



SEKAISHISO SEMINAR

# グループ・ダイナミクス入門

組織と地域を変える実践学

杉万俊夫

世界思想社



まえがき

「目からウロコ」の感覚を

グループ・ダイナミックス（集団力学）は、組織やコミュニティなどのグループ（集合体）の中に研究者が飛び込み、現場の当事者とともに現場を改善・改革していく実践的な学問です。本書は、学問としてグループ・ダイナミックスを勉強しようとする人のみならず、さまざまな現場を改善・改革していうとする実践者をも念頭に執筆しました。グループについて、「目から鱗が落ちる」感覚を味わっていただければ幸いです。

たとえば、次のようなセリフに対して、興味や反発をもたれた方は、ぜひ、本書を読んでください。

・ どんなグループでも、一つのグループとしての全体的性質をもっている。グループの中の人は、その全体的性質に操られて動く——その人の判断で動いているのではない（第2章）。

・ 「自分は価値中立的な立場に立っている」と言う研究者は嘘をついている（第3章）。

・ 夢（ビジョン）を描けないリーダーは、リーダーにあらず。夢を描くツールがある（第5章）。

・ 心理カウンセリングの中には、「心の病」の原因を追究せずに病を治す技法も存在する（第6章）。

・ グループの人たちは、「神」のような存在を創り出し、その「神」の声によって動かされる（第7章）。

・緊急避難のとき、目立たない、大きな声を出さない、出口への方向も示さない、そんな誘導方法が有効な場合もある(第8章)。

### 本書Ⅱ入門書十集大成

本書は入門書です。高校生にもわかるようにと努力しました。「である」調ではなく、「です、ます」調の文体にしたのも、そのためです。

しかし、本書は、入門書であると同時に、私自身の研究の(現時点での)集大成でもあります。グループ・ダイナミックスは若い学問です。グループ・ダイナミックスの産みの親、K・レヴィンから数えても半世紀ちよつと。しかも、本書で紹介する「新しい」グループ・ダイナミックスが本格化してから、わずか二〇年です。蓄積が少ないのは若い学問の弱点ですが、この弱点を逆手に取れば、初心者を学問の最前線に連れていきやすいという強みに変えることができます。

### 本書の縦系——「グループ一本」主義

本書を貫く縦系を述べておきましょう。それは、「一貫して、グループという概念一本で押し通す」という考え方です。ふつう、私たちは、「頭で考え、心で感じて行動する」と確信しています。本書の縦系、すなわち、「グループ一本」主義は、この確信に対する挑戦です。グループ・ダイナミックスは、「頭の中で、心の中で」を前提にしません。グループ・ダイナミックスの前提は、ことごとく「グループの中で」です。この点で、本書は、同じグループ・ダイナミックスという言葉を使っている、これまでの類書とは決定的に違います。

ただ、私たちが、「頭の中で、心の中で」という確信をもっているのは事実です。では、どうして、このような確信が生まれたのか。グループ・ダイナミックスは、それをきちんと説明します。

数学では、公理と定理を区別します。無条件に前提とする出発点が公理です。それに対して、公理から証明で導き出されるのが定理です。私たちの常識や、従来の心理学では、「頭の中で、心の中で」は公理です。それに対して、グループ・ダイナミックスでは、「頭の中で、心の中で」は、「グループの中で」という公理から証明（説明）されるべき定理なのです。

### 本書の読み方

まず、第1章と第2章はぜひ読んでください。この二つの章を読めば、グループ・ダイナミックスの基本的な考え方がわかります。

グループ・ダイナミックスは、現場の当事者と研究者の協同的実践によって、現場のベターメント（ベターにしていくこと、つまり、改善・改革）をめざす実践的な学問です。したがって、グループ・ダイナミックスの方法論は、当事者と研究者の協同的実践の方法論です。第3章では、この方法論を説明しています。

当事者と研究者の協同的実践における研究者の役割は、実践現場で使われる言葉を豊かにすることです。グループ・ダイナミックスの概念も理論も、これに貢献するためのものです。本書の第II部では、まず、理論の役割（第4章）を確認した上で、活動の理論（第5章）、言語の理論（第6章）、規範の理論（第7章）、群集の理論（第8章）を紹介します。どの章でも、理論を協同的実践にどのように活かすことができるかを実例で示します。第II部の章は、どの章から読んでいただいてもかまいません。

第Ⅲ部は、グループ・ダイナミックスという学問分野が、科学全体の中でどのような位置を占めるのかを説明します。従来「科学Ⅱ自然科学」と考えられてきましたが、「科学Ⅱ自然科学＋人間科学」と考えるべきです。グループ・ダイナミックスは、人間科学の一つです。第9章では、自然科学と人間科学の守備範囲を明確にしました。

しかし、悲しいかな、グループ・ダイナミックス（あるいは社会心理学）の学会誌は、似非・自然科学的な研究論文で埋め尽くされています。実は、私自身も、かつては似非・自然科学的な研究をしていました。第10章では、その当時の私自身の論文をまな板に載せ、似非・自然科学の「似非さ」加減を具体的に示してみます。

最後の第11章には、私自身の理論的研究の「今現在」を書きました。まだ学会発表すらしていない内容です。本書でグループ・ダイナミックスを学んだ読者にどう受け取られるか、ぜひ知りたいと希望しています。

### お知らせ

・ 本書についての意見、質問、議論の場としてホームページを開設しました。アドレス(URL)は、<http://group-dynamics.org/nyumon/>です。どうぞ、気軽に投稿してください。また、頁数の都合で本書に掲載できなかった原稿も掲載しています。

・ 本書の内容にそったビデオ講義（一回三〇分で計七回）もあります。詳しくは、公益財団法人「集団力学研究所」のホームページをご覧ください。集団力学研究所は、電子ジャーナル『集団力学』も発行しています。

グループ・ダイナミクス入門

—— 組織と地域を変える実践学

---

目次

第1部 グループ・ダイナミックスの基礎

第1章 グループ・ダイナミックスとは……………2

- 1 グループ・ダイナミックスの研究対象 2
- 2 当事者と研究者による協同的实践 8

第2章 基本的な考え方……………11

- 1 集合性——「かや」に例えて 11
- 2 人間像の常識を問い直す 16
- 3 グループ・ダイナミックスの前提 24
- 4 「かや」の多層的重複構造 36

第3章 研究方法——当事者と研究者の協同的实践……………48

- 1 研究者の位置づけ 48



2 協同的実践の現場

51

コラム3-1 二次モードの例——過疎ではなく適疎 64

コラム3-2 エスノグラフィ 66

コラム3-3 インターローカリティ——異なる時点を結ぶ 67

第II部 グループ・ダイナミックスの理論と実践

第4章 協同的実践のための理論……………72

第5章 活動の「かや」……………76

1 活動の構造 76

2 変革活動——新しい活動の創造 86

3 夢の活動を描く技法 98

4 リーダーシップ 111

コラム5-1 エスノメソドロジー 117

第6章 言語の「かや」

..... 119

- 1 四肢構造 119
- 2 言語の四肢構造 130
- 3 言語によるインパクト 137
- 4 ナラティヴ・セラピー 133

第7章 規範の「かや」

..... 147

- 1 規範と意味 147
  - 2 規範の形成プロセス 155
  - 3 「肉体に内蔵された心」の形成メカニズム 178
- 
- コラム7-1 規範の理念性 188
  - コラム7-2 規範伝達の事例 189
  - コラム7-3 規範理論と四肢構造との関係 191
  - コラム7-4 言語行為の主体 193

第8章 群集の「かや」……………196

- 1 物理的集合性 196
- 2 横断歩道を渡る群集の帯状構造 200
- 3 セル・オートマトン 206
- 4 意見分布の変化 210
- 5 群集の避難誘導法 221

第III部 社会構成主義

第9章 二つのメタ理論——自然科学と人間科学……………236

- 1 論理実証主義 236
- 2 社会構成主義 239
- 3 言説空間——自然科学と人間科学の守備範囲 251

第10章 人間科学の方法……………256

- 1 「自然科学的」研究 256

第11章

- 2 人間科学の実験 262
- 3 データ解析の問題 269

集合性から集合流へ——「イマココ集合流」試論……………287

- 1 集合流 287
- 2 イマココ集合流 289

似非・自然科学的研究論文の例 303  
索引 308

第  
I  
部

グループ・ダイナミックスの基礎

# グループ・ダイナミックスとは

グループ・ダイナミックス（集団力学）の研究対象は、家族、職場、組織、コミュニティなど、さまざまな集合体です。集合体という概念には、人間だけではなく、人間にとつての環境（物的環境と制度的環境）も含まれます。集合体は、生き物のように変化します。集合体の動き（動態）こそ、グループ・ダイナミックスの研究対象です。

グループ・ダイナミックスの大きな特徴は、研究者の研究スタンスにあります。グループ・ダイナミックスの研究者は、現実の集合体の中に飛び込み、現場の当事者とともに現場を改善・改革していきます。当事者と研究者による協同的实践、これがグループ・ダイナミックスの研究スタンスです。

## 1 グループ・ダイナミックスの研究対象

集合体——人々と環境の総体

グループ・ダイナミックス（集団力学）という学問分野について説明します。グループ・ダイナミックスの研究対象は、さまざまなグループです。たとえば、

- ・ 夫婦、恋人どうしといった二人グループ
- ・ 一緒に仕事をしている数人、あるいは、一緒にスポーツを楽しんでいる数人のグループ
- ・ 一つの企業に所属する何百、何千、何万という人のグループ（ふつう「組織」と呼ばれるグループ）

・野球場の観客席を埋め尽くす一万人以上のグループ（ふつう「観衆」「群集」と呼ばれるグループ）  
・同じコミュニティに居住する何千、何万という人々のグループ

・日本列島の上に住む一億二千万の人々のグループ（「国民」と呼ばれるグループ）  
などは、すべて、グループ・ダイナミックスが研究対象とするグループの例です。

これらの例からわかるように、グループ・ダイナミックスの「グループ」を、集団、あるいは、そのままグループと訳したのでは、少々、意味あいが狭すぎます。日常語で集団やグループといえば、どうしても、ごんまりした集まりだけを思い浮かべてしまうからです。

そこで、耳慣れない言葉ですが、あえて、「集合体」という言葉を使うことにしましょう。グループ・ダイナミックスの研究対象は、大小さまざまな集合体です。最近では、地球規模の環境問題や、先進国と発展途上国の間の利害対立（南北問題）が、大きな問題となっています。今や、宇宙船地球号の乗組員七〇億人という集合体を、グループ・ダイナミックスの研究対象にしていくことも時代の要請と言えます。

グループ・ダイナミックスでいう「グループ（集合体）」と、日常語の「グループ（集団）」の間には、もう一つ大きな違いがあります。日常語のグループ（集団）は、そのグループに属する人間たちだけを指します。それに対して、グループ・ダイナミックスのグループ（集合体）は、人間たちだけではなく、その人間たちにとっての環境をも含む概念です。したがって、グループ・ダイナミックスでは、「集合体とその環境」という言い回しは使いません。環境は、すでに集合体に含まれているからです。

## 物的環境と制度的環境

環境について、少々説明を加えておきましょう。環境は、物的環境と制度的環境に大別できます。職場の集合体には、同じ職場で働く人たちのみならず、部屋、デスク、パソコン等々の物的環境も含まれています。

制度的環境とは、一過性で終わったかもしれない「集合体の動き」が、なんらかの理由で繰り返されるうちに定型化し、定着したものです。どんな職場にも、皆が当たり前に従うルール、習慣、慣例があります。それらは、制度的環境です。

制度的環境は、物的環境のような物ではありませんが、あたかも物であるかのような性質をもっています。年中行事は、その典型です。年末になると、向こうから「お正月号」という電車（のような物）がやってきます。そうすると、電車が来るとホームの人々が乗車の準備をするのと同じように、人々は、大掃除をしたり、年賀状を書いたりして、「お正月号」に乗車する準備をします。

制度的環境の中で、私たちが忘れてならないのは、言語です。職務内容を異にする職場には、それぞれの職務内容の特徴を反映した独特の言葉づかい（言語使用）があるものです。その言語も、最初はなんらかの経緯で職場にもたらされたはずで、たとえ職場にもたらされても、多くの人が使用するに至らず、忘れられてしまうかもしれません。しかし、もし、その言語を使用する「集合体の動き」が定着するならば、その言語は制度的環境の一角を占めるようになります。

いかに「こうであるしかない」と思える制度も、最初は、一過性で終わったかもしれない「集合体の動き」だったのです。それが偶然や運をもはらみながら繰り返されるうちに、制度化への道を歩んだにすぎません。ということは、現在揺るぎないに見える制度も、決して不動のものではなく、常に、変



化の可能性を内包しているはずで。

### こんな集合体も——言葉

ここまで例にあげてきた集合体は、日常語で、「集団」「組織」「コミュニティ」「社会」などと呼ばれる集合体ばかりでした。しかし、グループ・ダイナミックスは、それ以外の広範な集合体も研究対象にします。

例をあげましょう。日本各地にはいろいろな方言があります。方言の中には、共通語からだいたいの意味を推測できるものもありますが、その方言を知らない人には、まるでチンプンカンプンという方言も少なくありません。当然のことながら、どんな方言でも、その方言で話したり、書いたりする人々がいるからこそ、その方言が存在しているわけです。方言を使う人がいないのに、方言だけが存在するなごどということはありません。つまり、方言を使う集合体があるからこそ、方言が存在するのです。その集合体には、その方言を使う地域に住んでいる人々はもとより、今は遠くの地に住み、たまに、ふるさととの身内や知人に電話するときだけ方言を使う人も含まれます。

方言に限らず、一つの言葉を当たり前に使用している人々は、一つの集合体を構成しています。さまざまな業界、学界には、独特の専門用語が使われています。一つひとつの専門用語は、それぞれの専門用語を使用する集合体があるからこそ、専門用語として存在しています。

同じことは、私たちが日常使用している多くの言葉の一つひとつについてもあてはまります。乳幼児は、日々、新しい言葉を使えるようになっていきます。それは、新しい言葉を覚えるたびに、新しい集合体の一員になっていくことを意味しています。

## こんな集合体も——習慣

以上、グループ・ダイナミックスでは、同じ言葉を使用する人々を、同じ集合体に属する人々と見なすことを述べましたが、言葉のみならず、同じ行動様式や習慣を共有する人々も、同じ集合体に属すると見なすことができます。このような見方をすると、時代の変化は、従来からの集合体の消滅と新しい集合体の登場によつて描くことができます。

一九九〇年代半ばから、わが国でも急速にインターネットが普及しました。仕事や勉強でも、あるいは、プライベートな交友関係でも、多くの人々にとつて、今やインターネットは欠かせぬツールです。これは、わが国に、「インターネット」集合体が登場し、急速に拡大していったことを示しています。「インターネット」集合体には、多くの直接的・間接的インターネット・ユーザー（人々）、パソコン、インターネット回線などの物的環境、インターネット使用に関するルールや言葉などの制度的環境が含まれます。言うまでもなく、わが国の「インターネット」集合体は、海外の「インターネット」集合体とともに、世界規模の「インターネット」集合体を構成しています。

一方、パソコンの普及に反比例して消滅しつつある集合体もあります。その一つは、「四〇〇字詰め原稿用紙に万年筆で文章を綴る」集合体でしょう。私自身、一九七〇年代に卒業論文を書いたときは、その集合体の一員でした。ただ、今でも、「原稿用紙に万年筆で文章を綴った経験を懐かしく語りあう」集合体の一員ではあります。

## こんな集合体も——対立する集合体

グループ・ダイナミックスが対象とする集合体は、目標、ルール、言葉を共有している集合体だけで

はありません。殴りあいのけんかをしている二人、対立・抗争をしている複数の集団も、一つの集合体として取り扱うことができます。いかに殴りあいのけんかをしている二人であっても、その二人を、ひとまとめにして全体的に観察すると、なんらかの特徴を観察することができます。たとえば、白熱したボクシングさながら、交互にパンチを繰り出している場合もあるでしょうし、どちらかが一方的に打ちのめしている場合もあるでしょう。いずれの場合も、二人のうちの一人だけを見ていたのでは観察できない動きです。これらの動きは、二人を含む集合体を視野に入れて初めて観察できるようになります。

同様に、グループ・ダイナミックスは、抗争関係や対立関係にある複数の集団をひとまとめにして、一つの集合体として取り扱うこともあります。もちろん、個々の集団も一つの集合体です。Aという集合体とBという集合体が対立関係にあるとき、集合体A、集合体B、AとBをひつくるめた集合体という三つの集合体が、それぞれ研究対象になりえます。AとBの対立の構図は、AとBをひつくるめた集合体の特徴として分析できます<sup>1</sup>。

### ダイナミックス(動学)

次に、グループ・ダイナミックスの「ダイナミックス」の説明に移りましょう。ダイナミックスとは、動き、変化についての学問、すなわち、「動学」を意味します。つまり、グループ・ダイナミックスは、さまざまな集合体を、基本的に、動いていくもの、変化していく存在として捉えます。

1 「対立の構図」を真正面から取り扱う章は、頁数の都合上、本書に収めることができませんでした。これについては、「まえがき」末尾に紹介したホームページをご覧ください。

私たちは、物事は安定している、変化しないと考えがちです。こう考えてしまうのは、私たちの思考の癖のようです。もちろん、集合体によつては、百年一日のごとく、変化しない集合体もあります。しかし、変化しないということは、変化のスピードがゼロという特殊ケースにすぎません。自動車は、時速五〇キロや一〇〇キロで動くものだと考えておけば、駐車場に止まっている自動車は、時速ゼロという特殊ケースで、驚くに当たりません。でも、自動車は止まっているものだと考えていたら、走り出した動く自動車には、ただただ啞然とするしかありません。集合体も同じです。集合体は変化するという動学の立場をとつておけば、変化しない集合体も十分取り扱うことができます。

以上をまとめると、グループ・ダイナミックスとは、集合体の動学です。グループ・ダイナミックスには、すでに「集団力学」という訳語が定着していますが、その意味は、「集合体動学」と解されねばなりません。

では、グループ・ダイナミックスでは、変化する集合体をどのように捉えるのでしょうか。それは次章で述べることにします。

## 2 当事者と研究者による協同的実践

### 現場を変える

前節で、グループ・ダイナミックスの研究対象が、さまざまな集合体の動態（動き・変化）であることを述べました。しかし、グループ・ダイナミックスのより大きな特徴は、研究スタンス、研究姿勢に

あります。

集合体を研究対象にする点では、社会学、教育学、経営学、文化人類学などの分野も同じです。たとえば、農村社会学は、農村という集合体を研究対象にします。学校や学級という集合体は、教育学の研究対象、企業組織という集合体は、経営学の研究対象です。

しかし、それらの研究分野では、現実の集合体を研究対象にする場合に守るべき鉄則があります。それは、「研究者が現場に入ることによって現場を変えてはいけない」という鉄則です。たとえば、ある伝統的な祭祀を継承している村落に研究者が入ったために、祭祀の中身が変わってしまうようなことはあつてはならないのです。

それに対して、グループ・ダイナミックスでは、研究者は「現場を変える」というスタンスで現場に臨みます。もちろん、現場をベターにする（改善・改革する）方向で、現場を変えようというスタンスです。現場の集合体のベターメント（改善・改革すること）こそ、グループ・ダイナミックスの目的です。

現場をベターにしていくには、現場の現状を把握しなければなりません。現状のみならず、どのような経緯や歴史を経て現状に至ったのか、つまり、過去を把握することも必要です。さらには、現状をこのまま放置すれば将来どうなるか、あるいは、ある手だてを講じたら将来どうなるかなど、将来を予想することも必要でしょう。このように現状、過去、将来を把握するには、調査研究をしてデータを集めることも必要です。しかし、データ収集をするにしても、決して、第三者的な外部者として行なうのはありません。それは、現場のベターメントのためのデータ収集です。

## 当事者とともに

現場の現状、過去、将来を把握するのも、また、その把握に基づいてベターメントを行なうのも、研究者だけでは不可能です。それらは、現場の当事者と研究者の協同によって初めて可能になります。そもそもベターメントとは、言うまでもなく当事者にとってのベターメントです。そうであれば、当事者抜きのベターメントなど論外です。

以上をまとめると、現場のベターメントに向けての「当事者と研究者の協同的实践」——これこそ、グループ・ダイナミックスの研究スタンスです。では、その協同的实践はどのように進めるべきなのでしょう。この問題については、第3章で論じることにしてしましましょう。

最後に、ベターメントについて、ひと言だけつけ加えておきましょう。ある集合体をどうしていくことがベターメントになるのか。これは、非常に難しい問題です。「こうすることがベターメントだ」と、あらかじめ決まっているわけではありません。何がベターメントなのかは、当事者と研究者の協同的実践の中で自問自答していく以外にありません。当初、「自分たちの組織をベターにするには、これしかない」と確信してスタートしたとしても、協同的実践を進めるうちに、他の方向性が浮上し、当初の確信が棄却されることもあるでしょう。ある時代に、「これこそベターメントのため」となされた協同的実践も、時代が変われば、必ずしもベターメントではなかったと評価されるかもしれません。あるいは、文化が違えば、何がベターメントかという判断も異なるかもしれません。存在するのは、ベターメントをめざす終わりのない運動だけなのです。

どんな集合体も、その集合体ならではの全体的性質（集合性）をもっています。集合性は、物理的な側面と意味的な側面から捉えることができます。本章では、集合性を「かや」に例えます。私たちは、無数の「かや」に包まれています。

私たちは、頭の中の思考、心の中の感情で動いているのではなく、「かや」に操られている——これがグループ・ダイナミックスの大前提です。もし、あなたが何の「かや」にも包まれていなかったら、あなたは何も見えない、何も考えることができません。

自分を包んでいる「かや」の全貌に気づくことはできません。自分の「かや」に気づかせてくれるのは異質性（自分の「かや」の外部にいる人）です。

## 1 集合性——「かや」に例えて

### 集合性

集合体とは、人々とその環境（物的環境・制度的環境）の総体でした。どんな集合体にも、その集合体ならではの性質があります。集合体の一部を除外したり、集合体を分割したら、もはや維持されることのない性質、また、集合体の構成要素（集合体を構成する人や環境要素）には還元できない性質、そのような集合体ならではの性質があります。そのような集合体の性質を「集合性」と呼ぶことにします。

集合性は、物理的性質と意味的性質という二つの面から捉えることができます。物理的集合性とは、

外部者にも観察できる集合性です。ある職場を観察すれば、そこで働く人たちとさまざまな物品や設備がどのように配置されているかを観察することができます。また、それらの人たちと物的環境は、相互に影響しながら、その集合体ならではの動きを呈します。そのような配置や動きは、よく似た職場であっても、完全に同じではありません。仔細に見れば、いかなる職場にも、その職場ならではの物理的集合性があるはずです。

集合性のもう一つの面である意味的集合性とは、集合体の中で形成されている「意味」をめぐる性質です。集合体を構成する一人ひとりの人間や、物的環境・制度的環境の構成要素は、意味をもっています。たとえば、職場でいちばん奥の席に座っている人物は、たんなる人物ではなく、「課長としての人物」です。その人物には「課長」という意味があるわけです。自分の机に積まれた書類は、たんなる紙束ではなく、「予算書としての紙束」です。その紙束には「予算書」という意味があるわけです。毎朝、始業時に行なわれる一〇分程度の朝礼（という制度）は、たんなる「集まり」ではなく、「一日の仕事が周知される場としての集まり」です。その集まりには「一日の仕事が周知される場」という意味があるわけです。また、言葉（という制度的環境）の一つひとつも、たんなる音声（たとえば、ケイヤクという音声）ではなく、「契約としてのケイヤク（という音声）」です。そのケイヤクという音声には「契約」という意味があるわけです。

ここで言う意味を、辞書に書いてある意味と混同してはいけません。物理的には同じ物であっても、それがどのように意味づけられるかは、集合体によつて異なります。同じことが書かれているマニュアルであっても、そのマニュアルが頻繁に使用されている職場では、「貴重な情報源としてのマニュアル」です。そのマニュアルには、「貴重な情報源」という意味があります。しかし、同じマニュアルがほこ



りをかぶっている別の職場では、そのマニュアルは、「近い将来に廃棄される物品としての、マニュアル」です。そのマニュアルには、「廃棄物品」という意味しかありません。

物理的集合性と意味的集合性は、互いを規定しあっています。たとえば、大きな自然災害でコミュニティの自然や建物が破壊されたとします。これは、物理的集合性の大きな変化です。この物理的集合性の変化は、災害が起こるまでであった自然や建物の意味を消し去ったり、大きく変化させたりします。

逆に、意味的集合性は物理的集合性を規定します。たとえば、ある破壊された建物が、災害の記憶を風化させないための記念碑として意味づけされれば、ほとんどの建物が新しく建て直される中で、その建物だけが被災直後の姿を長くとどめます。その建物の意味をめぐる意味的集合性が、町の物理的集合性を規定したわけです。

#### 「半身半心」モデル——暫定的な説明

集合性は、集合体を包む「かや」に例えることができます。ひと昔前まで、夏になると、蚊に刺されないよう部屋にこもっていた「かや（蚊帳）」です。最近では、田舎でも、あまり使われなくなりました。しかし、「かや」など見たこともないという若い人でも、いつもの仲間から自分だけが仲間はずれにされると、「自分だけ蚊帳の外だ」と不平を漏らします。「かや」を見たことのない人にとつても、「かや」はボキヤブラリーには含まれています。

集合性には、外部者にも観察できる物理的集合性と外部者には観察できない意味的集合性があります。集合性を「かや」に例えるならば、物理的集合性は、「かや」の外にいる人にも見える「かや」の形、意味的集合性は、「かや」の中にいる人だけに見える「かや」の性質に例えてよいでしょう。

集合性を「かや」に例えると、集合性の変化は、次のような二つのステップの繰り返しとして捉えることができます（ただし、以下の説明は不正確なものです。どこが不正確かはあとで述べます）。

まず、第一ステップ。いかなる集合体も、必ず、なんらかの「かや」に包まれています。実際の「かや」の中に入ると、「かや」のにおいをかいだり、「かや」の中の一種独特の雰囲気を感じるように、「かや」の影響を受けます。「かや」に規定されると言ってもいいでしょう。それと同じく、集合性の「かや」に包まれている人たちも、「かや」の影響を受けます。「かや」に規定される、「かや」に縛られる、と言ってもいいでしょう。集合体の構成要素である人々の行為や認識は、集合性の「かや」に縛られます。また、同じく集合体を構成する物的環境や制度的環境も、「かや」に規定されます。

たとえば、上座と下座がはっきり定められ、年長者が上座、年少者が下座に座る長いテーブルで会議をしている集合体を想像してみましよう。この集合体の「かや」は、出席者がみずからの年齢的立場に応じた発言をするよう行為を縛ることでしよう。年少者は、いくらいいいアイデアが浮かんでも、年長者への気遣いから発言を躊躇するかもしれません。また、その「かや」は、上座・下座という席の配置を固定的にするというように、物的環境をも規定するでしょう。おそらく、このような「かや」は、敬語を頻繁に使用するというように、制度的環境をも規定するでしょう。

一方、だれがどこに座ってもよい丸いテーブルを囲んで会議をしている集合体を想像してみましよう。この集合体の「かや」は、先の集合体に比べて、年少者にも自由に発言できるよう出席者に影響するでしょう。その「かや」は、先の集合体のテーブルには見られなかったコーヒーがいくつか置いてあるというように、物的環境を規定するかもしれません。その「かや」は、年少者が司会進行の役割を担うといったように、制度的環境を規定するかもしれません。

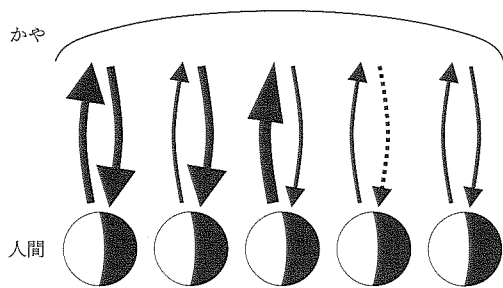


図 2-1 集合性を「かや」に例える

図 2-1 の下向きの矢印は、五人の人間が、皆、「かや」に規定されていることを示しています。この図には、人間しか描かれていませんが、「かや」は環境も規定します。「かや」に規定されるといっても、人によって強く規定される人もいれば、少ししか規定されない人もいます。環境「かや」によって規定される程度を、図 2-1 では矢印の太さで示しました。

次に、第二ステップ。このように集合体の人間も環境も、集合性の「かや」に規定されますが、個々の人間の半分（半身半心）だけです。かりに、右半分は「かや」に縛られるとしても、残る左半分では、さまざまなことを自由に感じ、考え、主体的に行動に移します。上に述べた上座・下座が明確な集合体でも、下座の年少者が思い切った発言をするかもしれません。

このような一人ひとりが左半分で発揮する自由と主体性の、いわば合力りよくによって、「かや」が変化をします。もちろん、ある人は「かや」を大きく動かす、ある人は少しだけ動かすというぐあいに、「かや」を動かす力には違いがあるでしょう。しかし、程度の差こそあれ、全員が左半分で発揮する自由と主体性によって「かや」が変化するわけです。図 2-1 の上向きの矢印は、五人それぞれが、どの程度「かや」を変化させたかを示しています。

人間と同じことは、人間たちの環境についてもあてはまります。環境にしても、「かや」に規定されるのは、いわば環境全体の半分だけであ

り、残る半分は「かや」とは独立に変化します。そして、「かや」からは独立な環境の動きも、「かや」を変化させるのです。突然の非常ベル（物的環境）が、会議の終了をもたらすのは、その例です。環境の構成要素にも、大きく「かや」を動かす要素もあれば、少ししか動かさない要素もあります。しかし、程度の差こそあれ、いずれの環境要素も「かや」の変化に関与しています。

これでワンサイクルしました。あとは、以上二つのステップの繰り返しです。一人ひとりが左半分で発揮する自由と主体性、そして、「かや」からは独立した環境の動きによって変化した「かや」が、ふたたび、一人ひとりの人間の右半分と環境の半分以上を規定します。しかし、個々の人間が、右半分は「かや」に縛られつつも左半分で発揮する自由と主体性、そして、「かや」に半分は規定されつつも、「かや」とは独立な環境の動きによって「かや」が変化します。これが、エンドレスに続いていきます。

## 2 人間像の常識を問い直す

「人間＝心を内蔵した肉体」？

ここまでの「かや」による説明は、私たちの常識から、それほどかけ離れたものではありません。だれしも、集合体全体の雰囲気、個々のメンバーの心理状態に影響することは経験しています（図2-1の下向きの矢印）。同時に、個々のメンバーは、雰囲気の影響を受けることはあっても、自分自身の意思によって動き得ること、そして、そうした個人の意思に基づく行為によって雰囲気が変化することも経験しています（図2-1の上向きの矢印）。前節の説明は、その二つの経験を一つのサイクルにまとめたに

すぎません。したがって、とっつきやすい説明ですが、取りたてて目新しさもありません。

グループ・ダイナミックスは、「半身半心」モデルよりむしろはるかにラディカルな見方で、集合性の變化を捉えます。実は、「半身半心」モデルは、私たちがもっている人間像の「常識」を受け入れていません。グループ・ダイナミックスは、この人間像の常識に依存しない見方、したがって、常識を超える見方で集合体を捉えます。本節では、次節でグループ・ダイナミックスの集合体の捉え方を述べるための準備として、私たちがもっている人間像の常識を俎上に載せることにします。

まず、私たちが、常識として、どのような人間像をもっているのかを確認することから始めましょう。人間とは何か、あらためて考えてみましょう。人間とは何かと問われたとき、私たちは一人の人間を思い浮かべます。つまり、個人です。

個人とは、まずもって、個体としての肉体です。それは、皮膚という境界で、肉体以外の外部と画されています。でも、その肉体がイコール個人ではありません。個人は、たんなる肉体ではなく、さまざまなことを思ったり、考えたり、意識的に行動したりすると考えられています。つまり、個人とは、心、意識、精神を持っていると考えられているのです。以下、「心」という言葉で代表させて、話を進めましょう。

心はどこにある？

では、心は、どこにあると考えられているのでしょうか。すぐ思いつくのは、「心は脳（あるいは、中枢神経系）にあり」という答えです。たしかに、脳科学は、脳のメカニズムと心的機能の関係を説明しつつあります。自然科学の立場から見れば、脳のメカニズムと心的機能の間に、密接な関係があるのは

間違ひありません。

しかし、私たちが、心を問題にする日常の場面を思い出してみましよう——「あの人、どんな気持ちなんだろう」「あいつ、プツツン切れそうだな」などと思う場面です。そのとき、はたして、「あの人の脳の中に、どんな気持ちがあるのだろう」「あいつの脳が、プツツン切れそうだな」などと思つていてでしょうか。違います。私たちの日常場面に即して考えるかぎり、「心は脳の中にあり」ではないのです。

そうかといつて、今度は、だれかが、「私の心は、ほら、ここにあるよ」と、机の上を指し示したとしましょう。あるいは、その人のポケットを指し示したとしましょう。これは、笑つてしまいます。冗談にしか聞こえません。そんなことは、心について、私たちがもつている常識では考えられないことだからです。

心のあり場所について、私たちが、どのような常識をもっているかがしぼられてきました。それは、皮膚で画された肉体の中のどこか (somewhere) です。それ以上でも、それ以下でもありません。「どこか」よりも突つ込んで、肉体のどの部位かと問われても、それは無理な話です。また、そうかと言つて、皮膚の外にあると言われたのでは、笑つてしまうしかありません。心は、皮膚で画された肉体の内部のどこかにある、そして、この心を内蔵した肉体こそ人間である——これが、私たちの素朴な常識です。

前節の説明に出てきた「半身半心」に言う「半心」も、「肉体に内蔵された心」の半分という意味でした。つまり、前節の「かや」の例えは、「人間 $\parallel$ 心を内蔵した肉体」という常識を前提にしていたのです。その説明がとつつきやすかつたのも、私たちが慣れ親しんでいる常識を前提にしていたためでした。

しかし、「心を内蔵した肉体」という人間像は、たしかに私たちの常識になつてはいますが、それが、私たちの日常の素朴な経験から自然に結実した常識かと言えば、必ずしもそうではありません。いや、むしろ、「心を内蔵した肉体」という常識は、私たちの素朴な経験とは矛盾しているのです。

### 「頭の中で」とは言うけれど

「個人＝心を内蔵した肉体」という常識が、そもそも、私たちの日常的な体験に合致していないことを、いくつかの具体例によつて示してみましよう。暑い日に運動をして、喉がからからに渴いたとします。早く、水を飲みたい、水道の栓に手がかかりました。今や、栓をひねろうとする瞬間。まだ、水は出ていないのですが、なにせ、喉はからから、水が頭の中に浮かびます。そんな状況を考えてみます。たしかに、「水が頭の中に浮かぶ」とは言うのですが、本当にそうでしょうか？ 実際は、そうではありません。たとえ水が浮かぶ（見える）にしても、その水は、目の前にある水道の蛇口のところに見えるはずで、決して、頭の中、あるいは、心の中に見えるわけではありません。水は、心の中ではなく、外に見えるのです。

もう一つ例をあげましょう。先日の日曜日に登山をして、山頂から見た絶景。それを頭の中で思い出して、晴れわたった空、遠くにキラキラ輝く湖も見えました。でも、「頭の中で思い出す」とは言うものの、その輝く湖は、頭の中、心の中のどこかに見えるのでしょうか？ ふたたび、そうではありません。おそらく、青い空も輝く湖も、あたかもレーザー光で映し出された立体像のように、外部に見えるはずで、過去の日曜日の思い出でしたが、同じことは、未来のことを想像する場合にもあてはまります。過去のイメージも、未来のイメージも、外に見えるのです。

以上の二つの例から、私たちが、「頭の中に見える、思い浮かべる」と言語的に表現しているイメージであっても、素朴な体験に忠実に従えば、内ではなく、外にあることがわかります。

### 他者も意識をもっていることの意味

「女心と秋の空」と言われます。女性の心は、秋の天候のように移り気だという、男性のため息です。昨日まで自分に好意をもっていてくれたのに、だれか他に好きな人ができたのか、もう自分のことなど上の空。いったい、彼女は何を考えているのか、だれのことを思っているのか。同じことは、女性に限らず、大なり小なり、他人一般についてあてはまります。他人は、何を考えているのかわからない。

でも、他人の考えていること、すなわち、他人の意識は、本当に、皆目わからないのでしょうか。そうではありません。彼女のしぐさや表情から、彼女は、だれか好きな男性のことを考えている。そこまでは、わかります。そして、残念ながら、その男性が自分でないこともわかります。しかし、同時に、だれのことをどのように思っているかは、わかりません。つまり、ある部分はわかるけれども、ある部分はわからない——これが、他人の意識を理解するという、私たちの素朴な経験ではないでしょうか。

あるいは、こんな場合もあるでしょう。他人が何かを考えていることはわかる。しかし、何を考えているかは、まったく見当もつかないという場合です。しかし、この場合も、ある部分（何かを考えていること、何かを意識していること）はわかっているわけです。繰り返せば、他人の意識とは、皆目わからないものではなく、部分的にわかり、部分的にわからないものなのです。

「個人」心の内蔵した肉体」という人間像は、他者の意識の理解をめぐる素朴な経験に矛盾します。なぜならば、心（意識）が、皮膚で覆われた肉体の中に内蔵されているのならば、基本的に、他人の心



(意識)は「まったくわからない」ということになるからです。これは、他者の意識は、「部分的にはわかる」という、私たちの素朴な体験に反します。第一、もし、他人の心がまったくわからないとすれば、「他人も、自分と同じように、心をもっていること」には、ついぞ気づけないはずで、しかし、私たちは、他人が何を考えているかはわからないにしても、他人にも心があることを素朴に信じています。

### 「個人」という造語

以上のように、いかに私たちが、「頭の中に、イメージが浮かぶ(肉体に内蔵された心の中にイメージが浮かぶ)」と言語的に表現しても、実際のイメージは肉体の外に浮かびます。また、私たちが他人の意識について素朴に経験していることも、「心を内蔵した肉体」という人間像からの帰結とは食い違っています。

実際、江戸期までの日本には、「肉体に内蔵された心」を人間のきわめて重要な部分だと見なす人間像は存在しませんでした。判断をなし、意思決定をする重要な座としての心の観念は、江戸期までは存在しなかったのです。したがって、文明開化の時代、すでに、そのような人間像が流布していた欧米から入ってきた「インディヴィデュアル (individual)」という外来語は、日本語に訳そうにも訳しようがありませんでした。「肉体に内蔵された心」という重要な座で思考し判断して行動する人間——それがインディヴィデュアルの意味でした。そこで生み出された造語が「個人」<sup>1</sup>だったので。

「心を内蔵した肉体」という人間像は、いかに私たちにあって当たり前の人間像に見えようとも、そ

1 柳父章『翻訳語成立事情』(岩波新書、一九八二年)を参照。

これはなんらかの歴史的経緯を経て形成されたものなのです。少々極端に言えば、「心を内蔵した肉体」という人間像は、「人は右、車は左」という交通規則と同じだということです。この交通規則は、人間という動物の性質から自然に結晶化してきたものではありません。日本の中にとどまるかぎりは当たり前の交通規則も、海外に出れば当たり前ではありません。日本では、それなりの歴史的経緯があつて、「人は右、車は左」が当たり前になつたにすぎません。

「人間⇨心を内蔵した肉体」という人間像が、それなりの歴史的経緯によつて形成されてきたということは、この人間像もまた一つの「かや」であるということです。では、いかなる歴史的経緯によつて、「心を内蔵した肉体」という人間像の「かや」ができたのでしょうか。残念ながら、今ここで、それを手短かに説明することはできません。その歴史的経緯の説明には、第7章で紹介する規範理論が必要で

### 「外界と内界」を区別する常識

「人間⇨心を内蔵した肉体」という常識は、今から述べる、もう一つの常識と表裏一体の関係にあります。心が、皮膚で画された肉体の内部のどこかにあるとすれば、それは、内なる世界、すなわち、内界と言つてもよいでしょう。私たちは、その内界で、「ああ、きれいな花だな」と感じたり、「パソコンのどのキーをたたいたらいいのだろう」と考えたりすると思ひ込んでいます。

ということとは、内界の他に、花やパソコンといった事物が実在する外界がある（と考えられている）ということです。外界に実在するのは、花やパソコンのような事物だけではありません。他人という人物も実在しています。その他人も、自分と同じく、心を内蔵した個人です。また、忘れてならないのは、

あなたの肉体も、外界の重要な一部だということです。自分の手のひらを眺めながら、「汚れたな、洗わなくては」と思うことがあるはずです。私たちは、視覚のみならず、聴覚、触覚、味覚なども用いて外界を捉えます。「どうも、今日は、胃が重たい」と感じるとき、あなたは、胃という外界（の一部）を捉えているのです。胃は、たしかに肉体の内部にはあつても、心の場所（肉体の内部の somewhere）とは別の場所にあります。

このように、「個人 $\parallel$ 心を内蔵した肉体」という常識は、内界と外界を区別する常識をもたらしめます。そこから、認識とは、「外界を内界に捉えることである」という常識が生まれます。

外界は、個人の内界に捉えられるか否かとは無関係に、実在していると考えられています。あなたが、今、気づいた足元の草（外界の一部）は、あなたが気づいていなかった一分前も、あるいは、一時間前、昨日も、そこに実在していた。その草を、今、あなたが内界に捉えた、つまり、認識した、とされるわけです。

もちろん、外界が、あるがままに、認識されるわけではありません。個々人の内界の状態によつては、同じ刺激（外界）でも認識は違つてきます。極端な場合、真つ白な壁の上に、何かを見せしめよう（認識してしまふ）ことだつてあります。

あくまでも、外界は、内界にどのように捉えられるかとは無関係に、本来の姿で存在していると考えられています。その本来の姿は、「真実」あるいは「客観的事実」と呼ばれています。真実が、そのとりに認識されると、「客観的な認識」と言われ、真実とは異なつて認識されると、「主観的な認識」と言われます。以上のように外界と内界を区別する考え方は、「外界／内界」図式と呼ばれています。

### 3 グループ・ダイナミックスの前提

#### 現前という概念

グループ・ダイナミックスは、「人間 $\parallel$ 心を内蔵した肉体」という常識や、「外界／内界」図式という常識を前提にしません。では、グループ・ダイナミックスは、どのような前提に立つのでしょうか。

ここで、グループ・ダイナミックスの前提を述べるために必要となる三つの用語を導入しましょう。というのも、私たちが日ごろ使用している言葉が、すでに、「人間 $\parallel$ 心を内蔵した肉体」という常識、あるいは、「外界／内界」図式という常識と分かちがたく結びついているからです。たとえば、「花を見る」と言えば、暗黙のうちに、外界にある花を内界に捉えることを意味してしまいます。そこで、どうしても、日ごろは使用しない用語を使わざるをえないのです。今から三つの用語を導入するのも、そのためです。

まず、「現前する」という用語を説明します。「きれいな花が現前する」「きれいな花の現前」というように使います。私たちのまわりには、ある世界が広がっています。世界と言っても、別に、身構える必要はありません。さしあたって、世界とは、風景のことだと考えてください。私たちのまわりは、決して虚無ではありません。見渡せば、向こうに窓が見えますし、その向こうには木々が見えます。今度は、手元を見れば、ボールペンや本があつたり、さらによく見れば、自分の手のひらが見えます。風景というのは、そんな取りたてて言うまでもない、ただの風景のことです。外を通る自動車の音も、いれたてのコーヒーの香りも、頬をなでる風も風景の一部です。

そんな風景、世界が、私たちのまわりに広がっています。それを、そんな風景、世界が「現前している」と言うことにします。また、その風景、世界の中には、窓、木々、自動車の音、コーヒーの香りなどが含まれています。それを、窓、木々、自動車の音、コーヒーの香りなどが「現前している」と言うことにします。注意していただきたいのは、「現前する」という言葉には、外界に、窓、木々、自動車の音、コーヒーの香りなどが実在していて、それらを、私たちが内界に捉えているという意味あいはいっさい含まれていないということです。

### 身体と事物

では、もっと詳しく見ていきましょう。テーブルの片方にAさん、もう片方にBさんが座っています。テーブルの上にはコーヒーカップやきれいな花が置いてあります。でも、Aさんに現前している風景とBさんに現前している風景は同じではありません。Aさんには、コーヒーカップの取っ手が現前していますが、Bさんには現前していません（日常の言葉を使うならば、Aさんには取っ手が見えるが、Bさんには見えない、ということです）。同様に、きれいな花のAさんに対する現前のしかたは、Bさんに対する現前のしかたとは異なります（日常の言葉で言うならば、きれいな花の見え方は、AさんとBさんと異なる、ということです）。このように考えていくと、Aさんに現前する風景とまったく同じ風景が、他の人にも現前するということがありません。座る場所が違えば、また、時間が違えば、どんなにわずかでも、必ず、現前する風景は異なります。言いかえれば、Aさんに現前する風景は、Aさんに固有の風景だということなのです。

これで、二番目の用語として、「身体しんたい」という用語を導入する準備ができました。身体とは、固有の

世界が現前している物質のことです。Aさんにも、Bさんにも、固有の世界が現前していますから、AさんもBさんも身体です。そういえば、部屋の隅つこに、Aさんがかわいがっている猫がいます。その猫には、AさんともBさんとも異なる世界が現前しているでしょう。したがって、その猫も身体です。

最後に、三番目の用語として、「事物」を導入します。事物とは、固有の世界が現前しない物質のことです。コーヒークップに対して、何か固有の世界が現前しているとは考えられません。また、テーブルに対しても、固有の世界が現前しているとは考えられません。したがって、コーヒークップもテーブルも事物です。

私たちに現前する風景（世界）は、大別すると、身体と事物で構成されています。身体と事物の区別は、一見、生物と非生物の区別と同じようですが、そうではありません。何が身体となり、何が事物となるかは、身体と事物をひっくりかえした集合体全体の性質、つまり、集合性によって変わります。たとえば、小さな子どもと、その子どもが自分の妹のようにかわいがっているぬいぐるみの集合体を想像してください。そのぬいぐるみが傷つけられた日には、子どもは自分の体を傷つけられたような痛みを感じてでしょう。そのような集合体では、子どものみならず、ぬいぐるみも身体なのです。この点については、第7章第2節（一五七頁）で正確に説明することにします。

## 意味

さて、「現前する」「身体」「事物」という三つの用語を説明しましたので、話を一步先に進めましょう。私たちに現前する身体や事物は、たんに「何か」ではありません。必ず、「意味」をもっています。意味については、本章第1節の冒頭で意味的集合性を説明したときに述べました。ある身体は、たんに

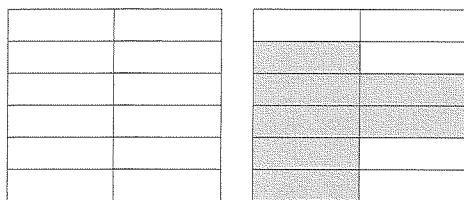


図 2-2 2つの本棚と多角形

「何か」ではなく、「Aさん」という意味をもっています。その身体は、「Aさんとしての何か」です。また、部屋の隅っこにいる身体も、たんに「何か」ではなく、「猫」という意味をもっています。その身体は、「猫としての何か」です。同様に、目の前の事物も、たんに「何か」ではなく、「コーヒーカーブとしての何か」、あるいは、「テーブルとしての何か」です。

私たちに現前する身体や事物は、すべて、意味をもっています。テーブルの上の小さなゴミだって、「どこかに飛んでいっても、どうでもよいゴミ」という意味をもっています——「どこかに飛んでいっても、どうでもよいゴミとしての何か」です。

現前するすべての身体や事物が意味をもっているということは、意味をもたない身体や事物は、そもそも現前しないということです。意味をもたないものは、たとえ網膜に映ったとしても、現前しないのです。一例をあげましょう。あなたの部屋に、図 2-2 の左側の図のように、本棚が二つ並んでいるとします。その本棚をじっくり見てください。さて、そのとき、図 2-2 右側に濃く塗った多角形は現前していませんか。おそらく、現前していません。それに対して、本棚の一段分とか二段分、あるいは、本棚一個の全体は、現前していません。どうしてでしょうか。それは、本棚の一段分とか二段分、あるいは、本棚一個の全体は、意味をもっているからです。一方、あんな多角形は意味をもちません。なぜ、本棚の一段分とか二段分、あるいは、本棚一個の全体が意味をもっているかと言えば、過去に、「これだけの本、本棚一段に収まるかな」「本棚一個の本を全部運ぶのに、ダンボール箱がいくつ

必要だろう」などと考えた経験があるからです。しかし、あのような多角形について、何かを考えた経験などありません。だから、あのような多角形は意味をもたず、したがって、現前しなかつたのです。

このように、何かが現前するには、それがたんなる何かではなく、なんらかの意味をもっていることが必須条件です。詳しい話は第7章に譲りますが、意味は、必ず、集合体（身体と事物の集まり）の中で形成されます。たとえば、コーヒーカップという意味は、コーヒーカップのような事物を、コーヒーカップとして当たり前に使用している集合体があるからこそ形成されたのです。その集合体は、コーヒーカップをコーヒーカップとして使用する、非常に多数の身体と、非常に多数の事物（コーヒーカップ）で構成される集合体です。大雑把に言つて、コーヒーカップでコーヒーを飲む世界中の人々が含まれる、巨大な集合体です。あなたにとつて、当たり前前にコーヒーカップが現前するとしたら、それは、あなたも、その巨大な集合体の一員だからです。

以上、(1)世界（身体と事物）が現前するには、それが意味をもっていることが必須条件である、(2)意味は、必ず、集合体の中で形成される、という二点を述べました。これら二点から、次のことを導くことができます。すなわち、私たちに現前するものは、すべて、集合体によつて現前せしめられたものである、ということなのです。つまり、私たちに何が現前するかは、私たちが、どのような集合体に属しているかによつて決定されるわけです。

「私たちにさまざまなものがあるのは、ひとえに集合体のなせるわざである」——これこそグループ・ダイナミックスの前提です。決して、外界があつて、それを内界に捉えるから、外界が現前するのではありません。



## 「かや」こそ主体——とつきにくいが正確な説明

ここで、ふたたび「かや」の例えに戻りましょう。前項の最後に、「私たちにさまざまなものが現前するのは、ひとえに集合体のなせるわざである」と述べました。これを言いかえれば、「私たちにさまざまなものが現前するのは、ひとえに、「かや」のなせるわざである」ということです。

いかなる集合体も、必ず、なんらかの「かや」（集合性）に包まれています。そして、集合体の人たち（身体たち）になんらかの世界が現前するのは、「かや」に包まれているためです。もし、生まれてこのかた、いかなる「かや」にも包まれていない人がいたとしたら、その人には何も現前しないでしょう。その人の世界は、文字どおりの無です——日常の表現を使うならば、たとえ、肉体的、神経的機能は正常だとしても、その人には何も見えない、何も聞こえない、何もにおわない、触って何も感じない、のです。もし、今、あなたになんらかの世界（風景）が現前しており、その世界の中にボールペンが含まれているとしたら、そういうものをボールペンと見なし、ボールペンとして使用する人々（非常に多くの人々）を包む「かや」があつて、あなたも、その「かや」に包まれているからです。その「ボールペンかや」とでも呼べる「かや」に、あなたの身体が包まれているからこそ、当たり前前にボールペンとして現前するのです。

ここで、先に述べた「半身半心」モデルで、どこが不正確だったのかを、はっきりさせておきましょう。「半身半心」モデルでは、(1)「かや」が一人ひとりの半身半心を規定する、(2)一人ひとりは半身半心は「かや」に規定されつつも、残りの半身半心で自由と主体性を発揮し、それによって「かや」が変化する、という二つのステップの繰り返しで、「かや」の変化を説明しました。しかし、ここに言う「半心」は、まさに「肉体に内蔵された心」（の半分）に他なりません。それが、先の説明の不正確さで

した。

私たちに世界を現前させるのは「かや」である——これが私たちの前提でした。私たちが包まれてい  
る「かや」が世界を現前させるということは、次のように言いかえてもよいでしょう——私たちが、何  
かを認識（見たり、聞いたり、嗅いだり）するとき、実は、「かや」に認識させられている。私たちが、何  
かが欲しい、何かをしたいと感じるとき、実は、「かや」の欲望に突き動かされている。私たちが、何  
かを感じたり考えているとき、実は、「かや」の思考に動かされている。私たちが、何かを行動に移す  
とき、実は、「かや」の行動の一部を演じている。このように、あえて、認識・欲望・思考・行動の  
「主体」という言葉を使うならば、決して、心を内蔵した個人が主体ではありません。「かや」こそ、主  
体です。

### 主体性

「かや」こそ主体ということは、集合体の人間も環境も「かや」に操られている「操り人形」にすぎ  
ないということですが。しかし、ここまで言われると、きつと反発を感じる方がいらつしやることでしょ  
う——「いくらなんでも、それは言い過ぎだ。もし、そうだとしたら、皆、自分が属している集団や、  
まわりの人々に流されているだけ、ということになるじゃないか。もちろん、まわりに流される場合も  
あるけれど、まわりの動きとは別に、自分独自で考え、判断する場合もある。それに、集合体なんかと  
は無関係に、自分一人で、もの思いにふけつたり、考え込んだり、何かをしたくなつたりすることもあ  
るじゃないか」と。

このような反発は、言いかえれば、「人間の主体性——主体的な判断——は、どこにいったのだ」と

いう反発です。実際、私たちは、主体的に判断した経験をもっていますし、主体的に判断することが重要である場合があることも経験しています。しかし、そのときに、注意していただきたいのは、主体的に判断するとは、まわりの人に流されず、「肉体に内蔵された自分自身の心（あるいは、頭）」で判断することだと考えられているということです。そのような考え方は、私たちが本章第2節で否定した「人間 $\parallel$ 心を内蔵した肉体」にしがみついていることを示しています。

しかし、グループ・ダイナミックスが、「主体性」に何も関心を払わないというわけではありません。「主体的な判断」というのは、自分や他人のふるまいが現前するときの、現前のしかたの一つです。自分や他人のふるまいが、どのように現前するかは、実にさまざまです。「だれかに強制された判断」「まったたく偶然による判断」「不注意による判断」等々、さまざまな現前のしかたがあります。「主体的な判断」は、そのようなさまざまな現前のしかたの一つです。

そうであれば、「私たちにさまざまなものが現前するのは、ひとえに「かや」のなせるわざである」というグループ・ダイナミックスの前提は、「主体的な判断」の現前にもあてはまるはずです。つまり、あなた（という身体）にとって、あなた（の身体）の「主体的な判断」が現前する（ふつうの言葉で言えば、あなたが、自分は主体的に判断していると思う）のは、ひとえに、あなた（という身体）を包んでいる「かや」のなせるわざ、なのです。

もちろん、集合体のなせるわざと言っても、たった一つや二つの集合体のなせるわざではありません。あなたの身体は、オギヤと生まれて以来、無数と言っていくくらい多くの集合体に属しています。言いかえれば、あなたの身体は、多くの集合性（かや）に包まれているのです。そして、身体を包む集合性（かや）が、ある条件を満たすとき、「主体性」が現前します。

では、どのような集合性（かや）に包まれば主体性が現前するのでしょうか。主体性とは、「肉体に内蔵された心」で發揮する主体性と考えられています。したがって、主体性（の現前）の説明のためには、まず、「人間 $\parallel$ 心を内蔵した肉体」という人間像が歴史的にどのように形成されたかを説明する必要があります。前にも約束したとおり、その説明は第7章の中ですることにします。

### 「半身半心」モデルをいかに読みかえるべきか

ここで、先の「半身半心」モデルを、どのように読みかえたら正確な説明になるのかを述べておきましょう。というのも、不正確さを自覚した上で使うならば、「半身半心」モデルはけっこう役に立つからです。複数個人間の相互作用で集団を捉える考え方を脱却して、ともかく「かや」の考え方を導入しようとするれば、まずは「半身半心」モデルを用いるので十分です。現場の当事者と、現場の「かや」について考えてみようという場合にも、「半身半心」モデルは有用です。したがって、「半身半心」モデルは、それはそれで活用しながらも、それをどのように読みかえれば正しい説明になるのかを知っておくことが重要です。

「半身半心」モデルを読みかえるには、自由と主体性を發揮する左の半心をどう読みかえるかがポイントになります。左の半心とは、図2-1に描かれている「かや」以外の多くの「かや」によって動かされる部分のことです。だれでも生まれてこのかた、多くの「かや」に包まれています。図2-1の五人のいずれれにとつても、図2-1に描かれている「かや」は、自分が包まれている多くの「かや」の一つにすぎません。五人のいずれれも、この図に描かれた「かや」以外の多くの「かや」にも動かされます。左の半心とは、図には描かれていない多くの「かや」によって動かされる部分のことなのです。

図2-1に描かれた「かや」以外の多くの「かや」の中には、「人間 $\parallel$ 心を内蔵した肉体」という人間像の「かや」も含まれています。特定の「かや」にだけ注目するとき、あたかも「半身半心」が、「かや」を動かしているかのように思うのは、私たちが「人間 $\parallel$ 心を内蔵した肉体」という人間像の「かや」にも影響されているからです。

### 「半身半心」モデルの使い道

「半身半心」モデルは、不正確なものですが、とりあえず集合性の概念を導入したときには、それなりの効用があります。というのも、従来の集団像（集団のイメージ）は、「半身半心」モデルよりもずっと強く「人間 $\parallel$ 心を内蔵した肉体」という人間像に縛られているからです。

「かや」による集合性の捉え方は、従来からの集団像とどのように異なるのでしょうか。それをはつきりさせておきましょう。読者は、「かや」の例えを聞くまで、集団と言え、どのようなイメージをおもちだったでしょうか。

第一に、集団ですから複数の人間がイメージされていたことでしょう。この点では、「かや」の例えでも同じです。もともと、「かや」の例えでは、複数の人間だけではなく、環境も「かや」に包まれていると考えます。

しかし、ただ、複数の人間を想定しただけでは、集団のイメージにはなりません。三人の人がいたとしても、互いに他の二人がこの世にいることさえ知らないというのでは集団のイメージにはなりません。従来の集団像では、第二に、複数の人間の間に相互作用が想定されています。AがBに影響を与え、BがAに影響を与える——そのような相互作用が想定されていたはずで

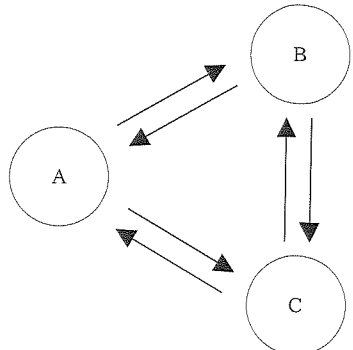


図 2-3 従来の集団のイメージ

ての影響です。A、B、Cという三人の集団では、三人が「かや」に規定されつつ、「かや」を動かします。AからBへといった直接的影響はありません。

このように、「半身半心」モデルは、不正確さを残してはいますが、集合性（身体と事物をひっくるめた集合体全体の性質）を重視する点で、従来の集団像とはかなり違います。したがって、「半身半心」モデルは、「従来の集団像を脱却して、集合性を重視しよう」と訴えるために使うことができます。実際、さまざまな現場で当事者と語りあうときには、「半身半心」モデルでほぼ十分です。

### 従来の心理学との違い

「人間＝心を内蔵した肉体」という常識も、主体性の常識も、グループ・ダイナミックスにとつては、「解くべき問題」です。グループ・ダイナミックスにとつて、それらの常識は、決して前提ではありま

「(1)複数の人間がいて、(2)その人間たちの間に相互作用がある」、これが集団のイメージだったのではないのでしょうか。この集団像を図にすると、図2-3のようになります。相互作用をしている複数の「心を内蔵した肉体」が、従来の集団像でした。

しかし、「かや」の例えには、人間の間の相互作用は出てきません。少なくとも、人間から人間への直接的影響による相互作用は登場していません。「かや」の例えでは、かりに人間から人間への影響があるとしても、それは「かや」を介し

せん。それらの常識は、最初から前提にされるのではなく、他の前提、すなわち、「私たちにさまざまなものがあるのは、ひとえに、集合体のなせるわざである」という前提からスタートして、考察を重ねることによって「解くべき問題」なのです。実際、私たちは、第7章で、その問題を解くことになります。

一方、従来の心理学は、「個人 $\parallel$ 心を内蔵した肉体」という前提からスタートします。その上で、「肉体に内蔵された心」にいかなる感情がいかにして宿るか、いかなる思考がいかにしてなされるかが研究されます。行動は、そのような「肉体に内蔵された心」の感情や思考の発露として捉えられています。従来の心理学が、心の科学であることを標榜しながらも、心の起源についてまともな知識を生み出せなかった理由も、ここにあるのです（本書「まえがき」の「本書の縦糸——『グループ一本』主義」もご覧ください）。

現在の心理学の主流は認知心理学です。認知とは、情報処理のことです。外から入ってくる情報や、頭の中に蓄えられている情報を、人間はどのように処理しているか——それを研究するのが認知心理学です。つまり、認知心理学にとって、人間は高度なコンピューターなのです。人間コンピューターの中核は脳ですから、認知心理学は急速に脳科学へと接近しています。

では、このような認知心理学、あるいは脳科学とグループ・ダイナミックスの関係を、どのように理解しておけばよいのでしょうか。グループ・ダイナミックスでは、人間コンピューターを徹底的に、ネットワーク型のコンピューターと考えます。私たちが使っているコンピューターは、最初、単体で使用するために開発されました。そして、単体としてのコンピューターがかなり進歩したあとで、コンピューターを結ぶ段階、つまり、ネットワークの段階に入りました。今や、インターネットあつてのパソコン

ンですが、そのパソコンも、そもそもは単体として開発されたのです。

それに対して、人間コンピュータは、最初から、ネットワークあつてのコンピュータだったので。最初から、ネットワークの一部としてのコンピュータでした。人間コンピュータのメカニズムは、ネットワークの部品のようになっているはずですが、ここでいうネットワークが、集合体であることは言うまでもありません。

ここまで述べてきた「かや」こそ主体」という考え方は、グループ・ダイナミックスの基本的な考え方であると同時に、より広く、社会学、教育学、経営学、文化人類学、哲学などの分野にも浸透しています。そのような考え方は、「社会構成主義」あるいは「構築主義」と呼ばれています。社会構成主義は、本書の第II部で紹介するさまざまな理論のベースにある「ものの考え方」、いわば研究哲学です——そのような研究哲学をメタ理論と言います。本書の第9章では、社会構成主義というメタ理論を、自然科学のメタ理論である論理実証主義と対比しながら説明します。

## 4 「かや」の多層的重複構造

### 「かや」の多層性

集合体は、何枚もの「かや」に包まれています——多数の集合性をもっています。たとえば、職場の集合体の一日を見ても、さまざまな「かや」に包まれています。出勤時間の「かや」、朝の打ち合わせの「かや」、仕事の進め方の「かや」、昼休みの過ごし方の「かや」、残業をめぐる「かや」、等々。これ



らの一つひとつは、すべて、同じ職場を包んでいる「かや」なのです。

このように、一つの集合体は、さまざまな「かや」に包まれています。言いかえると、図2-4のように、何枚もの「かや」に多層的に包まれているわけです。これを、「かや」の多層性と呼ぶことにします。多層的な「かや」の一つひとつが、物理的集合性と意味的集合性という二つの面をもっていることは言うまでもありません。また、多層的な「かや」の中には、相互に連動しあっている「かや」もあるでしょう。上にあげた職場の例で、仕事の進め方の「かや」と、残業をめぐる「かや」が連動しているかもしれません。

集合体によっては、その中の人々が非常に親密で、お互いのことが手に取るようにわかるような集合体があります。あうんの呼吸が通じあうような集合体です。従来、このような親密さは、心の内面で感

じられる親密さと考えられてきました。つまり、「肉体に内蔵された心」という常識に基づいて、親密さは、心の状態の一つ、感情の一つと考えられてきました。

しかし、親密な集合体というのは、決して、心の状態などではなく、「かや」が非常に多層的に形成されているということなのです。たとえば、長年連れ添ってきた老夫婦（という集合体）。食事中の箸の上げ下ろしのような、相手のちょっとしたしぐさからも、相手がかいいつもと違うことを察知します。これは、この集合体が、箸の上げ下ろしのようなささいなことに関する「かや」も含めて、非常に多くの「かや」に、多層的に包まれているから

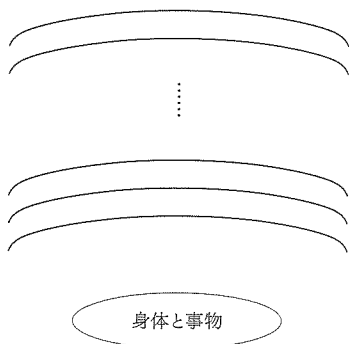


図2-4 「かや」の多層性

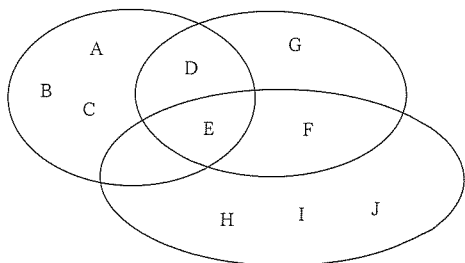


図 2-5 「かや」の重複構造

です。

### 「かや」の重複構造

現実の集合体を包んでいる「かや」は多層的であるだけではありません。多くの「かや」が、部分的に重なりあいながら存在しています。たとえば、図 2-5 に示したように、ある一群の「かや」は、(1) A、B、C、D、E の五人を包み、(2) 別の一群の「かや」は、D、E、F、G の四人を包み、(3) さらに別の一群の「かや」は、E、F、H、I、J の五人を包む、というぐあいに、部分的に重なりあっています。このような部分的に重なりあう構造を、「重複構造」と呼ぶことにします。

同じことは、人間たちにとつての環境（物的環境・制度的環境）についても言えます。環境は、さまざまな物的要素、制度的要素の集まりです。上の(1)、(2)、(3)の「かや」に包まれる物的・制度的環境の要素も、部分的に重なりながら重複構造をなしています。

先ほど、親密さは「かや」の多層性によって生まれることを述べましたが、今度は、個性（ユニークさ）について考えてみましょう。個性も、ふつうは、心で感じること（感性）、あるいは、頭で考えること（思考）の個性というように考えられています。しかし、本当に、そうなのでしょいか。

今、ある人が、オギャーと生まれて以来、包まれてきた「かや」を、図 2-5 のように、すべて描いたとします。もちろん、そんなことはできるわけがありませんが、かりに描くことができたとして。

そして、その人が、いちばん下から自分を包んでいる多くの「かや」を見上げたとします。それは、多くの「かや」群です。この人と同じ「かや」群に包まれている人はいないはずで、一卵性双生児の二人も、人生のどこかの時点からは別々の「かや」に包まれていきます。

つまり、私たちは、一人ひとり独特の「かや」群に包まれています。この「かや」群の独特さこそ、個性あるいはユニークさといわれているものに他なりません。個性は、決して、人の心あるいは内面の個性ではありません。その人を包む「かや」群の個性です。

### 異質性との出会い

ある「かや」に包まれている人たちにとって、自分たちの「かや」に包まれていない人は異質な存在です。言いかえれば、その人は異質性をもっています。なぜならば、自分たちとは異なる物理的・意味的集合性に包まれて生きているからです。自分たちが当たり前に行なっている行為が通用しないかもしれません。自分たちが常識と思っていることが通用しないかもしれません。それが異質性です。

現実の「かや」は、多層的重複構造をなしています。したがって、ある人とある人が、同じ「かや」には包まれていない関係、つまり、異なる「かや」に包まれているという関係が、いたるところに存在しています。そのような関係では、双方にとつて、相手は異質性をもっているわけです。

そのような関係で、二人の間に何も起こらなければ、それまでです。ちやうど、道ですれちがった見知らぬ二人が、すれちがったことにさえ気づかないようなものです。「かや」に何の変化も生じません。しかし、二人の間に何かが起こったとします。偶然でもよいし、あるいは、何かしら外部からの力があつて、二人の間に何かが起こったとします。なんでもかまいません。二人の前で、急に老人が転んで、

二人で協力して助け起こすことになった、急に配置転換になって、まったく知らなかった二人が一緒に仕事をするようになった、等々なんでもかまいません。

こうして二人の間に何かが起こるということは、二人を包む新しい「かや」ができるということです。二人を含む一つの小さな集合体が形成され、二人は新しい「かや」に包まれていきます。

場合によっては、けんかや争いでもよいのです。道ですれちがう二人が、偶然、激しくぶつかりあい、けんかになったとします。もちろん、路上のけんかを奨励する気持ちはありませんが、新しい「かや」ができるという点では、けんかも同じです。第1章（七頁）で述べたように、対立する二人（あるいは、二集団）も、ひとまとめに見れば、「かや」に包まれています。「かや」に包まれていると言っても、協力的な「かや」、ハッピーな「かや」だけではないことを忘れないでください。

協力的な「かや」であろうと、けんかの「かや」であろうと、二人を包む新しい「かや」ができると、それまで二人が別個に包まれていた「かや」にも変化が生じます。少なくとも、変化が生じる可能性が出てきます。異質性は、「かや」を変化させる原動力になり得るのです。

### 異質性による「かや」の変化

ここで、異質性との出会いによって「かや」が変化するメカニズムを見ておきましょう。今、Aという「かや」に包まれているaさんと、Bという「かや」に包まれているbさんがいるとします。二人は、別の「かや」に包まれていますから、互いに異質性をもっています。そんな二人が出会い、二人を包む新しい小さな「かや」Xができたとします。

aさんは、もともと、「かや」Aに包まれていますし、bさんは、「かや」Bに包まれています。そん

な二人が、「かや」Xをつくるわけですから、「かや」Xは、いわば、「かや」Aと「かや」Bのブレンドされたものになるでしょう。

aさんとbさんを包む「かや」Xが、「かや」Aと「かや」Bのブレンドであれば、「かや」Bの性質は、aさんを介して、「かや」Aに浸透していきます。同様に、「かや」Aの性質は、bさんを介して、「かや」Bに浸透していくでしょう。こうして、「かや」Xができたことによって、「かや」Aも、「かや」Bも変化していくのです。

このように、互いに異質な少数の人の間に、新しい「かや」ができることによって、それまで、少数の人が別々に包まれていた大きな「かや」が変化します。変化のきっかけは、異質性との出会いです。偶然の出会いもあるでしょう、大きな外力によってもたらされる出会いもあるでしょう。このような異質性との出会いの可能性は、多層的重複構造のいたるところに存在しています。いたるところで異質性と異質性が出会い、新しい「かや」が発生することによって、多層的重複構造をなす「かや」群が、次々に変化していくのです。

異質性と言うと、ずいぶん、たいそうなことに聞こえるかもしれませんが、そんなことはありません。先に、個性（あるいは、ユニークさ）の話をしたことを思い出してください。そのとき、ある人の個性は、決して、その人の内面の個性ではなく、その人を包んでいる「かや」群の個性であることを述べました。そして、ある人と同じ「かや」群に包まれている人は、他にいないことも述べました。ということは、皆、独特の「かや」群に包まれているわけですから、皆、異質性をもっていることになります。この皆がもっている異質性が、多層的重複構造を通じて、「かや」群を変化させていくのです。

## 新しい知識を学ぶということ

私たちは、生まれてこのかた、数多くのことを学んでいます。ミルクの飲み方、スプーンの持ち方には始まり、一つひとつ言葉覚え、学校でも、多くのことを学びます。また、職場で、地域で、あるいは、マスコミから、さまざまな知識を学びます。このように、何かを学ぶときには、上で述べたような「かや」の変化が起こっています。

例として、学校の先生から、「三角形の内角の和は一八〇度」という知識を学ぶ場合を考えてみましょう。世の中には、すでに、「三角形の内角の和は一八〇度」という常識の「かや」ができています。その常識は、意味的集合性です。その「かや」には、非常に多くの人々が含まれています。先生も、その一人です。しかし、生徒たちは違います。つまり、生徒たちにとって、先生は異質性をもっているのです。

先生と生徒たちは、縁あつて学級という集合体を形成しました。その集合体では、月曜から金曜まで授業が行なわれます——そのような「かや」に含まれています。「三角形の内角の和は一八〇度」と教える授業も、その一つです。この授業を通じて、先生がすでに含まれていた「かや」、つまり、「三角形の内角の和は一八〇度」という常識の「かや」が、生徒たちの「かや」に浸透していきます。決して、生徒たちの「肉体に内蔵された心（頭）」の中に「三角形の内角の和は一八〇度」という知識がインプットされるわけではありません。先生という異質性との接触によって、生徒たちが、「三角形の内角の和は一八〇度」という常識の「かや」に含まれるようになったのです。

同じことは、一対一で、何かを教え、教えられる場合にもあてはまります。あなたが、友人から、おもしろいホームページを教えてもらったとします。友人は、すでに、そのホームページを使う人々の

「かや」に包まれていました。その「かや」に包まれる人々にとって、あなたは異質であり、その「かや」に包まれている人々は、あなたにとって異質でした。そして、今、友人とあなたの小さな「かや」ができたのです。この小さな「かや」の形成をきっかけに、友人を介して、あなたも、あのホームペー  
ジを使う人々の「かや」に包まれます。

### 内部者兼外部者

私たちは、他人が包まれている「かや」に気づくことがあります。たとえば、新しい職場に移ったとき、「へー、ここでは、朝の打ち合わせはこんなふうにするのか」と思ったりします。このように、ある集合体が包まれている「かや」に「おやつ」と気づくとき、言いかえると、ある集合体の集合性が現前するとき、あなたと集合体は、どのような関係にあるのでしょうか。

ここで、重要なことが二つあります。

(1)まず、あなたは、集合体が包まれている「かや」の内部者でなければなりません。もし、かりに、あなたが、集合体の「かや」の完全な外部者だったとします。ということは、集合体の人々に現前する世界と、あなたに現前する世界は、完全に異なるということです。そうだとすれば、集合体の人々がやっていることは、あなたにとつて、文字どおり、チンプンカンプン、いったい何をやっているのか皆目わからないはずです。

もちろん、あなたも集合体の人々も、同じ会社という大きな「かや」に包まれているわけですから、皆目わからないというのは言い過ぎでしょう。打ち合わせの特徴を理解できるということは、それを理解できる程度には、同じ「かや」に包まれている必要があります。でも、入社したばかりの新入社員は、

そのような「かや」には包まれていないでしょう。打ち合わせの細部について、「おやつ」と気づくには、新入社員よりも深く「かや」の内部者であることが必要です。

(2)しかし、逆に、もし、あなたが、集合体とまったく同じ「かや」に包まれているとしたら、つまり、あなたが集合体の完全な内部者であつたとしたら、どうでしょうか。そのような場合には、あなたは、何も「おやつ」と思わないでしょう。自分が完全に含まれている「かや」に気づくことはありません。自分自身を包んでいる「かや」には気づけないのです。この点については、次項できちんと説明します。ということとは、あなたが「かや」に気づくときには、あなたは、「かや」の外部者でもあるということです。そして、「かや」の外部者であるということは、あなたは、内部者にとつての異質性だということ事です。

(1)と(2)から、あなたが、ある集合体の「かや」に「おやつ」と気づくとき、あなたは、その「かや」の内部者であると同時に外部者でもあるということがわかります。集合体の人々と、同じ「かや」にも包まれながら、異なる「かや」にも包まれているとき、あなたは、「おやつ」と「かや」に気づくことができます。

自分を包む「かや」はわからない？

自分が包まれている「かや」に気づくのは、非常に難しいことです。なぜ難しいかは、「かや」の二つの面——物理的集合性と意味的集合性——の説明を思い出せば、わかります。まず、物理的集合性。物理的集合性とは、集合体の身体と事物の全貌を視野に入れたときに、観察できる集合体全体の動きです。したがって、あなた（の身体）を包む「かや」の物理的集合性を観察しようとするれば、あなた自身



をも含めて、すべての身体と事物を視野に入れなければなりません。あなたの身体をも含めて、あなたの視野に入れることは不可能です。

次に、意味的集合性。一つの意味を共有する集合体で、その意味は無自覚に使用されます。サッカーをしている選手たちの集合体で、転がる球体は「ボールとしてのコレ」です。コレはボールという意味をもっていきます。その意味は無自覚に使用されます。その上で、「ボールとしてのコレ」をどちらに蹴るかを判断するのです。無自覚に使用しているものに気づくのは容易ではありません。

以上のように、「かや」の二面である、物理的集合性と意味的集合性のいずれについて考えてみても、自分を包んでいる「かや」に気づくのは難しい、と結論せざるをえません。ここまで、「かや」について勉強しておきながら、自分の「かや」に気づくのは難しいというのでは、なんとも残念、無念——というより、ここまで読者を引っ張った本書の著者に腹が立つ——ご安心ください。自分の「かや」に気づく方法は、あるのです。

前項で、「かや」がわかるには、「かや」の内部者であると同時に、外部者でもあることが必要だ、と述べました。このことは、自分を包む「かや」がわかる場合についても、あてはまります。つまり、自分の「かや」に気づくには、自分の「かや」の内部者であると同時に、外部者でもあることが必要なのです。自分の「かや」の内部者であることは当然ですから、問題は、「外部者でもある」というところ です。これを、さらにつきつめると、自分の「かや」の外部者になった分だけ、自分の「かや」が見えてくる、ということになります。

## 異質性との出会いによって外部者に

では、どうしたら、自分の「かや」の外部者になれるのでしょうか。ここで、異質性との出会いが決定的に重要になります。前に、「かや」Aに包まれている身体aと、「かや」Bに包まれている身体bが、「かや」Xをつくることによって、「かや」Aと「かや」Bが変化していくプロセスを説明しました。「かや」Xができるまでは、aとbは、別の「かや」に包まれていたわけですから、互いに異質性をもっていたわけです。そんな二つの身体が、小さな新しい「かや」Xをつくることによって、大きな「かや」A、「かや」Bに変化のきつかけがもたらされるのでした。

実は、このプロセスは、自分の「かや」に気づくプロセスでもあります。aとbでつくった「かや」Xは、いわば、AとBという二つの「かや」のブレンドです。したがって、aは、「かや」Xに包まれたときから、「かや」Bによっても動かされるようになっていきます。「かや」Xに包まれるまでは、「かや」Aによつてのみ動かされていましたが、「かや」Bによつても動かされるようになったのです。ということ、aは、「かや」Bによつて動かされるようになった分だけ、「かや」Aの外部者になったわけです。こうして、aは、「かや」Aの内部者でも外部者でもある身体になり、外部者になった分だけ、自分を包んでいる「かや」Aのことがわかるようになるのです。

今度は、同じプロセスを、「かや」Bの方から見てもみましょう。最初、集合体Bにとって、身体aは、まったくの外部者でした。おそらく、aが、集合体Bの動きを見ても、大方、チンプンカンだったでしょうし、第一、aが、集合体Bに関心を向けることすらなかったでしょう。しかし、aとbによる「かや」Xができる、aは、ちよつとだけですが、「かや」Bの内部者にもなります。aが、「かや」Xに強く包まれるにしたがつて、aは、いつそ、「かや」Bの内部者になっていくでしょう。という

ことは、aは、「かや」Bにとつて、内部者でもある外部者ということになります。したがって、aは、「かや」Bについても、いろいろ気づくことができるわけです。

このように、異質性との出会いは、自分の「かや」に気づくためにも、また、自分の「かや」を変化させていくためにも、きわめて重要です。とは言うものの、異質性と出会い、つきあうのは、どうしても、敬遠されがちです。なにしろ、自分の集合体では、あうんの呼吸でやっていることも通用しませんが、自分の集合体では当たり前前の常識も通用しない身体、それが異質な身体なのですから。へたに、そんな身体とつきあった日には、明日からの生活がめっちゃめっちゃになるかもしれない、リスクがいっぱい、つきあわない方が無難——そう考える理由は十分わかります。しかし、そうかといって、あまりにも異質性を遠ざけすぎると、今度は、自分の「かや」に気づいたり、自分の「かや」を変えるきっかけをも遠ざけることになってしまいます。

前に、人の個性は、その人の内面的な持ち味ではなく、その人が、生まれてこのかた、包まれてきた「かや」群の個性だと述べました(三九頁)。どの人も、皆、異なる「かや」群に包まれています。つまり、だれでも異質性をもっているのです。従来、日本社会は、同質性を重視し、異質性を押え込む傾向にありました。今、私たちは、どのように異質性と向きあつていくかを、あらためて考えてみる時期にきているのではないのでしょうか。

当事者と研究者の協同的実践は、「かや」を変える実践です。重要なことは、研究者だけが、その「かや」を客観的に分析するなど不可能だということです。では、研究者は、どのような姿勢で協同的実践に臨めばよいのでしょうか。そのポイントは、以下の五点です。

- (1) 協同的実践も、そこから出てくる知識も、ローカルな制約を被る。
- (2) 価値中立性は不可能である。
- (3) 協同的実践は一次モードと二次モードの交替運動である。
- (4) ローカルな協同的実践はインターローカルな協同的実践に発展し得る。
- (5) 協同的実践の言説空間を豊かにするのが、研究者の役割である。

## 1 研究者の位置づけ

研究者だけが特権的位置にいるのではない

第1章で述べたように、グループ・ダイナミックスでは、さまざまな集合体の中に研究者が飛び込み、現場の当事者とともに協同的実践を展開します。もちろん、現場を改善・改革していくこと（ベターメント）に向かつての協同的実践です。グループ・ダイナミックスの研究方法は、すなわち、当事者と研究者の協同的実践の方法論でもあります。

前章で「かや」の例えを使って、グループ・ダイナミックスの基本的な考え方を説明しました。非常

に重要なことは、研究者だけが、当事者が包まれる「かや」の外にいて、「かや」を客観的に観察するなど不可能だということです。研究者だけが、特権的な位置にあるわけではありません。第2章で述べたすべてのことは、研究者に現前する世界についても完全にあてはまりません。

研究者と現場の関係は、前章の「内部者兼外部者」で述べたとおりです。現場に足を踏み入れるまで、研究者は現場の「かや」には包まれていません。完全な外部者です。したがって、現場に入った当初は、どこにもある表面的なことは現前しても、その現場固有の現象は現前しません。しかし、現場を歩きまわり、現地の人々と接するうちに、徐々に現場に固有の現象や問題が現前してきます。それは、研究者が徐々に、現場の「かや」の内部者になりつつあることを示しています。

### 当事者と研究者の「かや」の重複構造

現場の当事者と研究者の出会いには、「かや」の新たな重複構造ができるプロセスです。当事者の一部と研究者によって小さな「かや」ができれば、その小さな「かや」を介して、多くの当事者を包む大きな「かや」と研究者がすでに含まれている大きな「かや」の間に重複構造が生まれます。この重複構造を通じて、当事者も研究者も、互いに異質性に接します。当事者にとって研究者は異質性、研究者にとって当事者は異質性です。

「かや」の重複構造による異質性との接触は、自分自身を包む「かや」を自覚する契機となります。皆、「かや」に操られているのですから、自分自身を包む「かや」に気づくということは、自分自身を知る（己を知る）ことに他なりません。当事者は、研究者との出会いによって、それまでは無自覚だった自分たちの生活の一面に気づくかもしれません。同様に、研究者も、当事者との出会いによって、み

ずからの研究分野では、その現場で進行している現象をほとんど見過ごしてきたことを痛感するかも知れません。

重複構造は、「かや」の変化をもたらず唯一のメカニズムでもありません。「かや」は他の「かや」と重複構造をつくることによつて、他の「かや」の方向に変化する可能性を得ます。研究者との接触によつて、現場の「かや」は研究者の「かや」の方向に変化するかも知れません。同様に、研究者の「かや」も、当事者の「かや」の方向に変化するかも知れません。現場で進行している現象、しかもそれまでは学問的に見過ごされていた現象が、学会で注目されるとしたら、それは、研究者の「かや」が当事者の「かや」の方向に変化しつつあることの一例です。

このように、当事者も研究者も、「かや」に操られつつ、「かや」の重複構造を通じて「かや」を変化させていきます。研究者が、いかなる「かや」からも距離を置いて、客観的に現象を見て取るなど、ありえない話です。研究者は往々にして、「自分が新しい事実を発見した」という興奮を覚えます。その興奮自体は、新しい現前を得た興奮として貴重です。しかし、その興奮は、新しい「かや」の重複構造のなせるわざであることを忘れてはいけません。

### 読者と私も重複構造

ひるがえれば、書物を介しての著者と読者の関係も重複構造と見なすことができます。読者が読んでいるこの本に書かれている文章は、私の「肉体に内蔵された頭の世界」で考え、綴られたものではありません。私がこの本を書くまでに包まれてきた多くの「かや」に操られてできあがったのが、この本です。そして、この本とともに読者と私がつくった小さな「かや」によつて、読者が包まれる多くの「か

や」と私が包まれる多くの「かや」の間に重複構造が形成されます。その小さな「かや」は、読者を包む「かや」を変化させるかもしれないし、私が読者の反応を知ることによって、私を包む「かや」を変化させるかもしれません。

以上の点で、グループ・ダイナミックスは自然科学と対照的です。自然科学は、神の視点に立っています。あるいは、神の視点に接近することを目的としています。すべての「かや」を含め、宇宙のすべてを見渡すことのできる神、宇宙のすべてを知っている神、そのような神の視点に立つことが自然科学の目的です。この点については、第9章で本格的に論じます。

以下、研究者も「かやの中」であることを銘記しつつ、グループ・ダイナミックスの研究現場、すなわち、当事者と研究者の協同的実践の現場を見ていきましょう。具体的には、協同的実践の現場の特徴として、(1)ローカリティ、(2)価値・目的、(3)一次モードと二次モード、(4)インターローカリティ、(5)研究者の役割、という五点を述べます。適宜、自然科学との比較を交えながら、グループ・ダイナミックスの特徴を鮮明にしていきます。

## 2 協同的実践の現場

### ローカリティ

当事者と研究者の協同的実践は、特定の時期（時代）に、特定の場所で、特定の人々によって行なわれます。もちろん、時期の長い短い、場所の広い狭い、人々の多い少ないは、さまざまです。しかし、

そのような違いはあっても、協同的実践は、限定された時期に、限定された場所で、限定された人々によって行なわれます。したがって、グループ・ダイナミックスの知識は、基本的に、限定された時期と場所での限定された人々による協同的実践、つまり、ローカル（局所的）な場から生まれ、そのローカリティの特色を色濃く反映します。それに対して、自然科学は、時代と場所を超えて万人に妥当する知識、すなわち、ユニバーサル（普遍的）な知識を探究します。

データ収集や観察は、グループ・ダイナミックスでも重要です。しかし、グループ・ダイナミックスのデータ収集や観察は、ローカルな協同的実践の中で、協同的実践のために行なわれます。言うまでもなく、協同的実践を行なおうとすれば、現状をよく観察しなければなりません。必要ならばデータも集めなければなりません。現状のみならず、過去のいきさつや歴史について、よく調べてみる必要性も出てきます。あるいは、将来について、予想やシミュレーションをしてみることが必要になる場合もあるでしょう。このように、グループ・ダイナミックスにとつても、データ収集や観察は重要です。しかし、グループ・ダイナミックスのデータ収集や観察は、あくまでも、ローカルな現状、過去、将来を把握するためのものです。決して、場所を超えて、時代を超えて妥当する普遍的事実を発見するためのものではありません。

それに対して、自然科学におけるデータ収集や観察は、普遍的事実を実証するためのものです。自然科学のデータや観察結果は、場所を超え、時代を超えて妥当する事実（現象）の「サンプル標本」です。グループ・ダイナミックスにおいても、データ収集の技法として、標本サンプリングが有効な場合があります。しかし、それは、時間、労力、費用の節減のためであり、収集されたデータによって把握しようとするのはローカルな現実です。



## 価値・目的

協同的实践は、必ずなんらかの価値や目的を前提にして行なわれます。いかに価値中立的であろうとしても、あるいは、特定の価値を意識していなくても、必ずなんらかの価値や目的を前提にしているのです。もし、「自分は価値中立的だ」と言う研究者がいるとしたら、その人は、社会の大多数がもっている支配的な価値観に与していることを忘れていきます。

ということは、グループ・ダイナミックスの知識は、その知識を生み出した協同的实践の根底にある価値や目的と分かちがたく結びついているということです。グループ・ダイナミックスの知識は、その前提となっている目的や価値を共有する人々の実践にとつてこそ、意味ある知識となります。逆に言うと、あるグループ・ダイナミックスの知識を使うということは、その知識の発信者と目的や価値を共有していくことを意味します。

それだけに、グループ・ダイナミックスの知識をつくりだす研究者も、グループ・ダイナミックスの知識を使おうとする人々も、みずからの目的や価値観を常に問いつづける必要があります。この点についても、いったん生成された知識が、価値や目的の違いを超えた妥当性、すなわち価値中立的な妥当性を有する自然科学とは対照的です。

## 内在と外在

「かや」にすっぽり包まれていることを、「かや」に内在していると言います。内在の反対は外在ですが、少々説明が必要です。ある「かや」に内在していない身体や事物は、たしかに、その「かや」の外に部にいるわけですが、やはりなんらかの「かや」に内在しています。包まれている「かや」が違うだけ

の話です。前章で「「かや」こそ主体」というグループ・ダイナミックスの基本的考え方を紹介しましたが、この考え方は、徹頭徹尾、「かや」への内在を前提にしています。もちろん、当事者と研究者の協同的実践も、協同的実践の「かや」への内在を前提にして考えねばなりません。

それに対して、外在とは、いかなる「かや」にも内在していないということです。言いかえれば、「かや」の違いを超越しているということです。自然科学は、このような意味での外在的知識（超越的な知識）を探究します。自然科学の知識は「かや」の違いを超越していますから、どんな「かや」にも適用可能です。

現状把握が、外在的な事実を保証せず、たまたまみずから内在している「かや」の産物にすぎないと考えるならば、それに基づいてみずからの行動を決することなどできません。かりに、目の前で暴力をふるう人を見ても、その暴力が事実かどうかもわからなければ、何もできません。棒立ちになるか、あるいは、「世の中、こんなものさ」とニヒリズムを決め込むしかないでしょう。では、どう考えるべきでしょうか。

### 一次モードと二次モード

ローカルな現状、過去、将来を把握し、その把握に基づいて問題解決に取り組む段階を、協同的実践の「一次モード」と呼ぶことにします。この一次モードでは、データ収集や観察も必要になります。また、研究者は、さまざまな概念や理論を持ち込みます。

一次モードには、一線の向こう側に据えた対象を、一線のこちら側から観察するスタンス、すなわち、自然科学と同じスタンスが必要です。あるいは、素朴に目の前の事実を、事実として受け止めるスタン

スを素朴实在論と呼びますが、一次モードは素朴实在論でいいのです。

重要なことは、一次モードの協同的実践は、必ず、ある前提、しかも、「気づかざる前提」の上に立っているということです。「気づかざる」というところが重要です。「気づかざる前提」に立たない協同的実践など、そもそも不可能です。気づかざる前提に立つて初めて、協同的実践を行なうことが可能になります。

自分たちが前提にしていることを、徹底的に洗い出し、考えぬいたとしても、考えついた前提の、そのまた先に、必ず、「気づかざる前提」が残ります——いや、「残る」という表現は、正確には間違いです。「気づかざる前提」を見極めることは、それ自体、協同的実践の一部に他なりません。そうであれば、「気づかざる前提」を見極めようと努力する協同的実践は、見極めつつも、さらなる「気づかざる前提」をつくりだしているはずです。

ところが、協同的実践が進行するうちに、それまでの実践の根底にあった「気づかざる前提」に気づくことがあります。この「気づかざる前提」に気づく段階を、二次モードと呼ぶことにします。「あつ、そうか。今まで、そう思いこんでいた」「そういう価値観に囚われていた」と、それまでの（一次モードの）前提に過去形で気づくモードです。こうして、二次モードを経て、新たな一次モードに入っていきます。

新たな一次モードでは、現状、過去、将来の把握のしかたが、前の一次モードとは異なってきます。また、前の一次モードで行なった協同的実践の意味づけも異なってきます。しかし、今回の一次モードの協同的実践もまた、「気づかざる前提」——もちろん、前回の「気づかざる前提」とは違いますが——に立っています。その「気づかざる前提」に気づくときには、新たな二次モードに入っていきます。

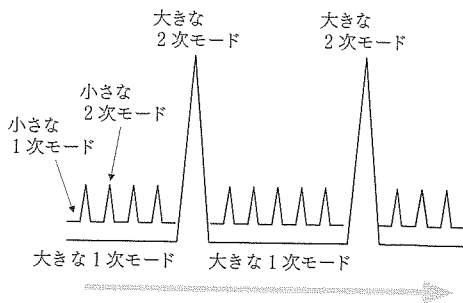


図3-1 1次モードと2次モードの交替運動

### 二つのモードの交替運動

協同的実践の現場は、一次モードと二次モードの繰り返し、一次モードと二次モードの連続的交替運動です。二次モードは、一次モードの協同的実践を深化させる中から、蓋然的に到来します——必然的に到来するものではありません。

この二つのモードの交替運動は、図3-1のように、小さな(微視的な)交替運動と大きな(巨視的な)交替運動に分けることができます。まず、微視的な交替運動が、日常的に進行したとします。小さな気づき、小さな発見は、すべて、「一次モード↓二次モード↓(新たなる)一次モード」という交替運動です。もちろん、この場合には、「気づかざる前提」に気づいたという感覚は伴わないし、「気づかざる前提」が大きく変化するわけでもありません。しかし、いかに小さい変化でもあるにしても、「気づかざる前提」は、必ず、変化しています。とくに前提が変化したという感覚はなくとも、現状、過去、将来の事実を徹底的に調べ、実践の対象としていくことによつて、実は、「気づかざる前提」の方も、徐々に変化しているのです。この微視的な交替運動が数多くなされるところに、大きな(巨視的な)交替運動に向けてのエネルギーが蓄積されていきます。

大きな(巨視的な)交替運動の場合には、二次モードに入ったとき、まさに、「気づかざる前提」に気づいた、という感覚が伴います。「そうか、自分たちは、そういう、気づかざる前提に立っていたのだ

な」と、目から鱗が落ちたような感覚を覚えることもあるでしょう。このような大きな交替運動が生じると、それまでの（一次モードの）実践や、その基礎になつていた現状・過去・将来の把握が大きく変化します。

### 自然科学との違い

以上、一次モードと二次モードについて述べたことは、グループ・ダイナミックスのみならず、自然科学にもあてはまるかのように見えます。たしかに、自然科学でも、大きな発見をきっかけに、おおもとにある基礎理論（前提）が改訂されてきました。そして、基礎理論が改訂されると、従来の多くの知見が、改訂された基礎理論の上に再編成されてきました。このプロセスは、グループ・ダイナミックスについて述べた、「一次モード↓二次モード（基礎理論の改訂）↓新たな一次モード」と同じように見えます。

しかし、自然科学では、このような基礎理論の改訂を続けることによつて、普遍的な事実に接近できるといふ大前提があります。逆に言うと、普遍的な事実に接近していくためにこそ、基礎理論の改訂がなされるのです。したがつて、基礎理論が改訂されるということは、それまでの基礎理論が普遍的な事実への接近において不十分であつたこと、すなわち、それまでの基礎理論が不完全、ないしは、誤りであつたことを意味します。

一方、すでに述べたように、グループ・ダイナミックスは、普遍的事実を追究する科学ではありません。グループ・ダイナミックスは、ローカルな協同的実践のための科学です。したがつて、かりに一次モードから二次モードに入ったとしても、二次モードは、先行する一次モードの誤りを指摘するのでは

ありません。もちろん、「気づかざる前提」に気づいたときには、「そう思いこんでいたけれども誤りだった、実は……」というセリフが飛び出すでしょう。しかし、その「誤り」は、外在的事実に対する認識の誤り——自然科学的な誤り——とは性質を異にします。

本章末尾のコラム3-1には、ある過疎地域の活性化運動の中で私が経験した二次モードを紹介しています。

#### インターローカリティ

ローカルな協同的实践についての記録は、特定の人物、特定の場所、特定の時代に彩られた生々しい実践の記録です。生々しい記録は、それなりに人の心をうつものですが、同時に、他の場所、他の時代の人々の実践には結びつきにくいものです。他の人が参考にしようとしても、「あの人物だったから、あの場所だったから、あの時代だったから、できたのだ」と思わざるをえません。

そこで、生々しい記録を、ちよつとだけ抽象化してやる必要があります。つまり、ちよつとだけ一般的な概念を使って、直接の当事者ではない人にも理解できるようにするのです。たとえば、ある人物が、青年期に親とけんかをして故郷を飛び出し、都会で荒唐無稽な独身時代を送ったあとに結婚、その後、リストラにあつて帰郷し、ふとしたきつかけで、都会で荒唐無稽な独身時代を送ったあとに結婚、その後、たとします。この彼ならではの人生をそのままメッセージにしても、彼と同じ人生をたどった人はいません。しかし、「都会の経験を活かした」というところがポイントですから、その人物を、ある「Uターン者」という概念を用いて、ちよつとだけ抽象化して描いたらどうでしょうか。それなら、「あー、うちの村だったら、Uターンして戻ってきた、あの人のことだ」というぐあいに、他のコミュニティの

参考になるかもしれません。

この抽象化の作業も、当事者と研究者が協同して行なうことができるでしょう。おそらく、研究者の方が、「こういう概念が使えるのではないか」と提案する場合が多いでしょう。研究者は、その概念について、かみくだいてかみくだいて、わかりやすく説明しなければなりません。また、当事者の方も、決して研究者の言いなりになつてはいけません。自分(たち)の実践が、その概念での確に表現されているのか、また、その概念で自分(たち)の実践をメッセージにしてよいのか、徹底的に考え、研究者とも議論しなければいけません。こうして、当事者と研究者の協同によるグループ・ダイナミックスの知識が生まれ、発信されます。その知識は、特定の人物(たち)が、特定の場所、特定の時代に行なつた実践、つまり、ローカルな実践を、ちよつとだけ抽象化した知識です。

こうして、あるローカルな場所・時代から発信された知識は、抽象化のおかげで、他のローカルな場所・時代に伝播していきます。あるローカルな場所・時代から発信された知識は、他のローカルな場所・時代にいる人(たち)によつてキャッチされ、実践の参考にされるかもしれません。そうなれば、地点と時点を異にする二つのローカルな場が結びつく、「インターローカル」な関係が生まれます。言いかえれば、二つのローカルな実践からインターローカルな実践へと進展します。

もちろん、キャッチした知識がそのまま使われるとは限りません。批判も結構です。一つのローカルな実践の中にも、当事者と研究者の対立があるように、異なる地点あるいは異なる時点の間の協同的実践にも批判や対立はあり得るはずで、むしろ、そのような批判や対立を通じて、批判する側、批判される側の協同が深まり、ローカルなメッセージ(知識)が、より広範な人々のメッセージ(知識)へと鍛えられていきます。

グループ・ダイナミクスにおけるローカルな実践からインターローカルな実践への進展は、自然科学におけるユニバーサルな知識の探究に匹敵する位置を占めています。しかし、いかにインターローカルティが空間的、時間的に拡大しようとも、あくまでも（拡大した）ローカルティであり、決して、ユニバーサルティではないことには変わりはありません。

本章末尾のコラム3-2では、エスノグラフィという手法について、協同的实践をインターローカルなものに拡大する手段として紹介しました。また、コラム3-3では、終戦直後と現在という二つの時点を結ぶインターローカルティの例を紹介しています。

#### 研究者の役割——言説空間を豊かにする

最後に、当事者と研究者の協同的实践で、研究者が果たすべき役割は何なのでしょうか。研究者と違って、大学や研究機関に所属する研究者だけではありません。研究者とは呼ばれない当事者の中にも、研究者と同じような本を読み、思索を重ねている人がいるかもしれません。ここでの研究者には、そのような当事者も含まれます。

研究者の研究者としての役割は、現場の言説空間を豊かにすることです。言説とは、まとまりをもつた言葉のことです。現場における言葉の世界を豊かにすること——これが研究者の役割です。私たちは、言葉を使って考えます。そして、言葉を使ってコミュニケーションをします。その言葉が豊かになれば、思考もコミュニケーションも豊かになるはずでです。

研究者は、さまざまな概念や理論を学び、考案します。理論は言説ですし、概念は理論という言葉で構成する重要な素材です。言説空間を豊かにするために、研究者が使用できる理論は多様です。個別の



現象、個別の実践についての理論もあるでしょうし、広い歴史的・社会的見地に立ったグラウンドセオリ、学問そのものの基礎を問うメタ理論の類もあるでしょう。また、データ解析、モデル構成など、研究手法についての理論もあるでしょう。自然科学の理論や概念も必要になるでしょう。

言説には、日常言語で表現される言説以外に、数式のような数学言語や、化学の元素記号のような記号言語で表現される言説もあります。言うまでもなく、これらの言説を当事者が理解できるように、かみくだいて現場に持ち込むことが必要です。

### 協同的实践への貢献

では、現場の言説空間を豊かにすることによって、協同的实践にどのような貢献が期待されるでしょうか。第一に、理論的な言説によって、一次モードと二次モードの連続的交替運動が推進されることが期待できます。まず、一次モードで、現状・過去・将来を把握し、実践の指針や計画を立てるのに、理論的言説が役立つかもしれません。次に、一次モードにおける「気づかざる前提」を常に問いつづけ、二次モードへの進展可能性を高めるのに、理論的言説が寄与するかもしれません。さらには、首尾よく二次モードに入ったときには、明示化された「気づかざる前提」に基づいて、先行する一次モードの認識や実践を位置づけ直し、新たな一次モードでめざすべき方向性を定めるのにも、理論的言説が寄与できる可能性があります。

第二に、理論的言説によって、ローカルな協同的实践がインターローカルな実践へと拡大できることも期待されます。その場合、すでに述べたように、ローカルな実践の生々しい記録を、ちよつとだけ抽象化することが必要です。しかし、どの程度抽象化すべきかは、慎重に考えねばなりません。あまりに

も抽象化しすぎると、今度は具体性がなさすぎて、他のローカリティの人たちには、はなから理解不能ということになってしまいます。自分たちの協同的実践を、どの程度抽象化して発信するか、それを決めるのも当事者と研究者の協同的実践の一部です。

一方、どこかのローカリティから発信されたメッセージを受信する側では、メッセージを具象化することが必要になります。抽象化されたメッセージの内容を、自分たちのローカリティの具体的な事情に引き寄せて、解釈するわけです。これも、研究者が貢献できる部分です。ただし、メッセージの解釈には、これが正しいという唯一の解釈があるわけではありません。同じセリフでも、それを受け取る側が置かれている状況によって、解釈は異なってきます。メッセージの具象化も、当事者と研究者の協同的実践の一部です。

以上、フィールドに飛び込み、当事者との協同的実践に直接かかわる研究者を中心に論じてきました。しかし、フィールドとの距離については、遠近さまざまな研究者が必要です。書齋の理論家も必要です。広い歴史的・空間的視野から理論を展開する研究者も必要です。ただ、自然科学の理論家が、どこか末端で、試験管を振って理論を実証する同僚を念頭に置いているのと同様に、グループ・ダイナミックスの書齋の理論家や広い歴史的・空間的視野に立つ研究者は、どこか末端で、現実の当事者と協働する同僚を念頭に置いておく必要があるでしょう。

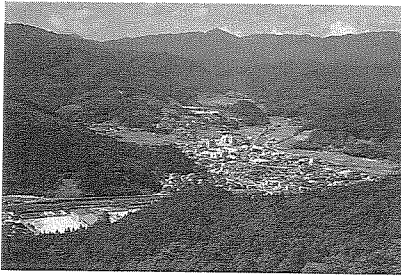
#### アクション・リサーチ

最後に、研究者の役割が言説空間を豊かにすることであれば、それが常に必要だとは限らないことも忘れてはならないでしょう。研究者が当事者とともに現場を変えることを明確に自覚している協同的実

実践は、しばしば、アクション・リサーチ（実践研究）と呼ばれます。ただし、アクション・リサーチでも、研究者の役割が、言説空間を豊かにすることである点は変わりません。アクション・リサーチが常に必要である、あるいは、当事者にとって常に役に立つなどと思うのは、研究者のおごりに他なりません。

もちろん、アクション・リサーチが当事者の役に立つ場合は多いでしょう。しかし、何の役にも立たない場合、さらには有害な場合もあります。私が、それを思い知ったのは、もう一八年前になります。が、阪神・淡路大震災（一九九五年）の直後（三日後）に被災地を訪れたときでした。未曾有の災害に打ちひしがれ、立ち上がるにも立ち上がれない被災者ばかりでした。ただただ、悲しさ、寂しさ、切なさ、むなしさを噛みしめているのが伝わってきました。言葉など無用です。言説空間を豊かにするなど、百害あって一利なしでした。

## 二次モードの例——過疎ではなく適疎



鳥取県智頭町の中心部

ある過疎地域（鳥取県智頭町）に行きはじめて数年が経過したころの話です。私が、智頭町に初めて行ったのは一九九二年、四一歳のときでした。それまでも、過疎村おこしといった言葉は聞いていましたが、それらは私とは別世界の話でした。

智頭町では、一九八四年以来、全国的に見てもきわめてラディカルな地域活性化運動、しかも住民自治をめざす徹底した草の根の運動が進行していました。

私が、その運動にかかわり出して、早、二〇年になります。

智頭町で出会ったほとんどすべての人が、

口にするセリフがありました。それは、過疎に対する不安のセリフでした——「若い人はどんどんいなくなる。年寄りばかり。二〇年後、自分の集落はどうなるのだろうか」。その過疎を嘆く声は、今もつて多くの住民たちから聞かれる素朴な声です。

一般の住民だけではありません。過疎をなんとかしようとして決起した二人のリーダー、そして、その仲間たちの間でも、過疎は疑いのない現実でした。ただ、彼らが、多くの住民と決定的に違っていたのは、過疎に手をこまねているのではなく、みずからなんとかしようと決起したことでした。しかし、過疎を自明の現実として受け入れていた点では、その他の住民たちと同じだったので

す。さらに、私たち研究者も同じでした。智頭への訪問回数が増え、現地の状況を知れば知るほど、過疎の深刻さもわかるようになりました。過疎の深刻さを理解しつつ、それを前提に、二人のリーダーとともに、智頭をどうしたらよいかを議論し、行動をとりました。

あるとき、ある研究者が一枚のグラフ（図3-2）を持ってきました。その研究者は、私よりもずっと先に智頭の活性化運動に関与し、私を智頭へといざなってくれた研究者でした。そのグラフには、江戸・寛政年間（一七九〇年代）からの智頭の人口推移がまとめられていま

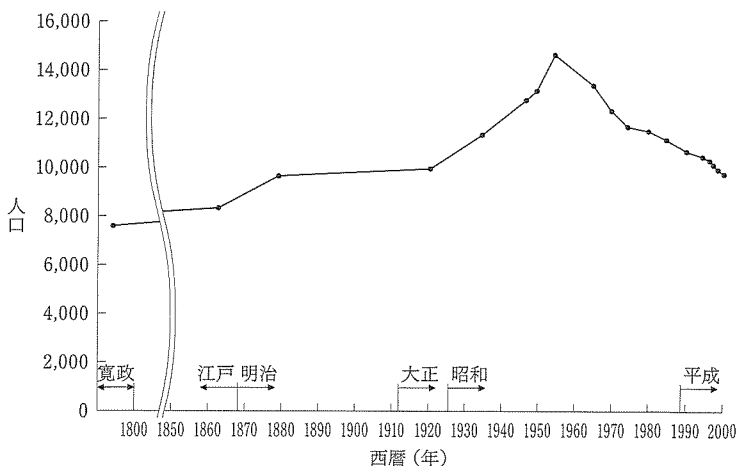


図 3-2 智頭町の人口推移

した。そのグラフによれば、智頭の人口は、明治までは約七〜八千人台で安定していました。それが、明治以降、緩やかに上昇し、太平洋戦争直後に一万四〇〇〇人以上まで跳ね上がりました。海外の戦地から戻った兵隊たち、焼け野が原と化した都市から移り住んできた人々、それらによって、いわば人口バブルが発生したのです。その人口バブルが次第に収縮し、その当時一万人を割り込むうとしていました。

このグラフが示しているのは、そもそも智頭という土地のキャパシティ（収容力）は、人口七〇〇〇人くらいだということでした。そして、今、終戦直後の人口バブルが収縮し、適度な人口へと回帰しつつあることがわかりました。智頭は、過度な「疎」に向かっているのではない。適度な「疎」への道のりを歩んでいるのだ。過疎ではなく、適疎。まさに、二次モードでした。過度な「疎」に怯えることなく、人口減少を一つのデータとして睨みつつ、前向きに地域づくりに取り組み新たな一次モードが始まりました。

\* 岡田憲夫ほか『地域からの挑戦——鳥取県・智頭町の「くにおこし」』（岩波ブックレット、二〇〇〇年）より。

## エスノグラフィ

インタローカリティの観点から、エスノグラフィという手法を論じてみましょう。エスノグラフィとは、そもそも民族学者（文化人類学者）が研究フィールドを調査し、見聞したことを記述したドキュメンタリーのことでした。その研究フィールドは、多くの場合、「未開の地」と呼ばれる地域でした。エスノグラフィは、「民族誌」と訳されています。しかし、今では、民族学者のみならず、社会学をはじめ多くの分野でエスノグラフィが書かれるようになり、エスノグラフィによって描かれる対象も多様化しています——若者の新しいライフスタイル、ベンチャー企業、スポーツ・芸術集団、等々。したがって、民族誌という訳語は使わず、エスノグラフィとカタカナ書きにすることにします。

しばしば、エスノグラフィに対して、次のような質問がなされます——「たしかにおもしろいエスノグラフィだが、書いてあることに一般性はあるのか？ はたして、客観的な描写なのか？」と。この質問には、どう答える

べきでしょうか。

ここで思い出すべきは、すでに述べたように、いかなる協同的実践もローカルな場で行なわれるということとです。協同的実践がローカルな営みであれば、その記述であるエスノグラフィもまたローカルな性質を有することは当然です。エスノグラフィに何が書かれ何が書かれないか、また、書かれることがどのように書かれるかは、ローカルな場の中で決まります。一般性（ローカリティを超えて普遍的に妥当するか）や客観性（だれが書いても同じ記述になるか）など、そもそも見当違いな質問です。

では、エスノグラフィがめざすものはなんでしょうか。それこそ、ローカルな協同的実践からインタローカルな協同的実践への拡大です。平たく言えば、協同的実践の輪を広げること——もつと平たく言えば、協同的実践の仲間を増やすことです。

エスノグラフィを書くという作業は、協同的実践の一部です。エスノグラフィは、協同的実践が終了したあとの記録報告ではありません。第一、協同的実践に、「ここで終わり」といった最終ゴールがあるわけではありません。かりに、当事者と研究者が「これで終わり」にしたくても、時計が止まらないかぎり、そんなことは不可能です。

エスノグラフィは現場から読者へのメッセージです。

当事者とともに自分たちの協同的実践をメッセージとして発信し、読者を仲間ないしは理解者にする——これが、エスノグラフィのめざすところです。言い換えれば、当事者と研究者が、読者との間にインターローカルな協同的実践の関係をつくるのが、エスノグラフィの目的です。

読者を仲間にするには、エスノグラフィのもとになった協同的実践を、わがことのように追体験してもらうことが必要です。願わくば、手に汗握りながら、目に涙を浮かべながら追体験してほしいものです。したがって、エスノグラフィで描かれている現象そのものに関心がある人々が、「おもしろい」と感じてくれないようなエスノグラフィは失格です。

それでは、読者に「おもしろい」と感じさせるためだったら、あることないことなんでも書いてよいのでしょうか。嘘八百を並べてもよいのでしょうか。ここが、エスノグラフィとフィクションとの決定的な違いです。いくらエスノグラフィに共鳴したとしても、現地に行ってみたら、事実はまったく違うことに気づいたとします。あるいは、インターネットで調べたら、嘘がばれてしまったとします。これでは、協同的実践の仲間にはなってくれません。仲間を得ようとすれば、淡々とした状況描写や事実経過の記述も必要です。

### コラム 3-3

#### インターローカリティ——異なる時点を結ぶ

京都市の北西部に小野郷という地域があります。平成の大合併までは京都市の西北端でした。京都市の一部ではありますが、小野郷という地域だけを見れば過疎地域です。

二〇〇〇年、長年、小野郷の医療に携わってきた医師が亡くなり、無医地区になっていました。京都市街部の病院に行くには、山道を車で三〇分走らねばなりません。救急患者はヘリコプターで搬送しなければなりません。医療サービスが受けられないわけではありませんが、小野郷という地域、住民の暮らし、患者の家族のことを熟知した医師がいなくなつたのです。

京都新聞（二〇〇一年二月二三日）に載つた一つの記事が、二人の医師と私（筆者）の目にとまりました。その記事は、小野郷小学校の五、六年生七人が取り組んだ総合学習「小野郷の明日を創る」について報じていました。子どもたちは、自分たちの地域をつぶさに見てまわるとともに、学区内の約一九〇戸を一軒一軒訪ね、小野



小野郷の氏子会館で診療を待つ住民たち

郷の昔と今、そして、将来について話を聞きました。学習発表会では、みずからの地域への熱い思い、活性化に向けての提言を発信しました。その中に、病院がなくなったことへの不安も報告されていました。

二人の医師と私は、一つの提案を温め、小野郷を訪れました。それは、「自分たちの診療所をつくってみませんか。私たちが、雇われ医師になります」という提案でした。しかし、この提案は、住民にとって意味不明でした。「難しいことを言わずに、さっさと開業してほしい」というのが、住民の気持ちでした。目の前に二人の医師が来ているのですから、当然と言えば当然でしょう。

そんなとき、「小野郷の明日を考える会」（以下「考える会」というグループの存在を知りました。四〇歳代後半から五〇歳代、いわゆる団塊の世代を中心とする約一〇人の男性グループでした。彼らは、過疎化、沈滞化

の一途をたどる現状に危機感を抱き、打開策を模索しはじめていました。しかし、団塊の世代とはいえ、伝統的な地域にあつては、まだまだ周辺の存在でした。自治会や一般住民からも認知されない陰の存在でした。

私たちは、「考える会」の人たちとミーティングを重ねました。「住民主体の診療所を軸に地域を活性化していこう」——私たちは、徐々に、この目標を共有していききました。仕事が終わって夜七時から始まるミーティングは、翌日の仕事があるにもかかわらず、毎回、一〇時をまわるまで続きました。

自治会という正式のルートを通すことも重要でした。「考える会」で議論しながら素案をつくる。その素案を自治会に諮る。その反応を、ふたたび、「考える会」に持ち帰り、議論する。これを繰り返すうちに、自治会も「考える会」も、そして、二人の医師と筆者も、次第に、「住民主体の診療所」のイメージを固めていきました。「今までよくわからなかったけど、先生らは、私たち小野郷の住民に賭けてはるんやな（賭けているのですね）」——自治会の席上で、こんな発言が飛び出しました。他の役員もうなずきました。

こうして、「住民主体の診療所」をめざす活動が始まりました。住民たちは、地元にある大きな神社の隣にある氏子会館を、診療の場とすることを決めました。クモ





終戦直後、住民主体の診療所をつくった西陣の住民たち

をなんとかしようとして、住民たちが団結し、それに応える医師とともに、西陣織工場の一隅に「白峯診療所」をつくったのです。ベッドも、医師のカバンも自転車も、住民たちが持ち寄ったのだそうです。白峯診療所は、その後も住民主体という一線を堅持しつつ、総合病院へと発展していきま

の菓が張っていた物置部屋をきれいに掃除して診療室として使えるようにしました。また、住民が診療所の運営について学習し、運営に参加するために「医療専門委員会」を立ち上げました。その委員は、やる気のある人はだれでも参加できるよう、公募制で募集しました。

二人の医師と私が、上のような提案を温めたのには理由があります。あるモデルがあったのです。それは、終戦直後の極貧の中で、京都市西陣の住民たちが、ある医師とともにつくった診療所でした。当時は、医療保険もありません。医者にかかりたくてもかかれない——それ

した。

二人の医師と私は、住民とともに白峯診療所をつくった医師を通じて、西陣で行なわれた住民運動のことを知っていました。たしかに、現在は、医療保険もありますし、医療にこと欠く時代ではありません。しかし、小野郷のように過疎化が進み、無医地区となる地域が出現しています。また、都市部と同様、過疎地域でも住民の絆は弱体化し、孤独な高齢者が増えています。孤独死は過疎地域でも大きな問題です。

貧しかった時代と豊かな時代という違いはありますが、今ふたたび、住民が絆を取り戻すことが重要です。それは地域の活性化です。活性化には、さまざまな軸があります。福祉を軸に活性化することもできれば、産業、教育、アート、防災等々を軸に活性化することもできます。小野郷の「住民主体の診療所」は、地域医療を軸とする活性化です。

「住民主体の診療所」は、終戦直後の西陣から半世紀後の小野郷へと連なるインターローカルな試みでもあります。それは、異なる時点を結ぶインターローカルティです。終戦直後の西陣から飛んできたタンポポの種が、半世紀の時間を経て小野郷に根づこうとしています\*。

\* 杉万俊夫（編著）『フィールドワーク人間科学——よみが

えるコミュニティ』（ミネルヴァ書房、二〇〇〇年）第3章を参照。

第

# II

部

## グループ・ダイナミックスの理論と実践

## 協同的実践のための理論

本章は、グループ・ダイナミックスの理論を紹介する第II部の序論です。グループ・ダイナミックスの理論は、当事者と研究者による協同的実践のための理論です。

第一に、理論をどのように位置づけるべきかを説明します。研究者と同様、理論もまた協同的実践に内在しています。

第二に、理論が協同的実践でどのように貢献できるかを述べます。理論は、デシジョン・メイキング（意思決定）とセンス・メイキング（腑に落ちること）に貢献できます。過去について腑に落ちることも、意思決定と同様、明日に向かっての営みです。

## 協同的実践に内在する理論

第II部の各章では、グループ・ダイナミックスの理論を紹介します。同時に、理論が、当事者と研究者の協同的実践の中でいかに活用されるか、その実例も紹介します。本章では、個々の理論に入る前に、グループ・ダイナミックスでは、理論をどのように位置づけるべきか、また、理論は、当事者と研究者の協同的実践でどのような貢献をなし得るのかを述べることにします。

前章（五三頁「内在と外在」）で、グループ・ダイナミックスの協同的実践は、協同的実践の「かや」に内在していることを述べました。協同的実践では、当事者も研究者も、また、過去・現状・将来の把握も、すべて協同的実践の「かや」に内在しているのです。同じことは、理論にもあてはまります。理

論が「かや」に内在するということは、理論の解釈が「かや」によって異なるということです。

それに対して、自然科学の理論は外在的でした。自然科学の理論を使う場合でも、いちおう、その理論は協同的実践の「かや」に内在していると言うことはできません。しかし、自然科学の理論は、協同的実践の「かや」を離れても同じ意味を維持します。自然科学の理論は、個々の協同的実践の、いわゆる「外に」あり、協同的実践の中で「外から持ってきて適用される」のです。したがって、どの協同的実践の中で適用されるかによって、理論の意味内容が異なることはありません。

一方、グループ・ダイナミックスの理論は、融通無碍とまでは言いませんが、それが内在する協同的実践の「かや」によって、どのように解釈されるかが異なってきました。どのような解釈がなされるか、ひいては、協同的実践に役立つか否かも、「かや」の中で決定されていきます。そういう強い意味で、理論が、協同的実践の「かや」に内在しているのです。この点は、研究者だけが特権的な位置にいるのではなく、当事者同様、協同的実践の「かや」に内在していることと表裏一体です。理論という言葉だけが特権的な位置にあるわけではありません。

#### デジジョン・メイキングとセンス・メイキング

当事者と研究者の協同的実践で、グループ・ダイナミックスの理論を役立てることができる二つの局面があります。その一つは、今後（将来）に向けて、協同的実践の方針を決定し、計画を立てる局面です。ひと言で言えば、「意思決定（decision-making）」の局面です。もう一つは、過去から現在までを振り返り、自分たちの歩んだ道のりを理解する局面です。この局面では、過去から現在までについて「腑に落ちること（sense-making）」が重要です。

一見すると、デシジョン・メイキングは未来を向いているから前向き、センス・メイキングは過去を向いているから後ろ向きに思えます。そして、センス・メイキングに対しては、「過ぎ去った過去について今さらどう納得してみたところで、所詮は過ぎ去った話じゃないか」と、無駄なことのように思っています。でも、本当にそうでしょうか。

あなたに親友がいたとします。もう数年來のつきあいです。その友人は明るい性格なのですが、たまに突然暗い表情を浮かべることに、あなたは気づいていました。ただ、それがなぜなのかは気づきませんでした。ある日、友人と話をしている途中、友人が暗い表情になりました。そのとき、あなたは自分の母親について熱っぽく語っていました。そして、自分が話している話題と友人の暗い表情が、結びつきました。そういうえば、友人は小さいころに交通事故で母親を亡くしていたのです——友人とつきあいはじめたころ、そんな話を聞いた覚えがありました。この瞬間、あなたは、過去、友人が時々浮かべてきた暗い表情について、センス・メイキングできたわけです。

あなたは、今後、今までのように友人に母親の話をするでしょうか？ おそらく、友人のことを考えれば、少なくとも今までのように不用意には母親の話はしないでしよう。「もう、彼に母親の話をするのはやめよう」などと意思決定をする必要などありません。心底、過去についてセンス・メイキングできれば、ことさらに意思決定などしなくとも、今から先の行動は変化します。一見、後ろ向きに見えるセンス・メイキングも、意思決定と同様、未来を変える力をもっています。

言うまでもなく、グループ・ダイナミックスの理論は、変化する「かや」（集合性）についての理論です。集合性は、第2章（一一頁）で述べたように、意味的集合性と物理的集合性から構成されています。センス・メイキングは、前の例で言えば、「彼の悲しい表情は、なるほどそういう意味だったのか」と、

今までは気づかなかった意味に気づくことですから、意味的集合性の理論と親和性をもっています。一方、デシジョン・メイキング(意思決定)は、「あれをどうして、これをこう動かして……」と、人物、事物、制度などをどう変えていくかを考えるわけですから、物理的集合性の理論と親和性をもっています。ただし、上に述べた親和性は、大まかな目安にすぎません。第一、デシジョン・メイキングとセンス・メイキングと言っても、まずセンス・メイキングをして、その後にデシジョン・メイキングをするといったように、両者は分離されていません。デシジョン・メイキングの途中でセンス・メイキングできたり、センス・メイキングを模索している途中にデシジョン・メイキングがなされたりというように、両者が一体となって進行する場合も多いのです。また、意味的集合性と物理的集合性も分かちがたく結びついています。物理的集合性から遊離した意味的集合性はありませんし、意味なき物理的物事は現前しないのですから、意味的集合性と無縁の物理的集合性もありません。

## 第II部の構成

以上のような限定つきですが、少々紋切り型に第II部で紹介する理論を分類してみましよう。言語の理論(第6章)と規範の理論(第7章)は、意味的集合性の理論です。一方、群集の理論(第8章)は、物理的集合性の理論です。活動の理論(第5章)は、意味的集合性と物理的集合性の両方に関する理論と言えるでしょう。

第II部の各章は、どの章から読んでいただいてもかまいません。また、第III部第9章では、「理論とは何か」を言説の視点から説明し、自然科学と人間科学(グループ・ダイナミックスは人間科学の一つです)という二種類の科学の守備範囲を論じることになります。

私たちは、うまくいってもいなくても、その原因を特定の個人に求めて、一件落着とする癖があります。しかし、一見、個人プレーに見える行為も、実はチームプレーの一部にすぎません。活動理論は、個人プレーに目を奪われがちな私たちの視野をチームプレーへと拡大してくれます。活動理論は、私たちが見るべきものをきちんと視野に入れて意思決定するのに役立つ理論です。

本章では、活動理論を使って夢（新しい活動ビジョン）を描く技法についても紹介します。ビジョンは、意思決定にとって重要です。本章の最後では、グループ・ダイナミックスの定番メニューの一つ、リーダーシップを取り上げます。

## 1 活動の構造

個人に目を奪われる癖

私たちは、変化する集合体に内在しています。集合体に内在しているということは、集合体にどっぴりつかっているということです。したがって、集合体の全体的性質である集合性（かや）の全貌を俯瞰的に捉えることなど不可能です。ただし、そうかと言って、私たちは、何も見ずに、やみくもに動くのではありません。集合性の全貌は把握できずとも、それなりに集合性（物理的・意味的集合性）の一部を把握しながら動いています。



しかし、私たちには、どうしても個人に目を奪われる癖があります。スポーツでチームが勝てば、「監督の采配がよかったから」と、監督という個人に注目します。あるいは、チームが負ければ、「彼のエラーで負けた」と、ふたたび、選手という個人に注目します。こうして、試合に勝っても負けても、特定の個人に原因を帰着させて、「一件落着」と納得してしまふ傾向があります。

とくに、いいことでも悪いことでも、中長期的に繰り返される現象の原因は、特定個人の内面に帰着される傾向があります。いつも手際よく仕事を片づける人を見れば、彼の内面（頭の中）に豊富な知識とスキルがあるからだと考えがちです。また、いつもミスばかりする人を見れば、彼の内面（心の中）に、仕事に対する意欲がないからだと考えがちです。こうして、特定個人の内面に首尾よく原因を帰着できると、理解できたような気になります。

しかし、私たちは、第2章で学んだように、「肉体に内蔵された心」という観念を捨てるところから出発しました。私たちの出発点は、「かや」こそ主体「だ」だったことを思い出してください。個人や、個人の内面に原因を求めるのは、その前提に反しています。

もちろん、集合体の全貌を把握することは不可能ですが、個人だけを注視しがちな視野を少しでも広げて、集合体へと視野を拡大することは重要です。言葉を換えれば、どうしても個人プレーと見てしまふ癖に流されず、一見、個人プレーに見える現象もチームプレーの一部として見ていく姿勢が重要なのです。

本章で紹介する活動理論は、まさに大きな集合体へと視野を拡大するための理論です。大きな集合体と言ふときの集合体には、人々のみならず、物的・制度的環境も含まれています（第1章四頁）。活動とは、そのような集合体の動きのことです。

## 本章の構成

本章では、第一に、人間の活動の構造を、低次の動物の活動と比較しながら図示します(本節の次項以下)。その上で、第二に、今までにない新しい活動が生まれるとはどういうことなのか、どうすれば新しい活動を創り出せるのかを説明します。活動理論は、新しい活動を創出するための活動、すなわち、変革活動をめざしています(第2節)。

大きな集合体を視野に入れることはセンス・メイキングにとっても重要ですが、デシジョン・メイキングにとっても重要です。デシジョン・メイキングのためには、視野を広くして、見るべきものをきちんと見ておくことが必要だからです。本章では、活動理論を使ってビジョン(夢)を描くツールも紹介します。ビジョンを描くことは、デシジョン・メイキングの重要な部分を占めています(第3節)。本章の最後では、グループ・ダイナミックスでもっとも関心の高いテーマの一つである「リーダーシップ」を取り上げましょう(第4節)。

## 活動の進化

活動理論の源流は、L・ヴィゴツキー、A・レオンチェフ、A・ルリヤなどに代表される二〇世紀ロシアの心理学者グループ(文化・歴史的心理学派)にあります。活動理論は、「文化・歴史的活動理論」(cultural-historical activity theory)とも呼ばれるように、人間の行為を、徹底的に、集合体や社会の文化的・歴史的文脈の中で捉えようとしています。

また、活動理論は、たんに、集合体の活動や人間の行為を理解するためだけの理論ではありません。それは、集合体を変革し、人間の行為を変革していく実践のための理論、すなわち、意思決定(デシジ

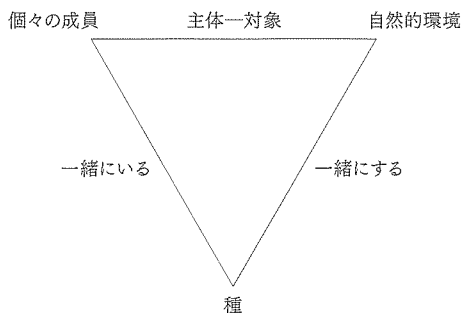


図 5-1 低次レベルの動物の活動

ヨン・メイキング)のための理論でもあります。活動理論の代表的研究者であるY・エンゲストロームが「学習活動」と呼んでいる活動(本章では、「変革活動」と呼びます)は、集合体や社会で自明とされている前提(活動の前提)の文化・歴史的基盤を問い直し、新しい前提を創出していく活動のことです<sup>1)</sup>。ここで、いささか回り道に見えるかもしれないませんが、人間の活動の特徴を浮き彫りにするために、動物の進化にそった活動の変化を見ておきましょう。図5-1は、進化の低次レベルにおける活動の構造を示しています。重要なことは、活動の構造が逆三角形として描かれていることです。この三角形は、次のことを意味しています——「隣りあう頂点は、決して直接結びついていてはならず、必ず、もう一つの頂点を経由して結びついている」。「もう一つの頂点を経由して」を、もう一つの頂点に「媒介されて」と言うことにします。

たとえば、個々の成員(左上の頂点)と自然的環境(右上の頂点)の関係は、種(下の頂点)に媒介されています。個々の成員は、常に、種とともにあります。種あつての個体です。また、自然的環境は、種によってつくられ、種をつくります。したがって、個々の成員と自然的環境との関係は、決して直(ちよく)の関係ではなく、種を介して

1 本章で紹介する活動理論は、次のエンゲストロームの著作に基づいています。

Y. Engeström *Learning by Expanding: An Activity-theoretical Approach to Development Research*, Helsinki:

Oriente-Konsultit, 1987

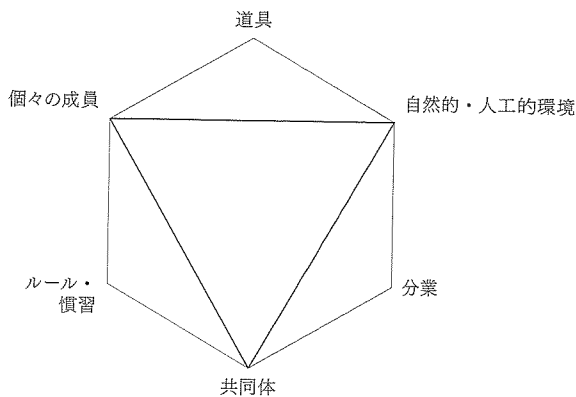


図 5-2 高次レベルの動物の活動

の関係、種に媒介された関係なのです。

図 5-2 は、類人猿など高次のレベルにおける活動の構造です。ここでは、図 5-1 の隣接関係が、直接的な関係から間接的な関係へと移行しつつあることが示されています。成員と環境（自然的・人工的環境）の関係は道具を媒介とする関係に、成員と共同体の関係はルールや慣習を媒介とする関係に、共同体と環境の関係は分業を媒介とする関係に移行しつつあります。図 5-1 の自然的環境が、自然的環境だけではなく人工的環境（正確には、人工的ではなく、猿工的）も含むようになったこと、また、生物的な種が社会的な共同体になったことにも注意してください。

### 人間の活動

いよいよ、図 5-3 は、人間に固有の活動の構造です。図 5-2 で現れた媒介項が、もともとあった三つの頂点と対等角形は、純粹な自然の中で営まれる活動を示していました。ひるがえれば、図 5-1 の三や共同体のように経済的・歴史的な媒介項が現れました。そして、図 5-3 では、自然的環境に経済的・歴史的でもある人間固有の活動が描かれています。

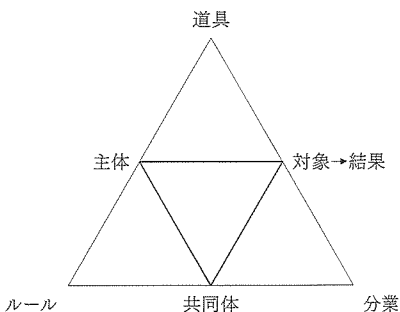


図 5-3 人間の活動

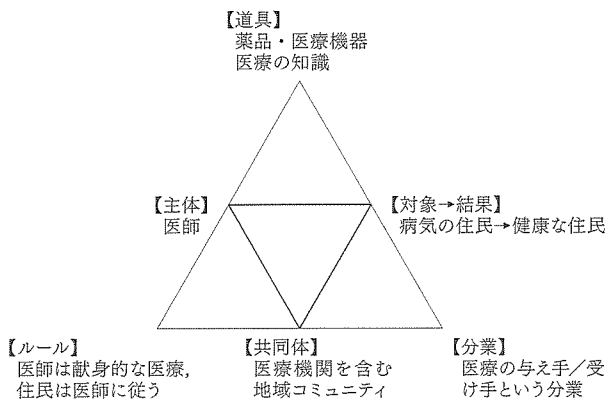


図 5-4 一般的な医療活動

図 5-3 の具体例として、一般的な医療活動の構造をまとめたのが図 5-4 です。この図は、コミュニティに住む医師による医療活動を表わしたものです。まず、この図の中央にある「主体」（中心的な人物や集団）と「対象→結果」の二項を結ぶ線（横線）から見ていきましょう。この線は、「主体」と「対象→結果」の二項を結ぶ線（横線）から見ていきましょう。この図は、コミュニティ

の「主体」である医師が、病気になる住民を「対象」に医療行為を行ない、健康な住民に変換する（健康な住民という「結果」をもたらす）という日常の行為を示しています。しかし、これだけでは、医師と患者という二者関係しか視野に入っていません。そこで、二つの方向に向かって集合体の範囲を拡大していきます。第一に、「道具」の項を含むよう、向上きに視野を拡大します。医師の

患者に対する医療行為は、さまざまな「道具」を使って行なわれます。薬品や医療機器のような物的道具はもちろんのこと、医師が学んできた医療に関する知識も使用されます。ここで重要なことは、いかなる道具も、必ず歴史的・社会的な産物であるということです。言いかえれば、過去の幾多の集合体によってつくられてきたということです。そのような道具を使用することは、医師も患者も、過去から現在に至る集合性に身を置くことを意味します。

第二に、「共同体」（そして、「ルール」「分業」）の項を含むよう、下向きに視野を拡大します。医師も患者も、同じ地域コミュニティのメンバーです。地域コミュニティの集合性にも含まれています。いかに個人としての医師が個人としての患者に相対していようと、それは、直ちよくの関係ではなく、地域コミュニティという共同体に媒介されています。

### 分業とルールも

地域コミュニティという共同体での通常の医療活動では、医師が医療の与え手、患者（住民）が医療の受け手という明確な「分業」体制があります。また、地域コミュニティという共同体には、医療に関する「ルール」も形成されています。ここでいうルールは、ある程度メンバーに意識化されているものを指しています。通常の医療活動では、上に述べた分業体制のもとで、「医師は献身的な医療を提供すべきであり、一方、患者（住民）は医師の指示に従うべし」というルールが存在しています。以上の分業やルールは一見当たり前のように思われるかもしれませんが、コラム3-3（六七頁）で紹介したように、上記のルールに加えて、住民も診療所の運営に参加するという分業や、住民主体の診療所運営というルールもあります。

以上のようにして、主体の対象に対する行為（中央の横線）が、今や合計六項からなる活動として把握されることになりました。言い換えれば、道具に媒介される間接的な集合性と、より直接的に主体と対象を包み込む集合性をも包含するまでに、視野を拡大できたのです。主体の対象に対する行為（中央の横線）だけしか視野にない場合、現状の行為を変えようとするれば、主体の能力や意欲を変える以外に術はありませぬ。しかし、計六項を含むまでに視野を拡大すれば、さまざまな手の打ち方が可能になります。道具を変えてみる、主体のパートナー（共同体）を変えてみる、役割分担（分業）を変えてみる、ルールを変えてみるなど、手の打ち方が一気に広がります。

ただ、実際の問題に直面したとき、医療の例のように視野を拡大するのは簡単ではありません。いかなる道具が行為を媒介しているのか、主体と対象の背後にいかなる共同体が存在しているのかを見出すには、試行錯誤も含めた徹底的な観察、分析が必要になります。その観察、分析によって、どのように視野を拡大できるか、つまり、当初の主体の行為をどのような活動の一部として捉えることができるかが、それに基づく意思決定（デシジョン・メイキング）を大きく左右します。

本章末尾のコラム5-1では、活動理論の立場から、エスノメソドロジーという研究分野を紹介しなす。

### 活動と活動の関係

社会には多くの活動が存在しています。それら多くの活動の中には、互いにほとんど無関係という活動もあるでしょうが、他方では、相互に依存しあっている活動もあります。その依存関係には、四つの種類があります。私たちにとってもっとも重要なのは、次節で紹介する第四の依存関係、すなわち、変

革活動・従来の活動・新しい活動という三つの活動の依存関係ですが、まずは依存関係を理解するために、他の三種類の依存関係について見ておきましょう。

第一の依存関係は、ある活動の「道具」が、他の活動によって生産されるという関係です。たとえば、医学の科学活動は、医学的知識を生産し、その知識は、医療活動の道具として使用されます。つまり、医学の科学活動は、医療活動の道具を生産しているわけです（図5-5）。

第二の依存関係は、ある活動の「主体」が、他の活動によって生産されるという関係です。たとえば、教育活動は、外国語を使える人間を生産し、その人間は、発展途上国を支援する活動の主体となって活躍します。つまり、教育活動は、途上国支援活動の主体を生産しているわけです（図5-6）。

第三に、当該活動の「ルール」が、他の活動によって生産されるという依存関係もあります。たとえば、行政活動や立法活動は、その他のさまざまな活動で守られるべきルールを生産しています（図5-7）。

以上三つは、二つの活動の関係でしたが、次節で紹介する変革活動は、三つの活動の関係が含まれています。変革活動は、従来から続いてきたならかの活動そのものを「対象」にして、「結果」として、今までなかった新しい活動を創造するタイプの活動です。ここには、従来の活動、変革活動、新しい活動という三つの活動が登場します。



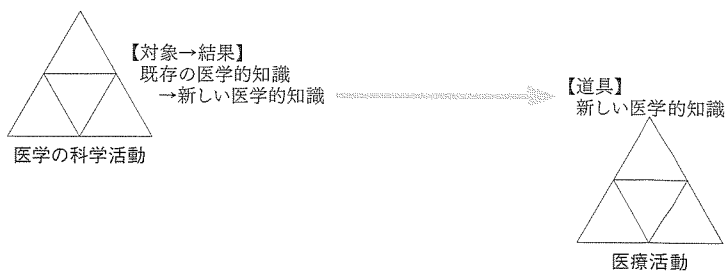


図 5-5 他の活動の「道具」を生産する活動



図 5-6 他の活動の「主体」を生産する活動

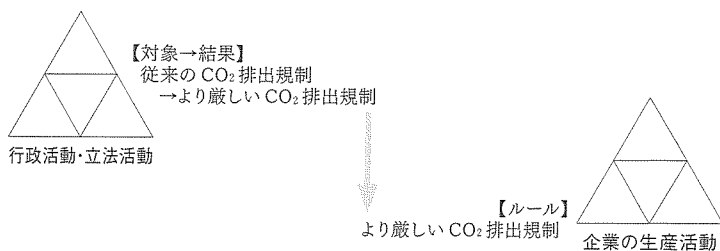


図 5-7 他の活動の「ルール」を生産する活動

## 2 変革活動——新しい活動の創造

### 矛盾とダブルバインド

すでに述べたように、活動理論は、たんに活動を記述するだけの理論ではありません。それは、従来ずっと続いてきた活動に内在する人間が、従来の活動の惰性や呪縛から脱却し、新しい活動を創造する指針を与える理論です。エンゲストロームは、従来の活動を脱却して新しい活動を創造する活動のことを「学習活動」と呼んでいます。これは、どうしても心理学や教育学における学習の概念と混同されてしまいますので、本書では、学習活動の代わりに「変革活動 (transformational activity)」という用語を使用することにします。

図5-8は、変革活動の構造を示したものです。変革活動の「対象」は、従来行なわれているなんらかの活動です。従来の活動を「対象」にして、それを換骨奪胎して、新しい活動を「結果」として創造していくのが、変革活動です。

では、変革活動のきっかけはどこにあるのでしょうか。それは、矛盾です。矛盾とは、一つの活動を構成する六つの頂点にチグハグが生じている状態、あるいは、二つ以上の活動の間にチグハグが生じている状態のことです。

一見、矛盾は困った事態のように見えますが、そうではありません。矛盾は、新しい活動へと向かう重要なきっかけになります。しかし、矛盾が生じれば、常に新しい活動が芽生えるわけではありません。矛盾は、新しい活動に向かうか、それとも、従来の活動にとどまるかという選択を迫るのです。

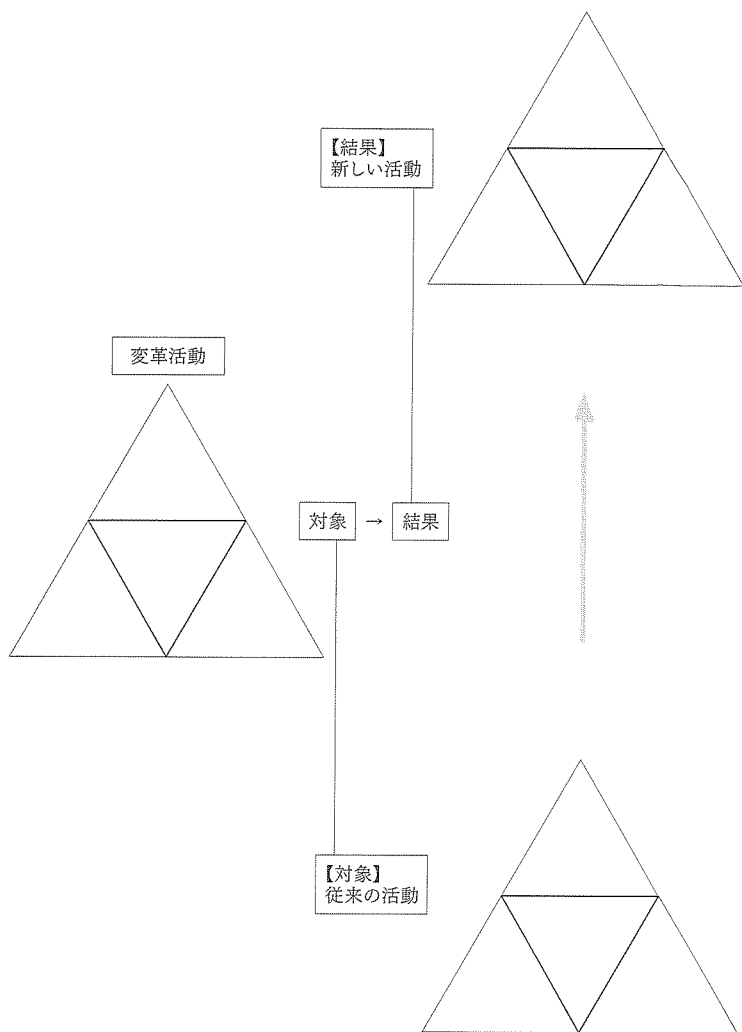


図 5-8 変革活動

「立ち止まることは許されない。右か左しかない。どちらを取るか」——このような状況を、活動理論では「ダブルバインド」と呼びます。矛盾は、新しい活動に向かうか、向かわないかというダブルバインドをもたらしめます。ダブルバインドは、一つの苦境です。しかし、この苦境を、新しい活動を選択するかたちで乗り越えることができれば、変革活動につながっていきます。

矛盾には、三種類あります。(1)一つの活動の頂点間に顕在化した矛盾、(2)従来の支配的な活動と新しい活動の間に生じる矛盾、(3)ある活動領域(たとえば、医療活動)で新しく芽生えた活動と、他の領域(たとえば、家庭活動)で支配的な活動との間に生じる矛盾です。

### 活動の基盤にある価値観

上で述べた(1)~(3)の矛盾について説明する前に、そもそも一つの活動の六つの頂点の一つひとつの内部に矛盾が潜在していることを述べておかねばなりません。一つの活動には六つの頂点があります。一つの活動は、六本の足で支えられているテーブルのようなものです。六本の足のどれもが、長すぎもせず短すぎもせず、うまくテーブルを支えているのです。このようにうまくテーブル(活動)を支えるには、六本の足(六つの頂点)が、矛盾なく調和していることが必要です。この調和をもたらすのは、価値観です。六つの頂点は、特定の価値観という床の上で、互いに調和を保っています。

価値観は、意味の体系です。意味については、第2章(二七頁)で「意味なきものは、そもそも現前しない」ことを述べました。また、意味については、本章に続く第6章と第7章でも重要な説明を加えますが、意味には、これら三つの章では真正面から触れていない大事な性質があります。

それは、意味は差異によって成り立つという性質です。説明しましょう。「善」という意味は、「善で

はない」こととの差異によって成立します。この世に、「善ではない」ことが皆無だったとしたら、そもそも「善」という言葉も意味も成立しなかつたはずです。あるいは、世の中に携帯電話以外の電話がなかつたとしたら、携帯電話という意味は成立しなかつたはずです。世の中には、携帯電話ではない電話（卓上型の電話、公衆電話など）もあるからこそ携帯電話という意味が生まれたのです。このように、Aという意味は、必ず、Aではない可能性をはらんでいます。意味のまとまりである価値観も同じです。ある価値観は、その価値観とは相いれない価値観が可能だからこそ、存在しているのです。

いかなる活動もなんらかの価値観の上に立っています。ということは、一つの活動が特定の価値観をベースにしているとしても、必然的に、その価値観とは対立する別の価値観をもベースにしてしまっているということなのです。ただし、その別の価値観は、いわば舞台裏に潜んでいます。あるいは、舞台の芝居を乱さない程度にのみ、時折、舞台に姿を見せるだけです。舞台上で繰り広げられている活動のベースになっている価値観を「顕在的」と呼ぶならば、舞台裏の価値観は「潜在的」と呼んでいいでしょう。

### 頂点内部の矛盾の例

ここで、図5-4の医療活動を例にして、価値観を具体的に説明してみましよう。ここでは、「使用価値」を追求する価値観と「交換価値」を追求する価値観に注目します。図5-4は、使用価値の追求という価値観をベースにした医療活動を描いたものと言えます。主体である医師にとって、薬品・医療機器・知識という道具は、患者の病気を治すために使用できる価値（使用価値）をもっています。また、

2 エンゲストロームは、「動機 (motive)」という用語を使っていますが、本書では「価値観」としました。

コミュニテイの人々も、いったん病気になるれば医師の医療行為のパートナーになるという意味で使用価値をもっています。

しかし、同時に、薬品や医療機器は、市場で売買されるわけですから、交換価値ももっています。医師にとって、薬品・医療機器・知識は、みずからの生活を維持するために貨幣を得るための交換価値ももっています。また、医師にとっては、コミュニテイの人々も、診察料を得るための「お客さん」という意味で交換価値ももっています。

このように、図5-4に描かれた医療活動の舞台裏には、交換価値の追求という別の価値観をベースにした、もう一つの活動が潜在しているのです。もし、舞台上の価値観と舞台裏の価値観が入れ替われば、検査漬け、薬漬けの医療活動になってしまいます。

### 頂点間の矛盾

以上のように、一つの顕在的な活動の背後には、それとは対照的な別の活動が潜在しています。通常は、顕在的な価値観をベースにした活動が、六つの足（頂点）に支えられて進行しています。しかし、六つの頂点の一つひとつに、矛盾が潜在していることは事実です。なんらかの理由で、いずれかの頂点で、潜在的だった性質が顕在化するかもしれません。そうすると、その頂点と他の頂点の間にチグハグが生じてしまいます。今までしっかりと安定していた活動のテーブルが、不安定になってしまいます。そのチグハグこそ、(1)のタイプの矛盾です。

今から、上で述べた(1)～(3)のそれぞれが、どのようなダブルバインド状況を突きつけてくるか、また、いかなる変革活動のきっかけになり得るかを見ていきましょう。

まず、「(1)一つの活動の頂点間に顕在化した矛盾」です。すでに述べたように、活動の六つの頂点には、矛盾が潜在しています。上では、使用価値を追求する価値観と交換価値を追求する価値観に注目しましたが、ここからは、肉体的な疾患にのみ注目する「疾患治療」の価値観と、肉体面だけではなく精神面の治療も行なう「全人的治療」の価値観を取り上げてみましょう。さらに、疾患治療の価値観が顕在化しており、全人的治療の価値観は潜在的であったとします。その活動では、「対象」の患者は肉体的な疾患を訴えるのみです。ところが、なんらかの理由で、たんなる肉体的な治療の枠には収まらない「心の問題」を訴える患者が急増したとします。それにもかかわらず、肉体的な疾患治療しか念頭に置いていない「道具」しかなかったとします。この場合、「対象」と「道具」の間に矛盾が発生します。

頂点間の矛盾は、頂点内部の矛盾とは違って、顕在的です。頂点間の矛盾は、ダブルバインド状況を関係者に突きつけてきます。「心の問題」を抱える患者の急増という「対象」の変化に対応して、活動の他の頂点を変化させることによって、新しい活動へと足を踏み出すか、それとも、患者の「心の問題」から目をそらして今までの活動を維持するか——このようなダブルバインド状況に、関係者は立たされます。

このダブルバインドを新しい活動に向かって突破するための活動は、変革活動の第一段階です。変革活動を開始するには何をすればよいのか、また、変革活動の「道具」にはどのようなものがあるのかについては、あとで説明します。ここでは、かりに、(1)の矛盾に対して、新しい活動を育む方向でダブルバインドを突破できたとしましょう。しかし、まだ新しい壁が待ち受けています。それが、次に述べる「(2)従来の支配的な活動と新しい活動の間に生じる矛盾」です。

## 支配的な活動と新しい活動の矛盾

新しい活動は少数派。従来の支配的な活動と対立する少数派です。ここに、矛盾が生じます。支配的な活動は、その価値観を新しい活動に押し付け、みずからの中に取り込んでしまおうとします。また、新しい活動の「主体」の側も、支配的な活動の価値観にふたたび飲み込まれてしまいがちです。上で使用した医療活動を例に引けば、かりに、患者の「心の問題」をも対象とする「全人的治療」の医療活動が芽生えたとしても、支配的な疾患治療の医療活動との間に矛盾が生じてしまいます。ここで、新しい「全人的治療」の活動か、あるいは、従来の「疾患治療」の活動か、という選択を突きつけるダブルバインド状況が待ち受けています。

(2)の矛盾から生じるダブルバインドを新しい活動に向けて突破するための活動は、変革活動の第二段階です。ここでも、変革活動の詳細は後回しにして、かりに、新しい活動を選択するかたちでダブルバインドを突破できたとしましょう。しかし、まだ新たな壁が立ちはだかります。それが、「(3)ある活動領域で新しく芽生えた活動と、他の領域で支配的な活動との間に生じる矛盾」です。

## 他の領域の活動との矛盾

「疾患治療」でいくならば、活動の大半は医療活動の領域に収まります。しかし、「全人的治療」を行うなうには、もはや医療スタッフのみならず、患者の家族も巻き込み、協力してもらうことが必要です。ところが、患者の治療に家族も関与するという家庭活動は支配的ではありません。むしろ患者の治療は病院に任せて、家族は治療には関与しない家庭活動の方が主流です。こうして、医療活動の領域で生まれた「全人的治療」の医療活動と、従来支配的な家庭活動との間に矛盾が生じます。ここで、ふたたび、



新しい活動へと突き進むか否かというダブルバインド状況に陥ります。このダブルバインド状況を突破して、「全人的治療」の医療活動が選取られるならば、疾患治療を中心とする従来の医療活動から「全人的治療」をめざす医療活動への変革が大きく進展します。そのための活動が、変革活動の第三段階です。

以上のように、変革活動とは、(1) (3)の矛盾によるダブルバインド状況を新しい活動の方向へと突破していく活動のことです。では、変革活動を開始するには、どうすればよいのでしょうか。

### 現状と過去の分析

ダブルバインドを変革活動の突破口にするために、まず必要となるのが、活動の構造(図5-3)に基づき、予断を排して現状を徹底的に分析することです。一見、個人の性格や能力が原因であるかのように見える現象も、本当にそうなのか。道具に問題があるのではないか。対象の捉え方はどうか。当人はどのような「共同体」に身を置いているのか。共同体のいかなる「ルール」が、当人を縛っているのか。このように、現状に対して、社会的・文化的な分析を加えます。

現状の分析にとって、もう一つ重要なのは、歴史的な分析です。図5-3の頂点、また、頂点間の関係はいずれも、長短の違いはあっても、時間の流れの中で形成されています。当たり前に「こうである」現状、当たり前前に「ずっと昔から、こうである」かに見える現状も、意外とそうではなく、ごく最近そうになったのかも知れません。あるいは、「ごく最近、こうなった」と思っていた現状が、意外にも長い歴史の経緯の産物かも知れません。このような時間軸にそった歴史的分析は、図5-3による現状の分析を豊かにしてくれます。このように十二分に視野を拡大して、現状を把握しておくことは、次に述べ

る変革活動の「道具」を考える上でも有用です。

### 変革活動の道具 1——スプリングボード

変革活動の道具には、(1)スプリングボード、(2)モデル、(3)ミクロ・コスモスの三つのタイプがあります。

スプリングボード（跳躍台）とは、わらをもつかみみたい苦境の中、突如降ってわいたがごとくに実現する出会い、つまり、イメージ、技術、人間との出会いです。変革活動を描いた図5-18は、ある程度新しい活動が目に見えるようになったあとにしか描けません。とりわけ、変革活動の初期段階では、新しい活動はぼんやりとしか描けませんし、それに向かう変革活動も曖昧模糊としています。現状とは異なるものの、そうかといって明確なイメージは描けない、そのような新しい活動に向かって、いわば暗中模索で開始されるのが変革活動です。

しかし、ダブルバインド状態で、従来の活動とは決別しています。退路は断たれているのです。その中で不確定な新しい活動に向かって、不確定な変革活動を立ち上げていくことは、大きな苦難でもありません。繰り返しますが、退路は断たれています。前進あるのみ。しかし、道は定かではない。十分な時間がない場合もあるでしょう。これは、絶体絶命のピンチです。そんなピンチの中で苦し紛れに浮上した発想、口からとっさに出た一時しのぎの説明、ピンチの渦中であるがゆえに出会えた人間たち——それらがスプリングボードです。

したがって、何がスプリングボードだったかは、事後的にしかなんと言えませんが、事前にはできません。事前にはできないことと言え、スプリングボードに出会える可能性を上げておくことくらいです——多くの人とネット

ワークをつくっておく、幅広い教養を身につけておく、など。しかし、具体的な変革活動で何がスプリングボードになるかは、その場になるまではわかりません。

### 変革活動の道具2——モデル

モデルとは、変革活動の「対象」、すなわち、従来の活動を把握するための「ひな形」です。従来の活動という現状をどのように捉えるかは多様です。第3章のコラム3-1(六四頁)で紹介したように、人口が減少する地域の現状を「過疎」と捉えるか、「適疎」と捉えるかで、めざすべき新しい活動がまったく違ってきます。この場合には、人口減少という現状に対して、「過度な疎か、あるいは、適度な疎か」という「分類モデル」(分類のひな形)が使用されています。

分類モデルのもっとも単純なものは、分類が一つしかない場合、つまり、一つのラベルを貼れるか否かという場合です。「過度な疎か適度な疎か」という分類モデルが現れる以前は、「過疎」というラベルを貼れるか否かでした。そして、当地の住民たちは、打ちそろって自分たちの地域に「過疎」のラベルを貼っていました。このように一枚しかないラベルのモデルを「典型モデル」(典型的なひな形)と言います。典型モデルが使用されると、その典型が現状にあてはまるかどうかという点からのみ現状が把握されます。

現状を把握するとき、たんなる分類モデルを超えて、「あれが原因でこういう結果になった」と、「原因↓結果」関係が使用されることも少なくありません。このような把握では、「因果モデル」(因果関係のひな形)が使用されています。たとえば、「人口が減少すれば、地域の産業は停滞する」という因果モデルを使用すれば、「人口減少によって産業が停滞した地域」が変革活動の「対象」に据えられます。

現状を単純な因果モデルで把握できない場合もあります。多くの要因が複雑に絡みあい、因果関係の網の目をつくっているような場合です。このような場合に使用できるモデルの一つに「システム・モデル」があります。複雑に絡みあつた多くの要因群を一つのシステムと見なし、そのシステムの外部からどのような入力（地域外部からの投資、来訪者など）があり、システム全体で何を産出（出力）しているかという観点から現状を把握し、変革活動の「対象」に据えるのは、システム・モデルを使った一例です。システム・モデルで言うシステムには、自己組織システムも含まれます。生物は自己組織システムの代表です。たつた一個の胚細胞は、みずからがもつプログラムに従つて細胞分裂を繰り返し、一つの生命体を作り上げていきます。ある地域を自己組織システムとして把握すれば、その地域の日常に埋め込まれたプログラムを理解し、そのプログラムを変更していく変革活動がめざされるでしょう。

### 変革活動の道具3——マイクロ・コスモス

マイクロ・コスモス（小宇宙）とは、将来の新しい活動の構造で活躍する「共同体」のミニチュア版です。具体例として、第3章のコラム3-3で紹介した「住民主体の診療所」をつくる運動を見てみましょう。この運動は、医師が経営する診療所を前提にした従来の医療活動を、住民が運営する診療所による新しい医療活動に変えていこうとする変革活動です。その変革活動によって、「医療専門委員会」という住民代表が診療所を運営する体制（新しい活動）が発足しました。

この変革活動では、「小野郷の明日を考える会」という約一〇人のグループと医師によるミーティングが重ねられています。このミーティングは、後に形成される「医療専門委員会」のミニチュア版でした。実際、このミーティングのメンバーのほとんどは医療専門委員会のメンバーになり、他の多くの委

員会メンバーとともに、自分たちの診療所を運営しています。

### 活動の発達可能領域

以上、活動理論に基づき、従来の活動を越えて、新しい活動がいかにして創出されるかを述べてきました。活動理論は、同時に、新しい活動を創出するにはどうしたらよいかという課題に対する実践的指針でもあります。その指針を再確認しておきましょう。第一に、いかに個人の能力、性格の問題に見えようとも、あくまでも社会的・文化的文脈、歴史的な脈をもった「活動」として捉えなければなりません。第二に、活動に潜在する矛盾、そして、その矛盾の顕在化であるダブルバインドこそ、新しい活動を創造するエネルギーです。第三に、新しい活動を創出する変革活動の道具には、スプリングボード、モデル、マイクロ・コスモスがあります。

いくら矛盾に直面し、ダブルバインド状況になつても、スプリングボード、モデル、マイクロ・コスモスのような道具に恵まれなければ、変革活動にはつながりません。逆に言えば、かりに変革活動の道具が与えられ、変革活動さえ行なわれるならば創造できる新しい活動の領域が、常に、可能性として広がっていることとなります。この目前に広がった可能性の活動領域を、ヴィゴツキーという心理学者は「最近接発達領域」と呼びました。現在の活動に最近接している（もつとも近接して目前に広がっている）発達可能な領域という意味です。最近接発達領域へと進むことは、活動の一角を占める主体（個体）の発達を含んでいます。しかし、それは、個体の「肉体に内蔵された心（あるいは、頭の世界）」の発達ではありません。そうではなくて、あくまでも、個体を一角として含む活動の発達なのです。ヴィゴツキーは、頭の中の発達と考えられてきた思考の発達を、集合体の活動の発達として捉え直したのです。

### 3 夢の活動を描く技法

#### 夢(ビジョン)の重要性

本節では、活動理論を意思決定(デシジョン・メイキング)に活用する方法を紹介します。具体的には、「今の職場(あるいは、コミュニティ)には、こんな活動はないけれども、こんな活動が根づいたらいいな」という夢(の活動)を描く技法を紹介します。活動ビジョンを描く技法と言ってもよいでしょう。現代は、ビジョン(夢)を描きにくい時代です。ひと昔前の高度経済成長期(一九七〇年代まで)であれば、戦後の貧困を脱却して、「より豊かな生活を」という夢が日本中に共有されていました。しかし、一九七〇年代半ばには、日本の経済水準は欧米と比べても、そう見劣りしない水準にまで到達しました。全国レベルの夢がなくなつたのです。

一方、一九九〇年代以降、企業は、生き残りをかけて組織をスリム化しています。だれしも、フル回転で職務をこなさねばなりません。夢を描くなど、暇人のやること、自分には関係ない、こう思いたくなるのも無理からぬことです。

しかし、夢(ビジョン)なきリーダーの下で働く部下ほど、みじめなものはありません。次から次になら上から降ってくる仕事——夢なきリーダーは、その大量の仕事を自分に割りつけてくるだけの存在です。どんなに忙しくても、今やっている仕事は夢の実現に貢献するとわかつていれば耐えられます。その夢に共感できれば、やる気も出ます。

夢(ビジョン)は夢想することから生まれますが、夢想とは違います。夢(ビジョン)は他者に提示し、

他者とスクラムを組むためのものです。そのためには、他者に語るができること、これが夢（ビジョン）の必須条件です。

### 夢を描くツール

しかし、ただ夢（ビジョン）を描けと言われても、そう簡単ではありません。腕組みして、ウンウンうなつても、なかなか夢は描けません。そこで、私は、夢を描くツール（道具）を作れないものかと考えました。母親に、もつと子どもと会話をしなさいと言つても、なかなかできません。でも、そこに絵本というツールがあれば、ずいぶん会話がしやすくなります。絵本を読みながら、「このワンちゃん、隣のワンちゃんと似てるね」などと脱線して、会話を膨らませることもできます。夢を描くにも、絵本のようなツールがあつたら、と考えました。

そこで、私が目をつけたのが活動理論でした。「こういう人が中心になって（夢の主体）、こんな道具を使って（夢の道具）、こんな人たちとスクラムを組んで（夢のスクラム）、こんなことをするようになるというふうな」というふうに、夢を描いてもらえるのではないかと考えたのです。

ツールは、なるべくシンプルで使いやすくなければなりません。図5-3は、一般の人たちにとつて必ずしもとつつきやすいものではありません。そこで、図5-9のようなひし形に変更しました。もちろん、図5-3の大事な要素は維持しています。以下、ひし形を使って活動理論をどう説明するか、そこから紹介していきます。内容的には、本章第1節で述べたことと重複しますが、それよりもずっとわかりやすいはずです。現場の当事者と理論を共有する事例として参考にしてください。

ひし形は、夢を描くツールであると同時に、夢を語るツールでもあります。あらかじめ図5-9に書

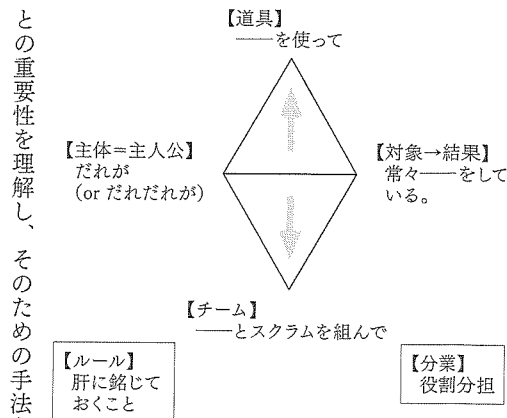


図 5-9 活動のひし形

との重要性を理解し、そのための手法を身につける時期でもあります。

### 活動理論の導入

夢を描くツールとして活動理論をどのように導入するか、その説明のしかたは次のとおりです。

活動理論の最大の眼目は、いつけん個人の行動に見えるものを、その個人を含むグループの活動として捉えていくことです。注意してください——「活動」はグループの活動、「行動」は個人の行動。したがって、個人の活動という言葉はありません。

き込まれている表現、すなわち、「——が、——を使って、——とスクラムを組んで、常々——をしている」は、夢を語るときの「語り口」を示しています。

ここに紹介する技法は、企業、病院などの職場活性化の手法として、あるいはコミュニティの活性化運動の中でも使用してきましたが、以下では、大きな病院の中堅看護師研修で、この手法を使用した事例を紹介しましょう。中堅看護師は、看護師になって数年ほど経過した人たちです。この時期になると、一人前の看護師になるためのスキルアップに専念する段階から、職場のリーダー的役割をも期待される段階へとモード・チェンジすることが期待されるようになります。それは、リーダーとしてビジョンを描くこ



図5-9、しかも最初は、中央にある横線だけに注目してください。この横線は、「主体（だれか）」が、なんらかの「対象」に働きかけ、なんらかの「結果」を生み出すという個人の行動を表わしています。平たく言えば、「だれかが、常々——をしている」ことを表現しています。たとえば、Aさんという看護師（主体）が、ある孤独な患者Bさん（対象）に働きかけて、少しでも会話をする状態（結果）を常々生み出している、といったぐあいです。

ふつう、私たちは、この横線で思考停止になりがちです。そうなると、行動の「結果」がよい結果であろうとも、あるいは、悪い結果であろうとも、その原因を主体の内部（頭の中の知識、身につけたスキル、心の中のやる気など）に求めてしまいうしかありません——いい結果になるのは（主体に）能力があるからだ、悪い結果になるのは（主体に）熱意がないからだ、など。

たしかに、主体の内部に原因があるとしか考えられない場合もあるでしょう。しかし、同時に、実は、主体はなんらかのグループの一員として動いており、そのグループのあり方を変えれば、主体の行動も変わるといふケースも数多いのです。言いかえれば、主体を一部として含む大きなグループを視野に入れば、主体の行動を変えるきっかけを見出せるという場合も多いのです。

### 第一のルート——道具

大きなグループに向かって視野を拡大するルートは二つあります。第一のルートは、主体が使用している「道具」を視野に入れることです（図5-9の上向きの矢印）。上に登場した看護師のAさんは、Bさんが大のプロ野球ファンであることを知っており、スポーツ新聞（道具）を二人で見ながら会話しているのかもしれませんが。新聞は物的道具（物的環境に相当）の一例ですが、物的道具以外にも、制度的道具

(制度、仕組み、言葉、知識など)も「道具」として使用することができます。

でも、なぜ、「道具」を視野に入れることが、大きなグループを視野に入れることになるのでしょうか。理由は簡単、いかなる道具も決して天から降ってはこないからです。つまり、いかなる道具も、その道具を作り、維持し、利用可能にする人々がいて初めて、主体が使用できるようになるのです。「道具」の背後には、それを支えるグループあり。したがって、「道具」を視野に入れるということは、「道具」を支えるグループを視野に入れることになります。

## 第二のルート——チーム

大きなグループに向かって視野を拡大する第二のルートは、主体が直接間接にスクラムを組んでいる人たちを視野に入れることです(図5-9の下向きの矢印)。Aさんは、同じ病棟で働く先輩ナースCさんのアドバイスを受けて患者に接しているかもしれませんが、また、師長のDさんには、常にその患者について相談をし、励ましてもらっているのかもしれませんが。

第二ルートの視野拡大を行なえば、もはや主体の行動は個人プレーではなく、スクラムを組んでいる人たちとのチームプレーの一部として捉えられることになります。そのチームには、分業(チームメンバーの役割分担)と、ルール(チームメンバーが肝に銘じておくこと)があるはずですが、分業もルールもないのに、チームプレーなど不可能ですから。第二ルートの視野拡大の中では、主体のチームメイトを考えただけではなく、チーム内の分業とルールも併せて考えます。

こうして大きなグループを視野に入れると、最初、個人の行動(中央の横線)のみに目を奪われている段階とは比べものにならないくらい、手の打ち方が多くなります。もはや、主体の内部にだけフォー

カスする必要はありません。「道具」を変えてみたらどうか、あの人にもスクラムに加わってもらったらどうか、少し役割分担を変えてみたらどうか、今までの思い込みを捨てて新しいルールで動いてみたらどうか、等々、発想の幅が一気に広くなります。

### 夢の活動を描く(第一ステップ)

上のように活動理論を導入した上で、いよいよ活動理論を使ってどのように夢の活動を描くかを紹介します。言うまでもなく、夢を描くだけではおもしろくありません。せつかく描いた夢は、ぜひ実現したいものです。以下は、夢の活動を描き(第一ステップ)、それを実現する活動をも描く(第二ステップ)一連のプロセスです。

まず、第一ステップとして、夢の活動(ビジョン)を描きます。夢の活動を一般的な言葉で表現すると、図5-10のように、「夢の主体が、夢の道具を使って、夢のチームメイトとスクラムを組んで、常々——している」のように表現されます。

具体例を紹介しましょう。図5-11は、集中治療室の中堅看護師Eさんが描いた夢の活動です。集中治療室には、時間を争う救急患者が次々に運ばれてきます。まさに戦場。どうしても、医療スタッフが発する声も大きくなりがちです。しかし、同じ部屋には、手術直後の患者も休んでいます。その人たちには、安静にできる静かな環境が必要です。そこで、「やかましくなりがちな職場を少しでも静かにできたら」と、Eさんは思いました。

Eさんは、図5-11のような夢の活動を描きました。「注意当番チームが、患者アンケートや騒音計を使って、日動リーダーや病棟管理者(師長・副師長・主任)とスクラムを組んで、常々、話し声が大きい

スタッフに注意している」(日勤リーダーはスタッフに声をかけをしてくれる、病棟管理者は注意したスタッフをほめてくれる、しかも、注意当番チーム・日勤リーダー・病棟管理者の間には、「堂々と注意しよう」というルールがある)——職場に、こんな活動が定着したらいいなあ、という夢をEさんは描いたのです。注意当番チーム(夢の主体)など、現在は存在していません。主体が存在していませんのですから、主体が使う道具(夢の道具)も、主体とのスクラム(夢のチームメイト)も存在していません。

ちなみに、この中堅看護師研修では、第一ステップの主体に、「私」をもつてくることは禁止しました。それは、この研修の目的が、自分自身のスキルアップ・オンリーという段階から、職場全体を見渡

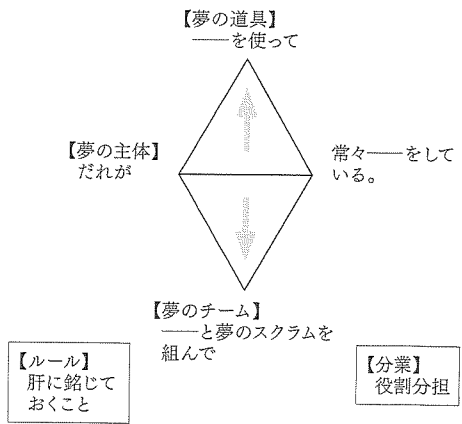


図 5-10 第1ステップ 夢の活動

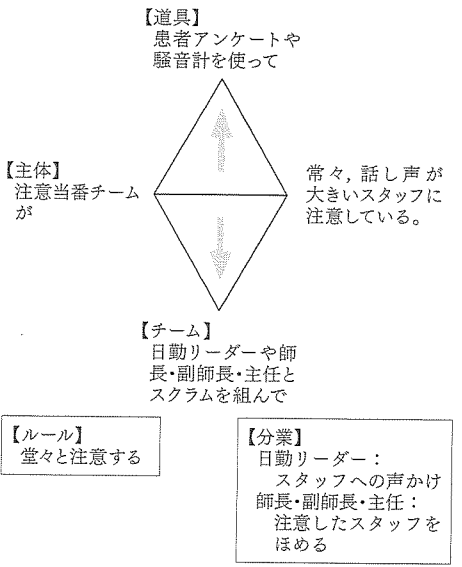


図 5-11 集中治療室中堅看護師の夢の活動 「もっと静かな環境に」

し、リーダーシップをとるようになることだったからです。主体を「私」にしてもよいとすると、職場全体を見渡すことがおろそかになると危惧されたからです。

夢を実現する活動(第二ステップ)

第二ステップは、第一ステップで描いた夢の活動(ビジョン)を実現するために、今度は自分(研修生自身)が「主体」となって着手する活動を描くステップです。ここでは、「主体」の項は最初から決まっています——「私」です。

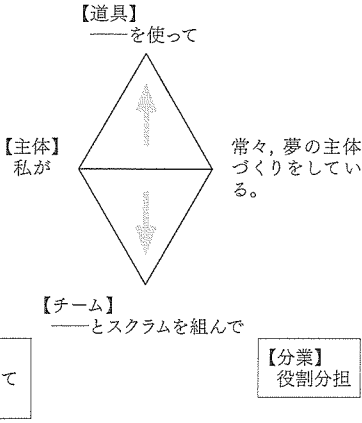


図 5-12(1) 第 2 ステップ 夢の主体をつくる活動

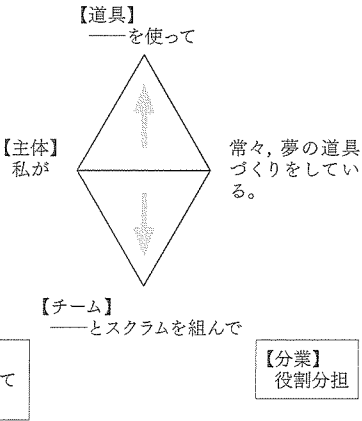


図 5-12(2) 第 2 ステップ 夢の道具をつくる活動

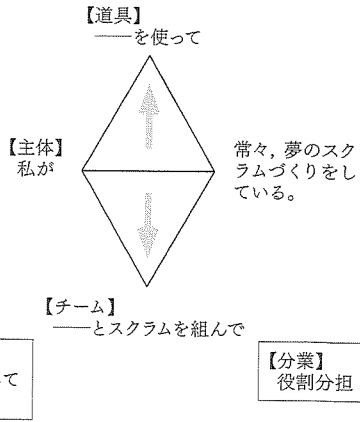


図 5-12(3) 第 2 ステップ 夢のスクラムをつくる活動

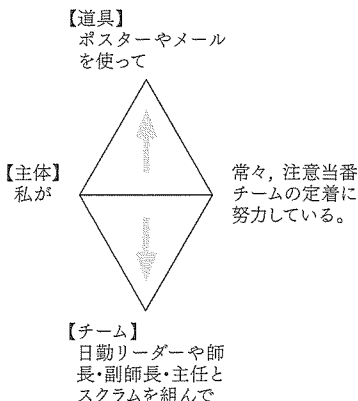
第二ステップには三種類の作業があります。夢の活動を実現するには、夢の主体、夢の道具、夢のスクラム（夢の分業と夢のルールを含みます）の三つが必要です。したがって、第二ステップでは、図 5-12(1)～(3)のように、夢の主体をつくる活動、夢の道具をつくる活動、夢のスクラムをつくる活動という三種類の活動を描くこととなります。しかし、夢の活動の内容によっては、すでに主体はある、道具はあるという場合もあります。あるいは、スクラムづくりは、わざわざ新たな活動を始めなくても大丈夫という場合もあります。そのような場合には、三種類のうち必要な活動だけを描けば十分です。

逆に、ある種類の活動を二つ以上描く必要がある場合もあります。たとえば、夢の活動に、重要な夢の道具が二つ以上描かれており、それらを一つずつつくる必要がある場合もあります。たとえば、夢の活動で主体に協力する夢のチームメイトが多数いる場合には、一気に大きなスクラムをつくるのは難しいので、二～三つの小グループに分けてスクラムづくりをする必要があるかもしれません。この場合には、夢のスクラムづくりの活動を二～三個描く必要があります。

さらには、三種類の活動のうち二つを、一つの活動で実現することが可能な場合もあります。たとえば、夢の道具づくりをする活動に、夢の主体と夢のチームメイトを巻き込み、夢のスクラムも同時につ

くっていくという活動もありえます。

ここで、先に夢の活動を紹介したEさんが、第二ステップでどんな活動を描いたかを見てみましょう。Eさんの夢の活動を実現するには、何はさておき夢の主体である注意当番チームを立ち上げねばなりません。そこで、Eさんは、自分が中心になって注意当番チームの制度を立ち上げ、定着する活動を描きました。図5-13は、その活動です。主体は、「私」(Eさん)です。Eさんは、「私(主体)」が、ポスターやメール(道具)を使って、日勤リーダーや病棟管理者(チームメイト)とスクラムを組んで、注意当番チームを立ち上げ、定着させていこう」と考えたのです。チームメイトの日勤リーダーには、注意当番チームと自分の連絡窓口になってもらう、同じくチームメイトの病棟管理者には、スタッフ全員に声をかけてもらって、自分を応援してもらおうと考えました。また、ルールとして、輪番制で全員が注意当番チームになる(特定の人だけが注意当番チームになるのを避ける)ことを徹底したいとも考えました。ちなみに、Eさんは、図5-13以外に、夢の道具(患者アンケート)をつくる活動も描いています。その活動は、「私(主体)」が、患者へのヒアリングの結果(道具)を使って、注意当番チーム(チームメ



【ルール】  
輪番で全員が当番  
チームになる

【分業】  
日勤リーダー：  
自分との連絡窓口  
師長・副師長・主任：  
スタッフ全員への  
声かけ

図 5-13 集中治療室中堅看護師の夢を実現する活動(夢の主体づくり)

チームメイト)とスクラムを組んで、注意当番チームと自分の連絡窓口になってもらう、同じくチームメイトの病棟管理者には、スタッフ全員に声をかけてもらって、自分を応援してもらおうと考えました。また、ルールとして、輪番制で全員が注意当番チームになる(特定の人だけが注意当番チームになるのを避ける)ことを徹底したいとも考えました。ちなみに、Eさんは、図5-13以外に、夢の道具(患者アンケート)をつくる活動も描いています。その活動は、「私(主体)」が、患者へのヒアリングの結果(道具)を使って、注意当番チーム(チームメ

イト」とスクラムを組んで、患者アンケートを作成、定着させていこう」という活動です。

### 行きつ戻りつ

ここまで、夢の活動を描く第一ステップと、自分が主体になって夢を実現する活動を描く第二ステップについて説明しました。しかし、実際にやってみると、第一ステップ、第二ステップ、そして、第二ステップで描いた活動の実行、と直線的にはなかなか進みません。いちおう、第一ステップで夢の活動があります。そのときは、ためらわず第一ステップに戻り、夢の活動を描き直したらよいのです。あるいは、いちおう、第二ステップまで進めたとしても、いざ実行してみると一週間で立ち往生、という場合も出てきます。そのような場合には、ためらわず第二ステップに戻る、あるいは、第一ステップまで戻ればよいのです。

このような行きつ戻りつのプロセスは、一見、時間を無駄にしている、うまくいっていないかのように見えますが、そうではありません。夢を描くのはけっこう難しいものです。それなりの「練習」が必ず必要です。その意味で、行きつ戻りつは、決して無駄ではなく、むしろ、行きつ戻りつをすることによって夢が鍛えられていくプロセスと考えるべきでしょう。また、そのようなプロセスを経験することによって、夢を描くセンスを磨くこともできるでしょう。

### 夢を語る

本節の冒頭部分で述べたように、夢と夢想は違います。他者に語るができる——それが夢でした。



図5-9の言い回し、すなわち、「——が、——を使つて、——とスクラムを組んで、常々——している」という言い回しは、夢の活動、あるいは、夢を実現する活動を他者に語るときの言い回しでもあります。研修の中では、たんに活動を語るのではなく、この言い回しを必ず使うことを繰り返し強調します。

「私が描いた夢の活動は妥当なんでしょうか」——しばしば、こんな質問を受けることがあります。しかし、夢の妥当性を判断する絶対的な基準などあるはずがありません。では、自分が描いた夢の活動の妥当性はわからないのでしょうか。

自分が描いた夢の活動の妥当性を判断する唯一の方法、それは他者に語つてみることです。具体的に説明しましょう。第二ステップで、自分が主体となって夢を実現する活動を描きます。その活動の中には、自分とスクラムを組んでほしいチームメイトも描かれています。ということは、夢を実現する活動を始めるためには、そのチームメイトにやつてほしいこと（第二ステップで描いたチームメイトの分業）を頼まねばなりません。頼まれた人は、こう質問するはずで「——どうして、そんなことを頼むの？」と。

そのときこそ、第一ステップで描いた夢の活動の出番です。「自分は、こんな夢を描いたので。そして、自分が主体になって、ぜひ、その夢を実現したい。そのために、協力をお願いしたいのです」と、夢の活動を語らねばなりません。大事なのは、夢の活動を語つたときの相手の反応です。その反応は、大きく三つに分かれます。

第一は、「うん、そうだね。私も、そんな活動が根づいたらいいと思う。ぜひ、一緒にやりましょう」

——こう反応してくれば、自分が描いた夢の活動が妥当だったということです。第二は、「まあ、わかるけど、そんな途方もないこと言われたつて」——これは、夢が大きすぎたこと、非現実的な夢であ

ったことを示しています。第三に、「それが大事なことはわかるけど、それは業務上当たり前のことでしょう」という反応もあります。これは、夢が小さすぎたことを示しています。夢には、ある程度のワクワク感が必要です。まったくワクワクしないのは夢とは言えません。以上のように、夢の妥当性は、夢の実現に向かって自分とスクラムを組んでほしいと思う人に語るることによって判断できるのです。そのためにも、夢の活動を語れることは非常に重要です。

夢の妥当性を教えてくれるのは、チームメイトになってほしい人の反応です。ということは、文字に起こせば同じ夢も、職場によって妥当か否かが違ってくるということです。ある職場では立派な夢であっても、他の職場では大きすぎる夢かもしれません。あるいは、ワクワク感のない、たんなる業務の延長と取られるかもしれません。

### 新しい問題解決の手法

企業や病院などの組織では、「問題解決」と銘打った研修が数多く行なわれています。職場の問題を発見し、その問題を解決しようとする研修です。研修以外にも、職場のミーティングや日常活動の中で、そのような問題解決が図られる場合もあります。問題解決にはさまざまな手法が提案・開発されていますが、手法の違いこそあれ、「問題（弱点、欠点）を発見して、それをつぶしていく」という発想は共通しています。

そのような問題解決が重要であることは言うまでもありません。しかし、それだけで職場改善を迫られつづけると、往々にして、問題をつぶす前に人間の方がつぶれてしまいかねません。従来型の問題解決とは異なる発想に立つ問題解決も必要です。

本節で紹介した夢を描く技法は、そのような新しい発想に立つ問題解決の技法です。夢を描く背景に、なんとかしたい問題が存在するのは事実でしょう。しかし、問題に対する姿勢に大きな違いがあります。従来型の問題解決では、問題（弱点、欠点）の原因を徹底的に分析し、その原因を退治しようとし、それに対して、本節の技法では、問題がなくなった理想の状態を、夢の活動として描き（第一ステップ）、その夢の状態に向かうプロセス（第二ステップ）も描きます。本節の技法は、未来の理想の状態へと向かう未来志向型です。未来志向で夢を描き、実現することによって、問題を事実上、問題ではなくなるようにする方法だということもできます。この点で、本節で紹介した技法は、第6章（第4節）で紹介するナラティブ・セラピーと相通するものがあります。

## 4 リーダーシップ

これまでのリーダーシップ研究

グループ・ダイナミックスの教科書や概論書で定番メニューとも言えるテーマが、「リーダーシップ」です。本章の最後に、活動理論を踏まえつつ、このテーマに触れておきましょう。

リーダーシップに関するこれまでの研究成果を要約すると、次のとおりです。

- (1) リーダーシップには、集団の目標達成に貢献するリーダーシップと人間関係の円滑化に貢献するリーダーシップの二種類がある。
- (2) これら二種類のリーダーシップを、アンケート調査によってフォロワー（部下や一般メンバー）に評

価してもらおうと、両方のリーダーシップを発揮している（と評価された）リーダーの集団が、目標達成度、フォロワーの満足度、集団のチームワークなどでもっとも優れている傾向がある。

(1)で出てきた二種類のリーダーシップを、(2)のアンケート調査の質問項目で具体的に見てみましょう。まず、目標達成に貢献するリーダーシップとは、職場集団であれば、「あなたの上司は、仕事の目標や計画を明確に示していますか」「あなたの上司の指示・命令は、専門的な知識に裏づけられていますか」「あなたの上司は、部下が最大限に働くことを要求しますか」といった項目で評価されていますか」一方、人間関係の円滑化に貢献するリーダーシップは、「あなたの上司は、部下の声に耳を傾けますか」「あなたの上司は、職場にとげとげしい雰囲気があるときには、それを解きほぐそうと努力しますか」といった項目になります。

このような質問項目を使って、上司のリーダーシップを部下（フォロワー）に評価してもらおうと、二種類のリーダーシップを両方とも發揮している（と評価された）上司がいる集団の方が、目標達成度、フォロワーの満足度、集団のチームワークなどの面で優れている傾向があることが見だされてきました。ちなみに、目標達成度とは、売上・生産目標の達成度、トラブル件数（の少なさ）、労働災害事故の件数（の少なさ）などです。また、フォロワーの満足度や集団のチームワークは、通常、上司を評価するアンケート調査の中で同時に回答してもらいます。満足度は、「あなたは、今の職場に満足していますか」といった質問項目、チームワークは、「あなたの職場の人たちは、お互いに助けあいますか」といった質問項目で調べます。

## 文化的価値観とリーダーシップ

私は、学生時代（一九七〇年代）の恩師がリーダーシップ研究に力を入れていましたので、上で述べたようなアンケート調査の開発にも参加しました。ひと口にリーダーシップと言っても、どのような行動をとれば上記二種類のリーダーシップになるかは、集団や組織の種類によって異なります。企業、病院、学校といった組織の種類に応じた質問項目を開発する必要があります。また、同じ組織でも階層が上（トップ）、中間（ミドル）、下（監督者層）のいずれであるかによつて、異なる質問項目が必要になります。

そのような研究をしていたころ、外国との比較もやってみようということになり、欧米や中国の研究者と共同研究を行ないました。そのときのおもしろい経験を紹介しましょう。

米国人の研究者と、日本語版アンケートの英訳をしていたときでした。米国人が、日本語版の質問項目に異議あり、と言い出しました。具体的には、目標達成リーダーシップの質問である「あなたの上司は、部下が最大限に働くことを要求しますか」という項目で調べようとしている行動は、米国では目標達成に貢献するどころか、マイナスにしかならないと言うのです。「米国では、就職のときに会社と交わした契約書に定められた職務をきちんと遂行するかどうかが重要であり、契約内容を超えて最大限に部下を働かすなど、とんでもない」というのが、彼の説明でした。

もう一つ、人間関係円滑化のリーダーシップの質問項目についても、異議が出されました。それは、「あなたの上司は、あなたの個人的な問題にも気を配ってくれますか」という項目でした。彼曰く、「部下の個人的な（プライベートな）問題に上司が首を突っ込むなど、あつてはならない！」。

この米国人研究者との議論は、二種類のリーダーシップを認めた上で、その中身の違いをめぐるもの

でした。しかし、あるとき、中国人研究者から、「二種類のリーダーシップ」論そのものに対する異議が出されました。その中国人曰く、「いくら二種類のリーダーシップを発揮しても、よきリーダーたりえない。リーダーたる者には、徳が必要だ」。徳（人徳）のリーダーシップ——一瞬、啞然としたのを、今でも覚えています。

#### 活動理論の視点から

以上の経験談は、いずれも私が学生だった一九七〇年代のもので、現在では、日本のサラリーマン気質も、当時の米国流に近づいているようです。また、現在の中国企業の管理者に、市場経済が本格化する前と同じように徳が期待されているのかどうか、私にはわかりません。

しかし、重要なことは、リーダーシップという現象が、たんなるリーダーとフォロワーの関係には収まりきれないということです。活動理論を思い出すならば、リーダーシップという概念による記述は、リーダーという「主体」が、フォロワーという「対象」に働きかけて、なんらかの「結果」を産出するという「主体-対象」の部分（図5.3を参照）だけの記述です。ということは、リーダーシップ概念による記述は、ややもすると、活動の構造の他の部分、すなわち、「道具」「共同体」「分業」「ルール」に対する目配りを不十分にしてしまいます。先に紹介した「部下を最大限に働かす」ことに対する米国人研究者の異議は、米国では、契約書という「道具」が、管理者（主体）が部下（対象）に働きかけるときに否が応でも重視しなければならぬものであることを示しています。

第2節（八八頁）に述べたように、活動の基盤には価値観があります。活動の六つの頂点は、共通の価値観という床面の上に立っているテーブルの足のようなものでした。上で紹介した「部下の個人的な

問題に上司が首を突っ込む」ことに対する米国人研究者の嫌悪感、価値観が当時の日米では異なっていたことを示しています。また、中国人研究者の徳を必須とするリーダーシップ論も、当時の日中で価値観が異なっていたことを示しています。

### 「リーダーシップ」という言葉

リーダーシップについて、最後に、もう一つ、新しい観点を紹介しておきましょう。それは、「リーダーシップ」という言葉に注目する観点です。「リーダーシップを発揮する」という言葉は、少なくとも同じ目標を共有する集団や組織の中では、リーダーを高く評価する言葉です。「リーダーシップ」という言葉が使われなくても、「彼が皆を引っ張ってくれた」「彼がうまくまとめてくれた」などのセリフも、「彼がリーダーシップを発揮した」と同じ意味です。そこで、このようなセリフも含めて、「リーダーシップを発揮した」という言葉を、フォロワーからの評価の言葉、賞賛の言葉、感謝の言葉として捉えてみようというわけです。

組織や職場の日常を振り返ってみると、好ましい結果であるか好ましくない結果であるかにかかわらず、一つの結果が生まれるプロセスはけっこう複雑です。一つの成果も、いくつもの活動が連なった結果として生まれた成果、あるいは、いくつもの活動が同時並行的に進行した結果です。それらの活動の全貌は、おそらく中心的な役割を担った人でも語りきれないほど複雑です。その複雑なプロセスを大雑把に要約してしまう言葉の一つが、「リーダーシップ」という言葉ではないでしょうか。

複雑なプロセスを大雑把に、「リーダーシップ」のひと言で片づけるのは不正確きわまりないと思われるかもしれませんが、不正確なのは事実です。しかし、「〇〇さんのリーダーシップだ」という言葉は、

さまざまなインパクトをもたらします。○○さんが今まで目立たない人物だったとしたら、今後は、○  
○さんを軸とした新しい活動が始まるかもしれません。あるいは、○○さんがすでに評価の高いリーダー  
だったとしたら、○○さんの吸引力がさらに高まり、今までよりも困難な挑戦に多くの人を巻き込む  
ことが可能になるかもしれません。

このように、言葉（言語）には、新しい現実を切り拓く力があります。「たかが言葉、されど言葉」  
です。次章では、言語が新しい現実を切り拓くインパクトについて考えましょう。



## エスノメソドロジ

エスノメソドロジという研究分野を、活動理論に關係づけて紹介しておきましょう。エスノメソドロジは、社会学の一派です。「エスノ」とは、元來、民族を意味する言葉でしたが、ここでは「一群の人々」を指しています。「メソド」はメソッド、つまり、「方法」です。最後の「ロジ」は、心理学はサイコロジ、社会学はソシオロジであるように、「学」、あるいは、「研究」のことです。つまり、エスノメソドロジとは、「一群の人々が使っている方法についての学（研究）」という意味です。

まだ、漠然としています。いったい、一群の人々が何のために使っている方法なのでしょう。それは、一群の人々が、「秩序をつくり、維持するために」使っている方法です。私たち人間は、無秩序の中では生きることができない動物のようです。第2章第3節で、世界（風景）の現前にとって意味が必須であると述べましたが、意味も秩序の一種です。海や川を泳ぐさまざまな生き物

を、姿は違っても「魚」という意味を用いて多くの人々が捉えたとしたら、これが秩序でなくてなんでしょう。一群の人々は、どんな方法を使って、どんな秩序を維持しているのか——これを研究しようとするのがエスノメソドロジです。具体例をあげましょう。あなたがアンケート調査に回答していると想像してください。多くのアンケートでは無記名ですが、性別、年齢などは記入することになっています。そして、ほとんどの場合、性別欄には、あらかじめ「男・女」と印刷されており、いづれかを○で囲むようになっていきます。わざわざ○で囲むよう書いていないアンケートも珍しくありません。

しかし、考えてみると不思議です。アンケートの本体部分である質問項目を見ると、「賛成」「やや賛成」「やや反対」「反対」などの選択肢に並んで、「どちらでもない」「わからない」といった選択肢も用意されています。でも、性別欄には、そのような選択肢はありません。「男か女か」だけです。もし、あなたが、性別欄に、「男・女・どちらでもない」と書いてあるアンケートを見たなら、「えっ」と驚くのではないのでしょうか。

たしかに、人間の大多数は男か女か、いづれかです。しかし、ごく少数ではあるにせよ、両性具有の人（生理学的に男性の特徴と女性の特徴の両方をもっている人）は存在しています。いったい、両性具有の人たちは、通常

のアンケートの性別欄に、どういう気持ちで回答しているのでしょうか。

このように考えてくると、通常のアンケートの性別欄は、大多数の人々が「人間とは男か女か、いずれか一方である」という秩序を維持するのに貢献していることがわかります。もちろん、この秩序の維持に貢献しているのは、アンケートの性別欄だけではありませんが、性別欄も貢献していることは間違いありません。大多数の人々(エスノ)は、アンケートの回答欄(メソッド)を使って、上記の秩序を維持しているのです。

ここで、活動理論に立ち戻ると、エスノメソドロジの「メソッド」が、図5-3の「道具」の一つに相当することがわかります。アンケートの性別欄の例でいくと、アンケートの実施者(主体)が、性別欄(道具)を使って、回答者(共同体)とともに、両性具所有者の疎外を促進する活動が行なわれているのです。もちろん、こう言ったからといって、アンケートの性別欄を変更すべきなどと主張するわけではありません。しかし、アンケートの例は、ある一群の人々が、意図せずして無自覚のうちに、なんらかの秩序の維持に加担していることを示しています。

一群の人々は、ごく少数の人々の場合もあるでしょうし、アンケートの例のように大多数の人々という場合も

あるでしょう。たとえば、薬物依存を促進しあっている少数の人たちがいるとしたら、その人たちの間には薬物依存から逃れられなくなるなんらかの秩序が維持されているのかもしれない。そうであれば、その秩序を維持するために使用されている方法(メソッド)を見つけ、その方法を消去していくことが重要になるでしょう。一方、少数者に対する不当な差別は、大多数の人々が維持している秩序のしわ寄せなのかもしれません。その場合には、悪意なき大多数の人々が使用している方法(メソッド)が、実は差別の原因であることを示し、その方法を変更していくことが必要になるでしょう。

人間は、言語を使う動物です。私たちを包む「かや」も、言語によって形成されます。一つの言葉が、当事者と研究者の協同的実践を大きく変えることもあります。

本章では、まず、言語とは何かという基本的な説明からスタートします。言語以前の段階での「意味」の成立を説明し、そこから言語を使用する段階へと話を進めます。

言語は、他者にインパクトを与えます。では、そのインパクトは、どのようにして可能になるのでしょうか。それを説明する「言語行為論」を紹介します。

心理的な問題を抱える人を、原因を究明することなく、言語のインパクトによって癒すことができます。ナラティヴ・セラピーという新しいカウンセリング手法を紹介します。

## 1 四肢構造

### 本章の構成

集合性には、物理的集合性と意味的集合性という二つの側面がありますが、意味的集合性の中で大きなウェートを占めるのが言語です。もちろん、話し言葉が音の一種であり、書き言葉も紙上の筆跡やディスプレイ上の表示であるというように、言語は物理的集合性の一部でもあります。しかし、言語が意味的集合性に占めるウェートは、物理的集合性に占めるウェートをはるかに上回っています。

これまた当然ですが、意味的集合性のすべてが言語で構成されるわけではありません。言語によらな

い意味的集合性も無視できません。私たちの体の動きは、言語以前の意味を表現します。また、絵画や音楽といった芸術の存在も、言語以外で構成される意味的集合性の重要性を示す例です。

それでも、「人間は、言語を使う動物」と言われるとおり、私たちにとって、言語は、格別の重要性をもっています。では、言語とはいかなるものか、言語による意味的集合性の特徴は何なのか。本章では、この問題を取り上げましょう。

本章では、廣松涉<sup>わたる</sup>の四肢構造論をわかりやすく解説し（本節の次項以降）、言語の基本的性質を述べます（第2節<sup>1</sup>）。その基本的性質とは、言語は、必ず世界（たとえば、現前する風景）の一断面を指し示すという性質です。言いかえれば、言語を使うかぎり、まるごとの世界を把握するのは不可能だということです。しかし、まるごとの世界を把握できない代わりに、言語は、伝達という強力な手段を与えてくれます。第3節では、言語による伝達について、言語行為論をベースに、これまたわかりやすく説明します。第4節では、言説（ひとかたまりの言語）を分類し、その一つのアラテイヴを重視するカウンセリング技法（アラテイヴ・セラピー）を紹介します。

## 二つの関係の組み合わせ

意味という概念は、グループ・ダイナミックスで格別に重要な概念です。第2章（二七頁）では、意味なきものは、そもそも現前しないことを述べました。そして、前章八八頁では、意味が差異によって成り立つことを述べました。さらに、規範の「かや」を紹介する次章では、意味と規範が表裏一体の関係にあることを述べ、どのようにして意味が形成されるかを説明することになります。

本節では、言語とは何かという問題に分け入るために、意味に関する関係主義的理論である廣松の四

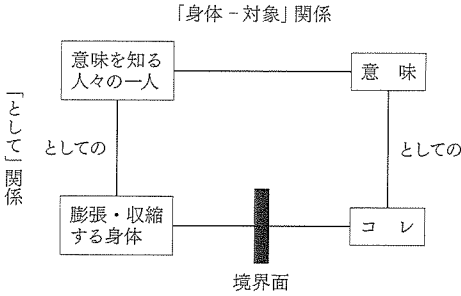


図 6-1 四肢構造（廣松、1982）

肢構造論を紹介しします。いきなり四肢構造だの関係主義だの、わけのわからない言葉が飛び出してきました。しかし、何も難しいことはありません。四肢構造の四肢とは両手両足のことです。両足を少し広めに開いて、「ヤッ」と両手を斜め四五度に突き上げてください。そのときの両手（手のひら）と両足（靴をはく部分）、全部で四つの関係が四肢構造です。

四肢構造は二つの関係の組み合わせです。一つは、手と足の関係（上と下の関係）、もう一つは右と左の関係です。この二つの関係を組み合わせると、四肢（右手、右足、左手、左足）の関係になります。

ここで図6-1を見てください。今から、この図を説明していきますが、簡単に図6-1の結論を述べておきましょう。まず、右と左の関係は、「右が左に現前する」という関係です。右が対象、左が身体です。対象（右）が身体（左）に現前するという関係です（現前については、第2章二四頁を参照）。対象とは、第2章の用語を使えば、「世界（風景）」、あるいは、「風景に含まれる身体や事物」のことです。

次に、手（上）と足（下）の関係は、「として」関係、さらに言えば、「手（上）としての足（下）」という関係です。第2章（二七頁）で、意味なきものは現前しないことを述べました。現前するものは、必ず意味をもっています。意味とは、「○○としてのコレ」の○○です。つ

まり、手（上）と足（下）の関係、すなわち、「として」関係は、意味の関係（意味を与える関係）と言ってもよいでしょう。

まず、対象（右半分）と身体（左半分）の関係があり、さらに、対象の側（右半分）にも身体の側（左半分）にも「として」関係がある、そんな四項関係が成立すること、それこそ現前の成立である——これが四肢構造論です。身体は、決して「心を内蔵した肉体」ではありません。また、対象は、「外界／内界」図式に言う外界に実在しているのでもありません。四肢構造論は、「認識とは、外界に実在する対象を、肉体に内蔵された心に捉えることだ」とする従来の認識論に対する挑戦状です。

### 対象側の「として」関係

では、四肢構造論の本格的な説明に入りましょう。廣松の四肢構造論は、世界（たとえば風景）の現前を、徹底した関係主義の立場から基礎づけようとしたものです。関係主義の反対は実体主義です。実体主義でも、ある実体を認めた上で、それら実体の間の関係が論じられます。しかし、関係主義では、「まず関係ありき」という姿勢、つまり、関係に先立つ実体を前提にしないという姿勢が貫徹されます。四肢構造論でもっとも重要なのは、「として」関係です。今、読者が手に取っているのは、たんなるコレではありません。それは、「本としてのコレ」です。この場合、「本」が、コレの意味です。

「本としてのコレ」のコレは、特定の場所と時間におけるコレです。場所や時間が違えば、コレの現前は同じではありません。場所や時間が違えば、ほんのわずかではあっても、明るさや見えるアングルは異なってきました。つまり、コレの見え方は、二度と繰り返しのない一回こっきり、すなわち、「個別的」です。まとめると、コレは、場所的・時間的・個別的という性格をもっています。

一方、「本としてのコレ」の本(という意味)は、場所や時間の限定を被りません。今、読者が手に取っているのも本ならば、行ったこともない書店に並んでいるのも本です。このように、本(という意味)は、場所を超えています。また、本(という意味)は、現在、世界中にある本だけを指すのではありません。過去には読まれた本で、もう焼かれて存在しない本も、本に変わりありません(本という意味をもつ点で変わりはありません)。さらに、今は存在しないが、将来出版される本も、やはり本であることに変わりありません。つまり、コレが特個的であつたのに対して、本(という意味)は普遍的なのです。まとめると、本(という意味)は、超場所的・超時間的・普遍的という性格をもっています。

以上のように、「として」関係は、場所的・時間的・特個的なコレと、超場所的・超時間的・普遍的な意味の関係です。場所的・時間的・特個的なコレが、超場所的・超時間的・普遍的な意味として、現前するのです。私たちに現前するのは、常に、超場所的・超時間的・普遍的な意味としての、場所的・時間的・特個的なコレなのです。したがつて、「として」関係が成立していないときには、現前はありません。意味がないコレは、そもそも現前しないのです。

「本としてのコレ」は、あくまでも関係です。本が常に意味とは限りませんが、コレが常に意味を充たされる対象とは限りません。これは、右左「関係」と同じです。Aさんが右、Bさんが左という位置「関係」にあるとしても、Aさんが常に右であり、Bさんが常に左であるわけではありません。Bさんは、さらに左側にいるCさんとの位置関係においては、右となります。

「として」関係も同じです。「としての」の上に来るか、下に来るかは変化します。たとえば、手に取っている「本としてのコレ」が、ある授業の教科書だつたとします。その場合には、教科書としての「本としてのコレ」、というぐあいに、先ほどの「本としてのコレ」がひとまとめになつて、「とし

ての」の下側に繰り込まれます。つまり、場所的・時間的・特徴的なコレと、超場所的・超時間的・普遍的な意味が、あらかじめ存在していて、後者としての前者という関係が取り結ばれるのではありません。そうではなくて、まず「として」関係が成立する。そして、そのときに限って何かが現前する。その何かは、すでにして、「超場所的・超時間的・普遍的な意味」として、場所的・時間的・特徴的なコレ」という関係を構成しているのです。

### 膨張・収縮する身体

四肢構造論には、現前する対象側の「として」関係に加えて、身体側の「として」関係も登場します。ただし、ここに言う身体とは、決して、「心を内蔵した肉体」ではありません。身体とは、第2章二五頁で述べたように、それに対して何かが現前する物質ですが、その物質には、心は内蔵されていません。では、「本としてのコレ」が、それに対して現前する身体は、いかなる物質なのでしょう。まず、身体は、コレと接触している必要があります。ここでは、あえて触覚を念頭に論を進め、後に、視覚に拡大しましょう。読者は、コレを手に持っています——コレと接触しています。コレと接触すれば、読者（という身体）の手とコレの間には、境界面ができます。この境界面は、読者の手の側に入ることもあれば、コレの側に入る場合もあります。これを理解するには、本を手にする例よりも、目を閉じて、手のひらを机の表面にぴたりくっつける例の方がよいでしょう。この場合、自分の手が机の表面を触っていると感じることもありますが、それとは逆に、自分の手の方が机の表面に触られている（机の表面が手のひらを触っている）と感じることもあります。自分の手のひらが触っていると感ずる場合は、境界面が手のひらの側に入っており、手のひらが触られていると感ずる場合は、境界面が机の側に入つて



いるのです。

視覚の場合も、触覚と同じです。今、目の前に樹木が現前しているとします。その場合、読者の身体は、その樹木の表面まで膨張して、視線で表面を触っていると考えればよいのです。実際、注視点の動きを測定してみると、何かを本当に注視しているときには、その何かをまさになでまわしているかのようになり、注視点は対象の表面を動き回っています。その逆に、注視していないとき、すなわち、ただボーッと眺めているときには、注視点は静止しています。つまり、視覚の場合も、膨張した身体と対象の間には境界面ができています。境界面は、現前する対象の表面です。その境界面は、身体の側に付くこともあれば、対象の側に付くこともあります。境界面が対象の側に付けば、自分が対象に見られていると感じます。

身体は、膨張するのみならず、収縮する場合があります。胃がきりきり痛む場合を考えましょう。この場合は、体内の胃を触れるまでに身体が収縮し、胃の痛みを触知しているのです。境界面は、胃の壁面です。

このように身体は、膨張もすれば収縮もします。膨張・収縮する身体が、対象と境界面で接するとき、その対象は、「○○としてのコレ」のコレとなります。コレが、場所的・時間的・特個的であれば、膨張・収縮する身体も場所的・時間的・特個的です。それだけではありません。コレと膨張・収縮する身体のそれぞれが、場所的・時間的・特個的であるのみならず、両者が挟む境界面も、一回こっきり、つまり、場所的・時間的・特個的です。境界面は、コレと膨張・収縮する身体が取り結ぶ関係そのものです。つまり、コレと膨張・収縮する身体は、それぞれが場所的・時間的・特個的であるのみならず、両者の関係も場所的・時間的・特個的なのです。

## 身体側の「として」関係

しかし、身体は、膨張・収縮する身体にとどまりません。身体は、膨張・収縮する身体であると同時に、意味を知る人々の一人でもあります。ここも「として」関係です。身体は、「意味を知る人々の一人としての膨張・収縮する身体」なのです。今、「本としてのコレ」という対象が現前しているとしたら、身体側の側は、「本という意味を知る人々の一人としての膨張・収縮する身体」です。

「意味を知る人々」の「人々」は、具体的に数え上げられるような人の集まりではありません。たとえば、本という意味を知る人々には、現在生きている人々だけではなく、過去に本を使っていた人々、そして、将来本を使う人々も含まれます。つまり、時間を超えています。もちろん、場所も超えています。本という意味を知る人々は、普遍的な性格をもった人々なのです。まとめると、意味を知る人々は、「〇〇としてのコレ」の〇〇（意味）と同様、超場所的・超時間的・普遍的な性格をもつわけです。

超場所的・超時間的・普遍的という性格は、意味と、意味を知る人々それぞれの性格のみならず、両者の関係の性格でもあります。意味と、意味を知る人々の間には、コレと膨張・収縮する身体の間にあつた境界面のようなものではありません。両者の関係もまた、超場所的・超時間的・普遍的で、両

以上をまとめると、図6-1のような四項関係になります。図6-1の上半分を左手（意味を知る人々の一人）と右手（意味）、下半分を左足（膨張・収縮する身体）と右足（コレ）と見なせば、図全体を四肢と見なせることから四肢構造と呼ばれます。すでに述べたように、四肢構造は、二つの関係を組み合わせたものです。一つは、図の左右関係であり、「身体・対象」関係です。もう一つは、図の上下関係であり、「として」関係です。廣松が四肢構造を本格的に論じた著作のタイトルは『存在と意味』。「身体・対象」関係は「存在」を可能にする関係であり、「として」関係は「意味」を可能にする関係です。現

前は、これら二つの関係が組み合わさることによって初めて可能になるのです。廣松の著作が四肢構造を論じる本であるかぎり、同書のタイトルは『存在と意味』以外にはなかったと言えるでしょう。<sup>2)</sup>

### 「実体ありき」という錯誤

四肢構造は関係主義に立脚する理論でした。関係主義は、「まず関係ありき」です。まず実体があつて、実体と実体を取ら結びと考えるのは、実体主義です。関係主義では、「まず関係ありき」からスタートして、そののちに、どのようにして、「まず実体ありき」と認識するようになってしまふのかを説明します。

四肢構造の「意味」と「コレ」は、「として」関係があつての項にすぎません。最初に「意味」と「コレ」が存在していて、両者が「として」関係で結ばれるではありません。では、どのようにして、「最初に」「意味」と「コレ」が存在している」という認識が生まれるのでしょうか。

ここで、第2章(二三頁)で説明した「外界と内界を区別する」常識を思い出してください。この常識は、「人間∥心を内蔵した肉体」という常識と表裏一体でした。その常識が、どのような経緯(成育史的経緯・歴史的経緯)を経て形成されたのかは、次章第3節で説明します。

外界と内界を区別する常識が浸透すると、本来、「として」関係あつての一項であつた「意味」は、

- 2 『存在と意味』は、決して読みやすい本とは言えません。多くの漢文調の表現が登場します。四肢構造は、「所識(意味)としての所与(コレ)」と「能識(意味を知る人々の一人)としての能知(膨張・収縮する身体)」からなると表現されています。

そもそも外界に実在しているのだと認識されるようになります。さらに言えば、外界に実在する物として認識されるようになります。このような認識を「物象化」と呼びます。外界に実在する物（物象）として認識されるという意味です。

一方、これまた本来は「として」関係あつての一項であつた「コレ」は、物象化された物が、内界（肉体に内蔵された心）に映つたイメージ（心象）だと認識されるようになります。このような認識を、物象化に対して、「心象化」と呼びます。

こうして、「机としてのコレ」という「として」関係は、物象化と心象化によつて、「外界に客観的に実在する机が、コレのような見え方で主観的に認識されている」というように実体化されるのです。関係主義に立てば、理論上、実体化（物象化と心象化）は錯認（誤つた認識）ということになります。しかし、ここは、もう少し慎重な考察が必要です。

#### 実体化の背後にいる人々

四肢構造の左半分を目を転じてください。そこには、「意味を知る人々」があります。つまり、ある「意味」は、「その意味を知る人々」との関係（身体・対象・関係）があつてこそ、初めて成り立ちます。意味が物象化するのでから、物象化によつていかなる物が外界に実在するとされるかは、やはり、「意味を知る人々」次第です。つまり、物象化は、たんに錯認として片づけられるものではなく、「人々」による社会的なプロセスなのです。

一例をあげましょう。買い物をしたときに、店員さんが商品を入れてくれるビニール袋（レジ袋）。最近、ビニール袋を有料にして買い物バッグを奨励する店が増えていますが、ここでは、それ以前の話

とします。でも、少なくとも、私にとつては、今もつて無料のビニール袋は必需品です。店員さんが手にしているコレは、文句なし、「商品を持って帰るための必需品」です。店員さんの手には（外界には）、疑うべくもなく、「商品を持って帰るための必需品」が実在しています。

しかし、私にとつて、コレがなぜ必需品なのか——ここが四肢構造の一番です。まず、私という身体に、「ビニール袋としてのコレ」が現前しています。それは、私が、たんなる私ではなく、「ビニール袋」という意味を知る人々の一人」としての私だからです。問題は次からです。私には、たんなる「ビニール袋としてのコレ」を超えて、「必需品としての「ビニール袋としてのコレ」が現前しています。ということとは、私は、「ビニール袋」という意味を知る人々の一人」としての私を超えて、「店員が無料で提供すべきものとしてのビニール袋」という意味を知る人々の一人」でもあるということです。平たく言えば、私が、「買い物すれば、店員がビニール袋を提供するのは当たり前」と信じて疑わない人々の一人だということです。

昨今では、環境問題、省資源を真剣に考える人たちの間では、ビニール袋の使用を減らすために、買い物バッグを持参する人が増えています。その人たちには、「必需品としてのビニール袋」ではなく、「極力使用すべきではないものとしてのビニール袋」が現前しています。そして、その人たちは、「極力使用すべきではないものとしてのビニール袋」という意味を知る人々の一人なのです。それに対して、残念なことに、私は現在のところ、そのような人々の一人ではないのです。

このように、四肢構造という関係主義的な視点をとることによって、私たちの関心は、目の前の現実だけから、その背後で意味を支えている人々へと広がります。それに対して、実体主義でも人々へと視野を広げることは不可能ではありませんが、往々にして、「外界に実在するビニール袋を、必需品とし

て内界に捉えているからだ」というぐあいに、問題を「肉体に内蔵された心」の問題（個人の認識の問題）に矮小化してしまいがちです。

## 2 言語の四肢構造

### 指示と述定

では、いよいよ四肢構造論に基づき、言語とは何かという本章の主題に入っていきます。先の四肢構造は、言語を使用しない現前（言語以前の現前）を可能にする関係でした。今からは、言語以前の四肢構造を拡張して、言語を使用する現前（言語的な現前）を説明します。

もともと単純な言語表現は一語文です。「地震！」「速い！」「飛んだ！」など、名詞、形容詞、動詞いずれの形態をとろうとも、それらは一語文の例です。

一語文は、言語化された部分だけを見れば、「述定」だけ、すなわち、なんであるか、どのようなか、何をしているかを述べているだけです。しかし、一語文は、述定と同時に、何かを指し示しています——何かを「指示」してもいます。まさに、述定したと同時に、何かを指示されてしまっているのです。「地震！」という一語文を発するときには、すでにして地面の揺れが指示されています。同様に、「速い！」という一語文は、たとえば、疾走する陸上短距離ランナーを指示しています。一語文といえども、「指示・述定」という二つの機能を備えているのです。指示と述定は、言語に必須の機能です。

重要なことは、「指示・述定」は、「として」関係を構成することです。以上の例は、「地震と、揺れ」「速いものと、走者」という「として」関係を構成しています。「揺れ」「走者」は、前節の言語以前の四肢構造における「コレ」に対応します。「地震」「速いもの」は、それぞれ「コレ」の意味です。ということは、「地震！」「速い！」と発する者は、「揺れ」「走者」と境界面で接する膨張・収縮する身体であると同時に、「地震」「速いもの」という意味を知る人々の一人でもあるのです。

### 言語の二つの選択

どんなに単純な「指示・述定」でも、その裏では二つの選択がなされています。第一の選択は、指示する対象（指示対象）のいかなる側面に注目するかという選択です。「地震！」という述定がなされるとき、いかに地面の揺れが指示対象になっても、地面の揺れのすべての側面が注目されているわけはありません。地震の専門家でもないかぎり、普通の人間に注目されているのは、地面の揺れの大きさのみです。地面の揺れのリズムや周期は注目されていません。また、「速い！」という述定の指示対象も、決して走者のすべての側面ではありません。注目されているのは走者の走るスピードだけであって、走者の顔つきや、走者が身にまとっている衣服は注意の範囲外に置かれています。

第二の選択は、他にありえたかもしれない述定群からの選択です。つまり、現実になされた述定の陰には、棄却された述定群があり、棄却された述定群との相对比较の上に実際に行なわれた述定が選択されたのです。「地震！」という述定は、地面の揺れの大きさに注目したとしても、「わずかな揺れ」という述定も可能であれば、「大地震だ！」「巨大地震だ！」という述定も可能です。しかし、「地震！」という述定がなされたということは、それらのありえたかもしれない述定群が棄却され、「地震！」とい

う述定が選択されたということです。同様に、「速い！」という述定は、「遅い」「普通だね」「ものすごく速い」といった述定群との比較の結果、選択されたのです。

言語以前の「として」関係と比較した場合、言語的な指示・述定によつて構成される「として」関係の特徴は、上で述べた二つの選択、すなわち、指示対象の述定される側面の選択と、他にありえた述定群からの選択を伴つているところにあります。いかなる言語表現でも、ある言語表現がなされる裏側で、なんらかの文脈がつくられていきます。文脈は、上の二つの選択が重層的になされることによつてつくられていきます。

以上、一語文について説明しましたが、「桜が散る」といった「主語・述語」文でも基本的には同じです。ただし、「主語・述語」文で重要なものは、すでに主語だけで「指示・述定」がなされているということです——「桜が散る」の主語「桜」は、ある指示対象（コレ）を桜として述定しています。その上で、「桜としてのコレ」が「散る」として二重に述定されているのです。二重の述定のおののに対して、上で述べた二つの選択がなされることは言うまでもありません。

このように、言語は、指示対象だけを、しかも、二つの選択（限定）のもとに述定します。したがつて、言語を使うかぎり、現前する世界（風景）をそのまま、まるごと表現することは不可能です。言葉の語源が「ことのは」と言われるのも、言葉が、現前する事のすべてを表現することはできず、事の一部、すなわち、事の端を表現するのみだからです。



### 3 言語によるインパクト

#### 表出と喚起

言語は、現前する世界の一端しか表現できない代わりに、その表現で他者にインパクトを与えるという重要な機能をもっています。本節では、言語による他者へのインパクトを取り上げましょう。

前節で「指示・述定」を説明したとき、「地震！」（地震だ！身を守れ！）、「速い！」（速い！君もそう思うだろ！）のように、すでに他者へのインパクトをもつ一語文の例を使いました。しかし、純粹な「指示・述定」は、他者へのインパクトを含まない中性的な機能です。「指示・述定」という機能だけに限定するならば、「コレは地震だ！」という叫び声も、「コレは地震だ」という無表情で単調な声も、コレを指示して、地震として述定している点ではまったく同じです。

では、中性的な「指示・述定」が、どのようにして他者にインパクトを与えるのでしょうか。中性的な「指示・述定」が他者にインパクトを与えるには、中性的な「指示・述定」それ自体が、さらに意味づけられること、つまり、さらなる「として」関係をつくる必要があります。

第一に、「指示・述定」が、話者に現前する世界の表出「として」意味づけられる必要があります。たとえば、「コレは地震だ」という中性的な「指示・述定」が聞き手にインパクトを与えるには、それが、話者に現前する世界を表出（表現）したものの「として」意味づけられることが必要です。

第二に、中性的な「指示・述定」が、聞き手に対してなんらかの行為を喚起するもの「として」意味づけられることも必要です。たとえば、中性的な「コレは地震だ」という「指示・述定」は、仕事など

【訂正】

134頁 後ろから5行目と4行目  
「語用論」→「意味論」

を中断して逃げる行為を喚起するもの「として」意味づけられるかもしれませんが、場合によっては、しばし様子をうかがうという行為を喚起するもの「として」意味づけられるかもしれません。しかし、いずれの場合も、その意味づけによって、話者が聞き手にインパクトを与えることとなります。

以上のように、言語は、指示、述定、表出、喚起という四つの機能をもっています。言語が他者にインパクトを与えるには、これら四つの機能がすべて必要です。

### 言語行為論

言語の誕生を振り返れば、言語は、表出・喚起のために誕生したと考えるべきでしょう。中性的な「指示と述定」は、表出・喚起を論理的に説明するために必要な基礎概念ではありませんが、実際の言語使用は、言語の表出・喚起機能を抜きに語ることはできません。

言語の表出・喚起機能は、複数の身体を含む現象です。さらに言えば、ある身体が発する言語が、他の身体の行為にインパクトを与えることを含む現象です。他の身体の行為にインパクトを与えるとは、他の身体の行為の選択肢（選択肢の集合）になんらかの制約を課すということです。

言語使用を行為と見なし、そのインパクトに注目した理論に、言語行為論があります。従来の言語理論の御三家は、音韻論、統語論、語用論でした。音韻論は音（発音）としての言語、統語論は文法規則、語用論は言語表現の意味を、それぞれ守備範囲にしています。しかし、言語使用は「他者にインパクトを与える行為」であるという側面は見過ごされてきました。そのような従来の言語理論に新風を吹き込んだのが言語行為論でした。<sup>3)</sup>

言語行為論は、言語使用が他者にインパクトを与える行為であるという点、つまり、他者の取り得る

行為の集合を制約する行為であるという点に注目します。たとえば、質問するという言語行為は、質問の自身がなんであれ、相手の選択肢集合を、その質問に答えるという行為の集合に限定する力をもっています。もちろん、質問への答え方は多様ですが、質問された側の選択肢集合は、なんらかのかたちで質問に答えるという方向に限定されます。

### 言語行為の三点セット

では、言語行為は、どのような構造になっているのでしょうか。言語行為は、次のように、三つの行為の複合体です。

第一に、当然のことながら、言語行為が他者にインパクトを与えるには、「言語を発する」という行為がなされねばなりません。何かを言うという行為 (an act of saying something) です。これを「発話行為 (locutionary act)」と呼びます。

第二に、言語行為が他者にインパクトを与える契機となるには、何かを語ることに、なんらかの行為が遂行されねばなりません。この発話の中で遂行される行為 (an act in saying something) を「発話内行為 (illocutionary act)」と呼びます。「その本を取ってくれ」という発話行為であれば、「命令する」という発話内行為が遂行されています。もし口調が激しければ、「命令する」という発話内行為が遂行されています。すぐ前に、表出と喚起について説明しましたが、発話内行為は、中

3 言語行為論については、J・L・オースティン『言語と行為』（原書は一九六二年に刊行）坂本百大訳、大修館書店、一九七八年）があります。

性的な「指示・述定」を表出されたものとして意味づける行為です。

第三に、言語行為が他者にインパクトを与える契機となるには、何かを語ることによつて生じる行為（遂行される行為）がなければなりません。この何かを語ることによつて結果として遂行される行為（*act by saying something*）を「発話媒介行為（perlocutionary act）」と呼びます。「その本を取つてくれ」という発話に対して、聞き手が「はい」と気軽に応じて本を渡したならば、依頼に應えるという発話媒介行為が遂行されたこととなります。ところが、同じ発話によつて、聞き手が侮辱されたと感じたならば、腹を立てるといふ発話媒介行為が遂行されたこととなります。先に述べた発話内行為が、「指示・述定」に表出の意味を与えるのに対して、発話媒介行為は、「指示・述定」に喚起の意味を与える行為です。

以上の発話行為、発話内行為、発話媒介行為は、発話の分類ではなく、すべての発話がもつ三要素です。「その本を取つてくれ」といふ発話は、文法に則り、有意義な音声であるという点で発話行為であり、依頼ないし命令を遂行している点では発話内行為でもあり、聞き手に侮辱の念を喚起した点では発話媒介行為でもあるというぐあいです。

ここで、一つだけ問題を提起しておきましょう。それは、言語行為の主体はだれか、という問題です。読者は、「主体は話者に決まっているじゃないか」と思われるかもしれませんが、しかし、それでは、話者という「個人」心を内蔵した肉体」を主体と考えていることとなります。それは、第2章（二九頁）で、私たちが決別した前提です。私たちの前提は、「かや」こそ主体」でした。言語行為の主体も、「かや」です。しかし、どのような「かや」なのでしょう。その説明は、第7章のコラム7-4まで持ち越すことにします。

## 4 ナラティブ・セラピー

### 分析的言説と接合的言説

ここまで、そもそも言語とは何か、言語はいかにして他者にインパクトを与えるのかという基礎的な考察をしてきました。本節では、その考察を踏まえて、私たちの日常生活における言語の使用へと話を進めましょう。

言語が、ある程度のみとまりをもって発せられるとき、それを「言説 (discourse)」と呼びます。言説には、音声による言説もあれば、文字による言説もあります。私たちは、日々、多くの言説を発し、また、他者が発する多くの言説に接しています。私たちは、言説の世界 (言説空間) に生きていると言ってもよいでしょう。

言説には、三つの分類軸があります。第9章では、これら三つの分類軸を総動員して、グループ・ダイナミックスが守備範囲とする言説空間を明確にします。ここでは、三つの分類軸のうち、さしあたって必要となる二つの分類軸について説明しておきましょう。

第一の分類軸は、「分析的言説／接合的言説」という分類軸です。これは、前後する二つの文がどのような関係になっているかについての分類です。

分析的言説とは、二つの文が「ならば」という接続詞で結ばれる言説です。「この病気が肺結核であるならば、感染する可能性がある」という言説は、その例です。この言説は、「この病気が肺結核である」「感染する可能性がある」という二つの文が、「ならば」で結ばれています。これら二つの文が「な

らば」で結ばれるためには、前の文で言及されている「肺結核」が、後の文で言及されている「感染可能性のある病氣」の一つであることが必要です。言葉を換えれば、感染可能性のある病氣が細かく分類されていて、肺結核がその一つであることが必要です。そのためには、感染可能性のある病氣の分類、つまり、分析（細かな単位に分けていくこと）が前提になります。これが、「ならば」を含む言説を分析的言説と呼ぶ理由です。

他方、二つの文が、「そして」で結ばれる場合もあります。そのような言説を、接合的言説と呼びます。「彼は肺結核になった。そして、家族に感染しないよう入院した」という言説は、その例です。この場合には、前の文で言及された「肺結核になったこと」と後の文で言及された「入院したこと」は、時間的な出来事の推移を示しています。前の文にどのような文が続くかは、かなり自由です。「入院がいやで自宅療法に固執した」と続けることも可能です。そこには、後の文で言及される事象を分類した一つが、前の文で言及された事象であることは必要ありません。逆に、さまざまな続き方（接続のしかた）があるだけに、実際の言説の中でどのような接続がなされたかが興味あるところとなります。

### 人称的言説と没人称的言説

言説を分類する第二の軸は「人称的言説／没人称的言説」という分類軸です。これは、言説を発した人がだれであるかによって、言説の意味内容や真偽が異なるか否かという分類軸です。

人称的言説とは、言説の意味内容や真偽が、その言説を発したのがだれかによって異なる言説のことです。たとえば、「君が好きだ」という恋人の言説は、恋人が発した言説だからこそ、喜びを感じさせる意味をもっています。もし、電車でたまたま隣に座った人から、同じ言説を発せられても、その意味

はまったく違うでしょう。また、その言説は、恋人によって発せられた言説だからこそ真なのです。

一方、没人称的言説とは、言説の意味内容や真偽が、その言説を発した人とは無関係な言説です。没人称的言説の典型は、自然科学の理論（という言説）です。自然科学の教科書には、偉大な理論を提出した科学者の名前も登場しますが、その理論の意味内容は、科学者の名前が書いていなくても何の影響もありません。

グループ・ダイナミックスの言説を考えると、人称的言説と没人称的言説の中間にある準・没人称的言説が重要になります。準・没人称的言説とは、同じ協同的实践に携わる当事者と研究者、あるいは、もっと広く彼らと同じ時代、同じ文化のもとに生きる人々にとっては没人称的ですが、歴史や文化の制約を被っている言説のことです。文化を異にする人が対話をすれば、互いの発する言説が没人称的言説ではなかつたことが判明するかもしれませんし、過去の時代の言説を読めば、その言説は、その時代特有の言説に映る場合も多いでしょう。しかし、それにもかかわらず、同じ文化、同じ時代を生きる者にとっては、没人称的である言説、すなわち、準・没人称的言説は数多く存在しています。

### ナラティブ

以上の二つの分類軸を使って言説を分類したとき、人称のないし準・没人称的な接合的言説を（狭義の）ナラティブと呼び、人称のないし準・没人称的な分析的言説をセオリーと呼ぶことにします。ナラティブは、語るといふ行為に注目する場合は「語り」、語られた内容に注目する場合には「物語」と訳されることが多いようですが、「語り」や「物語」は、どうしても、ある程度の長さをもったストーリー風の言説を連想させます。それに対して、ナラティブには、「今日、久しぶりにA君に会って、（そし

て) 授業もサボって話しこんじゃった」といった卓近な短い言説も含まれます。一方、セオリーには、「A君は絶対怒らない」といった身近な言説も含まれますので、あえて「理論」と訳さず、カタカナ書きにしておきます。

私たちの日常生活では、ナラティヴとセオリーが補完的に使用されます。また、ナラティヴがセオリーを変えたり、セオリーがナラティヴの中で言及されたりするというぐあいに、ナラティヴとセオリーは相互に影響を与えています。

### ナラティヴ・セラピー

ここで、ナラティヴとセオリーをまとめて「広義のナラティヴ」と呼ぶことにしましょう。その理由は、あとで紹介するナラティヴ・セラピーを含めてナラティヴ・アプローチ(ナラティヴを中心に据える研究スタンス)でナラティヴと呼ばれているのは、狭義のナラティヴのみならずセオリーをも包含しているように思われるからです。以下、広義のナラティヴをナラティヴと記すことにします。

日常の言説空間の圧倒的部分は、ナラティヴで占められています。ナラティヴは、日常の意味的集合性を大きく左右します。ということは、私たちの行為(認識を含む)は、ナラティヴによって変化するのです。

ナラティヴによる行為の変容という課題に真正面から取り組んできたのが、心理カウンセリングの一つの立場、ナラティヴ・セラピーです。<sup>4</sup> 読者は、「どんなカウンセリングだって、カウンセラーとクライアントの対話、すなわち、ナラティヴによって行なわれるはずだ。わざわざ「ナラティヴ」を冠するナラティヴ・セラピーとは何なのか」という疑問をもつことでしよう。



ナラティブ・セラピーと従来のセラピーの大きな違いは、「問題の原因を発見して、その原因を解決する」という自明とも思える方略をとらないところにあります。では、ナラティブ・セラピーは、「原因発見→原因解決」という方略を取らずに、いかにしてクライエント（カウンセリングを受けにきた人）が抱える問題に立ち向かうのでしょうか。

そのポイントは、クライエントが呪縛されている「支配的ナラティブ」から脱却し、新しい「もう一つのナラティブ」を探索するところにあります。心理カウンセリングを受けるクライエントに限らず、だれでも多くの支配的ナラティブに呪縛されています。たとえば、コラム3-1（六四頁）で紹介した過疎地域では、住民は、自分たちの地域で人口が減ることを「過疎」と呼び、さらなる「過疎」化の進行を心配する多くのナラティブを交わしていました。「過疎」を心配するナラティブに呪縛されていたのです。しかし、そこに「適疎」という新しい言葉が飛び込んできました。これによって、活性化運動に携わっていた人たちは、「過疎」を心配する支配的ナラティブの呪縛を脱し、「適疎」に向かう新しい道を模索し出したのです。

心理カウンセリングを求めるクライエントの問題も、なんらかの支配的ナラティブに縛られているからかもしれません。とくに、クライエントは、「問題の原因は自分の内面にあり、その原因を特定し、治癒しなければならぬ」という支配的ナラティブに呪縛されがちです。本書で使用した言葉を使うならば、「問題の原因は、肉体に内蔵された心の中にある」というナラティブに支配されがちです。ナラ

4 ナラティブ・セラピーについては、野口裕二『物語としてのケア——ナラティブ・アプローチの世界へ』

（医学書院、二〇〇二年）を薦めます。

ティヴ・セラピーの主たる目的は、この支配的ナラティヴに代わる「もう一つのナラティヴ」を紡ぐところにあります。

では、ナラティヴ・セラピーでは、いかにして支配的ナラティヴからの脱却、「もう一つのナラティヴ」の探求がなされるのでしょうか。ナラティヴ・セラピーは、(1)問題そのものの外在化、(2)カウンセラーの「無知」の姿勢という二つの特徴をもっています。以下、それらを説明します。

### 問題そのものの外在化

ナラティヴ・セラピーが、そこからの脱却をめざす主たる支配的ナラティヴは、「問題の原因は自分の内面にあり、その原因を特定し、治癒しなければならない」というナラティヴです。短く言えば、問題の原因を内面に求める「内面化のナラティヴ」です。この「内面化」に対抗するには、問題を内面の問題ではなく、外側の問題として構成し直す「外在化（外面化）のナラティヴ」が必要です。

ここで、注意しなければならないことがあります。それは、外在化といっても、問題の「原因」を外在化するのではないということです。「原因」の外在化は、クライエント以外の人物や実社会に原因を求めることです。「親が悪いのだ」「世の中が悪いのだ」というように原因を外在化しても、問題の解決にはつながりません。問題の「原因」を外在化するのではなく、「問題そのもの」を外在化するのです。では、「問題そのもの」を外在化するとは、どういうことなのか、次に、一つの具体例をあげてみましょう。これは、M・ホワイトとD・エプストンの著書に紹介されている有名な事例、「スニーキー・プー」の事例です。

ナラティヴ・セラピストであるホワイトを訪れたのは、ニックという六歳の男の子とその両親でした。

ニックは、「遺糞症」と診断される問題を抱えていました。もう六歳であるにもかかわらず、トイレでウンチをすることができず、パンツの中に排泄してしまっています。それだけではありません。ウンチを壁に塗ったり、引きだしにしまったり、食卓の裏に塗りたくって遊んだりもしていました。ニックは、すでに何人ものカウンセラーにかかっていたのですが、効果はありませんでした。それらのカウンセラーは、ニックの遺糞症の原因はニックの「肉体に内蔵された心」にあるというナラティヴに支配されていました。両親も同じでした。

しかし、ホワイトは、次のような方法でニックの「問題そのもの」を外在化したのです。ホワイトは、「問題そのもの」をスニーキー・プー（ずるがしこいプー、という意味）の仕業だと考えようと提案したのです。問題は、ニックの内面の問題ではなく、スニーキー・プーによって引き起こされた問題であるというナラティヴによって、内面に原因を求める支配的ナラティヴからの脱却を図ったわけです。

その上で、ホワイトは、スニーキー・プーがニックと家族にどんな悪影響を与えてきたのかと質問しました。その質問に対して、「スニーキー・プーは、ニックを友だちから引き離し、勉強もできなくしてしまい、ニックの人生を滅茶苦茶にした」「スニーキー・プーは、母親の自信を喪失させ、容赦なく打ちのめした」「スニーキー・プーは、父親を、秘密を抱えて生活せざるを得ない状況に陥れ、父親を友人や親戚から疎遠にした」などの悪影響が述べられました。このようにして、ニックの「肉体に内蔵された心」の問題だった遺糞症が、スニーキー・プーの仕業という外敵の問題に外在化されたのです。

では、このようにして外在化された問題にどのように対処したのでしょうか。たしかに、外敵スニーキー・プーは、ニックと両親の生活をかき乱してきたのは事実ですが、ニックと両親は一〇〇%かき乱されてきたわけではありません。たまには、スニーキー・プーが思うように、ニックや両親をかき乱せ

なかったこともありました。ホワイトは、それがどのような場合だったかを尋ねました。すると、ニックは、スニーキー・プーの思い通りにならなかったことが何回かあったことを思い出しました。母親は、自分を見じめにしようとするスニーキー・プーに抵抗しようと好きな音楽を聴いたところ、みじめさから救われたことを思い出しました。また、父親は、スニーキー・プーの思い通りにならなかった経験は思い当たりませんでした。が、今まで秘密にしていたスニーキー・プーの仕事を友人に話してみようかと考えるようになりました。さらに、あれだけのかき乱しに遭いながらも、ニックと両親は親子の関係を維持してきたこと、また、両親も夫婦の関係を維持してきたことを確認することもできました。

最後に、ホワイトは、ニックと両親に、今まで話したことを踏まえて、今後スニーキー・プーにどう対処していくかを尋ねました。それに対して、ニックは、「スニーキー・プーには二度とだまされない。もう友達にはならない」と言いました。母親は、「スニーキー・プーがみじめな思いにさせようとしても、それには絶対に負けない」と言い、父親は、「スニーキー・プーとのトラブルを友人に話してみる」と言いました。こうして、ニックも両親も、外在化された問題へのかかわり方を大きく変えました。その甲斐あって、ニックと両親がふたたびホワイトを訪ねるまでの二週間、ニックがスニーキー・プーの思うようになったのは、たった一度だけでした。ニックと両親のナラティヴも、「問題に振り回されて途方に暮れる」ナラティヴから、「問題と正面から戦う」ナラティヴへと変化していました。

### カウンセラーの無知の姿勢

前項では、ナラティヴ・セラピーが、「内面化のナラティヴ」という支配的ナラティヴの呪縛からクライアントを解放することを述べました。ナラティヴ・セラピーは、「内面化のナラティヴ」のみなら

ず、「原因を特定し解決するナラティブ」という支配的ナラティブの呪縛からの解放をもめざしていません。通常、クライエントは、みずからの問題の原因がみずからの内面に存在すると信じ、その原因を突き止め治癒してほしいと願ってカウンセラーのもとを訪れます。それに対して、カウンセラーは、クライエントの内面にある原因を明確にし、それを治癒するという使命をもってカウンセリングに臨みます。このように、通常のカウンセリングでは、カウンセラーもクライエントも、「原因を特定し解決するナラティブ」に支配されています。

ここで二つのことが重要になります。第一は、カウンセラーといえども、セラピーが進行する集合体に「内在」しているということです。その集合体には、目の前にいるクライエントのみならず、クライエントの家族や職場の同僚も含まれています。決して、カウンセラーだけが、その集合体を高みから見下ろせる特権的位置にいません。カウンセラーも、セラピー集合体の内部者なのです。カウンセラーは、クライエントが訴える問題の原因を特定でき、その解決を示唆できるような特権的位置にいないのです。

重要なことの第二は、クライエントが訴える問題について、もつとも精通しているのは、クライエント自身であるということです。クライエントの問題は、専門的立場からどのようなラベルを貼られようとも、人生の中でその問題に苦しみ、その問題とともに生きているのは、他ならぬクライエント自身です。もしカウンセラーが、専門的なラベリング（ラベル貼り）を行なうことによつて、クライエントの問題をクライエントよりも理解していると思うならば、それは、前述した特権的位置にしがみついていることを示しています。

では、カウンセラーには、いかなる態度が求められるのでしょうか。それは、「クライエントの問題

について、自分は無知である」という謙虚な姿勢です。それは、「無知の姿勢」とでも呼べる姿勢です。クライエントの問題について無知であるという姿勢をもつならば、その姿勢は、クライエントの問題を「教えてもらう」という姿勢につながるはずですが、実際、スニーキー・プーの事例でも、過去にスニーキー・プーの思い通りにならなかった経験を、ニックと両親に披露してもらっています。

同時に、無知の姿勢は、カウンセラーとクライエントの対等な関係をもたらします。カウンセラーが「内面の原因を発見する専門家」であれば、カウンセラーが「観察する人」、クライエントは「観察される人」という非対称な関係になってしまいます。しかし、問題を外在化し、カウンセラーが無知の姿勢をもつならば、両者は、あたかも外在化された問題を共通の敵として戦う戦友どうしという対等な関係になります。

#### 夢を描くツールとナラティブ・セラピー

読者は、前章第3節で紹介した「夢の活動を描く技法」とナラティブ・セラピーの共通点にお気づきでしょうか。「夢を描く技法」で使った「ひし形」は夢を描くツールであると同時に、夢を「語る」ツールでもありました。「ひし形」の「——」が、——を使って、——とスクラムを組んで、常々——をし「ている」という言い回しは、自分の夢を語るときのナラティブです。両方とも、ナラティブという言葉の「かや」を創造することによって、集合体を変えていく方法です。

また、「夢を描く技法」は、問題点（弱点、欠点）を見つけて、それを解決するのは違い、未来に向けて夢を描くことによって改善・改革を実現する方法でした。この点でも、ナラティブ・セラピーと共通しています。

「規範」とは、「そんな行為もあり得るよね」と皆が暗黙に了解している行為の集合です。相異なる規範に従っている二人にとつて、互いの行為は「えっ、ウツソー」です。

本章では、規範がどのようにして形成されるかを説明する理論を紹介します。最初は、オカルトにも見える理論です。その理論のキーワードは二つ——「身体の溶けあい」と「神」。私たちは、他者になることができます。複数の身体が互いに他者になりあう状態が、身体の溶けあいです。この溶けあいから、「神」が形成され、溶けあった身体は「神」の声を聞き、それに従うようになります。その「神」の声こそ、規範の声なのです。

## 1 規範と意味

### 規範理論

本章では、意味的集合性に関する理論の代表格とも言える規範理論を紹介します。<sup>1</sup> 規範という言葉を聞くと、「——しなければならぬ」「——してはいけない」というルールのことを想像するでしょう。もちろん、そのようなルールが規範であることは間違いありません。しかし、本章で言う規範には、「三角形の内角の和は一八〇度である」「教室の中には大きな黒板がある」といった客観的認識（としか思えないような認識）も含まれます。

本章で説明するように、規範と意味は表裏一体の関係にあります。したがって、規範の理論は、すな

わち、意味の理論でもあります。すでに第2章で、「何かが現前するには、その何かの意味をもって、それが必須条件である」ことを述べました。その「意味」がどのようにして形成されるのか——それを説明するのが、本章の規範理論です。

以下に紹介する規範理論は、第1章で述べたグループ・ダイナミックスの基本的考え方に立脚しています。したがって、私たちの常識、つまり、「人間 $\parallel$ 心を内蔵した肉体」という常識や「外界と内界を区別する」常識とは相いれない理論です——常識はずれの理論です。

### 規範 $\parallel$ 想定可能な行為の集合

規範とは、想定可能な行為の集合（無限集合）のことです。想定可能な行為とは、そういう行為が行なわれても不思議ではない行為のことです。その行為が好きか嫌いかとは関係ありません。また、その行為が道徳的に正しいか悪いかとも関係ありません。好き嫌いや良い悪いとは無関係に、「そういう行為も起こり得るよね」と思われれば、想定可能な行為、つまり、規範に従っている行為です。

一方、想定可能ではない行為とは、そんな行為が行なわれた日には、ただ啞然、「えっ、ウッソー」としか言えないような行為です。これまた、好き嫌い、良い悪いとは、まったく関係ありません。道徳的には良すぎるくらい悪い行為でも、「えっ、ウッソー」としか言えないような行為、つまり、規範に従っていない行為もあります。

例をあげましょう。授業中にペチャクチャ私語をしている二人の学生がいたとします。あきらかに、まわりの人は迷惑顔です。そこで、教師が、「その二人、静かにしろ！」と大声で叱ったとします。教師がとった行為は唐突で、学生たちは驚いています。怒られた二人はもとより、それ以外の学生にと



つても、その行為は不快な行為です。教師にしても、好き好んで、その行為に及んだわけではありません。

しかし、そのような教師の行為は、授業という場で生じても決して不思議ではありません。学生も教師も、その種の行為は、それなりの理由があれば、授業中に生じる可能性が十分にあることを知っています。過去に、自分自身が怒られた経験があるか、あるいは、クラスメイトが怒られたのを見た経験があるからです。したがって、その種の行為は、想定可能な行為、つまり、規範に従っている行為なのです。

しかし、次の例はどうでしょうか。授業中に教師が突然教卓の下からワインとチーズを取り出し、「ちよつと三〇分、休憩」とワインを楽しみ出したら、どうでしょうか。おそらく、学生たちは、怒るのも忘れて、ただ啞然とするばかりでしょう——「えっ、ウツソー。そんなのあり?」と。教師が授業中にワインを楽しむなど、良いとか悪いとか言う以前のこと、まったく想定していない行為です。それが、想定可能ではない行為、つまり、規範に従っていない行為です。

1 本章で紹介する規範理論は、次の本に基づいています。

大澤真幸『身体の比較社会学Ⅰ』（勁草書房、一九九〇年）

ただし、用語については、身体の溶けあい（間身体的連鎖）、ベシ規範（価値的規範）、である規範（認知的規範）、第三の身体（第三者の審及）のように、平易な表現に変えました（カッコ内が大澤の用語）。規範理論の数学的基礎については、次の本を参照してください。

大澤真幸『行為の代数学——スペンサー・ブラウンから社会システム論へ』（青土社、一九八八年〔増補新版は一九九九年〕）

## 規範の円を描く

規範とは、想定可能な行為の集合のことでした。したがって、規範を指定するということは、「この円の中が想定可能な行為ですよ」と、紙の上に円を描く作業と同じです。円の中の点が想定可能な行為、円の外の点が想定可能ではない行為です。円を描くということは、想定可能な行為と想定可能ではない行為を区別する作業です。

円の中の点は無限にあります。どんなに近い二つの点も、顕微鏡で拡大すれば、二点の間には隙間があり、さらに点を入れることができるからです。このように、想定可能な行為の集合は無集合です。授業での行為を考えてみましょう。口頭で説明する、板書をする、学生に質問をする等々の教師の行為、講義を聞く、ノートをとる、居眠りをする等々の学生の行為は、すべて想定可能な行為です。しかも、教師が板書をするという一つの行為を取り上げても、板書の内容、書き方などを仔細に区別していけば、板書をするという行為にも無限のバリエーションがあります。

円を描く作業は集合体の中で行なわれます。その原初的な姿は、子どもたちの遊びに顕著に現れています。野球をしたい子どもが四人集まったとしましょう。二対二に分かれてゲーム開始。本塁、一塁、二塁だけの三角ベースの野球しかできません。一チームたった二人ですから、守備側は一人がピッチャー、もう一人が内野手兼外野手でやるしかありません。攻撃側は一人がバッター、もう一人がキャッチャーです。バッターが出塁すれば、もう一人がバッター兼キャッチャーとなります。その場合には、バッターが打って、ランナーが本塁まで戻れなければ、もうバッターがいなくなるので、アウトというルールが必要になるでしょう。もちろん、盗塁など禁止です。

そこに、もう一人子どもがやってきました。一方のチームは三人になりますから、きちんとキャッチ

ヤーを出すことになります。そのキャッチャーがボールをそらせば、相手は盗塁OK。また一人子どもがやってきました。両チームともキャッチャーを出すことになります。さらに、もう二人子どもがやってきました。ここで、三角ベースが普通の四角ベースになります。それに伴って、他のルールも変更されます……。

こういうぐあいに、想定可能な行為の無限集合は、時々刻々と変化していきます。野球をやりながら規範をつくり、規範に従いながら野球をやり、また規範を変更していく、この繰り返しです。つまり、規範は行為しながらつくっていくものなのです。

私たちは、子どもたちの野球のように時々刻々と変化する規範の中に身を置く場合もありますが、他方では、もつと確立された規範のもとでも生きています。では、規範が確立するとは、いったいどういうことなのでしょう。規範は、どのようにして確立していくのでしょうか。時々刻々と変化する規範から、どのようにして確立された規範に変容していくのでしょうか。それは、次節「規範の形成プロセス」で説明します。

## 二種類の規範

規範には、大別して、「べし規範」と「である規範」の二種類があります。これら二種類の規範は、規範からの逸脱が発生した場合の対応によって区別できます。

規範からの逸脱が生じた場合、逸脱した人に規範に従うよう圧力がかかるのが「べし規範」です。先に、授業中の私語を叱った教師の例をあげましたが、この例で教師と学生が従っている規範は、規範に従っていない二人に、私語をやめるよう（規範に従うよう）圧力がかけられていますから「べし規範」で

す。

それに対して、逸脱した人には圧力がかからず、規範の方が、逸脱ケースをも許容・包含するまでに変化するのが「である規範」です。たとえば、地味な洋服しか着ないと思っていた先生が、ある日、真っ赤なネクタイに白いジャケットという派手な洋服で現れたとします。学生たちにとっては、「えっ、ウッソー」です。でも、学生は、先生に対して「そんな洋服はやめてください」とは言わなかったとします。そして、「先生って、あんな派手な服も着るのか」と認識を変えたとします。この場合、学生たちが前日まで従っていた規範の方が、逸脱ケース（先生の派手な服装）によって変化していきますから、それは「である規範」だったのです。

日常用語としての規範は、「べし規範」に近い意味で使用されますが、事実の認識もまた、「である規範」という規範に従った結果であることに注意してください。第2章第2節で述べたように、事実の認識は、外界の事実を内界に捉えることではありません。

## 意味

規範の形成・変容について述べる前に、規範と意味の関係について説明しておきましょう。第2章第3節で述べたように、意味という概念は格別の重要性をもっています。なぜならば、意味なきものは、現前しませんので、行為の対象になりえないからです。行為の対象がなければ、そもそも、その行為自体が成立しなくなってしまう。

意味とは、想定可能な行為が行なわれたとき、その行為の対象が「なんであるか」です。対象が「なんであるか」を、「対象の同一性」と呼びます。たとえば、授業中に教師が黒板消しで黒板をたたいて

大きな音を立て、生徒たちの注意を喚起したとしましょう。この行為は想定可能な行為です。この行為の対象である黒板消しの同一性（それがなんであるか）を問えば、それは「黒板をたたいて大きな音を出すもの」です。つまり、この場合には、「黒板をたたいて大きな音を出すもの」というのが、黒板消し（という対象）の意味なのです。

想定可能な行為の集合が規範ですから、規範と意味は表裏一体の関係にあります。規範は、集合体の中で形成されるのですから、規範と表裏一体である意味も、集合体の中で形成されます。異なる規範が形成されれば、異なる意味が形成されるのです。意味を、国語辞典に載っている「意味」と勘違いしないようにしてください。国語辞典に載っている語彙の「意味」は、決してすべてとは言えないまでも、その語彙で言及される対象を含む広範な集合体を想定した上での対象の同一性ではありません。しかし、個々の集合体の中で、対象がもつ意味には、必ず、その集合体の特性が反映されるはず——わが家の「テレビ」には居間で家族そろって見るものという意味があるかもしれませんし、隣の家の「テレビ」には、そういう意味あいが含まれていないかもしれません。

### 雰囲気

雰囲気は、規範の一種です。前項で述べたように、規範と意味は表裏一体です。規範に含まれる行為（想定可能な行為）にとつての対象の同一性（それがなんであるか）が意味でした。ひと口に意味といつても、言語化しやすい（言葉で表現しやすい）意味もあれば、言語化しにくい（言葉で表現しにくい）意味もあります。前項の例であげた「黒板をたたいて大きな音を出すもの」という黒板消しの意味は、容易に言語化することができます。

しかし、言語化しにくい意味をもつ対象もあります。たとえば、何となく魅了される、何となく目を背けたくなる、そんな感情を抱いてしまうような対象です。無理をすれば言葉になるのですが、言葉では表現しにくい感情を引き起こす対象です。

ただ、ここでも、第2章で述べたように、私たちが「肉体に内蔵された心」を否定するところから出発したことを思い出す必要があります。感情は、決して、「肉体に内蔵された心」に宿る感情ではありません。それは、あくまでも対象の「意味」なのです。いかに、「心に感情を抱く」と言葉では表現しても、それは「心の中」の話ではありません。対象の「意味」が、ちょうど対象の「表情」のように現前しているのです。

雰囲気とは、言語化できない意味を対象に与える規範（の一種）です。対象に「表情」を与えると、言ってもいいでしょう。椅子の形状をした物は、「俺に座ってくれ」と言わんばかりの表情（意味）を呈しますし、パソコンのキーボードは、「俺を指でたいてくれ」と言わんばかりの表情（意味）を呈してきます。通常、物は、行為する身体の対象として受動的に捉えられがちです。しかし、物は決して受動的ではなく、表情で訴えてきます。その訴えは、J・ギブソンという心理学者によって「アフオーダンス」と呼ばれています。多くの場合、私たちに現前する対象は、言語化しやすい意味とともに、言語化しにくい意味（表情）をも伴って現前します。私たちが包まれる規範の「かや」には、雰囲気が含まれていることの方が多いのです。

## 2 規範の形成プロセス

### (1) 原初的な規範の形成

#### 身体

では、規範の形成・変容の説明に入りましょう。以下の規範理論では、「しんたい身体」という概念が非常に重要になります。身体という概念については、すでに第2章第3節で述べたように、「それに対して固有の世界が現前している物質」のことです。言うまでもなく、身体は、個人（心を内蔵した肉体）とは違います。身体には心はありません。通常、個人は、「肉体の内部のどこかに心の世界（あるいは頭の世界）をもち、そこで何かを感じたり、考えたりする」と考えられています。しかし、身体は、そのような心の世界、頭の世界をもちません。ただ、身体には、その身体に固有の世界が現前します。

身体には、「溶けあう身体」と「第三の身体」という二つの種類があります。その違いは、何が現前するかにあります。結論を先取りすると、溶けあう身体には、「その場かぎり」で「その時かぎり」の世界（風景）が現前します。一方、第三の身体には、「意味」が現前します。第2章第3節で述べたように、意味なきものはそもそも現前しません。ということとは、私たちの理論がどのような方向に展開されるか、およその見当がつかってきます。溶けあう身体だけでは、世界は現前しません。溶けあう身体でもあり、同時に、第三の身体でもある（正確には、第三の身体の影響を受ける身体でもある）ことが必要です。では、どのようなプロセスを踏んで、そのようになるのか。これを今から説明していきます。

## 他の身体になる

身体の溶けあいを説明するためには、「他の身体になる」ことの説明から始めねばなりません。身体  
の溶けあいとは、複数の身体が、濃密かつ頻繁に、他の身体になる状態だからです。

「他の身体になる」というと、何かオカルトじみて聞こえますが、私たちが日常的に経験しているこ  
とです。今、演劇を見ているとしましょう。舞台の役者が崖つぶちに追いつめられています。その迫真  
の演技は、まさに演劇を見ている自分が崖つぶちに追いつめられているかのように感じさせます。思わ  
ず手に汗がにじみます。絶体絶命。しかし、ふと、「我に戻ります」。そして、自分は崖つぶちに追いつ  
められてはいないこと、観客席で演劇を見ているだけであることに気がつき、ホッとします。しかし、  
ふと我に戻るまでは、自分はだれだったのでしょうか？ ふと我に戻るまで、自分は舞台の役者でした。  
そして、ふと我に戻った瞬間、観客席の自分に戻ったのです。

舞台の役者ならば、まだ生身の人間ですが、私たちは、映画館のスクリーンやテレビのディスプレイ  
に映った像にもなることがあります。そのような像も、「それになる」かぎりでは身体です。

私たちが、他の人を見て強い情動に見舞われるときは、他の身体になっています。たとえば、あなた  
の目の前で危なっかしい手つきで包丁を使っている人がいるとします。あなたは、それをハラハラしな  
がら見ています。すると、その人がザクツと手を切ってしまうと、「あっ！」と思わず、あなたは  
目をつぶります——あたかも、自分の手が切れたように。そのとき、あなたは、包丁を使っていた人に  
なっています。

生物ではない物体になる例を、もう一つあげておきましょう。物づくりの現場には、機械化できない、  
職人芸に頼らざるを得ない作業がたくさんあります。職人は、使い慣れた機械を巧みに操り、自動機械



ただけではできない加工を行ないます。そのような職人にとって、使い慣れた機械は身体です。機械の調子がおかしいと、自分の体の調子がおかしいように感じます。職人は、機械になつていなのです。

第2章(第3節)で、現前、身体、事物という概念を導入したとき、何が身体で何が事物かは、集合体によつて異なる述べました。Xというものがあつて、身体がXになるとき、Xは身体です。したがつて、第2章二六頁の例で、女の子と、その子が妹のようにかわいがつているぬいぐるみの集合体ではぬいぐるみは身体です。しかし、そのぬいぐるみをクリスマスにプレゼントした両親とぬいぐるみの集合体では、ぬいぐるみは事物です。両親は、ぬいぐるみになることはないからです。

### 身体の溶けあい

話を「身体の溶けあい」に進めましょう。複数の身体が、濃密かつ頻繁に他の身体になつている状態が身体の溶けあいです。身体の溶けあひも、私たちが日常的に経験していることです。たとえば、だれかとしんみり話しこんでいて、思わずもらい泣きをしてしまう場合は、互いに相手の身体になつています。相手になつて話し、相手になつて聞いています——何度も何度も、濃密に。逆に、心底うれしくなつて、思わず「もらい笑い」をしてしまう場合もあります。その場合も身体が溶けあつています。

サッカーのような動きの速いチームプレーを見てみると、複数の選手が、ひとつながりの動きを見ることがあります。そのような一連の動きは、選手が他の選手になつてボールのゆくえを察知しつづ、みづからに戻つてボールに向かうという溶けあひなしには考えられないことです。

身体の溶けあひでは、複数の身体が、濃密かつ頻繁に他の身体になつています。今、A、B、Cという三つの身体が溶けあひの状態にあるとします。Aは、何度も何度もB、Cになつています。BもCも

同じです。このような状態では、A、B、Cは、異なる身体というより、異なるポジションと言った方がよいでしょう。二人がポジションA、残る一人がポジションBという場合もあるからです。三つの身体が、三つのポジションのそれぞれに、何度も何度も身を置くのです。

このように、三つの身体が、各ポジションを何度も何度も経験すると、ポジションによる現前（経験）の違いよりも、各ポジションに共通した現前（経験）がクローズアップされます。このクローズアップされた共通経験がもたなって規範が形成されるのです。

A、B、Cが、芳香を放つバラを囲んで互いに溶けあう三つの身体だとしましょう。見える花びらや、光の当たりぐあいには、ポジションによって異なります。もちろん、バラの見え姿の時間的変化も、ポジションによって違います。しかし、どのポジションからもバラは美しいピンクで、芳香を放っています。この溶けあいによる共通経験が、想定可能な行為（の集合）と想定可能ではない行為（の集合）を区別します。「いい香りだね」「ピンクだね」という発言、思わず鼻をバラに近づけるしぐさ、等々は想定可能な行為です。一方、「悪臭だね」「真っ黒だね」という発言、手で花を握りつぶす行為、等々は想定可能ではない行為です。こうして、三つの身体の溶けあいから規範が生成されます。

すでに述べたように、規範と意味の生成は表裏一体です。上のような想定可能な行為群が生成されれば、目の前のバラは、もうたんなる「コレ」ではなくなりません。それは、「いい香りを発するもの」としてのコレであり、「思わず鼻を近づけたくなるもの」としてのコレになります。つまり、目の前のバラは、「いい香りを発するもの」「思わず鼻を近づけたくなるもの」という意味を獲得するのです。

### 第三の身体

本章で紹介している規範理論の最大の特徴は、規範の主、つまり、想定可能な行為の集合を指定する主を軸に理論が展開されることです。この説明に入りましょう。

前項で見たように、想定可能な行為の集合は、溶けあう身体に共通する経験が結晶化するかたちで生成されるのでした。重要なことは、規範は、溶けあう身体の共通経験だけが結晶化して生成されるということです。

三つの身体A、B、Cの溶けあいの例を続けましょう。Aの経験には、共通経験も含まれていますが、Aというポジション独自の経験も含まれています。したがって、共通経験だけが結晶化してできる規範の主を、身体Aとするわけにはいきません。B、Cも同様です。規範の主は、A、B、Cのいずれとも異なる身体であるはずですが。

三つの身体の共通経験を代表しながらも、三つの身体のいずれとも異なる身体が、規範の主です。その身体は、A、B、Cのいずれでもない「第三の身体」です。本章冒頭のイントロの中では、第三の身体を「神」とカッコつきで書いておきました。第三の身体は、神のような身体と考えていただいても結構です。ただし、同じ神でも英語で言えば、一神教のthe Godではなく、多神教のa godと考えてください。日本では、八百万やおよほすの神と言われるように、いたるところに神様がいます。偉大な社会的貢献をした人はいつの間にか神様になりますし、大きな岩や大木なども神様になります。第三の身体は、そのような日本流の神の原型に相当すると考えていただいて結構です。

ここまでをまとめておきましょう。規範とは、想定可能な行為の集合でした。その集合は、第三の身体によって指定されます。したがって、規範の生成は、第三の身体が生成されることそのものです。第

三の身体は、身体の溶けあいから生成されます。

### 第三の身体の例——人見知り

次に、第三の身体の例をあげておきましょう。例を紹介する中で、身体の溶けあいから生成された原初的な第三の身体と規範の特徴にも触れることにします。

私たちは、成長して社会の一員になっていくにしたがつて、さまざまな身体と溶けあい、次から次に第三の身体を生成していきます。それらの第三の身体には、後に述べるように、発達するものもあれば、崩壊するものもありますが、大人は多くの規範に従っていますので、ある一つの規範を指定する第三の身体の効果だけを見て取ることが容易ではありません。その点、まだ小さな子どもには、そのような効果を比較的是つきり見て取ることができます。

第一の例は、「人見知り」と呼ばれる現象です。人見知りとは、八カ月不安という別名が示すように、生後八カ月前後で見られるようになる現象です（もちろん、個人差はありますが）。それまでは、だれにダツコされてもにこやかな表情を示していた赤ちゃんが、見知らぬ大人にダツコされると火がついたように泣き出します。これが、人見知りです。人見知りは、赤ちゃんが、ふだんから溶けあっている身体とそうではない身体を区別できるようになったことを示しています。

赤ちゃんは、母親や父親など日ごろから身近にいる大人とは、日常的に、さまざまな状況で溶けあっています。一緒にご飯を食べながら、お風呂に入りながら、オムツを替えてもらいながら、赤ちゃんの身体と身近な大人の身体は溶けあいます。その溶けあいからは第三の身体が次から次に生成されていきます。

重要なことは、身体の溶けあいから生成されたばかりの原初的な第三の身体は、特定の（現前する）身体とオーバーラップするということです。本来、第三の身体は「神」のような身体ですから現前しません。しかし、父親の身体、母親の身体のような現前する身体にオーバーラップするのです。言い換えれば、第三の身体は、特定の身体のオーラ（後光）のようになるのです。その意味で、原初的な第三の身体は、「見える」身体と言うことができます。

人見知りや、子どもが父親や母親など身近な身体と溶けあい、第三の身体が生成された証拠、そして、それらの第三の身体が身近な身体とオーバーラップしたことの証拠です。小さな子どもは、父親や母親と日常的に溶けあい、多くの第三の身体を生成し、それらの第三の身体は父親あるいは母親にオーバーラップします。だからこそ、子どもにとって、父親や母親は、他の大人とは違う格別の身体になるのです。

第三の身体の効力（想定可能な行為の集合を指定する効力）が及ぶ範囲を、「第三の身体的作用圏（あるいは、規範的作用圏）」と呼ぶことにします。第三の身体が特定の身体にオーバーラップするということは、事実上、「特定の身体Ⅱ第三の身体」です。特定の身体が現前する範囲の空間が作用圏になります。平たく言えば、特定の身体が見える範囲の空間、特定の身体の声が聞こえる範囲の空間が作用圏になります。

作用圏の外には、もはや第三の身体の効力（規範の効力）は及びません。ここで、規範と意味とは表裏一体であること、また、世界の現前には意味が不可欠であることを思い出してください。そうであれば、ある規範の作用圏の外部とは、その規範と表裏一体である意味が存在しない空間ということになります。それらの意味が存在しない分だけ、世界は虚無に戻ってしまうのです。

子どもにとって父親や母親が現前しない空間は、父親や母親にオーバーラップした第三の身体的作用圏の外部ということになります。作用圏の外に移動させられ、意味を喪失すること、すなわち、虚無に戻ることを恐れて子どもは泣くわけです。

### 第三の身体の例——「もう、ごちそうさましなさい」って言うて

第二の例は、発達心理学の専門書にも紹介されている例ですが、私自身、長男が三〜四歳のころに経験した事例でもあります。三〜四歳くらいになると、自分でスプーンを持って食事をできるようになりますが、なかなかテキパキとは食事をしてくれません。スプーンでご飯やお汁をかき混ぜたり、遊んでいるのか食事をしているのかわかりません。きちんと食べるよう何度か注意しましたが、なかなか言うことを聞きません。そうこうするうちに、とうに食事が終わった私は、テーブルを離れて新聞を読みはじめました。妻も、つきあいきれず、皿洗いを始めました。そのときのことです。

「お母さん、「もう、ごちそうさましなさい」って言うて——実に不思議な言葉でした。何をすればよいかわかつているのです。あまりの不思議さに妻の方を見ると、妻もポカンとした顔をしていました。でも、子どもが、そう頼んでいるのですから、「もう、ごちそうさましなさい」と言いました。すると、どうでしょう。子どもは、またたく間に「ごちそうさま」できたのです。

食事をめぐる規範は、昼間は不在で帰宅も遅くなりがちな父親ではなく、母親と子どもの溶けあいを通じて生成されたようです。そして、その規範を指定する第三の身体も、母親にオーバーラップしたようです。したがって、食事に関するかぎり、母親の声は、たんなる母親の声ではなく、第三の身体の声なのです。第三の身体の声を聞くとき、子どもに規範の効力が及び、「ごちそうさまする」という想定

可能な行為を実行できるのです。

以上、小さな子どもの例を二つ紹介しましたが、大人でも同じです。ただ、大人の場合は、子どもとは比較にならないほど多くの規範の作用圏に身を置いていきます。また、それらの規範は、あとで述べるように、一般化され、第三の身体が特定の身体にオーバーラップしなくなっています。それでも、たとえば、仕事をしていた、「あつ、ここはこういうふうにはやらなくては」「ここに注意しなくては」などと思つたとき、過去にそのことを教えてくれた人（上司、先輩、先生など）の顔が浮かんだり、その人の声が聞こえるように感じたことではないでしょうか。もしそうだとしたら、頭に浮かんだ人には、第三の身体がオーバーラップしているのです。

規範と意味には、無限性と論理的先行性という重要な性質があります。この二つの性質をまとめて、（規範と意味の）理念性と呼びます。これについては、本章末尾のコラム7-1をご覧ください。

### 自己言及

以上、身体の溶けあいから原初的な規範が生成されるプロセスを説明してきました。では、原初的規範（あるいは、原初的な第三の身体）は、その後どのような道のりを歩むのでしょうか。

身体の溶けあいの中の経験（各身体に共通の経験）から想定可能な行為の集合が生成されるプロセスは、「自己言及」という構造をなしています。自己言及というと難解な言葉に聞こえますが、そんなことはありません。わかりやすく説明しましょう。

ここに、ある特定の状況で私が発言してもおかしくないセリフの集合（無限集合）があるとします。「おはよう」「いい天気だね」等々、無限のセリフが、その集合に含まれています。問題となるのは、

「私の言うセリフは全部本当だ」「私の言うセリフは全部ウソだ」といったセリフです。これらのセリフも、セリフの集合に含まれる一つのセリフには違いないのですが、セリフの集合全体に言及しているという特徴があります。個々のセリフから見れば、セリフの集合全体に言及するということは、自分もその集合の要素なので、結果的に自分自身（自己）に言及することになります——それで、自己言及と呼ばれます。まとめておきますと、自己言及とは、みずからも要素である集合全体に言及するセリフです。

わかりやすいので、「私の言うセリフは全部ウソだ」という自己言及のセリフから始めましょう。これは、「ウソつきのパラドックス」として有名です。「私の言うセリフは全部ウソだ」と言っているわけですから、それを信じることにしましょう——「この人はウソつきだ」と。ということは、セリフの集合に含まれているセリフは、ことごとくウソということですが、そうであれば、「私の言うセリフは全部ウソだ」というセリフも、ウソのはずです。その人は、本当は、「私はウソつきではない」と言っていることになり、さして、この人は、はたしてウソつきか正直者か、わからなくなってしまう。――「私の言うセリフは全部本当だ」というセリフも同じです。かえって、「本当である」などと言われると、「なぜ、そんなことを言うのだろう。ひよつとして……」と、「本当ではない」可能性を考えてしまいます。またまた「本当に、本当なのかな？」となり、本当である可能性と本当ではない可能性の両方が生じてしまいます。

以上述べたように、自己言及のセリフは両義的になってしまいます。「私の言うセリフは全部ウソだ」というセリフは、「自分はウソつきだ」と言っているようでもあり、同時に、「自分はウソつきではない（自分は正直者だ）」と言っているようでもあります。このように、自己言及のセリフ「Aである」は、



Aでもあり、同時に、非Aでもあるという両義性をもつことになります。

## 両義性

ここで、身体の溶けあいと規範の関係に戻しましょう。溶けあいの中の経験は、たんなる経験ではなく、規範を生成します。前に、子どもの野球を例に述べたように、経験と規範生成は同時です。ということは、溶けあいの中の経験は、その経験をも一要素とする（想定可能な行為の）無限集合を生成するということです。溶けあいの中の経験が（想定可能な行為の）無限集合を生成するということは、溶けあいの中の経験が、その経験をも含む無限集合に言及する（想定可能な行為群の無限集合に言及する）ということなのです。つまり、溶けあいの中の経験が規範を生成するというプロセスは、自己言及の構造になっているのです。

したがって、溶けあいの中の経験は、ことごとく両義的ということになります。目の前のバラはいい香りがすると同時に、いい香りではない、きれいなピンクであると同時にそうではない、ということになります。注意してください。私たちは、判断や認識に問題を抱えた人の話をしているのではなく、規範（意味）の一般的な生成プロセスの話をしているのです。規範が、身体の溶けあいから生成されるとするならば、両義性は不可避の宿命なのです。

このように、身体の溶けあいから規範が生成されると考えるかぎり、経験の両義性は不可避の宿命です。しかし、私たちは、判断がつかかねる事態もあるにせよ、大方はほぼ一義的な世界に生きています。現前する物体が本であると同時に本ではないといった両義性には、ほとんど直面しません。ほぼ一義的な世界に生きることができるということは、両義性が隠蔽されているからです。では、どのようにして、

両義性が隠蔽され、ほぼ一義的な世界が現前するようになるのでしようか。その問いには、以下、原初的な規範が生成されたあと、どのような道のりを歩むのかを説明する中で答えます。

## (2) 規範の発達

### 崩壊か発達か

原初的な規範の作用圏は、溶けあつてその規範を生成した身体だけを含む小さな作用圏です。それだけに、その作用圏は、作用圏には属さない身体と頻繁に遭遇します。作用圏に属さない身体とは、想定可能な行為の集合を異にする違和的な身体です。違和的な身体が近くに存在しても何の接触も起こらないという場合もあります。しかし、違和的な身体となんらかの接触が生じた場合、何が起こるのでしようか。

二つの可能性があります。一つは、想定可能ではない行為を平気で行なう違和的な身体との接触によって、作用圏が崩壊する可能性です。もう一つは、違和的な身体と、作用圏の中の身体の間に溶けあいが生じ、違和的な身体が作用圏に包摂されてしまう可能性です。違和的な身体が作用圏に包摂されれば、その分だけ作用圏は大きくなります。これが、規範の発達です。違和的な身体との遭遇によって、規範の作用圏は崩壊か発達かという岐路に立つわけです。

もっと劇的な状況は、他の作用圏との接触です。異なる作用圏が近くに存在しても何の接触も生じないかもしれません。しかし、異なる作用圏が接触すると、双方の作用圏とも、崩壊か発達かの岐路に立たされます。崩壊の場合については言えば、どちらか一方だけが崩壊するという場合もあるでしょうし、

両方とも崩壊する場合もあるでしょう。では、発達の場合は？

### 規範の伝達

異なる作用圏の一方から他方へと、規範が伝達される場合もあります。作用圏Aから作用圏Bへと規範が伝達されるとしましょう。

規範の伝達といっても、規範は見えもしませんし、手に持って伝達することなどできません。何か媒体が必要で、規範を色濃く反映する媒体が、作用圏Aから作用圏Bへと伝達されることによって、Aの規範がBに伝達されるのです。

規範伝達の媒体には、三種類あります。第一の媒体は身体です。Aの規範を反映する特定の身体がAからBに伝達されるという場合です。その例は、外国人の社長のもとで再生した企業や、民間人をトップに起用して体質転換をなした公的機関などに見ることができます。外国人の社長にしても、民間出身のトップにしても、以前は外国企業や民間企業の規範の作用圏にいたはずで、表面的には、外国人の社長や民間出身のトップの個人的な影響に見えますが、そうではありません。それらの身体によって、作用圏から作用圏へと規範が伝達されたのです。

このような例ほど顕著ではないにしても、一般的に、新しいメンバーの集団への参入は、集団の規範になんらかの変化をもたらすことが多いようです。通常、このような変化が生じて、新しいメンバーが個人として与えた影響のように受け取られますが、実際には、そのメンバーの何がしか新鮮な行為は、そのメンバーが過去に所屬していた集団では想定可能な行為だったはずで、したがって、新しいメンバーによる集団の変化も、そのメンバーの身体を媒体とした規範の伝達と捉えるべきでしょう。

第二に、規範を象徴する事物も、規範伝達の媒体になることができます。たとえば、パソコンなど使ったことのない職場にパソコンが導入されたとしましょう。この場合、パソコンという事物は、それまでの職場にはなかったパソコンをめぐる規範を伝達します。職場のコミュニケーション、データの管理、はては昼体みの過ごし方まで、さまざまな行為が変化するかもしれません。それらの行為は、その職場では新しく生じた行為でしょうが、以前からパソコンを使っていた人々の間では、すでに想定可能な行為だったのです。

第三に、規範を象徴する言葉も、規範伝達の媒体になります。今度、病院に行くことがあったとき、患者であるあなたが、医師、看護師、事務の人たちからどのように呼ばれているか、耳をそばだててみてください。多くの病院では、あなたは、「患者様」と呼ばれています。おそらく、どこかの病院で、このような様づけが始まり、他の病院に次から次へと伝達されていったのでしょう。「患者様」という言語表現は、「患者」という呼び捨てはもちろん、「患者さん」という「さん」づけでも想定できないレベルの患者尊重の行為を想定可能にします。

### 交換との違い

前項で述べた三種類の媒体による規範の伝達は、交換（不等価交換を含む）とは違う点に注意してください。交換が行なわれるには、交換をする双方がすでに同じ規範を共有していることが必要です。たとえば、店で本を買う場合、本と代金が交換されます。その場合には、まずもって本が商品であることがすでに想定されています。さらに、売る側にも買う側にも共通する尺度（金銭価値のものさし）が共有されています。本と代金は、その尺度の同じ点にプロットされます。もし、古本を高く売りつけられたよ

うな不等価交換では、古本と代金が尺度上の異なる点にプロットされます。しかし、その場合にも、古本が商品であること、また、金銭価値の尺度は両者に共有されています。

金銭を使わない交換もあります。あなたが駅の階段を歩いているとき、すぐ前を歩いていた老人がつまりずいて転んだとします。あなたは、その老人に駆け寄り、手を取って起こしてあげたとします。老人は、「ありがとう」と嬉しそうにお礼を言ってくれました。これは等価交換です。金銭的尺度のように数値で表現するのは困難ですが、やはり、両者には行動の好みしさの尺度が共有されています。あなたのとった行動と老人のお礼の言葉は、その尺度のほぼ同じ点にプロットされています。ところが、せっかく起こしてあげたにもかかわらず、「何をよけいなことを」と言わんばかりに老人が立ち去ったとしましょう。この場合は、不等価交換です。あなたのとった行動と老人の反応は、異なる点にプロットされています。しかし、ふたたび重要なのは、両者に同じ尺度が共有されているということです。

規範の伝達は、まったく違います。三種類の媒体のどれが使用されようとも、媒体は伝達する側の規範を色濃く反映していますが、伝達される側にとっては無関係なものです。伝達される側は、その媒体にまったく関心を示さないかもしれません。伝達に使用される媒体をプロットする共通の尺度など存在していません。規範の伝達は、私たちが日常生活で慣れ親しんでいる交換とは違いますので、理解しづらいところです。

交換が、等価交換であれ不等価交換であれ、両方向的であるのに対して、規範の伝達は「一方的」です。媒体の与え手が、「これを受け取ってくれるかな」「これをもらったら喜んでくれるかな」などと考えたなら、これは交換です。また、受け手が、「ありがとう」と答えたら、これまた交換です。

与え手は、相手が関心を示すか、受け取ってくれるかなと考えず、「ここに置きたいから置く。あと

のことは知ったことじゃない」とばかりに媒体を置き去りにする。受け手は、「これはいい。俺のものだ」と、与え手への感謝などなしに我が物にする。これが、一方的伝達です。このような与え手の姿勢は、相手のことなど考えない贈与、受け手の姿勢は略奪と呼んでもよいでしょう。媒体の一方的伝達は、贈与と略奪の組み合わせなのです。勝手に置き去ること（贈与）と勝手に奪い取ること（略奪）が両方とも実現するなど、あらかじめ保証されるようなことではありません。吉と出るか凶と出るかの一発勝負、このイメージに近いでしょう。

### 規範伝達の効果

作用圏AからBへと媒体の一方的伝達が起こると、媒体に担われた規範がAからBに伝達されます。そうすると、図7-1のように、作用圏Bが、作用圏Aの一部に繰り込まれます。作用圏Aは大きくなり、作用圏Bの身体たちも包含するようになります。一方、作用圏Bの身体たちは、以前と同じ規範に従う行為を継続したとしても、その行為はAの規範に従う行為にもなっています。規範と意味は表裏一体でした。作用圏Bの身体たちの行為が、Aの規範にも従うようになったということは、Bの身体たちの継続している行為が、Aの規範と表裏一体の新しい意味を獲得したということです。このように、媒体の一方的伝達は、伝達された作用圏に新しい規範のインパクトを刻み込みます。それに対して、交換は、その場かぎりです。あとにインパクトを残しません。

規範の伝達は、伝達した側にもインパクトを残します。伝達以前は、Aの規範は、その作用圏の身体たちにのみ想定可能な行為の集合を指定していました。しかし、規範が伝達されると、作用圏Aには、作用圏Bがそっくり包含されるようになります。Aの規範は、もはや作用圏Aだけではなく、作用圏B

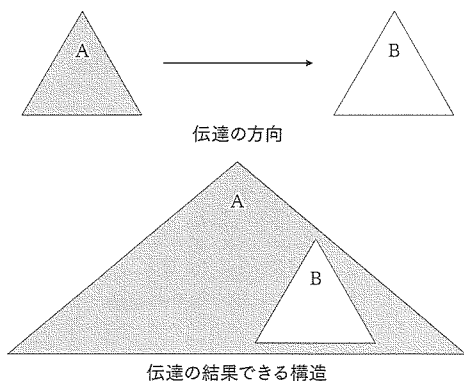


図 7-1 規範の伝達

の身体たちにも想定可能な行為を指定するようになったわけです。そうであれば、Aの規範は、作用圏Aだけの規範であったときよりも、より一般的な規範にならねばなりません。少なくとも、作用圏Bの身体たちにも通用するよう一般的な規範にならねばなりません。

規範の伝達について上に述べたことは、具体例がないと理解するのが困難です。本章末尾のコラム7-2には、私が、ある過疎地域の活性化運動の中で経験した事例を紹介しています。次に進む前に、ぜひ読んでください。

#### 規範伝達の連鎖

純粹な一方的伝達は、捨てるがごとくの贈与と、贈与側には無関心の略奪の組み合わせ（カップリング）です。このような純粹な一方的伝達は、不可能ではありませんが、非常に起こりにくいものです。贈与側と略奪側が対面し、少なくとも贈与と略奪の可能性だけは確認する——このような対面状況がないと、一方的伝達は稀にしか生じません。

しかし、対面状況には、どうしても交換の要素が混入してしまいます。「ここに置いておくから受け取ってくれ」「わかった」——たとえば、このようなセリフの交換（あるいは目配せ）が対面状況ではなされてしまいます。あるいは、「たしかに受け取ったよ」「わかった」といった言語的・非言語的な交換が

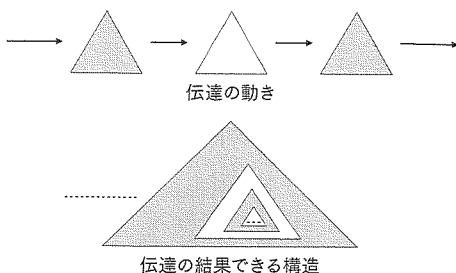


図 7-2 一方的伝達の連鎖

混入してしまいます。これでは、純粹な贈与と略奪にはなりません。

では、どうなれば純粹な一方的伝達が実現するのでしょうか。それは、一方的伝達の連鎖が長くなることによって実現されます。つまり、作用圏 A から B へ、B から C へ、C から D へ、——と一方的伝達が次から次へとなされることです。こうなると、作用圏の入れ子構造は、図 7-2 のようになります。ある作用圏に着目すれば、かりに一方的伝達の連鎖に組み込まれる前と同じ行為をしていたとしても、その行為は、みずからに先立って連鎖に組み込まれていた作用圏の規範にも従っていることになります。また、みずからのあとに連鎖に組み込まれた作用圏には、みずからの規範の効力を及ぼすことになりません。

伝達の連鎖が長大化すると、直前の作用圏の身体、あるいは、直後の作用圏の身体と対面し、交換の要素が混入しても、もはや問題ではなく作用圏に伝達される規範は、はるかあなたの作用圏から伝達されてきたものだからです。直前の作用圏の身体は、かあなたから来た規範を、たまたまみずからの作用圏に手渡したにすぎません。したがって、直前の作用圏の身体との間に少々交換がなされようとも、そんなことは取るに足らないことです。同様に、次の作用圏への伝達は、はるかあなたに向かつての伝達です。直後の作用圏の身体は、はるか向こうに向かつて送り出す規範を、たまたま手渡す相手というだけのことです。したがって、直後の作用圏の身体との間に少々交換がなされようとも、そんなことは取るに足らないことです。このように、規範伝達の連鎖が長大化すると、直前・直後の作用圏との身体と交換がなされて



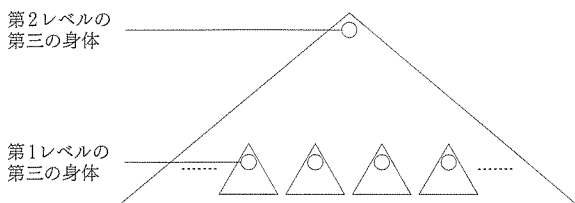


図 7-3 第三の身体の二層構造

も、それは問題にはならなくなります。直前・直後との交換が、「非問題化」されてしまうと云ってもよいでしょう。

### 第二レベルの第三の身体

規範伝達の連鎖が長大化すると、ふたたび、第三の身体が生成されます。先に、身体の溶けあいから第三の身体が生成されることを述べました。その溶けあいから生成される第三の身体を、「第一レベルの第三の身体」と呼ぶならば、今度は、「第二レベルの第三の身体」が生成されるのです。

第一レベルの第三の身体は、溶けあう身体の共通経験を代表しつつも、溶けあう身体のいづれとも異なる身体でした。今回も同じです。伝達の連鎖を代表しつつも、連鎖に含まれる作用圏の第三の身体（第一レベルの第三の身体）のいづれとも異なる第三の身体が生成されるのです。その第三の身体は、伝達の連鎖全体を代表するわけですから、伝達の連鎖の主ぬしのようなものです。はるかかなたからやってくる規範——そのはるかかなたにあつて、そこから連鎖が開始されたかのような第三の身体。はるか向こうに伝わっていく規範——そのはるか向こうにあつて、そこで連鎖が終了するかのような第三の身体。第二レベルの第三の身体は、そのような連鎖の始点でもあり、終点でもあるかのような身体として生成されるのです。

第二レベルの第三の身体が生成されると、全体としては、図 7-3 のような

二層構造になります。ちょうど、二層の管理体制になっている組織のようなものです。末端の溶けあう身体は、直属上司（たとえば、課長）である第一レベルの第三の身体の作用圏にあります。しかし、第一レベルの第三の身体たち（課長たち）は、第二レベルの第三の身体（部長）の作用圏にありますから、末端の身体たちは、第二レベルの第三の身体の大きな作用圏にも身を置いています。

以上、「(1)身体の溶けあい↓(2)第一レベルの第三の身体↓(3)伝達の連鎖の長大化↓(4)第二レベルの第三の身体」という規範の発達プロセスを述べてきました。注意していただきたいのは、「(1)を卒業して(2)に進む」のではないということです。(2)に至るということは、「(1)でありつつ、(2)の第三の身体の声をも聞くようになる」ということです。同様に、「(4)にまで至るということは、「(1)でありつつ、(2)の第三の身体の声をも聞き、加えて、(4)の第三の身体の声をも聞くようになる」ということです。

現実の社会では、(1)から(4)へと単純に進むだけではなく、大小さまざまな作用圏が、伝達の連鎖によって複雑に結びついていきます。連鎖の複雑化をもたらすプロセスは二つに大別できます。

### 伝達の連鎖の複雑化(その一)

第一は、図7-2のように、(3)の伝達の連鎖が長大化していく過程で、連鎖のあとに登場した作用圏から先に登場した作用圏へと規範が伝達される場合です。作用圏Aから作用圏Bへ、作用圏Bから作用圏Cへと規範が伝達されることにより、作用圏Aの中にBが包含され、さらにBの中にCが包含される構造ができます。ここで、CからAへと規範が伝達されたらどうなるでしょうか。作用圏Cは、B、そしてAにも包含されていますから、Cの規範はBの規範、そしてAの規範をも前提にした規範になります。そのCの規範がAに伝達されるというケースです。こうなると、もう、図7-1や図7-2のよ

うな単純な図では表現できません。

例をあげましょう。すでに紹介した本章末尾のコラム7-2を使います——ある過疎地域で、従前からの地域体質を打破しようとした二人のリーダーが、その地域でもっとも山奥にある集落にログハウスを建設し、集落住民に無償譲渡した事例です。集落住民は、ログハウスを総事として、しかも従来の総事とは違って集落の外部に開かれた総事として運営しはじめました。つまり、集落住民は「新しい総事」としてログハウスを運営したのです。

この事例には少し続きがあります。実は、集落住民が始めた「新しい総事」が、二人のリーダーが運動を進める上での大きなヒントとなったのです。「そうか、まったく新しいことを、まったく新しいスタイルで始める必要はないのだ。従来のスタイル（総事）に新しい精神を吹き込めばよいのだ」というヒントです。

以上を、規範伝達の連鎖という観点で整理してみましょう。まず、ログハウスという媒体によって、二人のリーダーから村長へ、そして、村長から集落住民へと新しい規範が伝達されました。さらに、その新しい規範に組み込まれた集落住民が開始したログハウス運営方法が、二人のリーダーへと伝達されたのです。

### 伝達の連鎖の複雑化（その二）

規範伝達の連鎖が複雑化する第二のプロセスは、第二レベルの第三の身体的作用圏に包含される第一レベル的作用圏から、第二レベル的作用圏へと規範が伝達される場合です。この場合も、包含されている作用圏（第一レベル的作用圏）が、それを包含している作用圏（第二レベル的作用圏）を包含するように

なるわけですから、単純な図解はできなくなつてしまします。

今度は、ある程度大きな組織を例に説明しましょう。大きな組織になると、部署ごとに独特の規範が形成されるとともに、ある部署から他の部署へと規範の伝達がなされています。また、部署レベルの規範は、組織の上層部を第二レベルの第三の身体とする大きな作用圏に包含されています。

企業組織では、「水平展開」という言葉がよく使用されます。ある部署で行なわれている望ましい活動を他の部署にも取り入れていくこと、つまり、他の部署へと展開していくことです。たしかに、同じ階層レベルにある部署から部署への展開ですから「水平」展開ではあるのですが、実態はそうではありません。実態は、まず、全社的に取り組んでいる目標があり、その目標をうまく実現している部署があるときに、それを上層部が他の部署にも取り入れるよう働きかけるのです。したがって、まずは、新しい活動を開始した部署から上層部へと規範が伝達されなければ、水平展開はありません。言葉を換えれば、第一レベルの作用圏（新しい活動を開始した部署）から第二レベルの作用圏（上層部）へと規範が伝達されているのです。

第一レベルの作用圏から、その作用圏を包含する第二レベルの作用圏とは別の作用圏の上層部（第二レベルの作用圏）へと規範が伝達される場合もあります。ある地域（第二レベルの作用圏）の中のある集落（第一レベルの作用圏）で行なわれている活動が、ふとしたきっかけで、遠く離れた地域の上層部（第二レベルの作用圏）に影響を与えるのは、その例です。さらに、異なる第二レベルの作用圏に属する第一レベルの作用圏の間で、規範が伝達されることもあるでしょう。

## 隠蔽される両義性

以上、規範伝達の連鎖を複雑にするプロセスを説明しました。現実の社会では、直線的な規範伝達と同時に、直線的な流れを逆行する方向での規範伝達も行なわれます。また、第二レベルの第三の身体が、第一レベルの第三の身体の声を規定すると同時に、第一レベルの第三の身体が第二レベルの第三の身体を規定する場合もあります。このような規範伝達経路の複雑化と規定関係の複雑化によって、作用圏の包含関係も複雑な構造になっていきます。

作用圏の包含関係が複雑な構造になるということは、規範相互の依存関係が複雑になるということです。平たく言えば、多くの規範が「持ちつ持たれつ」の関係になり、ある規範だけが勝手に動きたくても動きにくくなるということです。それによって、規範の両義性（Aと非Aの間をぶれる動き）も押さえ込まれてしまいます。こうして、第一レベルの規範では顕在的であつた両義性が、次第に隠蔽されていくのです。

第2章第4節で述べた「かや」の多層的重複構造を思い出してください。以上は、規範の「かや」の多層的重複構造ができるプロセスです。

## コミュニケーション

社会をコミュニケーションのシステムとして捉えるとしたら、そこに言うコミュニケーションは、決して個人から個人への情報伝達でもなければ、集団から集団への情報伝達でもありません。情報伝達は、コンピュータのような機械がやることであり、人間や集団がやることではありません。

そもそもコミュニケーションとは、その字義どおり、コミュ（共同性）をつくることです。規範理論

の概念を使うならば、共同的に第三の身体の作用圏を生成し、その作用圏に身を置くことが、コミュニケーションです。そう考えるならば、人間や集団のコミュニケーションとは、次のいずれか、あるいは、それらの組み合わせです。

(1) 身体の溶けあい 頻繁かつ濃密に他の身体になるわけですから、これほど直接的なコミュニケーションはありませぬ。

(2) 第三の身体の生成 第三の身体の作用圏に入ることによつて、共通の事実認識（である規範）と価値認識（べし規範）を共有するようになります。事実認識や価値認識の共有は、それらの認識が人から人へと伝わることによつて達成されるではありません。人々が、同じ作用圏の中に「浸る」ことによつて達成されるのです。

(3) 作用圏から他の作用圏への規範伝達 いかにも外部から来た個人が集団に与えた影響のように見えても、そうではありません。その個人は、他の作用圏から来たのであり、その作用圏の規範を伝達したのです。

### 3 「肉体に内蔵された心」の形成メカニズム

#### 作用圏の拡大による効果

では、幸い、作用圏が順調に拡大した場合、どのようなことが生じるのでしょうか。第一に、作用圏が拡大するにつれて、「身体がいつでもどこでも作用圏の内にある」という状況に近づいていきます。

第二に、拡大した作用圏に含まれる多くのかつ多様な身体に規範が通用するためには、規範の内容が、特殊なものから一般的なものへと変化しなければなりません。第三に、作用圏の拡大に伴い、第三の身体は、先に母子関係で見たような個別の身体とのオーバーラップを減じ、不可視の身体になっていきます。以上の三つを総合すれば、作用圏の拡大に伴い、「不可視の第三の身体が、いつでもどこでも（個別の）身体を視野に入れ、規範の声を発してくる」という状況に近づいていくこととなります。

くどいようですが、もう一度、繰り返します——作用圏の拡大に伴い、「不可視の第三の身体が、いつでもどこでも（個別の）身体を視野に入れ、規範の声を発してくる」という状況に近づいていきます。実は、これを踏まえれば、心（＝肉体に内蔵された心）の観念がいかにして成立するかを説明できるので

す。ただし、ひと口に心の観念と言っても、二つのレベルを区別しておく必要があります。第一は、成育史の過程で形成される心の観念です。これは、「わが身の中にわが心が宿る」という場合の心に相当します。これは、おそらく、太古の昔から人間が有していた心の観念でしょう。一方、第二は、歴史的過程で形成された心の観念です。具体的には、近代と言われる歴史段階を迎え、個人主義が成立するとともに形成された「判断や思考の重要な座」としての心の観念です。明治初期の日本には、この種の心の観念が希薄であったことは、すでに述べたとおりです（第2章二頁）。

#### 「胸ポケットの第三の身体」効果——成育史レベル

まず、成育史の過程で形成される心の観念から、話を始めましょう。養育者と乳幼児の間では、日々、さまざまな出来事をめぐって身体の溶けあいが生じ、そこから数多くの規範が生成されます。また、そ

これらの規範が帰属する第三の身体の一つひとつは、いまだ原初的な段階にあり、ほとんどは養育者という個別の身体にオーバラップします。

しかし、とりわけ乳幼児が生きていくために必須の行為をめぐる規範は、突出的に作用圏を拡大します。たとえば、食物の摂取、排泄、危険回避をめぐる行為などは、それに当たります。このような行為をめぐることは、その重要性のゆえに養育者はより敏感に子どもに反応し、濃密な溶けあいが頻繁に生じます。その濃密かつ頻繁な溶けあいは、形成された規範の作用圏を拡大し、前述の「不可視の第三の身体が、いつでもどこでも（個別の）身体を視野に入れ、規範の声を発してくる」という状況をつくりだしていきます。

心（成育史レベルの心）の概念は、この状況がもつ「効果」です。すなわち、いつでもどこでも規範の声が聞こえてくるということは、事実上、第三の身体を胸ポケットに入れて歩いているようなものです。これは、胸ポケットから規範の音が聞こえてくるような事態です。ちょうど、小さな音楽再生機を胸ポケットに入れて歩いている感じですか。どうでしょうか。胸ポケットから、もう数センチほど胸の内側に入ったところから聞こえる声。それが、心です。心の声に従って動くとは、このような事態なのです。

しかし、その声は、まだ乳幼児が生きていく上で必須の規範の声に限定されています。胸ポケットの第三の身体の声（規範の声）は、いつでもどこでも聞こえてきますが、その声は、「何についてでも」あてはまる声ではありません。この限定がかなりの程度除去され、「いつでもどこでも、何についてでもあてはまる声」になった効果が、次に述べる歴史レベルの心の観念です。



### 「胸ポケットの第三の身体」効果——歴史レベル

近代という時代は、政治、経済、宗教、教育など重要な社会的領域において、それまでの村落や小都市を超えて、国家という広範な空間を作用圏にもつ規範が形成された時代です。そうになると、先に述べた「胸ポケットの第三の身体」効果は、政治的な判断、経済的な判断、宗教的な判断など、広範囲に現れるようになります。つまり、胸ポケットの第三の身体の声は、あらゆることについて、いつでもどこでも規範の声を発してくるようになったのです。

こうなると、「胸ポケットの第三の身体」効果は絶大です。心は、社会的に重要な判断や思考がなされる座としての格別の地位を獲得したのです。この判断や思考の座こそ、歴史レベルの心の観念です。近代で成立した個人主義とは、このような心（頭）の思考・判断で動くという人間像、さらには、人間は（社会や周囲の人間に流されるのではなく）みずからの心（頭）の思考・判断によって動くべしとする倫理観のことです。

私たちは、多くの「かや」に包まれています。その中には、成育史レベルの心を自明とする「かや」も、また、歴史レベルの心を自明とする「かや」も含まれています。したがって、「かや」に包まれているがゆえに遂行した行為も、「みずからの心が欲したから行なった行為」「みずからそうすべきだと判断したから行なった行為」として現前するのです。

以上、「肉体に内蔵された心」の起源を説明しました。この説明は、第2章から持ち越した「宿題」でした。では、第三の身体（規範）は、このまま無限に発達しつづけるのでしょうか。この問題に進む前に、従来から使われてきた概念について再考しておきましょう。一つは、集団主義・個人主義というおなじみの概念、もう一つは、個体という概念について再考してみます。

従来の社会心理学では、集團主義も個人主義も、「肉体に内蔵された心」でなされる思考や判断で定義してきました。すなわち、「肉体に内蔵された心」で、他者のことを配慮しながら行動するのが集團主義、「肉体に内蔵された心」で、その心の思考や判断を他者よりも優先させて行動するのが個人主義と定義してきました。しかし、その定義が、そもそも「肉体に内蔵された心」という固定観念に縛られた定義であることは、読者にはもうあきらかでしょう。

本章で紹介した規範理論に基づき、集團主義、個人主義という概念を定義し直してみましよう。個人主義は、社会的規模において第三の身体が（ほぼ）極限にまで発達した状態、つまり、「胸ポケットの第三の身体」効果が強化され、「肉体に内蔵された心」の観念が重要視されるようになった状態で成立します。そのような状態に至った社会での人間観（人間というものの現前）が、個人主義です。

一方、集團主義は、第三の身体が、その作用圏を企業、コミュニティといった小規模な社会空間にとどめ、したがって、かなりの可視性（特定人物とのオーバーラップ）を残存させた状態で成立します。そのような状態では、「胸ポケットの第三の身体」効果もマイルドなレベルにとどまり、「肉体に内蔵された心」もマイルドにしか重要視されません。その代わりに、第三の身体をオーバーラップさせた特定人物、たとえば、指導者がどう動くかとか、指導者の下にいる大勢の仲間がどう動くかが、みずからの行動を決する判断基準になります。

以上のように、個人主義と集團主義を定義すると、集團主義は、個人主義に向かって社会の規範が発達する、その途上にある段階、すなわち、個人主義にはまだ至っていない未熟な段階のように思われるかもしれません。しかし、それは違います。規範の発達も、人間の発達と同じです。単純に、発達すれ

ばよい（歳を取ればよい）というものではありません。子どもには子どもの良さや悪さがあります。壮年も中年も高齢者も同じです。

また、次項以降で述べるように、個人主義への動きは大きな転換点を迎えています。個人主義は、身体の溶けあいによる原初的な第三の身体の生成へと回帰しつつあります。もし、そうだとしたら、集団主義は、案外、一周遅れのトップランナーになるかもしれません。

### 「個体」概念の整理

ここで、「個体」という概念について整理しておきましょう。今まで直接的には触れていませんが、生物レベルの個体を無視するわけにはいきません。言うまでもなく、Aさんの病気や死は、Bさんの病気や死とは違います。生物レベルの個体は、物理的集合性を構成する重要な要素です。しかし、生物レベルの個体しか考えないと、人間の認識や行為の原因を個体内部のメカニズムに求める結果になってしまいます。第2章（三五頁）で述べたように、人間コンピュータの内部で行なわれる情報処理にのみ原因を求める結果になってしまいます。とくに人間の社会的行為を理解しようとするれば、生物レベルの個体だけではどうにもなりません。

生物レベルの個体の上に、上で述べた成育史レベルの「心を内蔵した肉体」という個体を考えることができます。しかし、これは社会的産物です。養育者と子どもという、いかに小さな集合体であろうとも、「社会的」です。その小さな集合体で形成される規範の発達によって、「心を内蔵した肉体」という個体の観念が形成されます。

さらに、その上に、歴史レベルの「心を内蔵した肉体」という個体の観念が生まれました。これは、

歴史的産物です。近代という時代になって顕著になった個人主義の「個人」です。

以上のように、個体としての人間を理解するには、三つのレベルから捉えることが必要です。すべてを生物レベルに還元してしまうことは不可能です。動物として個体であることが、そのまま「心を内蔵した肉体」を保証するものではありません。成育史レベル、歴史レベルでの理解が必要です。

子育ての基本が変わらないかぎり、成育史レベルの個体の観念に大きな変化は生じないでしょう。しかし、歴史レベルの個体については、すでに弱体化の兆しを見ることができません。ポストモダン（ポスト近代）という言葉が流布していることが示すように、近代とともに成立した個人主義に言う個人（個体）の観念は、次第に、その内容を変えつつあるようです。それは、個人主義が歴史の産物であることの当然の帰結でもあります。近代という時代が終わり、ポスト近代という新しい時代に突入すれば、個人の観念にも変化が生じるのは当然です。本章の最後に、この問題を取り上げましょう。

#### 規範発達のゆくえ

規範の発達はどこまで行くのでしょうか。規範の一般化、作用圏の拡大、第三の身体の不可視化はどこまで進むのでしょうか。

「いい湯加減の原理」というのがあります。温度が三〇度の風呂はほとんど水風呂です。夏ならともかく、冬だと風邪をひくだけ。三五度。まだまだぬるい。三七、三八度、ぬるめの湯が好きなら、いい湯加減です。四〇度、熱めの湯が好きなら、いい湯加減です。では、五〇度では？ 六〇度では？ これでは、火傷しそうで、入れたものではありません。では、七〇度では？ もうほとんど釜ゆです。三〇度から四〇度までは熱くなるほど心地よくなりますが、いい湯加減を超えると、心地よい

風呂が、殺人の道具へと性質を一変させてしまします。

ある閾値（いい湯加減）を超えると性質が一変するという原理は、規範の発達にもあてはまります。たとえば、「よく生きよ」という規範は、非常に一般的であり、広範な人々にあてはまります。また、何についてもあてはまります。では、だれかがナイフをあなたに向けたとき、「よく生きよ」という規範の声が開こえたとして、あなたはどうかしらよいのでしょうか。逃げるべきか、立ち向かうべきか、あるいは、刺されるに任せるべきか。「よく生きよ」という過度に一般化された規範は、たしかに作用圏こそ広大かもしれませんが、もはや、具体的な状況でとるべき行為を何も指示してくれません。つまり、閾値を超えて発達した規範は、想定可能な行為群を指定するという規範本来の機能を失ってしまうのです。

では、規範が閾値を超えて一般化し、本来の機能を失ってしまったら、どうなるのでしょうか。そこは、もう、振り出しに戻るかありません。つまり、ふたたび、身体の溶けあいを通じて原初的な規範を生成するフェーズに戻るしかありません。こうして、話は、規範形成プロセスの振り出しへと回帰していきます。

現在、交通・通信の発達によって、身体、事物、言語による規範の伝達は、ますます加速化、広域化しつつあります。それは、さまざまな規範の作用圏が、他の作用圏を飲み込み、拡大していく過程です。また、社会の複雑化によって、今までは無縁に近かった規範どうし（たとえば、経済をめぐる規範と宗教をめぐる規範）の間にも影響関係が生じ、そこでも規範の伝達が生じやすくなっています。そこには、規範の一般化、作用圏の拡大が閾値を超えて進行し、もはや規範が機能マヒに入りつつあることを示す現象が多発しています。

## 新たな溶けあいへ

振り出しに戻るといつても、すぐろくのように完全な振り出しに戻るわけではありません。今まで、個人主義を経験した歴史を消すことはできません。通信・交通技術の進歩をなかつたことにするわけにはいきません。できれば、歴史の経験を活かすかたちで、身体の溶けあいと原初的な規範生成が実現できるような社会にしていくな必要があるでしょう。

そのためには、まず、溶けあいを妨げる要因を排除していくことが必要です。固定した役割分担や、上下の落差が大きい階層構造などは、溶けあいを困難にします。より柔軟な役割構造、よりフラットな組織構造に切り替える必要があります。一九九五年の阪神・淡路大震災以来、日本社会に根づきつつあるボランティア活動には、そのような新しい動きを見て取ることができます。

また、身体の溶けあいは、たんなる溶けあいではなく、原初的な第三の身体を生成するプロセスでもあります。それは、第三の身体がオーバーラップする人物のリーダーシップの問題でもあります。発達した規範、具体的には、理念や理想を背景にしたリーダーシップと、溶けあいの中から誕生するリーダーシップは違います。溶けあうためには、上からではなく、横に寄り添いながらともに歩む、ともに走る感覚が不可欠です。リーダーがフォロワーの息づかいを共有しながら導いていく、そんなリーダーシップが必要になるのではないのでしょうか。

\*

\*

\*

本章末尾には、前章で述べた四肢構造と言語行為論を、本章で述べた規範理論に結びつける二つのコラムを加えました。コラム7-3では、四肢構造の成立を規範理論の視点から説明しています。また、コラム7-4では、前章一三六頁から持ち越した宿題、すなわち、言語行為の主体はだれなのかという

課題に対する回答を述べています。

## 規範の理念性

規範の二つの基本的性質について見ておきましょう。それらは、規範と表裏一体である意味の基本的性質でもありません。

第一の基本的性質は、無限性と言われる性質です。規範とは、想定可能な行為の無限集合であると定義しました（本章第1節）。この働きは、「この円の中の点が想定可能な行為です」と円を描くことと同じでした。円の中には無限個の点があります。これが無限性です。

しかし、これまたすでに述べたとおり、規範は、身体の溶けあいの中でどの身体にも共通する経験が結晶化して生成されるのでした。何か変です。身体の溶けあいでの経験することは、所詮、有限のはずです。その有限の経験が結晶化して、想定可能な行為の無限集合が生成されるということは、有限（の経験の集合）から無限集合が生成されるということです。どうしてこんなことが可能なのでしょう。無限性は、不思議な性質と言わざるを得ません。

第二の基本的性質は、論理的先行性という性質です。規範に従うには、行為に先立って規範が形成されていることが必要です。形成されてもいない規範に従うことなど不可能です。つまり、論理的に、規範は、行為に先行して形成されていなければなりません。

意味も同じです。「これはミカンだ」という場合、つまり、「ミカンとしてのコレ」が現前する場合には、「コレ」と遭遇する以前に「ミカン」という意味が形成されていることが必要です。論理的に、意味は、「コレ」との遭遇（経験）に先行して形成されていなければなりません。

しかし、ここで、前に述べた子どもたちの野球の例（二五〇頁）を思い出してみましょう。野球のルール（規範）は、子どもの数が増えるにつれて、時々刻々と変化していきました。子どもたちは、野球をやりながら（その瞬間々々の野球を経験しながら）、同時に、新しい規範をつくっていくのでした。

このように、経験と規範形成は同時進行のほうです。規範は、簡単に変化します。授業中にワインを楽しむ教師が出現すると、その瞬間に、ワインを飲む行為は想定可能な行為になるからです。ワインを飲む教師を目標とするという経験が生じた瞬間、規範も変化するので。つまり、現実の時間経過に沿ってみると、経験と規範形成



は同時です。しかし、論理的には、規範形成（意味形成）は経験に先行していなければなりません。論理的先行性も、不思議な性質と言わざるを得ません。

無限性と論理的先行性という不思議な性質はいずれも、規範、意味、そして、第三の身体も、実体ではなく、虚構であるということに由来しています。虚構という言葉は聞くこと、嘘つばちのことと思われるかもしれませんが、そうではありません。人間は、共同で虚構をつくり出す人間の他の動物との決定的な違いは、共同の虚構をつくることにあると言つても過言ではありません。規範、意味、第三の身体は、すべて溶けあう身体たちによつてつくられた共同の虚構に他なりません。人間は言語を使う動物だとも言われます。言語の「意味」も共同の虚構です。何かを虚構として生成することを、「擬制する」と言います。この言葉を使うならば、身体の溶けあいから、規範、意味、第三の身体が擬制されるわけです。無限性と論理的先行性は、擬制によつてつくりだされる性質です。まず、溶けあいの中の有限の経験から、想定可能な行為の無限集合、すなわち、規範が擬制されます。それと同時に、規範を指定する第三の身体も擬制されます。また、規範も第三の身体も、経験に先行して「すでに存在していた」というカモフラージュを伴つて擬制されるのです。

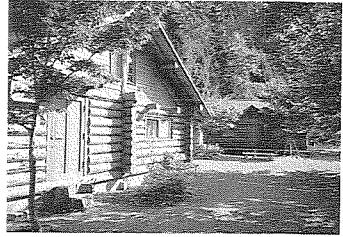
## コラム 7-2

### 規範伝達の事例

私が、ある過疎地域で見聞したことです\*。その過疎地域は、保守性、閉鎖性、有力者支配という地域体質を色濃く持つていました。その地域にあって、当時、一〇年ほど前から、二人のリーダーと三〇人ほどの仲間が結束し、そのような地域体質を打破しようとする運動を開始していました。彼らは、地域の中でもっとも山深いところにある小さな集落に、当時はまだ珍しかったログハウスを数棟建設し、レクリエーションエリアを建設するという計画を立てました。

二人のリーダーは、建設予定の集落の村長むらびとを訪ね、自分たちの計画を説明しました。しかも、ログハウスを建設したら、この集落に無償譲渡するので、それを有効活用してほしいという希望も伝えました。村長は、言い放ちました。「集落の外の人間がずかずか入ってきて、ログハウスとかいう訳のわからないものをつくるなど、とんでもない。とっとと出て行け」。

それにもかかわらず、二人のリーダーを中心とするグ



2人のリーダーから贈与されたログハウス

ループは、ひと夏を費やして、その集落のはずれにログハウスを建築しました。ログハウスの完成後、二人はふたたび、村長を訪ね、「反対されたけれども、結局、ログハウスをつくってしまいました。以前約束したように、ログハウスを無償譲渡します」と言いました。それに対して、村長は、「人が来るならもらってやるわ」。人が来るなど、想像もしなかったのです。まさに、一方的贈与でした。

ところが、多くの人が来るようになりました。しかも、町外、県外からも多くの人がレクリエーションエリアで憩うようになりました。集落の人たちは、生き生きとお客さんの世話をするようになり、自分たちで食堂施設も建設したのです。しかし、二人のリーダーに対しては、感謝の言葉はひと言もありませんでした。しかし、ここに、規範の贈与と略奪がなされたのです。

私は、その集落に行きはじめてから、集落の人たちが来客相手にやっていることは、民宿経営のようなビジネス

スだと思っていました。しかし、あるとき、たまたま集落の人が、そのレクリエーションエリアの仕事で得ている収入を知り、自分の間違いに気づきました。その額は、ビジネスと言うには、あまりにも少額でした。「彼らは何をやっているのだろう」という疑問を持って、数カ月いろいろ調べた結果、一つの言葉に出会いました。それは、「総事」という、地元の人なら皆知っている言葉でした。総事とは、集落の住民が総出でやる作業のことです。共有林の手入れ、用水路の掃除、冠婚葬祭などは総事として行なわれます。総事に出るのは義務です。総事に出ることができなければ、別途作業を割り当てられ、罰金を科せられたりします。

「ログハウスでやっていることは総事ではないか」という仮説について、先の村長に意見を聞いてみました。すると、村長は、ちよつとさびしげな表情で話してくれました。「そう、昔は、いろいろ総事があつた。しかし、若い人は集落から出て行き、年寄りばかり。もう総事をやろうにもやれなくなつた。今、総事と言えるのは、あのログハウスの運営くらいかな」。

集落の住民が、ログハウスを使ってやっていることは総事だったので。しかし、重要なことは、その総事には、旧来の総事とは決定的な違いがあることです。旧来の総事は、共有林の手入れや用水路の掃除など集落内部

の維持管理、あるいは、冠婚葬祭のような集落内部の相互扶助でした。それに対して、ログハウスを使ってやっている総事は、町外、県外からの来訪者を相手にした総事、集落の外部に開かれた総事です。ここには、二人のリーダーらがめざした目標の一つ、閉鎖性を打破するという規範を見て取ることができます。

\*第3章のコラム3-1で紹介した鳥取県智頭町です。

#### コラム 7-3

### 規範理論と四肢構造との関係

ここで、第6章で紹介した四肢構造と本章で紹介した規範理論の関係を説明しておきましょう。結論を言っておきますと、規範理論は、図6-1(第6章)のもっとも下から始まり、次第に上方へと進み、最終的に四肢構造が完成するまでのプロセスを説明しています。

規範と意味は、同じコインの二つの面でした。規範によって想定可能とされる行為にとつての、行為対象の同一性が、対象の意味でした。したがって、四肢構造の意味は規範と読みかえることができ、同時に、意味を知る人々の一人は、規範の作用圏にある身体と読みかえることができます。

規範理論によれば、規範の形成プロセスは身体の溶けあいに始まります。四肢構造の「コレ」が他の身体(他者)の場合、二つの膨張・収縮する身体は、膨張によって互いに他者の身体の部位において他者が感受するのと同じ経験を受けます。つまり、「他者になる」のです。このような「他者になる」ことが頻繁かつ濃密に生じる

状態が、身体の溶けあいでした。この状態は、図7-4上段のように、「膨張・収縮する身体」——「コレ」という関係のみの状態に対応しています。

身体の溶けあいから、原初的な第三の身体が生成されます。注意すべきは、すでに述べたとおり、身体の溶けあいの段階から第三の身体の声（規範を指定する声）を聞く段階へと移行するのではないということです。依然、身体の溶けあいを続けながら、同時に、溶けあいから生

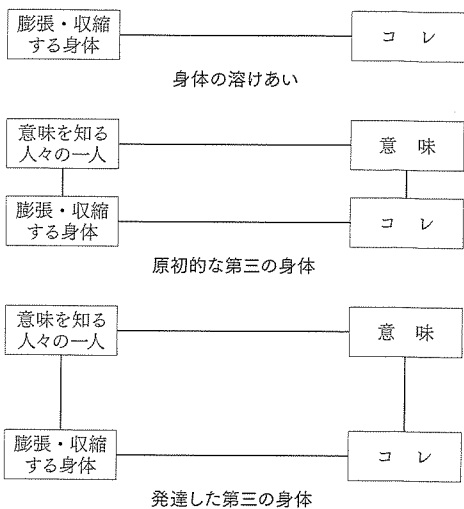


図7-4 四肢構造と規範理論の関係

成された第三の身体の声を聞くようになるのです。この状態は、図7-4中段のように、「意味を知る人々の一人」——「意味」という関係が追加された状態に対応します。

原初的な第三の身体の作用圏は狭い。したがって、この水準の四肢構造では、「意味を知る人々」の人々は限定されています。いまだ、超場所的・超時間的・普遍的という性格は、きわめて低い水準にあります。ただ、場所的・時間的・個人的な「膨張・収縮する身体」に比べれば、いかに低レベルとはいえ、超場所的・超時間的・普遍的という性格を有しています（この状態は、図7-4中段に相当します）。

本章で述べたように、原初的な規範は、その規範が通用しない身体や作用圏との遭遇により、崩壊が発達かという岐路に立ちます。もし崩壊を免れ、他の身体をみずからの作用圏に包含したり、他の作用圏に規範を伝達することができれば、規範は発達します。規範の作用圏は拡大し、規範の内容（第三の身体の声）はより一般的になります。そして、第三の身体は、個別の身体とのオーバラップを減じ、不可視の身体と化していくのです。このように規範が十分発達した状態が、図7-4下段のような四肢構造の完成形です。

## 言語行為の主体

第6章(第3節)で言語行為論を説明した最後に、言語行為の主体は「個人」心を内蔵した肉体」ではなく、「かや」であることを述べました。その主体である「かや」を、本章で説明した規範理論に基づいて説明しよう\*。

言語行為の主体は、発話者を作用圏に含む第三の身体です。「その本を取ってくれ」という言語行為は、決して、発話者の心の中の要望を表明しているのではありません。それは、発話者を作用圏に含む第三の身体の要望の声なのです。第三の身体の要望の声は、発話者の口を借りて、聞き手に規範・意味を一方向的に伝達します。しかし、聞き手は、発話者と同じ作用圏にはいません——発話者を含む作用圏の外部にいます。だから、その本を取ってくれるかもしれないし、あるいは、取ってくれないかもしれません。発話者を動かす第三の身体の声によって規範が伝達され、聞き手も同じ作用圏に繰り込まれれば、聞き手は本を取ってくれるでしょう。しかし、

規範が伝達されなければ、本を取ってはくれないでしょう。

では、もし、聞き手が、発話者が予想もしなかった不愉快な顔をしつつも、いちおうは本を取ってくれたとしましょう。聞き手が不愉快な顔をすることは、発話内行為では想定されていなかった発話媒介行為です。この場合、何が起こっているのでしょうか。本を取ってくれたかぎりにおいては、発話者から聞き手への規範の伝達はなされています。しかし、それに引きつづいて、聞き手だった方から発話者に対して、次なる規範、たとえば、セリフで言えば、「本くらい、自分で取れよ」という規範が伝達されようとしています。しかし、この規範の伝達も、あらかじめ保証されているわけではありません。うまく規範が伝達されれば、(最初の)発話者が、「突然頼んで申し訳なかつた」と応ずるでしょうが、規範が伝達されなければ、意味不明な表情とばかりに(最初の)発話者は席を蹴るかもしれません。

このように見てくると、複数の人の間に、曲がりなりにも発話行為が交わされ、会話が継続するというのは、決して当然のこととは言えません。会話は、いつでもどこでも崩壊する可能性をはらみつつ進行するスリリングなゲームなのです。本章で見たように、一般的に、規範の一方向的伝達は、伝達の成功があらかじめ保証されては

いません。異なる作用圏の接触は、伝達による作用圏の拡大をもたらす場合もあれば、作用圏の崩壊をもたらす場合もあるのです。その意味で、短時間の会話は、徹視的に見れば、規範が連続的に一方的に伝達されるプロセスなのです。

エスノメソドロジー（コラム511—17頁）の先駆者、H・ガーフィンケルが行った「実験」は、このような会話の性質をよく示しています。その「実験」の概略は次のとおりです。あなたは、実験者（ガーフィンケル）から協力を頼まれ、事前に打ち合わせもすませたサクラ（演技者）だとします。朝、大学に行くと、向こうからあなたの友人がやってきます。「やー、調子はどう？」——予想どおり、友人は、その声をかけてきました。そこで、あなたは実験者との打ち合わせに従って、次のように答えました——「えっ、僕の調子がいいかだって？ 君は、何が知りたいの？ 今日、僕の頭が冴えてるかどうかを知りたいの？ もう風邪がよくなったかどうかを知りたいの？ それとも、試験の成績のこと？」。友人はムツとした顔で、「もういい」と立ち去りました。実に人を食ったような「実験」ですが、会話が規範の一方的伝達というスリリングなゲームであることを、うまく例証しています。友人の「調子はどう？」は、広く行なわれている軽い挨拶です。そのような軽い挨拶の規

範が、その規範の声を発する第三の身体から、友人の口を通じて、あなたへと伝達されようとしていました。しかし、その伝達は、あなたを作用圏に巻き込むのに失敗してしまいます。

逆に、同じ友人の挨拶に対して、あなたが「まあまあかな」と答えたとします。今度は、軽い挨拶の規範は、うまく伝達されました。あなたは、相手と同じ作用圏に入ったのです。今度は、あなたの方から「君は？」と質問します。これは、相手の作用圏に入ったあなたが、さらにその作用圏の中の作用圏に相手を入れようとしているのです。それがうまくいけば、「最近いいことづくめなんだよ」などと相手が応じるでしょう。しかし、「お前の知ったことじゃないだろう」と相手が出てくる可能性は、常に残されています。

上の「実験」は、会話の継続が相互的な作用圏の拡大プロセスであり、その拡大プロセスは容易に失敗する可能性があることを示しています。しかし、第三の身体の声は、常に功を奏するかどうかは別として、ある程度の強制力を有しています。今度は、第三の身体の強制力を例示するガーフィンケルの「実験」を紹介してみましよう。

この「実験」では、被験者には、あるテーマについてカーテンの向こうにいる相手に次々と質問をし、そのテ

「マ」について相手がいかなる考えの持ち主かを判断するという課題が与えられます。相手は、被験者の質問に、「はい」か「いいえ」で答えます。ところが、実は、相手はコンピューターであり、あなたの質問にランダムに「はい」か「いいえ」を返してきます。当然、相手の答えは、かなり首尾一貫しないものとなります。しかし、それにもかかわらず、被験者の多くは、相手の考えを探るために長時間質問をしつづけたのです。この「実験」は、相手の応答が、第三の身体の声として被験者を作作用に巻き込みつづけるだけの強制力を有していたことを示しています。

\* このコラムは、大澤真幸『意味と他者性』（勁草書房、一九九四年）の第5章「言語行為論をどう評価するか」を参考にしました。

† 最近では、実験の「被験者」という用語に代わって、「実験協力者」といった用語が使用される傾向にあります。かえって紛らわしくなりますので、本書では「被験者」という用語を使用しました。

本章は、集合性（かや）の物理的な側面に注目します。とくに、ミクロ（個人の行動）が集まってマクロ（群集のような大集団）の動きをつくり、今度は、マクロの状態がミクロに影響するというモデル（「ミクロ・マクロ」リンク）を使ったコンピュータ・シミュレーションを紹介します。(1) 大きな横断歩道を渡る群集に観察される帯状の構造、(2) 周辺の人だけの影響で動く人々からなる大集団の変化、(3) 他者に同調する傾向が、集団の意見分布の変化に与える影響を取り上げます。

最後に、緊急避難のときの群集誘導法を説明します。特定の群集の動きを意図的につくる方法です。

## 1 物理的集合性

### 物理的挙動

集合性の二つの側面である物理的集合性と意味的集合性は、表裏一体の関係にあります。なんらかの物理的基盤なしには意味の使用はありえませんし、意味の使用は、物理的側面を規定します。

グループ・ダイナミックスは、意味的集合性を主たる関心としてきました。したがって、現実の協同的实践では、集合性の物理的側面を専門とする人たち、たとえば、工学の専門家との学際的協力が必要になってきます。製造現場の集合体で協同的实践を行なうには、たとえば、機械工学や情報工学との協同が必要になるでしょう。また、コミュニティという集合体で協同的实践を行なうには、建築学、土木工学との協同が必要になるでしょう。



しかし、グループ・ダイナミックスが、物理的集合性に着目した研究を行っていないわけではありません。本章では、第II部の他の章とは趣きを異にして、物理的集合性に焦点を当てた研究を紹介しません。それは、集合体の人々が呈する物理的挙動に焦点を当てた研究です。

集合体によつては、物理的集合性に焦点を当てた方が有効な場合もあります。「群集」と呼ばれる集合体は、その典型でしょう。鳥合の衆である群集にも、微細に見れば意味的集合性を見て取ることはできます。また、ある群集がなぜ発生したかという歴史的経緯には、従前からの意味的集合性が大きく関与しているでしょう。しかし、一定の空間に集まった群集の中で、将棋倒しで負傷者が続出するかどうか、ある人が発した大声が群集全体にどのようにこだましていくかといった現象は、ある程度、過去の経緯とは切り離して、その群集内部の物理的現象として分析することが可能です。

### 「ミクロ・マクロ」リンク

本章で紹介する集合体の分析には、「ミクロ・マクロ」リンクと呼ばれるモデルが使用されます。ミクロは個人、マクロは集合体のことです。「ミクロ・マクロ」リンクとは、「(1)ミクロ(個人)の状態が集まってマクロ(集合体)の状態をつくる↓(2)そのマクロ(集合体)の状態が、今度は個々人(ミクロ)の状態を規定する↓(1)↓(2)↓……」と続いていくことです。「ミクロがマクロを規定し、マクロがミクロを規定し、……」というぐあいに、ミクロとマクロの間をグルグルまわるリンク(輪)が、「ミクロ・マクロ」リンクです。

ここで、注意しておくべきことがあります。それは、「ミクロ・マクロ」リンクのモデルは、私たちが原理的には否定した「半身半心」モデルに立っているということです(第2章第1節)。なぜならば、

「個々人の動き（ミクロ）が集まってマクロの状態をつくる」と言うとき、個人内部の情報処理、すなわち、「肉体に内蔵された心」における情報処理が前提とされているからです。個々人の動きとは、そのような個人の内部で行なわれる情報処理による動きのことです。したがって、「ミクロ・マクロ」リンクのモデルは、決してグループ・ダイナミックスの原理的モデルにはなりえません。

しかし、第2章第3節で「半身半心」モデルを説明したときに述べたように、当面問題としている「かや」だけに注目する場合には、「半身半心」モデルで十分なのです。原理的には、人間は数多くの「かや」に操られています。しかし、数多くの「かや」のうちの一つに注目する場合、それ以外の「かや」の影響を、注目している「かや」には規定されない「半身半心」の影響と見なしても、実質的に大きな違いはありません。

### 本章の構成

本章では、まず、群集という集合体を取り上げ、その物理的集合性を分析した研究を紹介します。具体的には、多くの歩行者が通行する横断歩道を上空から観察したときに見て取れるマクロの状態、すなわち、人流（多くの人々の流れ）の帯状構造を取り上げます。そして、その帯状構造を「ミクロ・マクロ」リンクのモデルによってコンピュータ上に再現したシミュレーションを紹介します（第2節）。

それに続いて、同じ「ミクロ・マクロ」リンクのモデルに立った他のシミュレーションも見ておきましょう。具体的には、セル・オートマトンによるシミュレーション（第3節）と、微分方程式によるシミュレーション（第4節）を取り上げます。前者は数式によらないシミュレーション、後者は数式によるシミュレーションです。

本章では、最後に、群集の制御を目的とした研究例を紹介します。ビルや地下街のような閉鎖された空間から、多くの人々をいかに緊急脱出させるか、という問題に取り組んだ研究です（第5節）。

このように、本章で述べる内容の中には、正確を期そうとすれば数学を使わねばならない部分がありますが、本書が入門書であることを考え、あえて数学的な記述はいっさいしないことにしました。ただし、数学が、グループ・ダイナミックスにとつて重要な「言語」であることは事実です。やはり数学言語を使わないと考えられないことがあるのです。もちろん、当事者との協同的実践の現場で、数学言語を振り回してみても無意味です。しかし、研究者が数学言語を使って思考することができるかどうかは、研究者が現場に提供できる言説の幅を大きく左右します。

ちなみに、私は、学部の授業では、数学はほとんど使わずに、本章で紹介するセル・オートマトンや微分方程式によるシミュレーションの実習を行なっています。しかし、同時に、大学院に入った文系出身の学生には、修士課程の初年時に、少なくとも微積分と線形代数の基礎だけは学んでおくよう指導しています。まずは、ここさえ突破しておけば、数学言語と無縁にはならないですむだろうという期待があるからです。

## 2 横断歩道を渡る群集の帯状構造

### 帯状構造

まず、写真を見てください。これは、大阪中心部にある大きな横断歩道を上空から撮った写真です。多くの人々が横断歩道を歩いていきます。図8-1は、この横断歩道を歩く一人ひとりの二秒間の動きを示しています。多くの小さな矩形がありますが、これらは一人の歩行者が二秒間に移動した面積を示しています。白い矩形は左から右に歩いている人、黒い矩形は右から左に歩いている人です。白い矩形の帯と黒い矩形の帯が交互に並んでいるのがわかります。全部で五本の帯（三つの白い帯と二つの黒い帯）を見て取れます。このような人流の帯状構造は、横断歩道を歩いていると、なかなかわかりません。また、常に帯状構造が現れるわけでもありません。では、どのような場合に、どのようにして帯状構造が現れるのでしょうか。

帯状構造の出現を分析するには、まず、どの程度、帯状構造が形成されているかを示す指標（帯化指標）が必要です。ここでは、帯化指標の算出方法は省略して、直観的に理解していただくことにします。帯化指標は○から一の範囲を取ります。図8-2には、帯化指標の五つの値に応じた群集流（群集の流れ）の例を示しています。これを見ると、帯化指標が○・三を超える下二つの例では、かなり明確な帯状構造を見て取ることができます。

図8-3は、信号が青になり横断歩道の両側から歩いてきた二つの群集流が、横断歩道の中央部で混ざりあい、帯状構造を形成したプロセスを示しています。折れ線のいちばん左下の点が、信号が青にな

った時点（始点）です。始点を含めて三番目の点は、信号が青になって四秒が経過した時点で、③の図は、この時点の歩行者の（二秒間の）動きを示しています。次に、⑩の図は、一八秒が経過した時点を示しています。これを見ると、両



横断歩道の歩行者群集

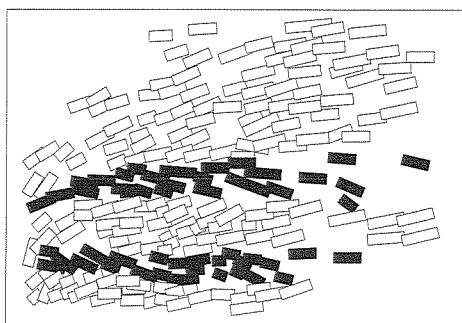
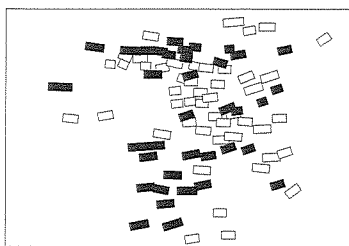


図 8-1 歩行者群集の帯状構造

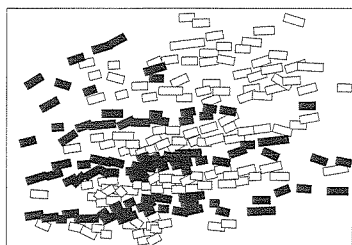
方向から来た歩行者が交差する直前に、いくつかの「くさび」形ができ、両方から来る「くさび」が入れ違いに交わっていることがわかります。このような「くさび」形ができなかつたり、かりに「くさび」ができても、両方からの「くさび」が正面衝突した場合に、帯状構造はできません。こうして、二四秒後（⑬の図）には、帯状構造が形成され、三〇秒後（折れ線の最右端、⑯の図）に帯状

1 本節で紹介する研究は、以下の論文で発表されたものです。

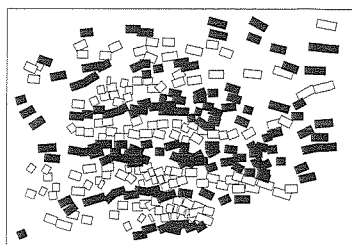
Katsuya Yamori "Going with the flow: micro-macro dynamics in the macrobehavioral patterns of pedestrian crowds" (Psychological Review, 1998, 105-3, 530-557)



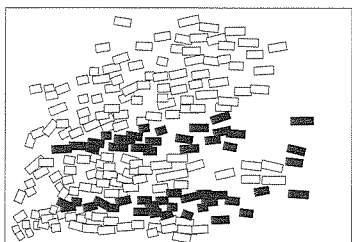
帯化指標 = 0.15  
横断者数 = 84



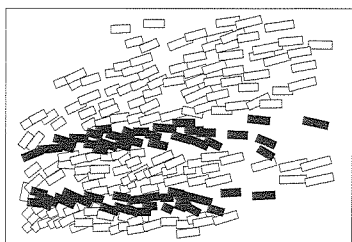
帯化指標 = 0.20  
横断者数 = 216



帯化指標 = 0.26  
横断者数 = 249



帯化指標 = 0.33  
横断者数 = 211



帯化指標 = 0.48  
横断者数 = 213

図 8-2 帯化指標の値

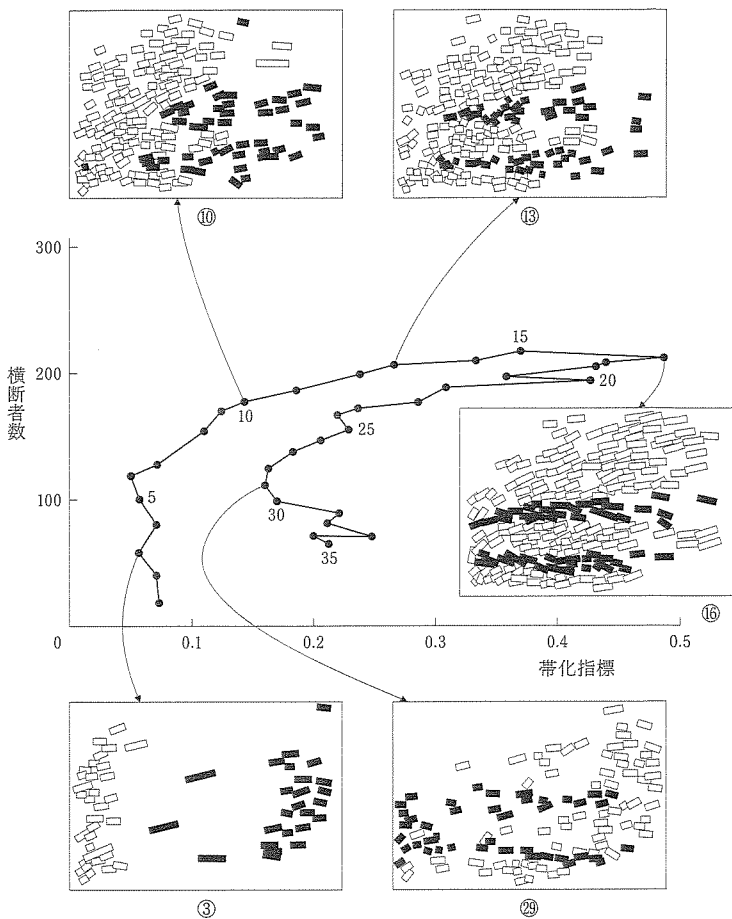


図 8-3 歩行者群集の帯状構造

構造はもつともクリアになります。

帯状構造の形成は、歩行者の総数と関係があることがわかりました。明確な帯状構造が形成された場合（帯化指標 $\cdot$ 三以上）と形成されなかった場合（帯化指標 $\cdot$ 三未満）に分け、横断者数との関係を分析すると、(1)横断者数が $100$ 人未満であると明確な帯状構造は形成されないこと、(2)横断者数が $200$ 人以上の場合には、明確な帯状構造が形成される場合と形成されない場合が、ほぼ同じ割合であることが見出されました。

### シミュレーション

では、次に、横断歩道の群集流をコンピュータ上でシミュレーションした研究を紹介しましょう。このシミュレーションでは、「マイクロ・マクロ」リンクのモデルが使用されています。

まず、マクロの状態、すなわち、横断歩道上の群集全体の状態を表わすのが、帯化指標です。帯化指標は、マイクロの動き、すなわち、個々の歩行者の動きによってつくられます。マイクロの動きによってマクロの状態が形成されるわけです。一方、このシミュレーションでは、マクロの状態である帯化指標が、マイクロの動き、すなわち、個々の歩行者の行動を規定するという視点を取り入れられています。具体的には、歩行者一人ひとりの二秒ごとの歩行行動を、次のようにして計算しました。

このシミュレーションでは、個々の歩行者が、台風の進路予想に使われるような扇形を視野に入れて、進行方向を決めるというモデルが用いられています。扇形の中には、今、注目している歩行者と同じ方向に歩いている人（背を向けて歩いている人）と、逆方向に歩いてくる人（正面から歩いてくる人）がいます。もちろん、扇形の中にだれも人がいない可能性もあります。そこで、歩行者の進行方向は、次のよ



うな三つのベクトル（矢線ベクトル）を合成して求めることにします。

- (1) 同方向に歩いている人がいる場合には、その人についていくベクトル
- (2) 逆方向に歩いてくる人がいる場合には、その人を避けるベクトル
- (3) 自然な進行方向として、直進ベクトル

(1)で、同方向に歩いている人が複数いる場合には、複数の人のそれぞれに対して、その人に向かう方向のベクトルを計算し、それらを合成して(1)のベクトルとします。(2)の場合も同じです。

こうして進行方向が決まると、次は、二秒間の進行距離を決めなければなりません。進行距離に影響するのは、歩行者のまわりの混みぐあい（歩行者密度）です。歩行者のまわりに多くの人がいるほど、速くは進めません。歩行距離は短くなります。逆に、まわりの人が少なければ、歩行距離は長くなります。シミュレーションでは、各歩行者を囲む矩形（どの歩行者にも共通の面積の矩形）を定め、その矩形内の歩行者密度によって歩行距離が決まるというモデルが使われています。

マクロからミクロへの影響は、帯化指標が扇形の中心角を規定するというかたちで導入されています。つまり、帯化指標が小さいほど（歩行者がバラバラに歩いているほど）、扇形の中心角は広くなる（より広角な視野で進行方向を決める）、そして、帯化指標が大きくなるほど扇形の中心角は狭くなるというモデルが設定されています。

以上のようなモデルでシミュレーションをしてみると、先に述べた現場観察の結果を再現できることが見出されました。すなわち、歩行者総数が二〇〇人を超えると、ほぼ五割の割合で明確な带状構造が形成されること、また、歩行者総数が一〇〇人より少なくなると、明確な带状構造が形成されないことが再現されています。さらに、「ミクロ→マクロ」リンクのリンクを切ってしまう、扇形の中心角が帯

状構造とは無関係に決まるようにすると、横断歩道の外に向かって出て行く、他の人の上を歩くなど、現場では起こり得ない事態が発生することも見出されています。「マイクロ・マクロ」リンクの重要性が確認されたわけです。

### 3 セル・オートマトン

セル・オートマトンとは

「マイクロ・マクロ」リンクのモデルを使ったシミュレーションの一つに、セル・オートマトンがあります。碁盤をイメージしてください。囲碁では、碁盤の格子点に石を置きますが、ここでは、一つひとつのマス目に注目しましょう。そのマス目がセル（細胞）です。たとえば、各セルは、白か黒いずれかの状態になるとします。そして、どういうときに白（ないし黒）が黒（ないし白）に変化するか、ルールを定めます。まず、各セルを白か黒で塗ります。これが初期状態です。次に、初期状態からルールにしたがって各セルを変化させていくと、まさに自動機械（オートマトン）さながらに、白黒の配置（模様）が変化していきます。

セル・オートマトンのおもしろい点は、セルの変化が、そのセルの周囲だけによって規定されるといふルールにあります。この点で、前節で紹介した帯状構造とは異なります。帯状構造は、歩行者群集全体の状態でした。これに対して、セル・オートマトンのルールは、セルの周辺だけにしか適用されないルールです。そういう意味では、セル・オートマトンでは、セル周辺がマクロ、セルがミクロというこ

とになります。ただし、隣りあったセルでは、互いの「周辺」が部分的に重なりあっています。

具体例を紹介しましょう。100×100で、合計一万个のセルからなるセル・オートマトンがあると思います。このようなセル・オートマトンで少々注意しなければならないのは、「隅っこ」をどう扱うかです。一つの扱いは、「隅は本当に隅」という扱い方です。そうすると、隅は隅なりに、別途ルールを定めてやる必要があります。たとえば、セルの周辺を、そのセルが隣接している八个のセルだと決めてルールを作っても、隅のセルには隣接しているセルが八个ありませんから、別のルールが必要になります。

もう一つの扱いは、「隅は反対側の隅につながっている」という扱い方です。たとえば、右上隅（ないし左上隅）のセルは左下隅（ないし右下隅）のセルにつながっているというぐあいです。この扱い方ですと、隅は隅ならず、隅はないということになります。

## 具体例

100×100の具体例に戻りましょう。ここでは、「隅は本当に隅」でいくことにします。個々のセルは白か黒のいずれかの状態を取ることになります。でも、白か黒では、あまりおもしろくありませんので、あるファクションの流行を考えましょう。ほとんどの人が今までの服を着ているところに、新しいファクションに飛びつく人がポツポツ出てきた、そんな状況を考えます。セルを人と見なし、今までの服を着ている人は白、新しいファクションの服を着ている人は黒ということにします。

さて、セルの状態変化についてルールを作ります。最初に、新しいファクションに飛びつきやすい人の集まり（一万人）を想定してみます。

「今までの服を着ている人は、隣接する周囲の人（八人）のうち一人が新しいファックションになると確率〇・五で新しいファックションに飛びつく。周囲の二人が新しいファックションになると確率〇・八で、三人以上だと確率一で新しいファックションに飛びつく。一方、新しいファックションになった人は、周囲に関係なく、新しいファックションでありつづける」——このようなルールにしてみましよう。隅にいる人は、隣接する周囲の人が少なくなりますが、周囲の何割が新しいファックションになったら、確率〇・五（あるいは、〇・八、一）で新しいファックションに飛びつくか、その周囲の割合は、隅ではない人と同じにします。初期状態として、右上隅にいる二五人だけが新しいファックションである状態からスタートすることになります。

このようなモデルでセル・オートマトンを動かしてみると、図8-4のようになります。新しいファックションが流行していき、最後には全員が新しいファックションになってしまいます。

次に、なかなか新しいファックションに飛びつかない人の集まりを想定してみましよう。今度のルールは次のとおりです——「今までのファックションを着ている人は、隣接する周囲の人（八人）のうち一人が新しいファックションになっても、確率〇・一でしか新しいファックションに飛びつかない。新しいファックションの人が二人、三人、……と増えるにしたがって、確率も〇・二、〇・三、……と増えていくが、周囲の八人がすべて新しいファックションになっても、確率は〇・八どまり」。初期状態や、いったん新しいファックションになった人はずっとそのままという条件は、前と同じです。

このルールでセル・オートマトンを動かしてみると、次第に新しいファックションが増えて、最後には全員が新しいファックションになるという、前と同じ経過をたどります。しかし、流行のスピードが大きく違います。前回の状態にほぼ対応する状態に至るまでのステップ数を、図8-4の各図にカッコでく

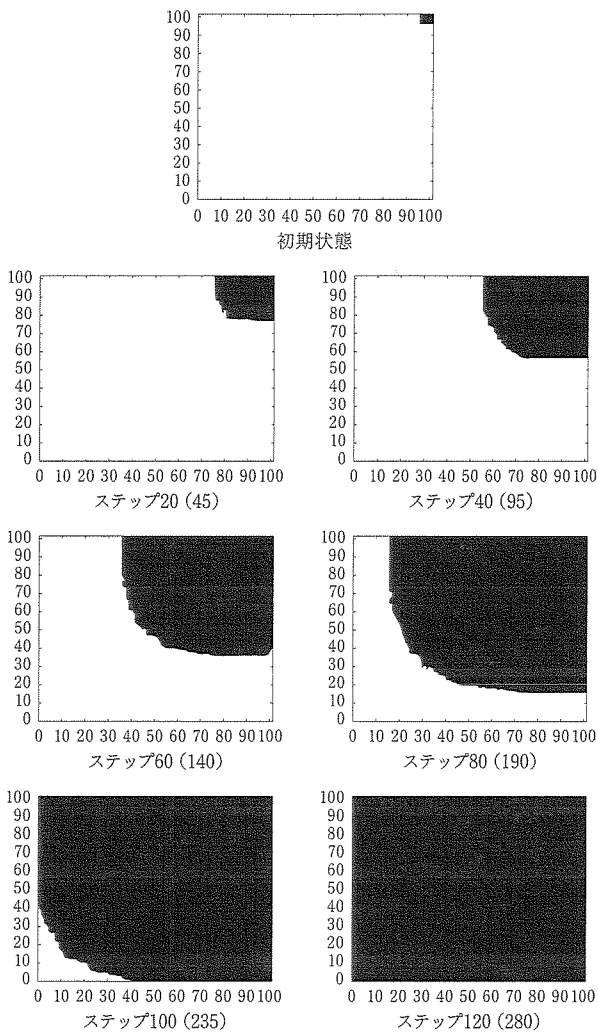


図 8-4 セル・オートマトンの例

各図 ( ) 内には、新しいファッションに飛びつきにくい人の集合のステップ数を示す。

くって示しています。これを見ると、前回とほぼ同じ状態に達するのに、約二・五倍のステップ数を要していることがわかります。

本節の例は、わざわざコンピュータを動かしてみなくても、結果が予想できる単純なものでした。しかし、ルールをもっと複雑にし、初期状態を工夫すると、まるで万華鏡をのぞいているような美しい動きを見ることが出来ます。そのような例を見ることが出来るホームページも少なくありません。どうぞ楽しんでみてください。

## 4 意見分布の変化

### 確率のおさらい

今まで紹介した横断歩道の群集やセル・オートマトンは、数式で表現して解を求めることはできませんでした。コンピュータ上で実際に動かしてみなければわかりませんでした。しかし、「ミクローマクロ」リンクのモデルを使ったシミュレーションの中には、数式（微分方程式）で定式化し、数式で解けるものもあります。本節では、そのような数式によるシミュレーションの例を紹介します<sup>2</sup>。ただし、本節では、数式はいっさい使用せずに説明していきます。

まず、確率について簡単なおさらいをしておきましょう。今現在のことなら、きちんと調べれば確率など使わなくても明言できます。外に出てみれば、今現在の天気は、雨であるか否かは明言できます。あえて確率を使えば、今現在は確率一で雨か、あるいは、雨ではないかです。しかし、三〇分後、一時

間後の天気はどうか。今、いくら快晴でも三〇分後に夕立が来ることはあり得る話です。たとえば、今、快晴でも、三〇分後には確率〇・一で雨ということもあるわけです。一時間後、一日後、一週間後ならば、なおさらです。今現在のことは確率なしに明言できても、将来のことは、確率なしには何も言えません。

天気を雨か否かに分け、一日単位に正午の天気を考えていきましょう。ある日の正午に雨だったとき、次の日も雨である確率は〇・五だとします。また、ある日の正午に雨でなければ、翌日は確率〇・三で雨、確率〇・七で雨ではないとします。

今日雨でなければ、明日雨の確率は〇・三、雨でない確率は〇・七でした。では、あさって(二日後)の天気はどうでしょうか。明日雨であれば、その翌日は確率〇・五で雨でした。しかし、明日雨の確率は〇・三ですので、 $0.3 \times 0.5 = 0.15$ と掛け算しなければなりません。でも、明日は雨ではない確率も〇・七あります。その場合は、その翌日が雨の確率は〇・三ですから、ふたたび掛け算をして $0.7 \times 0.3 = 0.21$ となります。こうして、あさって雨である確率は $0.15 + 0.21 = 0.36$ となります。あとは同じように、二日後から三日後へ、三日後から四日後へと辛抱強く計算を続けていけば、「今日雨でないときの〇日後の天気」が確率を使って表現できます。

2 本節で紹介する微分方程式はマスター方程式と呼ばれています。次の本の第2章を参照してください。

W・ワイドリッヒ/G・ハーグ『社会学の数学モデル』(寺本・重定・中島訳、東海大学出版会、一九八六年) [原書 W. Weidlich & G. Haag *Concepts and models of a quantitative sociology: The dynamics of interacting populations*, Springer-Verlag, 1982]

## マクロ——意見分布

確率の変化についてのおさらいがすみましたので、本論に入っていきます。ここに一〇人の人がいて、どの人も二つの意見（意見Aと意見B）のうちどちらかを支持しているとします。そうしますと、一〇人全体を見ますと、意見分布（意見の分かれぐあい）は、(1)一〇人全員が意見Bを支持、(2)意見A支持一人、意見B支持九人、(3)意見A支持二人、意見B支持八人……(10)意見A支持九人、意見B支持一人、(11)一〇人全員が意見Aを支持、のように全部で一一通りあります。

一〇人全体の意見分布は、マクロな状態です。マクロな状態は一一通りあります。一方、一人の人がどのように意見を変えるかは、ミクロの動きです。全体の意見分布（マクロ）が、ミクロ（個々人）の意見によって決まることは言うまでもありません。以下では、意見分布（マクロ）が個人の意見変化（ミクロ）に影響するという「ミクロ—マクロ」リンクのモデルを考えます。

まず、マクロから始めましょう。今現在の意見分布は、調べてみればわかります。確率など関係ありません。しかし、ちよつとでも時間がたつと、なんらかの理由で意見を変える人が出てきますので、確率（一一通りそれぞれの確率）を使わないと表現できなくなります。前に使った「雨が降るか否か」の例では、雨が降る確率だけを考えていけば十分でした。雨が降らない確率は、一から雨が降る確率を引けば簡単に出てくるからです。しかし、今回は意見分布が一一通りありますから、一つひとつの確率を考えねばなりません。

## 確率表示計

そこで、「確率表示計」という架空の装置を使って説明していきましょう。確率表示計とは、図8-5



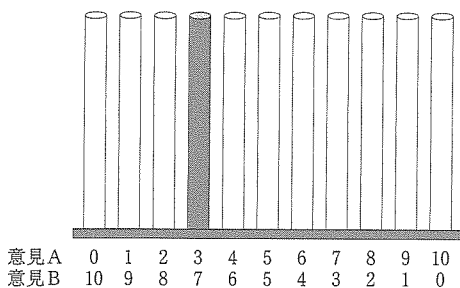


図 8-5 確率表示計

のように一一本のガラス管でできています。一一本のガラス管は、左から順に、意見分布(1)~(11)に対応しています。ガラス管には砂粒が入っており、その高さが確率を示しています。確率表示計のおもしろいところは、一一本のガラス管が下でつながっていることです。どこかのガラス管で砂粒が減ると、その砂粒は、必ず他のガラス管にまわります。砂粒の総量は決して変わりません。

今、一一本のガラス管に入っている砂粒の数を合計一〇〇〇粒とします。また、一つのガラス管を満杯にすると、一〇〇〇粒が入るとします。一粒は、〇・〇〇〇一の確率を表わします。一〇〇〇粒の砂粒は、一一本のガラス管の間を行ったり来たりしますが、全部あわせれば常に一〇〇〇粒(確率一)です。

最初、あるガラス管に一〇〇〇粒全部が入っているとします。しかし、少し時間がたつと、一〇〇〇粒のうち何粒かは他のガラス管に移動します。移動先のガラス管は一〇あります。ですから、本当は、一〇個のガラス管のそれぞれに何粒移動するかを考えねばならないのですが、近似的には、満杯のガラス管の両隣への移動だけを考えれば十分です。たとえば、「意見A支持三人、意見B支持七人」という状態を表わすガラス管(左から四番目のガラス管)が満杯だったとして、ほんの少しだけ時間がたったとき、「意見A支持二人、意見B支持八人」のガラス管(三番目のガラス管)に移動する砂粒の数と、「意見A支持四人、意見B支持六人」のガラス管(五番目のガラス管)に移動する砂粒の数を考えればよいのです。

四番目の状態から三番目の状態に移動するには、意見Aを支持してい

た三人のうち一人が、意見Bに変わることが必要です。また、四番目の状態から五番目の状態に移動するには、意見Bを支持していた七人のうち一人が意見Aに変わることが必要です。このような個人の意見変化によって、一一個のマクロの状態の確率が変化していきます。つまり、確率表示計の変化（マクロの変化）は、個人の意見変化（ミクロの変化）によって規定されています。

ここまでは、あるガラス管に一〇〇〇粒全部が入っている場合でした。もちろん、最初は、どれかのガラス管に一〇〇〇粒全部が入っていますが、少しでも時間がたつと、砂粒は分散していきます。あるガラス管には五〇〇粒、あるガラス管には二〇粒といった調子です。一〇〇〇粒全部が入っているガラス管は、もうありません。では、五〇〇粒入っているガラス管では、ほんの少しだけ時間がたつたとき、どのくらいの砂粒が両隣のガラス管に移動するのでしょうか。それは簡単です。そのガラス管に一〇〇〇粒全部が入っていた場合の一〇〇〇分の五〇〇、つまり、二分の一です。同様に、一〇〇粒入っているガラス管から両隣に移動する砂粒の数は、一〇〇〇分の一〇〇〇 || 一〇〇分の一です。

### ミクロ——個人の意見

次は、ミクロに目を転じましょう。個人は意見Aを支持するか、意見Bを支持するか、二つに一つです。個人の状態は二通りしかありません。しかし、考え方はマクロの確率表示計とまったく同じです。ただ、ミクロの方はガラス管が二つしかありません。一つは意見Aのガラス管、もう一つは意見Bのガラス管です。やはり砂粒の合計は一〇〇〇粒（確率一）で一定です。

今、意見Aのガラス管が満杯のとき、少し時間がたつと、どのくらい意見Bのガラス管に移動するか、逆に、意見Bのガラス管が満杯のとき、少し時間がたつと、どのくらい意見Aのガラス管に移動するか、

これらを決めれば個人の意見変化が定式化できます。この個人の意見変化の定式化に、マクロの状態（一〇人全体の意見分布）を反映させると、「ミクロ・マクロ」リンクのできあがりです。

### 同調傾向のシミュレーション

以下に紹介するシミュレーションでは、マクロからミクロへの影響として、多数派になびく傾向（同調傾向）を考えてみます。同調傾向が強いとは、他の人たちが、自分とは異なる意見に染まっていくと、自分も他の人たちの意見になびく傾向が強いということです。他の人たちがどうであろうと、われ関せずと、他の人たちの影響を受けにくいのは、同調傾向が弱いということです。

同調傾向を、図8-5に示した一通りの意見分布に即して説明しましょう。同調傾向が強いとは、かりに意見Aを支持していたとしても、左側の状態（意見Bの支持者が多い状態）になると意見を変える傾向が強いということです。逆に、同調傾向が弱いとは、左側の状態になっても、意見Aを支持しつづける傾向が強いということです。

以上のように「ミクロ・マクロ」リンクをモデル化して、マクロの確率変化を計算してみます。この計算は、横断歩道上の帯状構造やセル・オートマトンとは異なり、微分方程式を解く計算です。初期状態は、意見Aと意見Bが同数の状態とします。つまり、図8-5中央のガラス管に砂粒が全部入っており、他のガラス管は空っぽの状態からスタートします。

以下、二つの変数を変えて計算した結果を示します。第一の変数は、上に述べた同調傾向です。一〇人全員の同調傾向が弱い場合、中間の場合、強い場合に分けます。一〇人の個人差はないとします。第二の変数は、一〇人全員が、二つの意見のうちどちらか一方を好む程度を示す変数です。意見Aと意見

Bどちらでもよいのですが、以下では、意見Aの方を好む程度を考えていきましょう。この変数でも、個人差はないとします。全員にとって意見Aと意見Bに好みの差がない場合と、全員が意見Aの方を好む場合に分けます。

これら二つの変数の組み合わせによって、一一通りの意見分布の確率がどのように変化していき、最終的にどのような確率に落ち着くかを見てみましょう。

(1) 同調傾向が弱い一〇人　まず、全員に好みの差がない集団では、図8-6の(1) a のようになります。左右対称の山形を維持しつつ、次第に山が平たくなって最終状態に至ります。もっとも可能性が高いのは、意見Aと意見Bの支持者が同数という状態です。

次に、全員が意見Aの方を好む集団では、(1) b のようになります。一見、(1) a と同じように見えますが、よく見ると、山の右側の方が確率が大きくなっています——「意見A…四人、意見B…六人」の状態と、「意見A…六人、意見B…四人」の状態を比べてみてください。言うまでもなく、これは、全員が意見Aを好んでいることの結果です。

(2) 同調傾向が中程度の一〇人　意見Aと意見Bに好みの差がない一〇人の場合は、(2) a のようになります。(1) a がずっと山形だったのに対して、(2) a では山形から、少し真中がへこんだ台形へと変化していきます。最終状態では、中央が少しへこんではいますが、最左端と最右端を除く九つの状態がほとんど同じ確率になっています。

次に、意見Aの方を好む一〇人では、(2) b のようになります。右半分に偏った山形から、(2) a 最終形の右半分を高くした形に到達しています。

(3) 同調傾向が強い一〇人　意見Aと意見Bに好みの差がない一〇人では、(3) a のように、時間がた

つにつれて、山形から台形へと変化し、さらに、台形の中心部が陥没していき、両端が高い最終状態に至ります。つまり、(1)の同調傾向が弱い一〇人とは対照的に、もつとも起こり得るのは、全員が意見AないしBに染まってしまう状態です。同じ意見Aと意見Bに好みの差がない一〇人でも、同調傾向が弱いと山形(1-a)、同調傾向が中程度であれば台形(2-a)、同調傾向が強いと両端がとがった形(3-a)というように大きな違いが出てきます。

では、意見Aの方を好む一〇人だったらどうなるでしょうか。(3-aと同じく、山形↓台形、中心部の陥没、両端がとがった形と推移していきますが、常に、右半分の方に偏っています。最終的には、最右端(全員が意見A)がもつとも高い状態に至っています。全員が一様に意見Aを好んでおり、同調傾向が強いのですから、この計算結果は当然と言えるでしょう。

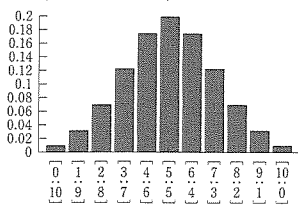
しかし、注意していただきたいのは、最右端の次に確率が大きいのは、最左端(全員が意見B)の状態だということです。ちなみに、最左端と左から二番目(九人が意見B)を加えると、約三〇%になります。意見Aの方を好む一〇人であるにもかかわらず、同調傾向が強いと、意見Bに染まってしまう可能性も結構あるのです。この辺は、数学を使わないと、なかなか予想できません。

### マルコフ性

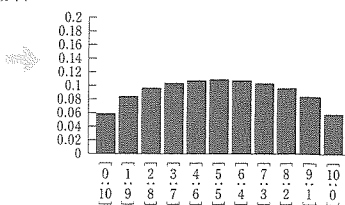
直前に述べた計算結果、すなわち、全員が意見Aを好きであっても、同調傾向が強いと意見Bに染まってしまう確率が結構あるという結果は興味深いものです。かりに、意見Aを平和、意見Bを戦争とすれば、全員が平和を好んでいても、同調傾向が強いと戦争に至る可能性も結構あるという衝撃的な予測になります。しかし、このように平和か戦争かという問題に、本節のシミュレーションを適用するには

(3)同調傾向が強い10人

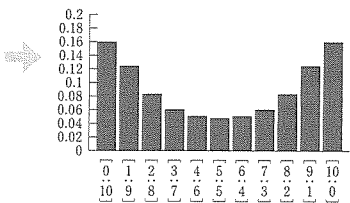
(3)-a どの人にとっても意見AとBに差がない場合



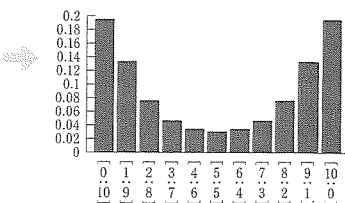
中間状態 1



中間状態 2

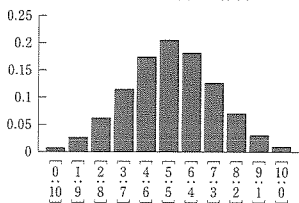


中間状態 3

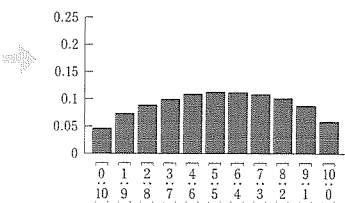


最終状態

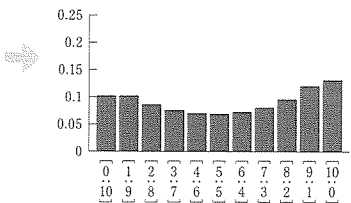
(3)-b 全員が意見Aの方を好む場合



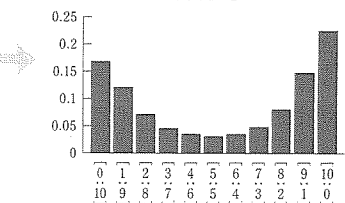
中間状態 1



中間状態 2



中間状態 3

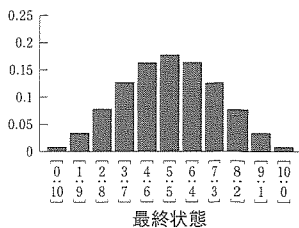
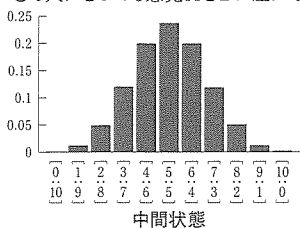


最終状態

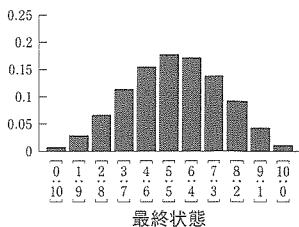
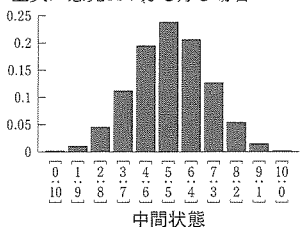
見 B : 5 人, 最右端は「意見 A : 10 人, 意見 B : 0 人」。縦軸は確率。

(1)同調傾向が弱い10人

(1-a) どの人にとっても意見AとBに差がない場合

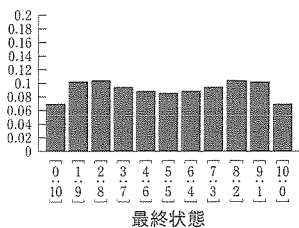
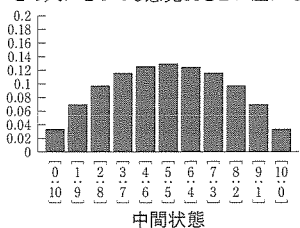


(1-b) 全員が意見Aの方を好む場合



(2)同調傾向が中程度の10人

(2-a) どの人にとっても意見AとBに差がない場合



(2-b) 全員が意見Aの方を好む場合

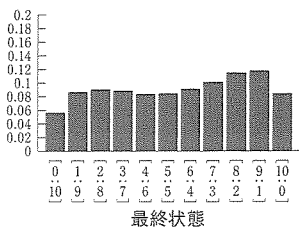
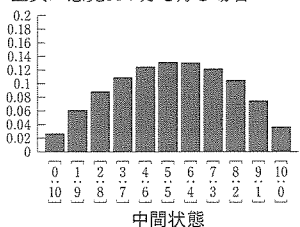


図 8-6 意見分布の確率の変化

各グラフとも、横軸の最左端は「意見A:0人、意見B:10人」、中央は「意見A:5人、意

無理があります。

本節のシミュレーションでは、初期状態からスタートして、「ほんのわずかの間」の砂粒の変化を定式化し、「ほんのわずか先」の確率を計算しました。こうして「ほんのわずか先」を繰り返して、どんな先の確率を計算していききました。「ほんのわずか先」の確率は、「ほんのわずか前」の確率からのみ計算されました。

ここで、重要なことは、ある時点の確率の計算には、直前の状態しか使われていないということです。つまり、本節のシミュレーションは、「直前の状態によつてのみ、次の状態が決定される」という仮定に立った上でのシミュレーションだったのです。直前の状態以外の状態、たとえば、ずっと以前の状態が、現在の状態に影響することは仮定されていません。この「直前の状態によつてのみ、次の状態が決定される」という性質を、「マルコフ性」と言います。

マルコフ性を仮定すれば、一連のプロセスをいくつものステップに刻み、ある条件を設定した上で、直前のステップの状態から次のステップの状態を求めるといふ操作を繰り返していくこととなります。本章第2節で紹介した横断歩道の帯状構造が形成されるプロセスのシミュレーションも、第3節で紹介したセル・オートマトンによるシミュレーションも、マルコフ性を仮定しています。

### マルコフ性の限界

ステップを一秒単位とするか一日単位とするか、はたまた一〇年単位とするか、それは自由です。しかし、いずれにせよ、マルコフ性を仮定するかぎり、直前のステップより前のステップは無関係です。どうでしょうか。私たちのまわりにある現象には、一度起こった出来事が長期にわたって影響を及ぼす



現象も少なくありません。たとえば、一度、悲惨な敗戦を経験すると、長期にわたって反戦の態度を維持します。これが、前に、意見A・Bを平和・戦争と見なすのに無理があると述べた理由です。また、直前の状態が同じであっても、どのような経緯でその状態に至ったかという歴史が、次の状態の決定に大きな影響を与える現象も少なくありません。たとえば、現在、極貧の状態にあっても、突発的な災難でそうなったのか、昔は裕福だったのが徐々に極貧になってしまったのか、あるいは、ずっと以前から極貧だったのかによって、現在の極貧状態が次の状態に与える影響は異なってきます。このように、マルコフ性は、歴史（経緯）や経験の蓄積を無視できない現象には適用できません。

一方、私たちの身の回りには、性懲りもなく、繰り返し発生する現象も数多くあります。流行やうわさは、その例です。衣服、飲食品、自動車等々、中身は違っても、流行現象は繰り返し発生します。また、うわさの中身を別にすれば、さまざまなうわさが現れては消えていきます。このように歴史とはあまり関係なく繰り返される現象には、マルコフ性を仮定することができます。

## 5 群集の避難誘導法

### 指差誘導法と吸着誘導法

前節までは、物理的集合性のシミュレーションを紹介しましたが、本節では、意図的に特定の物理的集合性をつくる試みを紹介します。具体的には、ビルや地下街などから多くの人たちを緊急避難させる場合の避難誘導法を取り上げます。出口に向かっての群集流を、少数の誘導者の誘導によっていかに短

時間でつくるか、これが目的です。特定方向への群集流を意図的につくる方法、言いかえると、特定の物理的集合性を意図的につくる方法が問題になります。

この研究では、従来から有効と考えられてきた誘導法に対して、その真反対とも言える新しい誘導法を考案し、二つを比較してみました<sup>3)</sup>。従来、避難誘導がうまくいった事例として、次のような誘導者の行動が紹介されてきました——「ある店員が、ショーケースの上に飛び上がり、大勢の人に大声で出口の方向を叫んだ。その勇敢な行動によって、多くの買い物客の命が救われた」。このような事例からは、誘導者が、(1)目立つ位置に立ち、(2)大きな声と大きな身振りで、(3)明確に出口の方向を指示することの重要性がくみ取れます。実際、従来の避難訓練では、避難誘導に関しては、これらの重要性が強調されていたように思われます。

しかし、以上の三点の逆をいく誘導法もあり得るのではないかと考えました。つまり、誘導者は、(1)目立つ位置には立たない、(2)大きな声も出さず、大きな身振りもしない、(3)出口の方向は指示しない、そんな誘導法もあるのではないかと考えたのです。では、いったい、どのような誘導法なのでしょうか。その新しい誘導法は、次のとおりです——誘導者は、自分のごく近辺にいる一名ないし二名の少数の避難者に対して、「自分についてきてください」と働きかけ、自分が働きかけた少数の避難者を実際に引きつれて避難する。このように、誘導者は、多数の避難者に対して大声で働きかけたり、明確なかたちで出口の方向を指示したりはしません。この誘導法では、誘導者が近辺にいる避難者を自分に吸着して避難誘導することから「吸着誘導法 (Follow-me method)」と呼ぶことにしました。

これに対して、従来から強調されてきた三点を満足する誘導法を「指差誘導法 (Follow-direction method)」と呼ぶことにしました。指差誘導法は、誘導者が「出口はあちらです。あちらに逃げてくだ

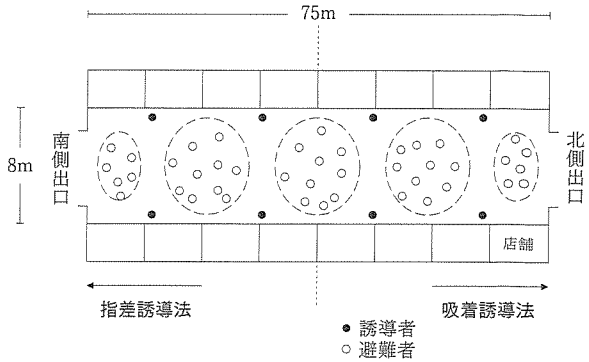


図 8-7 避難者と誘導者の配置 (第 1 実験)

さい」と大声で叫びながら、出口の方向を体全体を使って指し示す誘導法です。

#### 吸着誘導法の有効性

一九八〇年一〇月、福岡市 J R (当時、国鉄) 博多駅一帯で大掛かりな都市防災訓練が行なわれました。この訓練は、地下街のガス爆発事故を想定して行なわれました。その訓練の一部として、博多駅前地下街の一角で二つの誘導法を比較する実験(第一実験)を実施しました。

実験に先立ち、避難者四二名を図 8-7 のように五つの群に分けて配置しました。避難者は、福岡市役所の男子職員(年齢は二〇歳代ないし三〇歳代)にお願いしました。避難者には、「ふだん、買い物でもしているような感じでぶらぶらしてください。訓練が開始されたら店員が指示するとおりに行動してください」とお願いしました。

3 本節で紹介する研究は、次の論文に発表されたものです。

Toshio Sugiman and Jyuji Misumi "Development of a new evacuation method for emergencies: Control of collective behavior by emergent small groups" (Journal of Applied Psychology, 1988, 73-1, 3-10)

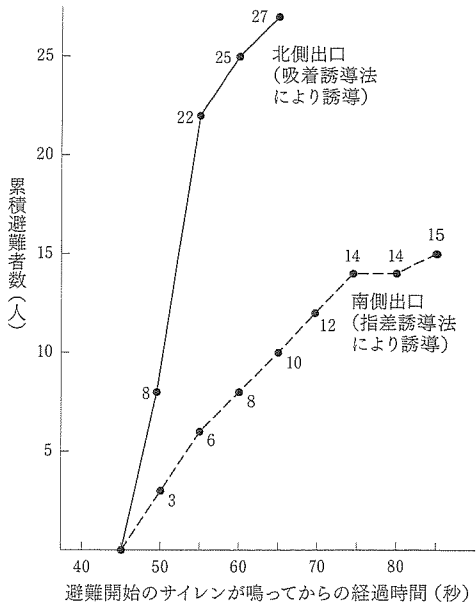


図 8-8 第 1 実験の結果

には、「通路に出たら、まず一人でも二人でも結構ですから自分と一緒に逃げのお客さんをつかまえてください。そして、自分がかまえたお客さんを引きつけて出口から逃げてください」と説明しました。図 8-8 は、吸着誘導法によって誘導した北側出口、指差誘導法によって誘導した南側出口のおのから避難完了した累積避難者数を時間経過にそってまとめたものです。この図の横軸は、避難開始のサイレンが鳴ってからの経過時間です。

誘導者は、実際に地下街の店舗で働いている従業員八名でした。誘導者八名のうち、四名は指差誘導法を使って南側出口に誘導、四名は吸着誘導法を使って北側出口へ誘導するようお願いしました。いずれの四名も男子二名、女子二名、八名とも年齢は二〇歳代でした。

誘導者に対しては実験前日に個別面接をし、誘導方法について説明しました。指差誘導法をとる四名には、「あなた自身も出口の方へ移動しながら、お客さんには、大声を出して出口の方向を指し示してください」、吸着誘導法をとる四名

図 8-8を見ると、吸着誘導法によって誘導した北側出口からは、二七名の避難者が一分五秒で避難し、一方、指差誘導法によって誘導した南側出口からは、一五名の避難者が一分二五秒で避難したことがわかります。あらかじめ中央部に配置された一〇名の避難者は、南北いずれの出口からもほぼ等距離のところのいたにもかかわらず、吸着誘導法に引つ張られてすべて北側出口から避難しました。

#### 吸着誘導法の雪だるま効果

この実験から、吸着誘導法が、指差誘導法よりも短時間に、より多くの避難者を避難させたことがわかりました。では、吸着誘導法では、避難者はどのように動いていたのでしょうか。ビデオを分析する中から、吸着誘導法では次のような避難者の動きがあったことがわかりました。

- (1) 誘導者が自分の近辺にいる少数の避難者に対して、自分についてくるよう働きかける（実験後の面接調査で、吸着誘導法を行なつたいずれの誘導者も、自分が直接働きかけた避難者は一人だったと述べました）。
- (2) 誘導者に直接働きかけられた避難者と、その避難者の周辺にいたまま誘導者の働きかけに気づいた数人の避難者が誘導者についていく。
- (3) それら数人の避難者のさらに周囲にいる多数の避難者が順次、誘導者を核とする小集団についていく。ただし、この段階で追隨する多数者は、誘導者の直接の働きかけはほとんど受けていない。

このように、吸着誘導法では、誘導者を核とする雪だるまが合計四個でき、四個の雪だるまが大きくなりながら出口の方に転がっていったことがわかりました。雪だるまは、インスタント小集団です。誘導者を核とするインスタント小集団が形成され、このインスタント小集団の「雪だるま効果」によって多数の人々が迅速に誘導されたのです。

## 誘導者と避難者の人数比

上で紹介した実験結果は、消防関係者のみならず私たちにとっても意外な結果でした。そこで、私たちは、吸着誘導法の効果をさらに検討する実験を行いました。その際、先の実験が、単純な構造の地下街で行なわれたことを考慮し、前の実験よりも複雑な構造の避難状況を使用することにしました。また、現実の緊急避難のときには避難者が不安を感じたり、動揺したりするにもかかわらず、前の実験では、避難者に対して不安や動揺を与えるような試みは行なわれなかったことを考慮し、避難者に、ある程度の不安と動揺を与える操作を導入しました。

具体的には、避難者が当初立っている位置のすぐ近辺にあり、特別な誘導がなされないかぎり避難者が使用するであろうと予想される一つの出口と、大部分の避難者にとって当初立っている位置からは直接見ることができない遠方にあるもう一つの出口という二つの出口を設け、誘導者は後者の出口に誘導することにしました。また、避難開始直前の二〇秒間、避難者がいる部屋の照明を消して真っ暗にし、その間、大きな非常サイレンを鳴らしつづけるという操作を導入しました。もちろん、避難者には、どの出口が開かれ、どの出口に向かって誘導が行なわれるかという点や、避難開始直前に照明が消え、非常サイレンが鳴ることはまったく知らせませんでした。

以上は、実験状況をよりリアルにする工夫ですが、今度の実験では、誘導者と避難者の人数比も変えてみました。具体的には、避難者を常に一六名に固定した上で、誘導者の数が四名の場合と二名の場合を比較しました。すなわち、誘導者一名あたりの避難者数が四名の場合と八名の場合を比較したのです。先の実験の結果、吸着誘導法では、誘導者を核とするインスタント小集団が複数形成され、そのインスタント小集団の「雪だるま効果」によって、避難者全員を巻き込んだ一つの群集流が速やかに発生した

ことがわかりました。しかし、そうであれば、形成されるインスタント小集団の数が、群集流の発生に対して影響を及ぼすはずです。かりに、形成されるインスタント小集団の数が少なすぎる場合、つまり、インスタント小集団が形成される際に核となる誘導者の数が少なすぎる場合には、出口に向かう一つの群集流を発生させることが困難になるかもしれません。これが、誘導者と避難者の人数比という要因を取り上げた理由です。

## 第二実験の概要

今度の実験は、一九八二年九月一二月、大阪市消防局消防学校の訓練棟地下室で実施しました。ふだんは、地下室で実際に火災を起こし、消防士が消火訓練をするのに使用されています。図8-9は、地下室の平面図です。

実験は、次のように五回に分けて実施しました。

- (1) 四名の誘導者が指差誘導法を用いて誘導する場合（四名指差誘導法）
- (2) 四名の誘導者が吸着誘導法を用いて誘導する場合（四名吸着誘導法）
- (3) 二名の誘導者が指差誘導法を用いて誘導する場合（二名指差誘導法）
- (4) 二名の誘導者が吸着誘導法を用いて誘導する場合（二名吸着誘導法）
- (5) 二名の誘導者のうち一名は指差誘導法を、もう一名は吸着誘導法を用いて誘導する場合（二名併用型）

のそれぞれについて実験しました。

いずれの場合も、避難者は大学生アルバイト一六名（男子一四名、女子二名）です。もちろん、毎回、

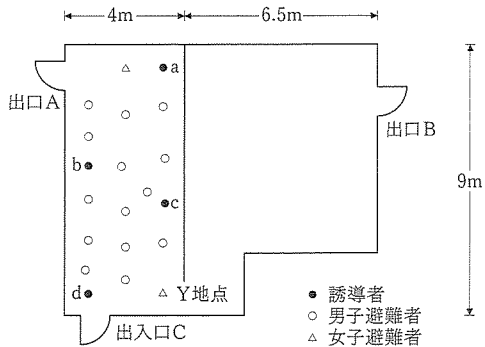


図8-9 避難者と誘導者の配置 (第2実験)

避難者は異なります。誘導者には、誘導法について事前に訓練を受けた男子大学生が当たりました。

図8-9のように、訓練棟地下室は壁で大きく二つの部分に分かれており、Y地点でのみ行き来できます。まず、避難者には地下室左側に入ってもらいました。地下室左側には、避難者が立つ位置を五回の実験で一定にするため、床に赤いビニールテープで二〇個の目印を貼っておきました。地下室は、出入口をすべて閉じて照明を消すと真っ暗になります。また、地下室外部から地下室内の照明を操作したり、非常サイレンを鳴らす設備がありません。

#### 実験の流れ

以下、実験の手続きを、順を追って説明しましょう。

① まず、避難者一六名と誘導者(四名ないし二名)を訓練棟の近辺に集合させました。ただし、この段階では、誘導者は自分も避難者の一人であるかのようにふるまうことにしました。避難者と誘導者一人ひとりにゼッケンをつけさせ、地下室入室後、ゼッケン番号と同じ番号がふられた目印の位置に立つよう指示しました。ゼッケンを避難者に手渡すときには、ランダムに手渡しましたが、誘導者になる四名ないし二名にはあらかじめ定められたゼッケンを手渡しました。また、二名の女子避難者には、図8-9に示した位置に相当する女子避難者用のゼッケンを手渡しました。



② 避難者を出入口Cから入室させ、ゼッケン番号と同じ番号がふられた目印の位置に立つてもらいました。すべての避難者が所定の位置についたのを確認後、実験者は次のような説明をしました。「では、これから避難訓練を始めます。今から私はこの部屋を出て行きます。しばらくしてドアが開かれますので、そうしたらこの部屋から避難してください。そのとき、現在皆さんの中にいる何人かの人が白い帽子をかぶって誘導しますので、その人の指示に従って避難してください」。以上の説明を二回繰り返し、質問があればそれに答えたあと、実験者は出入口Cより退室しました。これより後、出入口Cは閉じたままです。また、出入口Aと出口Bは、④の段階までは閉じたままです。

③ 実験者が退室してから一五秒後、突然、地下室の照明をすべて消し、二〇秒間、真っ暗な中で非常サイレンを鳴らしつづけました。この二〇秒の間に、誘導者はポケットに入れておいた白い帽子をかぶりました。

④ 二〇秒経過後、非常サイレンを止め、同時に、出口Aおよび出口Bのドアを外からいっせいに開きました。これを合図に、誘導者はあらかじめ決められた誘導法で誘導を開始しました。このときも地下室内の照明は消したままですが、出口A、Bの外部から入り込む光によって室内は各人の行動がわかる程度の明るさになります。誘導者は、すぐ近辺に出口Aがあるにもかかわらず、出口Bの方へと誘導します。出口Aと出口Bを出たところにビデオカメラを設置し、出口から出てくる被験者を撮影しました。

以上が実験の流れですが、④の段階の誘導者の誘導行動について詳しく説明しておきましょう。

(i) 誘導者が四名の場合

**四名指差誘導法** 誘導者は a、b、c、d の位置に配置しました。誘導開始時点になると、まず、誘導者 a が、出口 A から出ようとする避難者を制するようにして、「こちらが出口ではありません」と叫び、次いで、誘導者 b が Y 地点 (図 8-9) の方向を腕全体を使って指し示しながら、「こちらが出口です」と叫びます。さらに、誘導者 c、誘導者 d が、順次、出口 B の方向を指し示して、「こちらが出口です、あちらから逃げてください」と叫びながら、誘導者も避難者とともに出口 B の方向へ移動します。**四名吸着誘導法** 誘導者は a、b、c、d の位置に配置しました。誘導開始時点になると、各誘導者はそれぞれ自分のもっとも近くににいる避難者一名に対して、「一緒に逃げてください」と言い、肩を軽く押し、その人を実際に引きつれて出口 B に向かいます。

(ii) 誘導者が二名の場合

**二名指差誘導法** 誘導者は a、d の位置に配置しました。誘導開始時点になると、まず、誘導者 a が出口 A から出ようとする避難者を制するようにして、「こちらが出口ではありません」と叫び、次いで、誘導者 d が出口 B の方向を腕全体を使って指し示しながら、「こちらが出口です」と叫びます。その後は、どちらの誘導者も、出口 B を指し示して、「こちらが出口です、あちらから逃げてください」と叫びながら、誘導者も避難者とともに出口 B の方向へ移動します。

**二名吸着誘導法** 誘導者は a、d の位置に配置しました。誘導の方法は、四名吸着誘導法の場合とまったく同じです。

**二名併用型** 誘導者は、二名指差誘導法、二名吸着誘導法と同様、a、d の位置に配置しました。誘

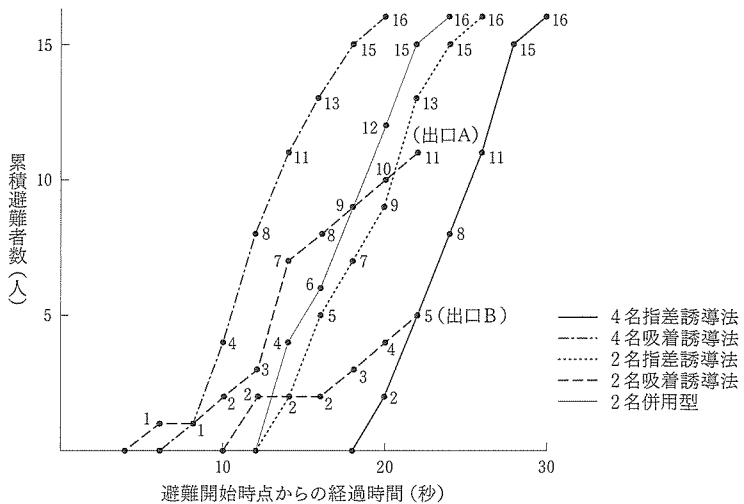


図 8-10 第 2 実験の結果

誘導者 a は指差誘導法、誘導者 d は吸着誘導法を用いて誘導しました。誘導開始時点になると、誘導者 a は、出口 A に向かう避難者を制するようにして、「こちらが出口ではありません」と叫び、引きつづいて、Y 地点の方向を指し示しながら、「こちらが出口です」と叫びます。その後は、出口 B の方向を指し示して、「こちらが出口です、こちらから逃げてください」と叫びながら、自分も出口 B の方向へ移動します。一方、誘導者 d は、誘導者 a が誘導を開始すると同時に吸着誘導法を用いて誘導を始めます。具体的な誘導法は、四名吸着誘導法、二名吸着誘導法と同じです。

#### 実験の結果

図 8-10 は、出口 A および出口 B のドアが開かれ、誘導が開始された時点からの避難完了者の推移をまとめたものです。避難者が出口 B (ないし出口 A) から室外に出た時点をもって、その避難者の避難が完了したものと見なしました。

まず、誘導者が四名の場合の指差誘導法と吸着誘導法を比較してみましよう。どちらも一六名の避難者全員が、誘導者によって誘導された出口Bから避難しましたが、その所要時間には大きな差がありました。すなわち、第一避難完了者の所要時間、最終避難完了者の所要時間、平均所要時間のいずれで比較しても、吸着誘導法の方が一〇秒以上早く避難しています。ここまでは、先に述べた地下街での第一実験と同じ結果です。

次に、誘導者二名の場合の指差誘導法と吸着誘導法を比較してみましよう。両者の間には、誘導者によって誘導されなかった出口Aからの避難者が出現したか否かという点で決定的な違いがありました。すなわち、指差誘導法では、誘導されなかった出口Aから避難した避難者はいませんでした。吸着誘導法では、一六名中一名が出口Aから避難してしまいました。今回の実験で取り上げた五つの避難誘導条件のうち、誘導されなかった出口Aからの避難音が出現したのは、この二名吸着誘導法だけでした。一方、二名指差誘導法では、先に述べた四名吸着誘導法と四名指差誘導法の間で所要時間で避難が完了しました。

最後に、二名併用型では、一六名全員が誘導に従って出口Bから避難、その所要時間は二名指差誘導法よりもわずかながら短いという結果になりました。

#### 誘導者の数による違い

このように、避難所要時間について指差誘導法と吸着誘導法を比較すると、誘導者と避難者の人数比によって両者の優劣が逆転するという結果が得られました。すなわち、避難者一六名に対して四名の誘導者を配した場合（誘導者一名あたりの避難者数が四名の場合）には、先の実験の結果とまったく同様、吸

着誘導法の方がはるかに迅速な避難を達成しました。

それに対して、誘導者二名の場合（誘導者一名あたりの避難者数が八名の場合）にはまったく逆の結果になりました。すなわち、二名指差誘導法では、四名吸着誘導法には及ばないものの、四名指差誘導法よりも迅速な避難を達成することができましたが、二名吸着誘導法では、約三分の二の避難者が、誘導されなかった出口から避難してしまいました。直後の質問紙調査の結果からも、二名吸着誘導法では、約三分の二の避難者が、「だれが誘導者かわからなかった」「どのような誘導をしていたのかまったくわからなかった」と答えました。これは、二名吸着誘導法では、誘導者の誘導効果が著しく小さかったことを示しています。以上の結果から、吸着誘導法の有効性は、誘導者と避難者の人数比という要因によって著しく制約されることがあきらかになりました。

つまり、吸着誘導法は、誘導者を核として形成されるインスタント小集団のもつ大きな吸引力をいかになく利用したものと云えます。しかし、二名吸着誘導法での不十分な誘導結果が示すとおり、誘導者を核とするインスタント小集団が常に出口に向かう群集流を生起させるとは限りません。そこには、もう一つの条件として、そのようなインスタント小集団を形成するにあたって、ある程度のスピードが求められることが示唆されます。すなわち、避難者のすぐ近くには、その方向に誘導がなされないにせよ、一つの出口が開いて待っているのですから、その出口に向かう自然発生的な群集流が形成されるのは自然なことです。そうなる前に、インスタント小集団が形成され、それによる周辺避難者の吸引が開始されねばなりません。それが可能か否かという点に関して、本実験の場合、誘導者二名と四名の間に境界線があると考えられます。ただし、一般に、誘導者と避難者の人数比がどの程度までであれば吸着誘導法が有効であるのかという点については、避難現場の物理的構造特性や、誘導者と避難者の質、などの

要因により影響を受けることが予想されますので、ここで早急な結論を出すことはできません。

#### 現実の避難誘導では

現実の避難誘導を考えてみますと、デパートや地下街の店員のように、客に対して多くの誘導者が確保できる場合には吸着誘導法が有効でしょう。しかし、映画館、劇場、野球場のように、多くの観客に対して十分な誘導者を確保できない場合には、吸着誘導法は不向きです。指差誘導法は、大きなアナウンス、床面を走る光などのハードウェアによって代替することができます。上の実験で、誘導者二名の場合に併用型が迅速な誘導を実現できたように、実際の誘導場面でも、ハードウェアによる指差誘導法と、誘導者による吸着誘導法の併用が有効と思われます。そのためにも、誘導者となる人の日ごろの訓練が重要なのは言うまでもありません。

第

# III

部

## 社会構成主義

従来、「科学Ⅱ自然科学」と考えられてきましたが、「科学Ⅱ自然科学＋人間科学」です。自然科学と人間科学は、その根底にある「哲学」が違います。本章では、自然科学の哲学である論理実証主義と、人間科学の哲学である社会構成主義について、わかりやすく説明します。グループ・ダイナミックスは、人間科学の一つです。

自然科学と人間科学が協力するには、互いの守備範囲を認識しておく必要があります。本章では、言説空間を分類し、自然科学と人間科学の守備範囲を明確にします。

## 1 論理実証主義

### メタ理論

本書の第Ⅰ部では、グループ・ダイナミックスの基本的な考え方と方法論を述べ、次いで、第Ⅱ部では、グループ・ダイナミックスのさまざまな理論とその協同的実践への活用例を紹介しました。それらを通じて、読者は、グループ・ダイナミックスが、物理学、化学、生物学等々の自然科学とは異なる研究スタンスを取ることに気づかれたでしょう。本章では、その研究スタンスの違いが、グループ・ダイナミックスと自然科学が立脚するメタ理論の違いによるものであることを説明します。メタ理論とは、第Ⅱ部で紹介したような個別の理論の根底にある「哲学」のことです。

少し結論を先取りするかたちで、本章の見通しを与えておきましょう。自然科学は論理実証主義（あ



とでわかりやすく説明します」というメタ理論に立脚しています。他方、社会構成主義というメタ理論に立脚する一群の科学も存在しています。本書では、社会構成主義に立脚する一群の学問を、「人間科学」と呼ぶことにします。グループ・ダイナミックスは、人間科学の一つです。

人間科学は、人間を対象にする科学であると早合点しないでください。自然科学と人間科学という分類は、あくまでもメタ理論による区別です。たとえば、人間についての生理学は、いかに人間を対象としていても自然科学です。また、古代の石器や土器という物質の化学的性質を研究していても、石器や土器を使用した人間たちを理解することが目的であれば、それは人間科学です。<sup>1)</sup>

### 論理実証主義——自然科学のメタ理論

まず、自然科学の根底にあるメタ理論、論理実証主義について説明しましょう。論理実証主義という「論理」とは、論理的な言語のことです。論理実証主義は、第2章(二二頁)で述べた「外界／内界」図式に立ちます。その上で、内界とは無関係に実在する外界の事実を、言語で表現します。言語には、日常言語の他に、数学言語、記号言語も含まれます。論理実証主義は、外界の事実を、言語に写し取るこ  
とができるという確信に基づいています。

「外界／内界」図式に立った外界の写し取り——その成果こそ、自然科学の知識です。その知識は、

1 「人間科学」という用語は、大学の学部や学科の名称として使用されています。また、この用語をタイトルに含む書物も出版されています。しかし、それらのほとんどは、「文系と理系を超えて人間を対象にする学問」という意味で使用されています。

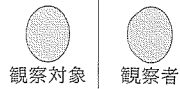


図 9-1 自然科学

第3章(五四頁)で述べたように、外在的知識(超越的な知識)です。外在的知識は、人間がそれを知ろうが知るまいが存在している事実についての知識です。たとえば、遺伝子の二重螺旋構造は、人間がそれを発見する前から存在していた事実です。また、当然のことながら、人間がそれを発見した(知るようになった)からといって、変化することのない事実です。

論理実証主義に言う「実証」とは、外界の事実と言語への写し取りを厳しく照合し、もし言語への写し取りに不備が見つかれば、言語への写し取りを改訂することです。外界の事実を言語に写し取ると言っても、簡単な作業ではありません。ある研究者の写し取りと他の研究者の写し取りに食い違いが出るかもしれません。あるいは、過去の写し取りとは異なる新しい写し取りが登場するかもしれません。そのような異なる写し取りのいずれが外界を正確に表現しているのか——それを決めるのが、外界の事実との照合、すなわち、実証です。

以上のような研究スタンスに立つと、一つの鉄則が出てきます——それは研究方法上の鉄則です。論理実証主義では、内界とは無関係に実在する外界の事実を言語に写し取るのが目的ですから、外界の写し取りが、写し取る人間の内界によって歪曲されることは断じて避けねばなりません。観察者の内界によって写し取りが歪曲されることは、主観的影響として厳しく排除されます。

### 観察対象と観察者の分離

そのためには、外界の観察対象と観察者を極力分離し、観察者の影響が観察対象に及ばないようにすることが求められます。そのためには、図9-1のように、観察対象と観察者を一線で分離し、一線の

向こう側に据えた観察対象を、観察者は一線のこちら側から観察しなければならないという鉄則が必要になります。たとえば、熱帯のジャングルに分け入り、そこにしか生息しない小鳥を超望遠レンズのカメラで遠方から撮影、観察するのは、その例です。小鳥は、まさか観察されているなどとは思わず、日ごろのあるがままの行動をします。それを、観察者は、観察対象にノータッチで観察するわけです。小鳥と観察者の間には一線が引かれ、両者は、一線のこちらと向こうに分離されています。

このようにノータッチが理想ですが、観察対象の性質を観察するには、ある程度、観察者が対象にタッチせざるを得ない場合もあります。たとえば、血圧を測定（観察）しようと思えば、血圧計を装着しなければなりません。あるいは、化学反応を調べるときのように、対象に実験操作を加える必要がある場合もあります。しかし、測定器具を装着するにせよ、あるいは、実験操作を加えるにせよ、それらは必要最小限にとどめねばなりません。間違っても、測定器具の装着や実験操作によって、本来観察したかった対象の性質が変化してしまつてはなりません。

## 2 社会構成主義

### 経済予測

論理実証主義で万時ことたりれば、自然科学オンリーでよいでしょう。しかし、私たちのまわりには、論理実証主義では知りたくないことを知ることができない、そんな現象も数多くあります。「観察者と観察対象の間に一線を引いて……」などと、論理実証主義の方法論的鉄則を守っていると、かえって手かせ

足かせにしかならない現象も多いのです。そのような現象の例を紹介しましょう。

まず、少々スケールの大きい話で、経済予測について考えてみましょう。向こう一年、景気はどうなるか、物価は上がるか下がるかなど、エコノミストと呼ばれる経済の専門家は、理論とデータに基づいて経済の動きを予測し、それをマスコミに発表します。この場合、いかにも、エコノミストは、一線のこちら側から、一線の向こう側に据えた対象（国民の経済活動）を予測しているように見えますが、実は、それほど単純な話ではありません。

たとえば、著名なエコノミストが、理論とデータをもとに、向こう一年、日本の景気はかなり悪くなると予測したとしましょう。そして、その予測が、マスコミで公表されたとします。そうすると、企業経営者の中には、「そうか、景気が悪くなれば、消費者のサイフのひもがきつくなるだろうから、少しでも商品の値段を安くしなければ」と考え、経費削減に努力し、製品の価格を下げる人が出てきます。もし、そのような経営者が多くなると、いろいろな商品の値段が安くなるわけですから、国民の購買意欲がそそれられ、結果として、物がよく売れ、企業ももうかり、景気が悪くならなくてすむ、ということになります。つまり、著名なエコノミストの予測は、幸いにもはずれたわけです。しかし、なぜ、はずれたかと言えば、エコノミストの予測を国民が知ることによって、対象（国民の経済活動）が変化してしまつたからです。

逆の場合もあります。今度も、著名なエコノミストが、景気が悪くなると予測したとします。すると、企業経営者の中には、景気が悪くなつて製品が売れなくなつたことを考えて、生産規模を縮小する人が出てきます。また、消費者の中には、今後は給料が上がらない、ひよつとすると収入が減るかもしれないと警戒して、早目から財布のひもを引き締める人が出てきます。そういう経営者や消費者が多

くになると、本当に商品の売買が減少してしまい、景気が悪くなってしまう。今度は、予測が当たったわけです。しかし、どうでしょう？ 予測が当たったのは、エコノミストの理論が正しかったからでしょうか？ 違います。エコノミストの予測を知った国民が、経済活動を変えたからです。かりに、エコノミストの理論が間違っていたとしても、権威あるエコノミストが予測をし、予測を信じた国民が経済活動を変えるならば、結果としては、予測が当たってしまう場合もあるのです。このような現象は、「予言の自己成就」と呼ばれています。予言（予測）が、その理論的根拠の正しさとは無関係に、勝手に当たってしまったという意味です。ふたたび、重要なことは、予測が当たったかに見える場合でさえ、決してエコノミストの理論が正しかったのではなく、予測対象（国民の経済活動）が予測によって変化してしまつたにすぎないということです。

このように、経済予測では、いくらエコノミストが、自分と予測対象の間に一線を引いて、一線の向こう側を対象を据え、一線のこちら側からクールに予測しようとしても、それは不可能なのです。なにしろ、予測対象がいったん予測を知れば、その姿を変えてしまうわけです。エコノミストが、対象についての事実をつかもうとしても、つかんだ瞬間に対象についての事実が変化してしまいます。エコノミストと対象の間には一線など引けそうにありません。

## 行動科学

次に、もっと身近な例をあげましょう。本屋さんに行きますと、どうすれば人間関係がよくなるか、職場の同僚にどのように接したらよいか、職場のリーダーは部下にどのようなリーダーシップを発揮したらよいか、などについて書かれた本がたくさん並んでいます。その中には、どうみてもかなりいい加

滅としか思えない本も多いのですが、同時に、心理学者や行動科学者が理論とデータに基づいて書いた本もあります。そのような本を開くと、たとえば、人間関係をよくするには、かくかくしかじかの行動を心がければよいといった理論が書かれており、その裏づけとなったデータが紹介されていたりもします。

ここで、ある課長がその種の本を読んで、「かくかくしかじかの行動」を学んだとします。その課長は決心しました——そうか、明日から、この「かくかくしかじかの行動」でいこう、と。翌日から、課長は、さっそく、「かくかくしかじかの行動」を実行に移しました。幸い、職場の部下は、その「かくかくしかじかの行動」によって、おおいにやる気を出し、仕事に熱が入るようになりました。さらに、「課長って、思っていたより能力があるんだね」「課長って、意外といい人なんだね」という声も聞かれるようになりました。

ところが、ある日、ぶらりと本屋に立ち寄った部下の一人が、たまたま、ビジネス書コーナーにあった一冊の本を手にとったとします。その本には、リーダーたるもの、いかにあるべきかが書かれており、結論として、「かくかくしかじかの行動」が部下の仕事に対する意欲を高めるのに有効であることが書かれていました。しかも、それが、たんなる著者の独断と偏見ではなく、多数の職場を調査した結果に基づいたものであることが書かれており、そのデータを示すグラフも掲載されていました。

本を見た部下はピンとききました——「あつ、これだ！ 課長、最近何か変わったと思ったら、これ読んで、これをやってるんだ」。こうして、「かくかくしかじかの行動」を知ってしまった以上、明日からも同じというわけにはいきません。課長の「かくかくしかじかの行動」が、部下に与える効果には必ずや変化が生じてしまいます。場合によっては、「課長の手のうち、わかっちゃった」とばかりに、「かく

かくしかじかの行動」の神通力がなくなってしまうかもしれません。でも、場合によっては、「課長は、けっこう忙しそうだけど、本もたくさん読んで、自分のリーダーシップを考えてるんだな。私も見習わなくては」と、課長に対する信頼が増すかもしれません。

### 知ることの影響

いずれにせよ、大事なことは、「かくしかじかの行動」についての知識をもつことによつて、「かくしかじかの行動」の効果が変化してしまうということです。整理してみましよう。まず、「かくしかじかの行動」の有効理論を見つけた研究者がいます。この研究者の研究対象は、さまざまな職場のリーダーと部下たちです。この研究者は、一線の向こう側に研究対象（さまざまな職場のリーダーと部下たち）を据え、自分は、一線のこちら側からクールにデータを収集し、「かくしかじかの行動」の有効理論を導き出しました。でも、その「かくしかじかの行動」の有効理論を、研究対象の一人（たまたま本を見た部下）が知ってしまうことによつて、その一人の研究対象には理論が通用しなくなってしまうわけです。

この例からも、研究者と研究対象の間に一線を引くという自然科学の流儀が通用しないことがわかります。前の例では、経済予測をするエコノミストと予測対象（国民の経済活動）の間に一線を引くことなどできませんでした。それと同じことが、職場のリーダーシップや人間関係を研究する心理学者や行動科学者と、その研究対象（さまざまな職場のリーダーと部下たち）についてもあてはまります。さらに、同じことが、研究成果である「かくしかじかの行動」の有効理論という知識を適用する側（課長）と適用される側（部下）についても言えます。理論を適用される側が理論を知ってしまうと、理論があては

まらなくなってしまうのです。理論を適用する側と適用される側の間にも一線を引くことなどでできそうにありません。

## カウンセリング

もう一つだけ、自然科学の流儀が通用しない例をあげておきましょう。今世紀には、脳科学や生命科学が飛躍的に進歩すると言われていきます。クロールン動物をはじめとする遺伝子工学の成果を見るにつけ、さらなる発展は間違いないように思えます。ここに、今世紀中ごろの、あるカウンセラーに登場してもらいましょう。そのカウンセラーは、進歩した脳科学や生命科学をよく勉強しているとします。そのカウンセラーのところに、あるクライエントが相談にきました。「どうも、最近、ノイローゼ気味なんです。昼間はまったく仕事に集中できないし、夜はなかなか寝つきません。うとうとしたかと思うと、真夜中にハッと目が覚め、そうなる、あれこれ頭の中に浮かんできて、もう夜明けまで眠れません。ふと、自殺してしまおうかと思うこともあるんです」——こう、クライエントが悩みを訴えます。

カウンセラーは、日ごろ勉強している脳科学や生命科学の知識を総動員して、クライエントに答えます——「うん、あなたの脳は、ドーパミンの分泌量が多すぎるのかもしれない。あるいは、最近のヒトゲノム研究によれば、あなたの遺伝子、DNAの構造の、この部分の配列がこうなっているのかもしれない……」。どうでしょう。こんなカウンセリングをやられた日には、このクライエント、その晩、ほんとに自殺してしまうかもしれません。

どこが変なのでしょう。それは、観察者（カウンセラー）と観察対象（クライエント）の間に一線を引いて、クールに観察しなければならぬ問題と、そもそも一線など引けない問題が、ごっちゃになっ



ている点です。もっと、はっきり言えば、クライエントが訴えている問題は、両者の間に一線など引けない問題であるにもかかわらず、カウンセラーは、一線を引くべき問題と勘違いしているのです。

### 社会構成主義とは

論理実証主義ではうまくいかない現象があるのですから、論理実証主義ではないメタ理論が必要です。その有力候補が社会構成主義です。

「すべての行為（認識を含む）は、なんらかの集合流に内在して初めて可能になる。すべての行為は、集合流の一コマとしてしか存立しない」——これが、社会構成主義の主張です。「集合流」とは、集合性の変化のことです。集合性は時々刻々と変化します。その集合性の変化を、水や空気の流れになぞらえて、集合流と呼ぶことにします。集合流に内在するとは、集合流にとっぴりつかっているということです。集合流の外から集合流を把握するなど、不可能であるということです。

このように、社会構成主義は、「心を内蔵した肉体」という人間像を否定しています。また、「外界／内界」図式も否定しています。「心を内蔵した肉体」という人間像や「外界／内界」図式に立てば、認識とは、外界を内界（肉体に内蔵された心）に捉えることです。また、行為は、内界で感じ、考えたことによつて駆動されることとなります。このように、「肉体に内蔵された心」に注目して、行為を説明しようとする立場は、「心理主義」と呼ばれています。すでに述べたように、論理実証主義も「外界／内界」図式に立っていますが、内界の影響を排除して、外界の事実を言語に写し取ろうとする点で心理主義とは一線を画しています。

それに対して、社会構成主義は、認識を含む行為はすべて、内在する集合流によつて可能になると主

張します。言いかえれば、私たちは集合流に操られているということです。また、行為も集合流によって決まります。歌の文句に「川の流れに身をまかせ……」というのがありますが、私たちは、集合流に身をまかせているのです。このように、社会構成主義は、心理主義を真つ向から否定します。第2章(三〇頁)で「かや」「こそ主体」と書いたとおりです。

### 社会構成主義に対する誤解

社会構成主義に対して、しばしば、次のような二つの誤解が見られます。その誤解を解くことによって、社会構成主義をよりクリアにしていきましょう。

第一に、社会構成主義とは、「社会」「世の中」という言葉があてはまるくらいに大域的な集合体だけを想定し、行為や認識は、そのような大域的集合体によって一方的に決定されるとする社会決定論の一種である、と見なす誤解があります。もちろん、社会構成主義が、そのような大域的集合体を射程に入れていることは間違いありません。しかし、それに加えて、問題とする現象に即して、大小さまざま、長短さまざまな集合流も射程に入れられます。現象によつては、ある人物をめぐる小規模で短期的な集合流が重要になることもあるのです。社会構成主義は、行為をさまざまな集合流が合流してできる複合的な集合流の中で形成されると考えます。

第二に、社会構成主義は、物理的実在を否定している、という誤解があります。この誤解には、「現実はずべて社会的に構成される」という社会構成主義者自身のセリフが災いしています。このセリフは、心理主義との決別を宣言しているセリフではあるのですが、認識論的側面を強調しすぎています。こんな過激なセリフを聞けば、大地震が起こったのも社会的構成の結果なのか、生まれたばかりの赤ん坊が、

一〇〇メートルを一〇秒で走る現実や、今すぐ天上の月が落ちてくる現実も社会的に構成されるのか、と批判したくなるのは当然です。

第2章冒頭で述べたように、集合性には、物理的集合性と意味的集合性の両側面があることを思い出せば、上の誤解は解決します。物理的集合性には物理的制約条件があります。決して、なんでもあり、ではありません。

あくまでも自然科学論の話としてですが、自然科学の営みを社会構成主義の立場から考察することは可能です。自然科学も、自然(物理的集合性)と研究(意味的集合性)を併せ持つ集合体の中で進歩してきました。その集合体には、研究者と、研究対象となる自然が含まれます。しかも、その集合体では、研究成果を述べた言説の没人称化(第6章一三九頁)が厳しく追求されます。自然科学の知見は、そのような集合体の産物に他なりません。

しかし、これは、あくまでも、社会構成主義の立場から見た自然科学論にすぎません。実際、自然科学の研究に携わる研究者が、研究とは社会的構成なのだなどと考えた日には、研究は進みません。外界にある事実、しかも、まだ言語に写し取られていない未知の事実を発見するのだというスタンスが必要です。そのスタンスこそ、論理実証主義なのです。

2 本当は、「時の流れに身をまかせ」(テレサ・テン)と「川の流れのように」(美空ひばり)をくつつけた文句です。

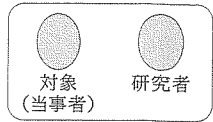


図9-2 人間科学

### 協同の実践

論理実証主義は、自然科学に「研究者と研究対象の間に一線を引く」という研究方法上の鉄則をもたらしました。では、社会構成主義は、人間科学にどのような鉄則をもたらすのでしょうか。

「すべての行為は、なんらかの集合流に内在して初めて可能になる。すべての行為は、内在する集合流の一コマとしてしか存立しない」という主張は、研究が行なわれる集合流、そして、研究者、研究対象にもあてはまります。たとえば、あるコミュニティに入った研究者が、コミュニティをつぶさに観察し、住民の話にも耳を傾けるうちに、コミュニティが抱える問題に気づいていったとします。それは、コミュニティの集合流（物理的・意味的集合流）に研究者も巻き込まれていったことを示しています。その集合流が、研究者の新しい気づき、すなわち、新しい現前（第2章二四頁）を可能ならしめたのです。

このように、社会構成主義に立てば、研究者と研究対象は、同じ集合流に巻き込まれていくことが必須条件になります。そうでなければ、新しい気づきも発見もあり得ません。同じ集合流に巻き込まれるということは、意識的か無意識的かは別にして、一緒に何かをやっている状態になるということです。研究者と研究対象（当事者）が一緒に何かをやっていることを、両者による「協同の実践」と言います。図9-2は、このような人間科学の両者の関係を示しています。図9-1と比較してください。第3章で述べたように、グループ・ダイナミックスは、この協同の実践を自覚的に行なう分野です。

グループ・ダイナミックスほど自覚的に協同の実践を行なわないう学問分野でも、意味的集合性にかかわる研究をしようとすれば、当事者との協同の実践は不可欠です。意味は集合体の中で形成されるので

すから、その集合体の中に入り、集合流の中に巻き込まれることなしに、意味を知ることが不可能です。おそらく、なんらかの現実の現象を対象にする人文・社会科学は、研究者が自覚的か否かを別にすれば、なんらかの協同的実践を行なっているはずですが、ただ、社会学や経済学のように、協同的実践の場となる集合体がきわめて大きい場合には、協同的実践を行なっているという感覚をもちにくいだけの話です。あるいは、歴史学のように、過去の文献や遺品がコミュニケーションの道具になる場合にも、過去の人々と協同的実践を行なっているという感覚はもちにくいでしょう。しかし、感覚的にはそう感じなくても、研究対象の集合流に研究者も身を置いているという意味で、研究対象との協同的実践を行なっているのです。

以上をまとめると、論理実証主義が研究者と研究対象の分離という方法上の鉄則をもたらずのに対して、社会構成主義は、研究対象（当事者）と研究者による協同的実践という鉄則をもたります。自然科学は、論理実証主義に立って、人間が知ろうが知るまいが存在する事実を探究します。それに対して、人間科学は、社会構成主義に立って、協同的実践を遂行します。そこでの事実とは、協同的実践の参加者が知ったからこそ事実になったのです。このように、両者の間には、「事実とは何か」という点で大きな違いがあります。

#### 何がおかしかったか

先に、論理実証主義の方法的鉄則が通用しない例として、経済予測、行動科学、カウンセリングの例をあげました。実は、これら三つの例では、いずれも、当事者と研究者の協同的実践が行なわれています。そこでは、協同的実践の参加者が「それ」を知ることによって初めて、「それ」が事実になる重要

なプロセスが含まれています。

経済予測の例では、エコノミストの予測は、国民の経済活動を変化させ、その結果、予測がはずれたり、当たったりしました。しかし、予測がはずれた場合も、当たった場合も、予測によって国民の経済活動が変化したのは、国民が、その予測に注目したからです（予測を知ったからです）。国民が経済活動を行なう上で、経済の動きを予測することは重要です。予測は、国民に求められているのです。その求めに応じて、エコノミストは予測をします。すると、今度は、国民の方が、その予測に基づいて経済活動を変更するわけです。これは、まさに、エコノミストと国民の協同的实践に他なりません。

次は、「かくかくしかじかの行動」有効理論を使った課長と部下の例。この例の課長は、「かくかくしかじかの行動」有効理論を勉強し、これを活用しているかぎりにおいては研究者と同じです。研究者と言っても、大学や研究機関の研究者に限定してはいけません。だれでも理論を勉強し、それをベースに動こうとすれば、そのかぎりでは研究者です。

課長と部下は、日ごろから、同じ職場で働いています。まさに、日々、協同的实践を行なっているわけです。その協同的实践の中で、「かくかくしかじかの行動」有効理論も用いられたのです。前の例では、部下が課長と同じ本を読んで、もろに、「かくかくしかじかの行動」有効理論を知ってしまった、という極端な話になっていました。ここまで極端な話ではなくても、突然、課長の行動が変化すれば、部下は、「おやっ」と思うはずですよ。そして、「どうしてだろう」と理由を考えるでしょう。あるいは、「どうしたんですか？」と、課長に尋ねるかもしれません。その結果、「かくかくしかじかの行動」の効果が左右されることは、十分あり得る話です。このように、「かくかくしかじかの行動」有効理論を本で知った課長が、その理論を試みること自体、課長が望むと望まざるとにかかわらず、部下との新

たなる協同的実践が始まってしまふきっかけになるのです。

最後に、カウンセリングの例。この例では、カウンセラーが研究者です。そもそも、カウンセリングは、クライエントの悩みをカウンセラーが受容し、クライエントだけが知っていた（感じていた）悩みを、二人にとっての事実にするところから始まります。これも、まさに、協同的実践です。この点で、いわゆる心の病と心臓の病は、決定的に異なります。心臓の病という事実は、たとえ、患者本人が気づいていなくても、また、医者が気づいていなくても、存在しています。しかし、心の悩みは、クライエントも感じ、カウンセラーも気づいているときに、事実として存在します。しかも、その事実は、二人の協同的実践を通じて、事実になるのです。前の例は、クライエントの心の病を、あたかも心臓の病であるかのように勘違いした例と言えます。

### 3 言説空間——自然科学と人間科学の守備範囲

いかなる言説を生成するか

言うまでもなく、論理実証主義に立脚する自然科学と社会構成主義に立脚する人間科学は車の両輪です。グループ・ダイナミックスのようにさまざまな現場のベターメントに取り組もうとすれば、ほとんどの場合、自然科学、あるいは、自然科学を応用する工学、医学、農学などの専門家と協働することが必要になります。

ひと口に、自然科学、あるいは、その応用分野といつても、その専門とする現象は多様です。しかし、

専門とする現象そのもの以外に、人間科学と自然科学（応用分野を含む）の間には、現象に関して、いかなる言説を生成するかという点で大きな違いがあります。人間科学と自然科学が協働していくには、互いが守備範囲とする言説の違いを、互いに理解しておく必要があります。

### 知覚的言説／概念的言説

そのために、まず、言説全体（言説空間）を三つの分類軸で整理しておきましょう。私たちは、すでに第6章第4節で、「分析的言説／接合的言説」「人称的言説／準・没人称的言説／没人称的言説」という二つの分類軸を学びました。ここでは、三番目の分類軸として、「知覚的言説／概念的言説」という軸を導入します。

知覚的言説とは、現前する具体的な世界や具体的な経験を指示対象にして、それを述定する言説です。咲き乱れる桜を見ながら発する言説、「きれいだな」は、知覚的言説の一例です。それに対して、概念的言説は、抽象的な概念を使って組み立てられる言説のことです。たとえば、「桜はバラ科の植物だ」という言説は、「桜」「バラ科」「植物」という概念で組み立てられた概念的言説です。知覚的言説か概念的言説かは、程度の差です。目の前の桜を見て発せられた「この桜は美しい」という言説には、「美しい」という知覚と「桜」という概念が含まれていますので、知覚的言説と概念的言説の中間に位置します。

### 言説空間の分類

以上の三つの分類軸を使って、言説空間を分類し、人間科学と自然科学の守備範囲を明確にしてみま



	人称的言説	準・没人称的言説	没人称的言説
自然科学 知覚的言説 概念的言説			● ●
人間科学 知覚的言説 概念的言説	● ●	● ●	

表 9-1 科学における言説空間の構成

しよう。表 9-1 は、「知覚的／概念的」「人称的／準・没人称的／没人称的」という二つの軸を使って、言説空間を分類したものです。

このように言説空間を分類した場合、自然科学の特徴は、徹底して没人称的言説を追求するところにあります。没人称的言説とは、言説の意味内容と真偽が、その言説がだれの言説かによって、まったく左右されない言説です。没人称的言説でなければ、自然科学の言説たりえないのです。自然科学の没人称的言説には、知覚的言説と概念的言説があります。知覚的言説は、実験や観察のデータです。一方、概念的言説は理論です。

自然科学の言説を、「分析的／接合的」という分類軸で見ると、どうなるのでしょうか。自然科学は分析的言説へと向かう強い傾向があります。しかし、自然科学の言説がすべて分析的言説かと言うと、そうは言えません。たとえば、生物の進化論は、接合的言説の色彩をもっています。

### 人間科学の守備範囲

自然科学の守備範囲が没人称的言説であるのに対して、人間科学の言説の特徴は、あくまでも準・没人称的言説にとどまり、純粹な没人称的言説には至りえないところにあります。これは、人間科学の言説が、ローカルな場で行なわれる当事者と研究者の協同的実践から紡ぎ出されることの結果です。

当事者と研究者の協同的実践では、人称的言説も重要です。同じ言説でも、

ある人が発すれば他者にインパクトを与えますが、別の人だと何のインパクトもありません。当事者と研究者の協同的实践に限らず、そもそも協同的な実践とは人称的言説によって進んでいきます——ある人物Aが、ある主張をする→その主張の意味は、発言者がAであることと密接に関係している→それがBが反論する→その反論も、発言者がBであることと密接に関係している、といったぐあいです。

人称的言説の中に準・没人称的言説が含まれる場合もあります。と言うよりも、準・没人称的言説が協同的実践の中で使用されるほとんどの場合、準・没人称的言説は人称的言説の中で使用されます。同じ準・没人称的言説でも、だれの人称的言説の中で使用されるかによって、異なる意味をもちます。たとえば、「地域の活性化にとって、他の地域との交流は不可欠である」という準・没人称的言説があり、そのこと自体にはだれも異論がなかったとしても、自分たちの地域を熟知している人が発した人称的言説の中で使用される場合と、自分たちの地域をほとんど知らない人が発した人称的言説の中で使用される場合では、そのインパクトはまったく違ってきます。

同じことは、自然科学の没人称的言説にもあてはまります。論文や教科書に出てくる没人称的言説ならばいざ知らず、研究者と当事者の協同的実践で没人称的言説が使用されるほとんどの場合には、人称的言説の中で使用されます。たとえば、研究者が協同的実践の中で発する没人称的言説も、それを発するのは特定の人物（特定の研究者）であり、その人物がどういう人かによって没人称的言説がどのように受け止められるかが異なってきました。

すでに述べたように、自然科学では分析的言説のウェイトが大きいものに対して、人間科学では接合的言説のウェイトが大きくなります。エスノグラフィ（コラム312、六六頁）は接合的言説の典型です。もちろん、人間科学でも分析的言説は重要です。第II部で紹介した理論（理論言説）は、分析的言説で

構成されています。しかし、それらの理論で、歴史性をもつ現象を説明しようとするれば、接合的言説に頼る部分が多くなります。

以上、当事者と研究者の協同的实践で使用される言説を整理し、自然科学と人間科学の守備範囲を論じてきました。協同的実践の言説空間では、どの種の言説が優れているとか、どの種の言説に他の言説を還元すべきかを問題にするのはナンセンスです。どの種の言説も、それなりの価値をもっています。また、同時に、同じ種類の言説どうしはもちろん、種類の違う言説の間にも、相互に刺激しあう関係があります。こうして、種類を異にする多様な言説が互いに刺激しあいながら、言説空間全体を豊かにするのです。第3章(六〇頁)で述べたように、協同的実践で研究者が果たすべき役割は、言説空間を豊かにすることです。

自然科学と人間科学は、車の両輪です。しかし、悲しいかな、現在のグループ・ダイナミックスや社会心理学の学術雑誌は、自然科学の流儀に固執した不毛な研究で溢れています。実は、私自身もかつては、そのような不毛な研究に明け暮れていました。本章では、私が過去に発表した論文をまな板に載せて、その間違いを具体的に指摘します。その上で、人間科学の実験はいかにあるべきかを論じてみます。

人間科学にとっても、データ収集、データ解析は必要です。しかし、現在の社会心理学やグループ・ダイナミックスで行なわれているデータ解析は問題だらけです。その問題を指摘し、代替案を提示します。

## 1 「自然科学的」研究

### 「自然科学的」研究の実例——私の論文

前章では、メタ理論を異にする自然科学と人間科学という二つの科学が必要なことを述べました。しかし、今なお、一部の学問領域では、人間科学のスタンスで行なわれるべき研究が、自然科学のスタンスで行なわれるという事態が続いています。その典型こそ、グループ・ダイナミックス、あるいは、社会心理学で行なわれている「自然科学的」研究です。本章では、本来、人間科学のスタンスで行なわれべき研究を自然科学的スタンスで行なう似非<sup>えせ</sup>・自然科学的研究を、「自然科学的」研究とカッコつき

で表記します。『*Journal of Personality and Social Psychology*』、『*Journal of Experimental Social Psychology*』といった国際的に「評価の高い」学術雑誌は、そのような「自然科学的」研究論文で埋め尽くされています。また、わが国の『実験社会心理学研究』（日本グループ・ダイナミックス学会の機関誌）、『社会心理学研究』（日本社会心理学会の機関誌）も、「自然科学的」論文が多数を占めています。

本章では、まず、「自然科学的」論文とはいかなるものか、その具体例を読者に提示してみます。それは、他ならぬ私自身が過去に書き、『実験社会心理学研究』（第一六巻第二号、一九七七年）に掲載された論文です。私が、本書で主張している人間科学に向かって方向転換をした一九八〇年代半ば（三〇歳代半ば）以前に書いた、まだ若かりしころの論文です。その論文をまな板に載せて、「自然科学的」であらうとしたがために、どのようなウソを書いてしまったかを具体的に指摘します。

以上の自己批判をも踏まえて、次に、人間科学の実験がいかになされるべきかを論じます。工学でも、新しい製品を開発した場合、従来の製品と新しい製品を実際に使用してもらって評価するという「実証実験」が行なわれています。それらの実験には、自然科学の実験というより人間科学の実験と言った方がよいものも少なくありません。また、第8章第5節では、二つの避難誘導法を比較した私自身の実験を紹介しました。このように、人間科学でも、実験は研究方法の一つです。しかし、同じく実験という言葉は用いられていても、人間科学の実験は、自然科学の実験とは違います。

それに続いて、私自身の論文を含めて、「自然科学的」研究で使われているデータ解析の問題点を指摘します。「自然科学的」研究では、数値データが格別の重要性をもっています。しかし、「自然科学的」研究では、データのもつ貴重な情報を捨て去るような解析手法がまかり通っています。第3章で述べたように、人間科学の現場（当事者と研究者による協同的実践の現場）でも、データは貴重な情報源です。

人間科学の現場で「自然科学的」研究の過ちを繰り返さないためにも、「自然科学的」研究のデータ解析の誤りを見ておきましょう。

## 仮説

繰り返しますが、本章で「自然科学的」とカッコつきで表記しているのは、似非・自然科学的という意味です。巻末の「似非・自然科学的研究論文の例」をご覧ください。これは、私自身が「自然科学的」研究を真剣にやっていたところに書いた修士論文です。のっけから数式が登場しますが、ここにもなんとか自然科学的であろうとした当時の願望が顔をのぞかせています。今に思えば、数式なんかまったく必要ありませんでした。

要するに、この研究でやったことは、次のような仮説の実証です——「集団で物事を決めるとき、各メンバーが決定に及ぼした影響がどのくらい均等か（影響量の均等度）と、決定に対する満足度の間には、逆U字型の関係があるだろう。言いかえれば、メンバーたちの満足度が最大になるのは、影響量が完全に均等な場合でも、影響量が極端に不均等な場合でもなく、その中間的な状況、つまり、ある程度の不均等がある場合である」。

この仮説（仮説A）は、平たく言えば、「メンバーのうちだれかが、ある程度大きな影響力を発揮して、決定プロセスをリードした方が、完全平等よりもメンバーは満足するだろう」という内容です。「そんなこと、当たり前じゃないか」と言われれば、そのとおりです。しかし、当時は、「メンバー参加型とワンマン型のどちらがいいか」という、あまりにも大雑把な比較しか行なわれていませんでした。そこに、均等度という量的概念を持ち込んだのが、唯一のとりえだったと思います。以上は、論文中の仮説

Aについてでしたが、仮説Bについては、論文の中でも仮説の根拠めいたものは書かれていません。当たるも八卦、当たらぬも八卦、の仮説でした。

ちなみに、この実験を行なったころは、満足度と言うときの満足を「肉体に内蔵された心」で感じる満足であると信じて疑いませんでした。現在ならば、満足を、現前する状況（メンバーによって決定する単語の数に違いがあったりなかったりし、自分が何個決めることができたかという状況）に対する意味として考えますが、当時は、「人間 $\parallel$ 心を内蔵した肉体」という人間観にみごとに呪縛されていました。

### 被験者

以前、私より一回り年長の先生から、おもしろい話をうかがったことがあります。その先生は、根っからの人間科学の研究者で、「自然科学的」な研究には批判的でした。その先生が、「自然科学的」論文か否かを見分ける簡単な方法を教えてくださいました。それは、論文の「方法」の部分を見るといいのです。「方法」の部分が、「被験者は大学生〇名……」といった簡潔な記述で始まっていたら、「自然科学的」論文と判断して間違いないというのです。図星、私の論文にもあてはまります。

被験者には、どうやって実験室に来てもらうのでしょうか。そんなことは、論文にはまったく書かれていません。しかし、生理学の実験ならばいざ知らず、グループ・ダイナミックスや社会心理学の実験であれば、実験の直前まで何をしていたか、どういう理由で被験者になったのかは、無視できない要因であるはずです。たとえば、たまたま授業が休講になって、ちょうどよい暇つぶしとばかりに実験室に来た被験者と、定期試験の勉強中だったのに実験者から無理に頼まれてしぶしぶ実験室に来た被験者では、実験に対するノリも違うはずです。

私の実験の場合どうしたかという、もっぱら私自身の友人関係と、友人の友人関係にすがって被験者を集めました。したがって、一回の実験に参加した二人の被験者（三人集団でしたが、一人はサクラでした）の組み合わせはさまざまでした。コントロールしたのは性別だけでした。多弁な二人の組み合わせ、寡黙な二人の組み合わせ、見るからに陽気な人と陰気な人の組み合わせなどなど。実験の直前まで何をしていたか、だれから依頼されて実験室に来たかなど、私の眼中にはまったくありませんでした。「とにかく被験者に来てもらえたら」と思う毎日でした。

以上は、私の実験の被験者についての話でしたが、一般的には、さまざまな被験者の集め方がありません。もっともドライな方法、しかし、お金がかかる方法は、アルバイトとして被験者に来てもらうという方法です。あるいは、実際に実験で何かをやってもらう代わりに、「もし、三人で何かを決める場合、だれか一人が全部決めてしまったら、どう思いますか？」などとアンケートをするのであれば、授業内容にかこつけて受講生を被験者にしてしまうという手もあります。米国の大学では心理学部の建物に入ると、壁際の目立つ場所に長テーブルが置いてあり、その上に記名ノートが並んでいます。記名ノートは、その時点で心理学部の教員や院生たちが行なっている実験の数だけ並んでいます。心理学部の学生は、単位取得の一環として、いくつかの実験の被験者になる必要があります。記名ノートは、被験者になるための予約簿です。インターネットの普及にしたがって、予約簿がオンライン化しているのは言うまでもありません。

### 実験結果の再現性

自然科学では常識ですが、実験に限らず実証的研究の信憑性は、研究結果に再現性があるか否かにか



かっています。論文に書かれている実験方法どおりにやれば、だれでも論文に書いてある実験結果を得ることができるといえる——それが再現性です。新しい発見の先陣争いが熾烈な分子生物学のような領域では、発表を急ぐあまり、再現性が十分確認されていない研究が報告され、批判を浴びるケースが出ています。自然科学では、再現性はそれほど重要なことなのです。

では、私の論文ではどうでしょうか。正直なところ、再現性など、私はまったく自信ありません。まあ、それほど常識からかけ離れた仮説ではありませんので、論文の結果が再現されることもあるでしょうが、そうかと言って、先ほど述べたように適当に集めてくる被験者相手に、必ず実験結果が再現されるなど、とても言えません。「再現されるも再現されぬも、確率半々」というのが、偽らざる気持ちです。この実験をやったときも、そうでした。Fig. 2の曲線関係（三人の影響量が、ある程度不均等なときに満足度が最大になることを示す曲線）が得られたときには、「やれやれ、これでなんとか修士論文が書ける」と安堵したのを今でも覚えています。

本章の最初に、社会心理学やグループ・ダイナミックスの分野で国際的に評価の高い学術雑誌や、わが国の学術雑誌をあげましたが、それらに掲載されている論文で報告されているデータに、いったい、再現性はあるのでしょうか。その判断は、読者に任せます。ちなみに、『実験社会心理学研究』は、独立行政法人「科学技術振興機構」のデータベース「J-STAGE」にアクセスすれば、だれでも読むことができます。

## 2 人間科学の実験

### 「実験室」はフィールドの一種

人間科学では、実験という手法は、まったく利用価値がないのでしょうか。そうではありません。どんなテーマでも何か新しいアイデアが浮かんだとき、「いろいろ頭で考えるより、実験をして試してみよう」と思うのは当然です。たとえば、新しいアイデアに基づいて新製品を開発したとき、新旧の製品を実際に使ってもらい、使い勝手の良さを評価してもらおう実証実験は、工学の分野でもよく行なわれています。その場合、第9章第1節で述べた自然科学の鉄則が通用するかどうか、大きな分かれ道です。生理的指標や単純な行動指標で十分ならば、自然科学の実験でいくことができます。しかし、どうしても実験者と被験者を一線で分離することができず、両者の間に相互作用が生じてしまう場合には、人間科学の実験であることを自覚すべきです。

人間科学の実験は、かりに「実験室」と称される場所で行なわれようと、一つのフィールド（現場）研究です。基本的に、「実験室」と、実際の組織やコミュニティの間に違いはありません。第3章では、当事者と研究者の協同的実践の特徴を五点述べましたが、それらの特徴は、そっくりそのまま「実験室」での協同的実践にもあてはまります。「実験室」では、実験者が研究者、被験者が当事者に相当します。被験者が、見も知らぬ「実験室」の当事者となること、そして、意図せずして実験者との協同的実践に巻き込まれることが、「実験室」というフィールド（現場）の大きな特徴です。

フィールド研究では、何はさておき、どんなフィールドなのか、当事者はどんな人たちなのか、非常

に重要な情報です。論文の中にも、それらが詳細に書かれなくてはなりません。それらの情報は、第3章のコラム3-2で紹介したエスノグラフィでも詳細に記述されます。「研究対象者(被験者)は男子大学生四八名、……」といった記述では話になりません。フィールド(たとえば、実験室)についても、物理的な構造だけではなく、被験者にとつてどのような意味をもつ空間なのか記述されるべきです。人間科学の実験は、被験者と実験者の協同的実践ですから、再現性など保証されるはずがありません。同じ被験者でも、実験者が老教授か、あるいは若い大学院生かで、異なる反応を示すのは当たり前です。では、再現性も保証されない実験をやる意味などあるのでしょうか。

### 探索的な姿勢

通常、自然科学の実験では、実験に先立って明確な仮説が立てられます。たとえば、Aという触媒よりもBという触媒を使った方が、ある気体の発生量が多いだろうといった仮説です。その仮説が支持されるか、棄却されるか、それを決するのが実験です。言うまでもなく、その実験結果は、他の人がやつても再現されることが必須条件です。実験によつて得られたデータは、後に説明する仮説検定という統計手法によつて分析されます。それに対して、「自然科学的」実験は、再現性は保証されないにもかかわらず、仮説検定だけは自然科学をまねてきました。

人間科学の実験は、「探索的」に行なう必要があります。人体の医学的・生理的なことは専門家しか知りませんが、日常の行為については、私たちはかなりの知識をもっているものです。しかし、日常の行為についてなんでも知っているわけではありませんし、知識はもっていても、どうすれば現状を変えていけるかは、試行錯誤をやりながら「探索」していく以外にありません。そこに、いくばくかでも貢

献しようというのが、人間科学です。しゃにむに自然科学のような明確な仮説を立てようとすると、「顔を東に向ければ、背中を西を向く」といった、あまりにも自明な仮説になってしまう。

### 探索的とは

では、探索的な実験とはどのようにやるのでしょうか。実験ですから、あらかじめ仮説を立てるのは、ごく自然なことです。ラッキーであれば、仮説どおりの実験結果が得られるかもしれません。しかし、それは、あくまでもラッキーであつたにすぎません。被験者は、どうして自分が予想した方向に反応したのか、実験者は被験者の声に耳を傾けることが重要です。そうしたら、たしかに自分が予想した反応ではあつても、自分が予想もしなかつた原因によつて、そのように反応した人を見つけることができるかもしれません。その原因は、実験者の思考を膨らませてくれるはずで

また、かりに平均値だけを見れば仮説が支持されたとしても、被験者の中には、仮説とは異なる反応をしている人がいるはずで

す。そこには、自分が思いもしなかつた理由が潜んでいるのかもしれない。間違つても、「統計的検定の結果、仮説が支持された」と、得意げに論文を締めくくるものではありません。

他方、仮説どおりの実験結果が得られなくても、実験は失敗だつたとがっかりする必要はありません。たんに、アンラッキーだつたにすぎないのです。かりに、平均値では仮説どおりの結果にならなくても、仮説どおりに反応した人も少数ながらいるはずで

す。同時に、より多くの人は仮説どおりに反応していません。では、結果的に仮説どおりに反応した人と、反応しなかつた人では、どのような違いがあるのか。その違いを探索すればよいのです。このような探索をするには、実験のあとに追加的な情報を収集

することも必要になるでしょう。

このように、仮説が支持されようがされまいが、そんなことよりも探索的に情報を集め、現実を捉える思考の幅を広げていくことの方が重要です。それには、実験の計画そのものを、多様な探索ができるように組むことが必要です。また、実験データを分析する方法も、仮説が支持されたか否かという仮説検定ではなく、データに潜む傾向をあぶり出していけるような手法（探索的データ解析）を採用することが必要です。探索的なデータ解析の手法については、次節で紹介いたします。

### 「権威への服従」実験

実験、とりわけ、「実験室」での実験は、私たちが生活する現実の世界とはかけ離れています。したがって、ある仮説が探索的に発見できたとしても、現実世界でもそうかと言われると、なかなかそうは言いきれません。したがって、人間科学の「実験室」実験は、従来行なわれてきたよりも、かなり狭い範囲でしか役に立たないでしょう。

そう考えてくると、「実験室」実験の意義は、「そんなこともあるのか！」と目から鱗を落としてくれるところにしかありません。そのような実験は、自然科学でも価値ある実験ですが、人間科学の実験では、そのような実験しか意義がないと言ってもよいでしょう。今までの社会心理学やグループ・ダイナミックスの実験にも、少数ですが、そのような実験があります。S・ミルグラムという米国の社会心理学者は、そのような実験を二つ行なっています。

その一つは、「権威への服従」実験と呼ばれている実験です。<sup>1</sup> その実験では、被験者は、ある研究者のアシスタントを頼まれました。その研究者は、単純作業の習得に対する罰の効果を研究していました。

つまり、作業を間違つたときに、電気ショックのような罰をどの程度与えると習得が速く進むかを研究していました。被験者が到着すると、実験室に案内されました。その実験室では、一人の「被験者」が作業机に向かつて単純作業を開始しようとしていました。しかし、本当は、その「被験者」はスクラであり、研究者との打ち合わせどおりに演技をすることになっていたのでした。もちろん、そのことをアシスタントである被験者は知る由もありません。

研究者は、「被験者」がエラーをしたときには、自分の指示に従つて電気ショックを与えるよう、アシスタントに命じました。実験が始まると、「被験者」は頻繁にエラーをしてしまいます。そのたびに、研究者は、アシスタントに、電気ショックのレベルを上げるよう指示しました。「被験者」の顔は苦痛にゆがみます。それにもかかわらず、研究者は、さらに電気ショックのレベルを上げるようアシスタントに要求します。驚くことに、アシスタントの被験者は、大声を上げて苦しむ「被験者」を目の当たりにしながらも、研究者の指示に従いつづけたのです。

被験者に、むごい行動をさせたのは、研究者の権威でした。権威ある人から命じられれば、ふだんはしないようなむごいことでもやってしまう——権威に服従する怖さを示した実験でした。この実験は、まだ第二次世界大戦の記憶が新しくなつた一九六〇年ごろに行なわれています。ミルグラムの頭にあつたのは、ナチスによるユダヤ人の虐殺です。ヒトラーを頂点とする絶大な権威が、多くの兵士を残酷な行為へと駆り立てました。

ヒトラーのような絶大な権威でなくても、いち研究者（大学教授）の権威によつてさえ、被験者はむごい行為に手を染めてしまいました。「そこまで、人間は権威に弱いのか」と、多くの人々が驚きま

## 「スモールワールド」実験

ミルグラムは、「スモールワールド」実験というおもしろい実験も行なっています。<sup>2</sup> 日本でも「世間は狭い」と言われますが、スモールワールド実験は、いかに世間が狭いかを数字で示してくれました。

この実験では、任意に選ばれた二人が、何人の友人を介して結ばれるかを調べました。具体的には、まず、米国中部にあるネブラスカ州のある町に住む一六〇人に対して、ボストン（米国東部）に住む、ある株式仲買人の名前と写真を提示し、「この人物を知っているような友人に手紙を書いてください」と依頼しました。その友人にも同様の依頼をし、この手続きを繰り返していきました。いったい、何人の友人を介したら、ボストンの株式仲買人に到達したのでしょうか。

実験の結果、一六〇通中四二通（二六％）が目標人物に到達しました。しかも、それらは、平均で約六人の友人を介するだけで、目標人物に到達したのです。世間が狭いことは、しばしば経験していても、ここまで狭かったとは驚きです。

ミルグラムの実験は、「そんなこともあるのか」と視野を広げてくれた数少ない実験の例です。人間科学の実験が、一種の現場研究（当事者と研究者の協同的実践）であれば、第3章で述べた「一次モードから二次モードへの進展」（五四頁）「ローカルからインターローカルへの進展」（五八頁）という性質があてはまるはずで、「権威への服従」実験は、あるローカルな場（実験室）で行なわれた協同的実践で

1 S・ミルグラム『服従の心理』（山形浩生訳、河出書房新社、二〇〇八年に新訳）

2 S・ミルグラム「小さな世界問題」野沢慎司・大岡栄美訳（野沢慎司「編・監訳」『リーディングス——ネットワーク論・家族・コミュニティ・社会関係資本』所収、勁草書房、二〇〇六年）

す。スモールワールド実験にしても、手紙の連鎖はローカルな協同的实践です。そして、ミルグラムの論文や本を読んだ読者は、実験というローカルな実践とインターローカルな関係をつくります。それによって、多くの読者が従来の「気づかざる前提」に気づき、一次モードから二次モードへと進展することができたのです。その意味で、少々、過激な表現を使えば、ミルグラムの実験は、読者の「気づかざる前提」を撃破するゲリラ的行為であつたわけです。

もちろん、ミルグラムの実験と言えども、再現性はありません。たとえば、「権威への服従」実験でも、サクラの演技のできれば、実験者の風体、被験者の特性等々の要因が少しでも変化すれば、同じ結果が出るとは限りません。また、スモールワールド実験でも、目標人物が白人か黒人かで、到達した手紙の数が大きく左右されることが見出されていますし、人種の違い以外にも、実験者にさえわからない数多くの要因が影響を与えているはずですから、それらの要因が変化すれば、実験結果もまた変化するでしょう。

ここで、現在の社会心理学やグループ・ダイナミックスの大部分を占める「自然科学的」研究に話を戻しましょう。「自然科学的」研究は、常識でもわかっている現象を、ことさらいかめしい概念を用いて記述し、「こんな条件のもとでは——となるが、別の条件のもとでは——となる」といった条件分析に終始しています。しかし、分析するデータは、上で述べたように、再現性の保証されないデータばかりです。最近では、実際に実験をする時間と労力が惜しいのか、実験もせずに、短いストーリーを被験者に読ませて、「あなたが登場人物だったら、どうしますか」と尋ねる安直な「アンケート実験」も横行しています。「自然科学的」研究の特徴を、ひと言で要約すると、「不必要に難解に記述した理論を、信頼性のないデータで検討する」研究と言えるでしょう。



実は、「自然科学的」研究には、もう一つの大きな問題があります。それは、実験にせよ、アンケート調査にせよ、収集したデータをどのように分析するかというデータ解析の問題です。次節では、この問題を取り上げます。

### 3 データ解析の問題

#### 二つの問題点

前章で述べたように、自然科学の根底には、論理実証主義というメタ理論があります。論理実証主義とは、「現実との厳しい照合作業、すなわち、実証の作業を通じて、研究対象を論理的な言語に写し取っていくことを使命なり」という主張です。論理的な言語の典型は数学言語です。したがって、自然科学では、極力、数値で研究対象を描写することが理想です。

自然科学に憧れるグループ・ダイナミックスや社会心理学の「自然科学的」研究が、数値データにこだわるのは無理からぬことでした。しかし、そこには、少なくとも二つの問題点を指摘することができます。人間科学でも、知覚的言説、より正確には準・没人称的な知覚的言説（前章二五二頁）の一つとしてデータは重要です。そのデータは、当事者と研究者の協同的実践の糧になります。しかし、その場合も「自然科学的」研究の誤りを繰り返してはいけません。本節では、「自然科学的」研究のデータ解析を批判するのみならず、人間科学のために代替案も提示していきましょう。

## 連続量願望

「自然科学的」研究のデータ解析に指摘できる第一の問題は、「何がなんでも連続量を得たい」という連続量願望から生じる問題です。ここで言う連続量とは、身長や体重のように実数で表現できる量のことです。「自然科学的」研究者の連続量願望は、並々ならぬものです。なにしろ、アンケート調査で、ある意見を提示して、賛否の程度を調べたデータが、あつという間に、「非常に賛成」五点、「やや賛成」四点、「どちらでもない」三点、「やや反対」二点、「反対」一点と数値化されてしまうのですから。本書末尾の私の論文も、例外ではありません——質問紙の質問への回答が、「あのような決め方でよいと思う」ならば四点、「決め方には少し不満が残る」ならば三点、というふうに数値化され、その数値は連続量（実数）として処理されています。

こうして、いったん、数値化されたデータは、最初から連続量であつたかのように一人歩きを始めます。百歩譲って、最初の一点、二点、……という数値化を認めるにしても、それらは所詮一桁の整数です。ところが、所詮一桁の整数データであるにもかかわらず、一流といわれる学術雑誌の掲載論文にすら、平均三・四五、相関係数〇・七八九といった数値が、小数点以下二桁、三桁の精度をもつかのように報告されています。そこには、有効数字についての常識のかけらも見られないばかりか、測定精度を一桁あげること必死の努力を傾注する理系の研究者に対する愚弄さえ感じられます。このような数値化に基づいて、さらには、多次元正規分布という、およそ非現実的な仮定まで立てて因果関係の構造を求める分析手法（共分散構造分析など）もよく使われています。私には、パソコン遊びとしか思えません。

## 実用的ではない手法

「自然科学的」研究のデータ解析に見られる第二の問題は、「基礎的ではあるが、実用的ではない手法を使っている」という問題です。私の論文でも、二つの独立変数（総影響量と均等度）を組み合わせた計六つの条件ごとに、満足度の平均値を出し、それを分散分析という統計的検定にかけています。 $t$ 検定と分散分析は、統計的検定の代表格です（ $t$ 検定については、あとでわかりやすく説明します）。

しかし、 $t$ 検定や分散分析は、たしかに一般教養として勉強しておかねばならない手法ですが、グループ・ダイナミックスや社会心理学では、ほとんど実用的ではありません。 $t$ 検定や分散分析は、ちょうど、自動車教習所で習う運転方法と同じです。もちろん、教習所で習う運転でうまくいく場合もあります。常にもうまくいくとは限りません。たとえば、生理学の実験、品質管理、農業試験のデータ処理などは、 $t$ 検定や分散分析でうまくいくのですが、人間科学のデータでは、そうはいきません。

大雑把に言うと、 $t$ 検定や分散分析が有効なのは、「3シグマ法」が意味をもつ分野です。3シグマのシグマとは標準偏差（データのバラツキの程度）のことです。統計的手法では、私たちが実験や観察の結果として手にするデータは、無限回実験や調査を繰り返したときに得られる無限個のデータ（母集団）から無作為にピックアップされたものと見なします。実験や観察で知りたいのは、母集団の平均です。自分が手にしたデータは、それを推測する道具にすぎません。3シグマ法とは、母集団の平均値は、「（データの平均値）—（標準偏差の3倍）」と「（データの平均値）+（標準偏差の3倍）」の間にあると推測する方法です。実際、かりに母集団が正規分布（山形の分布）をしていると仮定すると、この推測で九九%以上の正確さをもつことになりました。

では、私の論文のデータを見てみましょう。論文中には明示されていませんが、Table 1から被験者

全員（四八人）の満足度の平均は三・二であること（Table 1の条件ごとの平均六つを足し合わせて六で割れば求められます）、Table 2から被験者全員の標準偏差は〇・八一であること（Table 2最下行の平方和の合計三七・九二を自由度四七で割れば求められます）がわかります。3シグマ法で母集団の平均値を推定すると、推定区間は〇・八〜五・六となります。そもそも一〜四の値しかとらないのに、平均値の推定区間は一〜四を下側にも上側にも超えてしまいます。これでは、推定も何もあつたものではありません。私の論文のデータは、そもそも3シグマ法など使えないのです。私の論文のみならず、学術雑誌に報告されているアンケート調査の結果で、平均値と標準偏差をチェックしてみると、大方は、私の論文のデータと同じ結果になっているはずで、

#### 言葉を大事にする

代替案は単純明快です。回答者は、決して点数をつけたのではなく、選択肢の「言葉」に〇をつけたことを忘れてはいけません。あらかじめ設定された選択肢という画一的な言葉ではありませんが、アンケートは、質問者と回答者の間でなされる言語的コミュニケーションなのです。

したがって、原則は、個々の質問項目については数値化せず度数分布（何人が、どの言葉を選んでいるか）を見ることです。また、二つの質問項目の関係であればクロス集計表を見ることです。もちろん、数値化した上での平均値や相関係数は、ある程度の簡便法としては役に立ちます。回答分布が山のようなら形をしていれば、平均値によって複数の集団を比較することも、ある程度は役に立ちます。また、クロス集計表の主要な情報を、相関係数によって把握することも、ある程度はできます。しかし、せいぜい、そこまでです。やはり、論文には、度数分布やクロス集計を報告するのが基本です。

多くの変数（質問項目）の相互関係を分析する多変量解析でも同じです。選択肢を数値化した上で、主成分分析、因子分析といった手法がよく使われていますが、これらの手法では、言葉としての選択肢がもつ意味は、どこかに行ってしまう。また、後に述べるように、これらの手法には、相関係数（二つの変数の間に直線的な関係がある度合いを示す係数）に依存するという、もう一つの問題もあります。

### 仮説検定型データ解析

言葉を大事にすることと並んで、代替案を考える上で、もう一つ重要なことがあります。それは、データ解析の目的をどう考えるか、ということ。す。

本章の前節（二六三頁）で述べたように、自然科学の実験では仮説検証が中心であるのに対して、人間科学の実験では探索的な姿勢が必要です。この違いは、データ解析で採用すべき手法と密接に関係します。仮説を検証しようとすれば、「仮説検定」型のデータ解析が中心になります。一方、探索的な姿勢でいくならば、「探索的」なデータ解析が中心になります。

仮説検定型のデータ解析では、母集団という架空の集団を想定します。たとえば、二〇回実験を行なって得られた二〇個のデータは、同じ実験を無限回繰り返し返したとしたら得られる無限個のデータから、無作為にピックアップしたものと考えます。その無限個のデータが母集団です。母集団は、無限回実験したと仮定したときのデータの集合ですから、あくまでも理論上の集合です。

仮説検定型のデータ解析では、母集団に、ある仮説を立て、手元にあるデータが、そのような母集団から無理なく得られるデータであるか、あるいは、めつたに得られないデータであるかをチェックするという作戦が採用されます。以下、仮説検定型データ解析の代表格である $t$ 検定を例に説明します。

たとえば、従来の触媒と新しい触媒を使って、ある気体の発生量を調べる実験をしたいと思います。それぞれの触媒で二〇回ずつ実験を行なったとします。この場合には、二つの母集団を想定することになります。一つは、従来から使用されてきた触媒を使って、無限回、実験をした場合のデータの集合です。もう一つは、新しい触媒を使って、無限回、実験をした場合に得られるデータの集合です。そして、実験の結果得られた二〇個のデータは、それらの母集団から無作為にピックアップしたものと考えます。

ここで、母集団のデータの分布について仮定を立てます。分布とは、おなじみの棒グラフです。多くの人の身長を調べたときに、一四〇〜一四五センチ、一四五〜一五〇センチ、……と区切って、それぞれにあてはまる人の数を棒グラフで図示したりしますが、それと同じです。その棒グラフを、もっと区切りを細かくして描くと、より精密な分布になります。

多くの場合、仮説検定型のデータ解析で仮定される分布は、正規分布と呼ばれる山形の分布です。正規分布は、平均（山の頂点に対応する数値）と、分散（山がどの程度とがっているか、あるいは、どの程度、平らか）で完全に表現できます。

### 帰無仮説

次に、いずれも正規分布になっている二つの母集団について、一つの仮説を立てます。それは、「二つの母集団の分布はまったく同じである。つまり、平均も分散も等しい」という仮説です。この仮説の意味するところは、「従来の触媒も新しい触媒も、実験を無限回繰り返せば、気体発生量の平均も分散も同じである」ということです。もし、この仮説が正しいとしたら、新しい触媒を開発し、従来の触媒よりも優れていることを実験で確かめようとした人はガツカリです。実験をする人にとっては、否定し

たい「無に帰したい」仮説です。このように、できれば「無に帰したい」仮説のことを「帰無仮説」と呼びます。

ここで、実験の結果得られたデータを見えます。帰無仮説が正しい場合、手元のデータは無理なく得られるデータなのか、あるいは、稀にしか得られないデータであるのかを計算で求めます。その計算で求める値を $t$ 値と呼ぶので、この検定は $t$ 検定と呼ばれます。実験者が期待するのは後者、つまり、計算した $t$ の値が、帰無仮説のもとでは稀にしか得られないことです。なぜならば、もし、手元のデータから計算した $t$ の値が、帰無仮説のもとでめつたに得られない例外的な値であるならば、ひるがえつて、帰無仮説の方に無理がある（帰無仮説が正しくない）、つまり、新しい触媒と従来の触媒には差があると結論することができるからです。

しかし、いくら稀であるにせよ、ほんのわずかですが、帰無仮説が正しい可能性は残っています。その可能性は、帰無仮説が正しくないと主張するときの「危険率」です。通常、この危険率が1%以下（もっと緩やかな場合では5%以下）であれば、帰無仮説を棄却するのが慣行になっています。

以上に述べたように、仮説検定型のデータ解析では、母集団の分布（多くの場合、正規分布）を仮定した上で、帰無仮説を棄却できるか否かだけが焦点になります。しかし、母集団にこだわらずに、手元のデータが持っている情報を探索的に集約するような手法はないのでしょうか。また、かりに母集団を想定するにしても、帰無仮説だけではなく、多くの母集団の分布を仮定して、手元のデータが、どの母集団の分布ともっとも整合しているかを評価するような手法はないのでしょうか。以下では、そのような手法を紹介します。

男 性				女 性					
		Q2		計		Q2		計	
		賛成	反対			賛成	反対		
Q1	支 持	450	50	500	Q1	支 持	50	450	500
	不 支 持	50	450	500		不 支 持	450	50	500
	計	500	500	1000		計	500	500	1000

表 10-1 クロス集計をしなければわからない男女差

探索的データ解析(1)——林の数量化Ⅲ類

すでに述べたように、選択肢への反応を無理やり数値化せず、選択肢の言葉を大事にしながらデータを分析するには、何よりも単純集計を大切にしなければなりません。しかし、単純集計だけに頼ると、思わぬ落とし穴にはまってしまうことがあります。

今、男女一〇〇〇人ずつを対象にした世論調査に、「Q1. 現在の政権を支持しますか(選択肢は、支持する・支持しない)」「Q2. 憲法改正に賛成ですか(賛成・反対)」という二つの質問項目があったとします。新聞に、Q1では、支持・不支持がともに五〇%であったこと、また、Q2でも、賛成と反対がともに五〇%であったこと、しかも、この結果に男女差はなかったことが報じられたとします。さて、この報道を信じてよいのでしょうか？

ここで、表10-1を見てください。たしかに、単純集計の結果を見るかぎり、男性も女性も、Q1で支持・不支持が同数、Q2でも賛成・反対が同数です。しかし、Q1とQ2のクロス表を見ると、大きな違いがあります。つまり、男性では、Q1で支持の人はQ2で賛成し、Q1で不支持の人はQ2で反対する傾向がありますが、女性では、まったく逆に、Q1で支持の人はQ2で反対し、Q1で不支持の人はQ2で賛成する傾向があります。私たちは、複数の質問項目の単純集計の結果を、不用意に「かつ(AND)」で結んで、結論を出してしまいがちです。これが、単純集計の落とし穴です。単純集計



のみならず、クロス集計によって質問項目間の関係を見ることも大事です。

上に述べたことを、「回答パターン」という用語を使って言いかえてみましょう。回答パターンとは、各質問への回答がどのように結びついているか、その結びつき方のパタンのことです。表10-1を見ると、男性にも女性にも二つの主要な回答パターンがあることがわかります。つまり、男性には、「Q1支持・Q2賛成」という回答パターンと、「Q1不支持・Q2反対」という回答パターンがありますし、一方、女性には、「Q1支持・Q2反対」「Q1不支持・Q2賛成」という回答パターンがあります。

このように、質問項目が二つならば、クロス集計をすれば、どのような回答パターンがあるかは容易に見て取れます。質問項目が三つになっても、クロス集計表を複数つくればなんとかなります。では、質問項目が一〇個だったらどうするか。五〇個だったら……。

多くの質問項目の間にもどのような関係（結びつき）があるかを分析する手法を、「多変量解析」と呼びます。ただ、多くの多変量解析は、数値で得られるデータを前提にしています。従来、選択肢で得られたデータも、無理やり数値化して、そのような手法が使用されてきました。しかし、私たちに必要なのは、選択肢（の言葉）を大事にする多変量解析です。

### 数量化Ⅲ類とは

選択肢を大事にする多変量解析の代表に、林知己夫氏によって考案された数量化Ⅲ類という手法があります。私は、幸運にも、林先生の存命中に共同研究に加えていただき、直接指導を仰ぐことができました。林先生は、さまざまなフィールド（現場）に関心をもち、それぞれのフィールドの現象を分析するのにふさわしい統計数理的手法をみずから考案されました。考案された手法には、他の人によって、

I類、II類のように連番がふられました。あるとき、私は、林先生に、「いちばんの自信作はどれですか」と質問したことがあります。林先生の答えは、「やっぱり、III類かな」でした。

ちなみに、林先生は、この手法を「回答パターン分類の数量化」と呼んでいました。林先生の統計数理研究所(当時)グループが、一九五三年以来、五年おきに実施してきた「日本人の国民性調査」というアンケート調査の回答パターンを分析するために開発された手法だったからです。

数量化III類について解説しましょう。ここに、「あなたが持っている電気製品にすべて○をつけてください」という質問があり、五〇の電気製品が選択肢として並んでいるとします。このアンケートを一人の人の人に実施したとします。一群の回答者が、どのような一群の電気製品を持っているか(どのような一群の選択肢に○をつけているか)が回答パターンです。ある一群の人たちは、高価な家電製品は持っています、パソコンや携帯電話は持っていないかもしれません。また、別の一群の人たちは、IT関連の電気製品を多く持っているかもしれません。このように、一〇〇人の回答者は、回答パターンによって分類することが可能です。では、回答者一〇〇人の中には、どのような回答パターンがいくつあるのか——これを分析するのが数量化III類です。

数量化III類の「数量化」とはどういう意味でしょうか。数量化III類が対象とするデータは、連続量のデータではなく、上の電気製品のデータのように非連続量のデータです。この非連続量のデータを「ある方針のもとに」数量化しようというわけです。電気製品の例でいけば、五〇の電気製品に対して未知数  $(X_1, X_2, X_3, \dots, X_n, X_{50})$  を与え、「ある方針のもとに」方程式を解いて、それらの未知数を求めます。読者も、中学生のころ、 $3X+2Y=16$ 、 $5X+3Y=25$  のような連立方程式を解いた(解かされた?)はず。数量化III類で解く方程式も、基本的には、それと同じです。ただ、未知数の数が多いだけです。

では、「ある方針」とはどのような方針なのでしようか。数量化Ⅲ類の目的は、どのような回答パターンがあるかを見つけることでした。そのために、数量化Ⅲ類は次のような方針のもとに方程式を解きま  
す——「一群の人から同時に選択される傾向のある（複数の）電気製品には、互いに近い数値（たとえば、絶対値が大きな正の数値）を与える。また、それら一群の人からは選択されない傾向のある別の一群の電気製品には遠い数値（絶対値が大きな負の数値）を与える」。

### 数量化Ⅲ類の具体例

具体例で説明しましょう。一群の情報機器（パソコン、スマートフォンなど）を持つている一群の回答者がいるとすれば、それらの情報機器には互いに近い数値（たとえば、絶対値が大きな正の数値）を与えます。また、情報機器はあまり持っていないが、高級家電製品（高級なエアコン、高級な照明器具など）を持つている一群の回答者がいれば、それらの高級家電製品には互いに近い数値、しかし、情報機器に与えた数値とは遠い数値（たとえば、絶対値が大きな負の数値）を与えます。この方針で行けば、情報機器系の人でも高級家電系の人も持っている家電製品（たとえば、テレビ、冷蔵庫など）には、両者の中間的な数値（ゼロ近辺の数値）を与えることになります。このような方針で方程式を解き、未知数  $X_1, X_2, X_3, \dots, X_{95}, X_{96}$  を求めるのです。

以上、あらかじめ情報機器系の回答者や高級家電系の回答者がいると仮定して説明しましたが、実際

3 林の数量化Ⅲ類を解説した本は数多くあります。たとえば、林自身の著作『情報処理と統計数理』（林・樋口・駒沢、産業図書、一九七〇年）のほか、『数量化法の基礎』（岩坪秀一、朝倉書店、一九八七年）など。

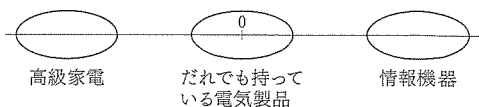


図 10-1 所有する電気製品を数量化Ⅲ類で分析した結果の例

は、そういうことは未知数を求めてみて初めてわかることです。したがって、上のような方針に従って未知数を求め、それを数直線上にプロットして、どういう分かれ方をしているかを解釈しなければなりません。図 10-1 のようなプロット図を見ながら、「数直線の右側（絶対値の大きい正の方）には情報系の電気製品が集まっているな。それに対して、左側には高級家電系の電気製品が集まっているな。ということは、回答者は一群の情報系の人（情報系の回答パターン）と一群の高級家電系の人（高級家電系の回答パターン）に大きく分かれるのか」というぐあいに解釈するのです。

ここから、中学生のころ解いた連立方程式と少々違う話になります。中学生のころ解いた連立方程式は解が一つ（一セット）でした。しかし、数量化Ⅲ類で解く方程式は、原理的には、選択肢の数（電気製品の例では五〇セット）だけ解を求めることができます。ただし、それらの多くの解は決して同格ではありません。回答パタンの情報をどのくらい持っているか（どのくらい情報を集約しているか）によって序列づけることができます。通常、上位から二〜三セットの解を使えば、主要な回答パターンを見つ

けることができます。さらに三セットの解を使う場合でも、序列があることを忘れてはいけません。相撲の言葉を借りれば、それらは、横綱セット、大関セット、関脇セットです。どれか一つを使うとすれば、もちろん横綱セットです。まずは、横綱セットで各電気製品がどのような数値になったかを見るのが第一です。大関セットは、横綱セットほどの情報はもちませんが、横綱セットではすくい取ることで十分な付加的信息をもっています。横綱セットと大関セットの数値を使って、電気製品を二次元グラフにプロットす

ると、横網セットの数値では近くに位置していた電気製品が、大関セットでどのように分離されるか（どのような回答パターンに細分化できるか）を見ることが出来ます。さらに、関脇セットも使ってもっと細かな回答パターンを見ることもできます。図10-2は、図10-1の横網セットに加えて、縦軸の大関セットを追加したときに、「だれでも持っている電気製品」が、洗濯機、電子レンジのような「家事に必要な電気製品」と、テレビ、ラジカセのような「レジャーに使う電気製品」に細分化された例を示しています。

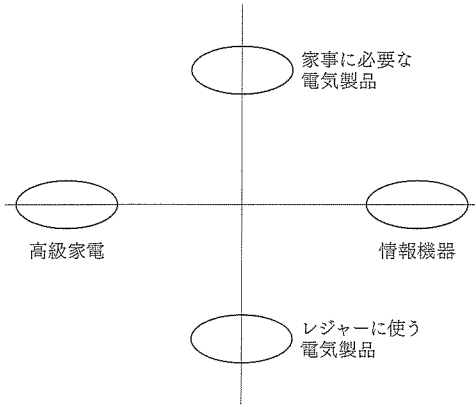


図10-2 横網セット（横軸）と大関セット（縦軸）によって回答パターンを細分化した例

以上、所有している電気製品に○をつけるという例で説明してきましたが、一般のアンケートでは、いくつも質問が並び、各質問には複数の選択肢が設けられています。しかし、その場合も、質問の壁を無視して、選択肢にのみ注目し、個々の選択肢を今までの電気製品のように見なせばよいのです。

#### 探索的データ解析(2)——赤池情報量規準(AIC)

数量化Ⅲ類と同様、言葉を大事にする探索的手法に、赤池情報量基準(Akaike's Information Criterion: AIC)を使う方法があります。<sup>4</sup>すでに述べたように、t検定や分散分析は、統計学の基礎として、ぜひ学習しておくべき手法ではありますが、グループ・ダイナミックスや社会

心理学のほとんどのデータ分析には不向きです。それらに代わる方法が、A I C に基づく方法です。

A I C を使う方法は、母集団を想定します。ただし、先に述べた仮説決定との大きな違いは、帰無仮説だけではなく、さまざまな分布の母集団を考えることです。手元のデータから、どの母集団がもつても「あり得る」のか、その「あり得る」程度を示す指標が A I C なのです。

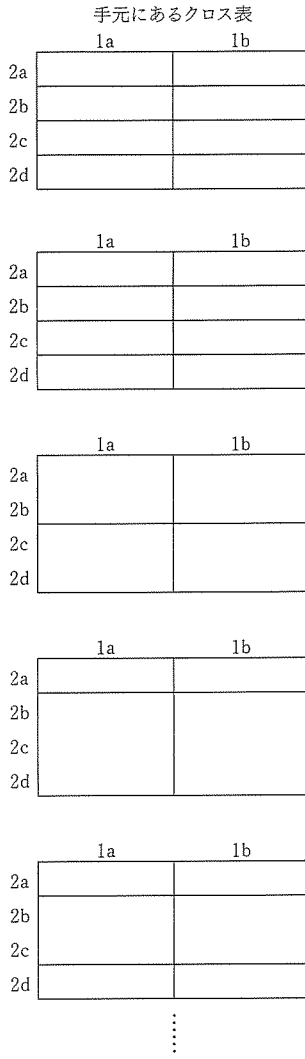
具体例で説明しましょう。ここに、三〇の質問項目からなるアンケートによって収集した一〇〇人のデータがあるとします。どの質問にも二つ以上の選択肢が設けられており、回答者は一つに〇をつけることになっています。ここで、三〇項目の中に目玉の項目があり、「目玉の項目をもつともよく説明する項目を知りたい」とします。そのような目玉の項目を「基準変数」と呼びます。基準変数を説明すると見なされる、基準変数以外の項目は「説明変数」と呼ばれます。基準変数をもつともよく説明する説明変数を探したいわけです。

それだけでは、ありません。基準変数が質問 1 で、二つの選択肢が設けられていたとします。説明変数として、質問 2 ( 選択肢は、「2a」「2b」「2c」「2d」の四つ ) を取り上げてみます。質問 2 だけを取り上げても、多くの母集団を考えることができます。まず、質問 2 の選択肢をそのまま使った「2 ( 質問 1 の選択肢数 ) × 4 ( 「2a」「2b」「2c」「2d」 ) というクロス表型の分布をもつ母集団があり得ます。この母集団から無作為にピックアップアップしたデータのクロス表が、手元にあるクロス表であると考えるわけです。

しかし、もし、2a ( 賛成 )、2b ( やや賛成 )、2c ( やや反対 )、2d ( 反対 ) のように順序性をもつ場合には、隣接する選択肢を併合したクロス表も意味があります。たとえば、2a と 2b を併合し、2c と 2d を併合することができません。言いかえれば、2a と 2b では基準変数の分布が等しく、同時に、2c と 2d でも基準変数の分布が等しい母集団であれば、2a と 2b ( あるいは、2c と 2d ) を合体して、一つの選択肢と見なすことがで

きます。そうすると、「2 (質問1) × 2 (質問2)」という (母集団の) クロス表が考えられます。あるいは、2b から 2d までの三つを併合して二つの選択肢に、あるいは、2b と 2c を併合して合計三つの選択肢にするなど、さまざまな (母集団の) クロス表が候補として考えられます。

これらすべての併合パターンの「あり得る」程度を、手元のデータから計算した AIC によって比較し、



元のクロス表から、どの母集団も「あり得るか」を AIC で比較する。

図 10-3 AIC によるクロス表分析

4 赤池情報量規準のわかりやすい入門書として、『情報量規準による統計解析入門』（鈴木義一郎、講談社、一九九五年）があります。

もつとも「あり得る」(母集団の)クロス表を求めるのです(図10・3)。つまり、質問2だけで説明するにしても、すべての併合パターンを比較して、A I Cによる評価が最高となる併合パターンを求めます。いわば、質問2をできるだけ背伸びさせたときのA I Cを、質問2だけを説明変数にしたときのA I Cとして記録にとどめるのです。このようにして、質問2以外の質問を順次取り上げ、すべての併合パターンを比べながら、一つひとつの質問の説明変数としての力をA I Cによって比較していきます。そうすると、最終的には、説明変数が一個であれば、どの質問を使った(母集団の)クロス表がもつとも「あり得る」のかがあきらかになります。

次は、説明変数二個の場合です。たとえば、質問2と質問3を説明変数に取り上げると、基準変数の質問1も加えて、三次元のクロス表になります。しかも、質問2についても、質問3についても、ありとあらゆる選択肢の併合パターンを比較していきます。その上で、もつとも「あり得る」説明変数の組み合わせを求めます。ここまで来ると、説明変数一個の場合と二個の場合を総合して、(母集団の)どのクロス表がもつとも「あり得る」かが判定できます。同じ要領で説明変数三個の場合に移ります。こうして、手持ちのデータから計算したA I Cによって、母集団のクロス表として、いかなる説明変数のセットがもつとも「あり得る」のか、また、そのときの選択肢はどのように併合されているのかを見つけることができます。

### 非直線的な関係

従来、特定の基準変数を定め、その変数をよく説明する説明変数を探す手法としては、重回帰分析あるいは重判別分析と言われる手法が用いられてきました。いずれの手法も、説明変数は連続量ですが、



基準変数も連続量の場合に使われるのが重回帰分析、基準変数が分類（試験の合格・不合格など）の場合に使われるのが重判別分析です。どちらの手法でも、個々の説明変数に重み（係数）をかけて足し合わせ、新しい変数（合成変数）を計算します。ただし、その計算は、基準変数と合成変数の相関係数（あるいは相関比）を最大にするという条件のもとに行なわれます。その上で、計算された各説明変数の重み（係数）を比較し、大きな重みが与えられた説明変数が基準変数を説明する力があると解釈するわけです。

しかし、重回帰分析と重判別分析には、致命的とも言える欠陥があります。第一に、すでに連続量で得られているデータならばまだしも、アンケートの質問項目の場合には無理やり数値化しなければ、これらの手法を使うことはできません。第二に、かりに恣意的な数値化には目をつぶるとしても、説明変数の間に高い相関係数がある場合には、基準変数との結びつきが重み（係数）に反映されません。大まかに言うと、説明変数の中に相関の高い複数の変数があると、そのどれか一つに大きな重みが与えられ、他の変数の重みが小さくなってしまったり、あるいは、複数の変数に、あまり大きくない重みが均等配分されてしまったりします。第三に、重回帰分析の場合、すべて相関係数がベースになっていますので、非直線的な関係は、最初から無視されてしまいます。

今述べた三つの欠陥のうち、最後に述べた点は、人間科学にとって非常に重要です。人間科学が取り扱う現象で、直線的な関係は、むしろ例外とさえ言えます。あるいは、直線的な現象であれば、データなど集めてみなくても自明という場合がほとんどです。言いかえれば、どのような非直線的な関係があるかを見出すところに妙味があると言ってもよいでしょう。二つの変数の間にある直線的関係の程度を示す相関係数を用いたのでは、この妙味を最初から排除することになってしまいます。

直線的関係以外を無視してしまうという欠陥は、先に述べた主成分分析や因子分析にもあてはまりません。これらの手法も、相関係数をベースとした手法だからです。それに対して数量化Ⅲ類では、変数間の非直線的な関係でも拾い出してくれます。

集合性は時々刻々と変化しています。それを川の流れになぞらえて、「集合流」と呼びます。私たちは、さまざまな集合流の合流点に身を置いています。重要なことは、その合流点自体が、一つの集合流だということです。それを、「イマココ集合流」と名づけました。イマココ集合流は、多くの場合、短時間しか持続しない小規模な集合流ですが、それにとどまらない重要な性質があります。その性質こそ、偶発性・創発性です。

従来、記憶や知識は、個人の頭の中にあるものと考えられてきました。しかし、それらを、イマココ集合流への他の集合流の流入と考えることはできないでしょうか。

## 1 集合流

本書の第2章では、集合性とその変化を「かや」の例えを用いて説明し、第II部の各章では、集合性の二つの面（物理的集合性と意味的集合性）を捉える概念と理論を紹介しました。集合性は変化します。変化する集合性を川の流れに例えて、「集合流」と呼ぶことにします（第9章二四五頁）。集合性が、物理的集合性と意味的集合性という二つの面をもつのに対応して、集合流は、物理的集合流と意味的集合流の二つから構成されます。両者は相互に影響しつつ、一つの集合流を形成します。

集合流を空間的規模と時間的持続という二つの軸で整理すると、図11-1のようになります。空間的規模とは、集合流に含まれる人々と環境（物的・制度的環境）の範囲のことです。集合流の中には、一

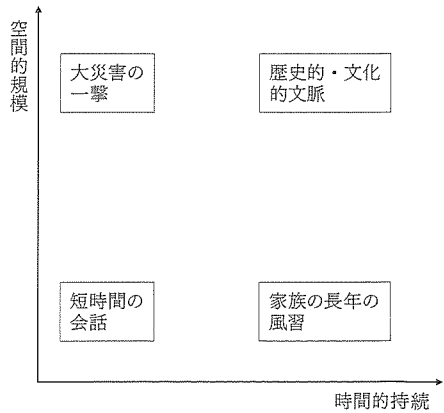


図 11-1 集合流の分類と例

国の国民とその環境を包含する大規模なものもあれば、ある家族とその環境だけを包含する小規模なものもあります。一方、時間的持続とは、集合流が変化しつつも、一つの流れを維持する時間の長さです。日本語の文字使用のよう  
に一〇〇〇年を超える歴史を通じて維持されてきた集合流もあれば、つい最近流行し出したファッションの集合流もあります。あるいは、たまたま出会った二人のわずか一分の会話という短時間の集合流もあります。

図 11-1 のように二つの軸で整理すると、集合流は、次の四つのタイプ、あるいは、それらの中間的なものに分類することができます。

第一のタイプは、長期にわたる大規模な集合流です。上にも例としてあげた日本語の文字使用の集合流は、これに当たります。これに限らず、通常「歴史的・文化的」といった言葉で表現される現象は、この種の集合流を指しています。

第二のタイプは、長期にわたる小規模な集合流です。包含される人数が少なく、その環境が狭くとも、長期的に維持される集合流です。たとえば、ある旧家で何百年も維持されてきた風習は、これに当たります。また、結婚したばかりの若い夫婦に比べれば、長年連れ添ってきた老夫婦は、小さいながらもより長期の集合流に身を置いています。

第三のタイプは、大規模な短期の集合流です。たとえば、広域を襲った災害の一撃は、これに当たり

ます。もちろん、そのような一撃は、それに端を発する長期の集合流をも形成しますが、それとともに、一撃の集合流それ自体も重要です。

第四のタイプは、小規模かつ短期の集合流です。たとえば、数分間の立ち話をしている二人の集合流は、これに当たります。

## 2 イマココ集合流

イマココ集合流とは

私たちは、常に、規模と持続時間を異にする多くの集合流の「合流点」に身を置いています。重要なことは、その合流点自体が一つの集合流であるということです。その合流点の集合流を「イマココ集合流 (the here-and-now collective stream)」と呼ぶことにします。私は、今、研究室のイマココ集合流の中で、本書のこの行を書いています。読者も、場所はわかりませんが、少なくともこの本と読者を含むイマココ集合流の中で、本書のこの行を読んでいるはずで

従来は、多くの集合流の合流点として、個人が想定されていたように思います。「肉体に内蔵された心」を否定し、歴史的文脈や文化的文脈のような大規模な長期的集合流から人間の行為を説明しようとする研究は、往々にして、行為の大きな方向性のみ関心を向け、特定の人間が特定の状況でとる特定の具体的行為にまでは立ち入らない傾向がありました。しかし、特定の具体的行為を不問に付せば、特定の具体的行為は「肉体に内蔵された心」にも、規定されるのだと考えざるをえません。こうして、「肉

体に内蔵された心」の否定が不徹底に終わってしまっています。

従来からも、行為は「肉体に内蔵された心」によって規定されるのではなく、「場」や「状況」に規定されることを主張する理論はありました。あとで触れる状況的認知論は、その典型です。それらの理論でも、場や状況は、歴史的な文脈や文化的な文脈に規定されるとされています。しかし、場や状況という概念と、歴史的・文化的な文脈という概念を統一的に把握する概念はありませんでした。それに対して、場や状況に代えて、「イマココ集合流」という概念を導入し、歴史的・文化的な文脈を大規模・長期的な集合流と考えれば、同じ集合流という概念で両者を統一的に把握することが可能になります。

### 偶発性・創発性

イマココ集合流は、多くの場合、小規模な短期的集合流の一つですが、それには収まらない大きな特徴をもっています。イマココ集合流には、イマココ集合流以外の多くの集合流が流入します。しかし、イマココ集合流には、流入する集合流には還元しえない独特の性質があります。まさに「今ここ」ならではの性質です。

イマココ集合流に独特な性質とは、偶発性と創発性です。イマココ集合流には、大なり小なり、前もって予想できない偶然の（偶発的な）要素が含まれます。それは、好ましいか否かにかかわらず、新しい何かが生み出される（創発される）ということでもあります。過去の何ものにも還元しえない「今、ここ」を生きているという感覚は、イマココ集合流の偶発性・創発性に由来します。

イマココ集合流の偶発性・創発性は、イマココ集合流の個性をもたらし、個性とは、「として」関係（第6章一二三頁）の説明の中で述べたように、「一回こっきり、繰り返しなし」ということで

す。現前する分節肢の個性は、イマココ集合流の偶発性・創発性に由来します。特徴的な「何か」が、普遍的な「意味」と「として」関係で結ばれるときに、分節肢の現前が可能になるのでした。イマココ集合流に由来する特徴的な「何か」と「として」関係で結ばれる「意味」は、イマココ集合流に流入する他の集合流に由来します。

イマココ集合流には、規模と持続時間を異にするさまざまな集合流が影響を与えます。大規模な集合流は、小さなイマココ集合流を真綿のように包み込み、イマココ集合流を揺り動かします。また、長期的な集合流は、短時間のイマココ集合流を串刺しにするかのように、イマココ集合流に流れ込みます。

しかし、その他の集合流が一方的にイマココ集合流に影響を与えるものではありません。イマココ集合流は、他の集合流のどれが影響してくるかを選択します。この選択も、偶発的、創発的です。したがって、特定の集合流がイマココ集合流に影響するかどうかは、決して必然的に決まるのではなく、所詮、可能性の問題です。

### イマココ集合流の持続

イマココ集合流の中での時間は一種独特です。イマココ集合流の中では、たしかに時計を見れば針は進んでいるのですが、時間は止まっています。ずっと「イマ」なのです。「イマ」は、決して瞬間ではありません。「イマ」は厚みをもっています。

読者は、「ハッと、われに返った」経験をお持ちのはずです。ハッとわれに返った瞬間は、一時停止していた時間がふたたび動き出した瞬間です。われを忘れていた間は、時間が止まっていたのです。その間、ずっと「イマ」だったのです。

## 状況的認知論

ここで、「状況的認知論 (theory of situated cognition)」と呼ばれる理論に触れておきましょう。状況的認知論も、人間の認知 (認識) を、外界を内界に捉えることと考える従来の認知論を否定しています。状況的認知論は、認知を与える「主体」は状況であると主張します。つまり、「人間も、物体も状況の中に埋め込まれている。さらに、歴史的・社会的文脈も、状況に埋め込まれている。そのような状況によって人間に現前せしめられる風景が、人間の認知内容である」と考えるわけです。さらに、人間の行為も、状況全体の変化の一部として捉えられます。

状況的認知論で言う状況は、イマココ集合流に相当します。状況的認知論で言う「状況に埋め込まれている (situated)」とは、本書の用語で言えば、イマココ集合流に内在しているということです。「すべての行為は、内在する集合流の「コマ」という社会構成主義の前提を思い出してください (第9章二四五頁)。行為が集合流に内在しているのであれば、行為の対象となる物体も集合流に内在しているのは当然です。この内在こそ、状況的認知論で言われる「人間も物体も状況に埋め込まれている」ことなのです。

では、状況的認知論にいう「歴史的・社会的文脈も、状況に埋め込まれている」とは、集合流の観点から見れば、どういうことなのでしょう。すでに述べたように、イマココ集合流は特個的です。かりに、イマココ集合流しかなかったとしたら、すべては一回こっきりのコレ・アレにすぎません。したがって、第2章で述べたように、そのコレ・アレは、意味をもたないがために現前しないのです。イマココ集合流の中でも、たとえば、本としてのコレ、机としてのアレが現前するのは、イマココ集合流以外の集合流によって、意味が与えられているからです。状況的認知論の言葉を使うならば、コレ・アレが、



歴史的・社会的文脈を表示しているからです。

状況的認知論の用語では、歴史的・社会的文脈がコレ・アレに表示されていることを、歴史的・社会的文脈がコレ・アレによって「可視化」されていると言われます。可視化という用語を用いるならば、イマココ集合流に内在する身体に何が現前するかが、どのような集合流がイマココ集合流に影響しているか（イマココ集合流に流れ込んでいるか）を可視化しているのです。

## 記憶

以上の議論は、記憶とは何か、知識とは何かという問題に連なっていくきます。「肉体に内蔵された心」という従来の前提に立てば、記憶とは、心（あるいは頭）の中に刷り込まれた過去の出来事を意味しています。また、知識も、頭の中の情報蓄積（情報ストック）を意味しています。しかし、集合流の視点をとるならば、記憶や知識を新しく把握し直すことができます。

記憶とは、イマココ集合流の中に、長期的な集合流が流れ込んでいることです。目の前の古い茶碗が、それを愛用していた祖父のことを思い出させたとしたら、祖父が生きていたころに端を発する長期的集合流が、目の前の茶碗を含むイマココ集合流に流れ込んだためです。

したがって、記憶を広義に捉えれば、現前の必須条件である「として」関係の「意味」の項は、記憶を含みます。つまり、「○○としてのコレ」が現前する場合、○○は、過去からの意味的集合流がイマココ集合流に流入することを必要とします。しかし、一般に記憶と呼ばれる現象は、単純な意味を超えて、一つのナラティブ（第6章一三九頁）が「想起」されるような現象です。なんらかのナラティブを維持する集合流が、イマココ集合流に流れ込むこと——それが記憶という現象です。

## 知識

知識も同じです。決して、頭の中の知識ではありません。記憶と同様、過去に端を発する集合流がイマココ集合流に流れ込むことが、知識という現象です。たとえば、試験管の水を見ながら、「水は、水素原子二個と酸素原子一個でできている」という知識を使ったとしたら、その事実が発見されて以来ずっと持続している集合流、しかも、自分もかつて学校でそう習って以来、それに内在している集合流が、イマココ集合流に流れ込んだのです。

このように、記憶（想起すること）と知識（知っていること）は、両者とも、意味的集合流のイマココ集合流への流入という点で基本的に同じです。ただ、あえて記憶と知識の違いを述べるならば、記憶という表現は、接合的言説（第6章一三七頁）を含む集合流の流入に対して使用され、一方、知識という表現は、分析的言説の集合流の流入に対して使用されることが多いようです。突然、雨が降り出したとき、「君に初めて会ったときも、急に雨が降り出して、二人ともずぶぬれになったよね」という接合的言説の集合流が流入すれば「思い出した（想起した）」と表現されますが、「この季節の雨はすぐ止むよ」（この季節の雨は、すぐ止む雨を分類したときの一つに相当する）という分析的言説の集合流が流入すれば「それを知っている（知識を持っている）」と表現されます。

ここで、もう一度、記憶の現象に戻って、身体的記憶という現象にも触れておきましょう。身体的記憶とは、「体で覚えている」ことです。ここで、集合流には、物理的集合流と意味的集合流の二面があることを思い出してください。すでに述べた記憶や知識の説明の中では、イマココ集合流以外の集合流として、主に意味的集合流を念頭に話をしてきました。しかし、私たちの身体は、物理的集合流にも内在しています。そうであれば、イマココ集合流の中に、過去に端を発する物理的集合流が流れ込むこと

は当然です。スポーツの競技会で身を置いているイマココ集合流に、長い間の練習期間に形成された物理的集合流が流れ込んだときこそ、練習して「体で覚えた」ことが発揮された瞬間です。

## 物

以上、言説レベルの記憶・知識、そして、身体的記憶の順で話を進めてきましたが、もう一步話を進めて、物による記憶についても考えることができます。物の存続は、物理的集合流の持続です。たとえば、堅固な建造物は、それが建てられたときに端を発する物理的集合流を長期にわたって持続させ、その後の多くのイマココ集合流に流れ込みます。このメカニズムは、すでに述べた記憶（身体的記憶を含む）と同じです。

したがって、物を作ることは、将来のイマココ集合流に流れ込んでいく物理的集合流を作ることでもあります。もちろん、ある物理的集合流を作ったからといって、その物理的集合流が特定のイマココ集合流に流れ込むかどうかは、イマココ集合流の選択次第です。しかし、物を作ることは、将来のさまざまなイマココ集合流に流入する可能性をもった物理的集合流を創出します。

そのような「物を作ること」の一つに、文字の使用があります。文字は、インクの痕跡であろうと、活字による印字であろうと、物の一つです。たった一個の文字からなる物もあるでしょうし、分厚い本のような物もあります。このような文字の使用は、そこに始まる物理的集合流と意味的集合流が、将来のイマココ集合流に流入する可能性を創り出します。

## 現代社会とイマココ集合流

私たちの人生が、イマココ集合流とともに刻まれていくのは、今も昔も同じです。しかし、現代社会は、過去の時代とは異なるかたちで、イマココ集合流が大きな比重を占めつつあるように思います。

近代という時代が終わり、ポスト近代の時代に入りつつあると、しばしば言われます。ポスト近代の特徴は、近代にあった「大きな物語」が、その影響力を失いつつあることです。「大きな物語」とは、大きな思想や価値観をめぐる言説です。東西冷戦の時代が終わり、社会主義の(思想的)言説は、かつてのような迫力を失いました。また、単純に科学技術の進歩を礼賛する価値観も、物質的進歩の負の側面(環境破壊、伝統崩壊など)が無視できなくなり、これまたかつてのような説得力を失いつつあります。「大きな物語」は、多くの人々によってつくられ、維持されてきた大きな集合流です。かつては、イマココ集合流に、「大きな物語」の集合流が流入し、イマココ集合流を方向づけていました。その「大きな物語」の集合流の影響が低下しつつあるのです。ということは、イマココ集合流の偶発性・創発性が、今まで以上に顕在化するはずで、社会を不安定にし、社会の進路を見えにくくするとともに、新しい活動(第5章)が創造される機会が増えることにもなるでしょう。

「大きな物語」の影響力が低下すると同時に、インターネットに代表される情報技術の進歩は、イマココ集合流に流入する集合流の数を飛躍的に増大させました。ひと昔前であれば想像もできなかった情報が、情報端末を通じてイマココ集合流に流れ込んできます。また、その情報も、時間をかけて編集された情報ではなく、ほぼ同時点に他のイマココ集合流で発信された情報が、未整理のままみずから身を置くイマココ集合流に飛び込んできます。この点でも、イマココ集合流の偶発性・創発性が、かつてなかった規模で発揮される時代になりました。イマココ集合流は、グループ・ダイナミックスの基礎

的概念であると同時に、現代社会を読み解くキー概念にもなるように思えます。

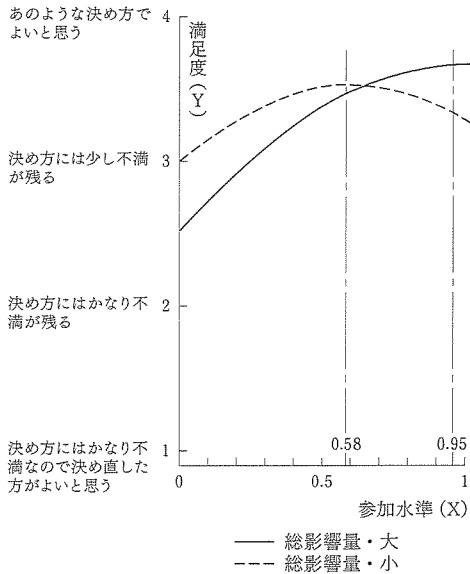


Fig. 2. 総影響量 (大・小) 別にみた参加水準が満足度に及ぼす効果 (2次式を用いた曲線回帰)

$$Y = -1.25X^2 + 2.375X + 2.5 \quad (1)$$

総影響量が小さい群では

$$Y = -1.5X^2 + 1.75X + 3.0 \quad (2)$$

のような関係があり、仮説Aが支持された。また、(1)式、(2)式から、総影響量が大きい群の最適参加水準は0.95、総影響量が小さい群の最適参加水準は0.58であり、総影響量が大きい群の最適参加水準の方が1に近づいている。これは、仮説Bを支持している (Fig. 2)。

[引用文献リストと要約は省略。表記は一部変更。]

- ( ) 決め方には少し不満が残る。
- ( ) 決め方にはかなり不満が残る。
- ( ) 決め方にはかなり不満なので、決め直した方がよいと思う。

被験者が質問紙への記入を終えた時点で、実験を終了し、実験の目的について簡単な説明を行なった。したがって、文章作成という課題は、実際には実施していない。

### 結果と考察

質問紙の選択肢に、「あのような決め方でよいと思う」を4、「決め方には少し不満が残る」を3、「決め方にはかなり不満が残る」を2、「決め方にはかなり不満なので、決め直した方がよいと思う」を1、のように数量化して分析を行なった。各処理ごとの平均値と分散分析の結果については、Table 1およびTable 2のとおりである。統計的には、参加水準の主効果が有意であった。そこで、参加水準と満足度との間に、仮説Aで指摘したような関係があるかどうかを検討するために、2次式による曲線回帰を行なった。その結果、

参加水準 (X) と満足度 (Y) の間には、

総影響量が大きい群では

Table 1  
各処理ごとの意思決定に対する満足度 (平均値)

	LP=0	LP=0.5	LP=1
総影響量・大	2.5	3.4	3.6
総影響量・小	3.0	3.5	3.3

Table 2  
Table 1 に関する分散分析

	平方和	自由度	平均平方	F	
参加水準	5.04	2	2.52	3.41	$p < .05$
総影響量	0.08	1	0.08	0.11	
交互作用	1.54	2	0.77	1.04	
誤差	31.25	42	0.74		
全体	37.92	47			

行なった。課題は、3人で話しあいをしてしながら1つの文章を作成することで、その際に、実験者が用意した120個の単語からなる単語のリストの中から24個を選択して、その24個の単語をどれも1回は使用しなければならないことにした。課題の説明では、集団で行なう課題であること、24個の単語の決定は非常に重要であること、の2点をとくに強調した。総影響量と参加水準は、どの24個の単語を使用するかを意思決定する過程で、成員が決定する単語の数によって操作した。

総影響量が大きい群では、課題の説明のあと、引きつづいて、24個の単語の決定に移った。すなわち、24個の単語のすべてを3人集団に決定させた。LP=1の群では、3人がまったく均等に、すなわち8個ずつ単語を決定した。LP=0.5の群では、サクラが1/2(12個)、被験者がおのおの1/4(6個)ずつ決定した。LP=0の群では、サクラがすべての単語(24個)を決定し、被験者はまったく決定しなかった。

総影響量が小さい群では、課題の説明に引きつづいて、実験者が、「とくに重要な12個の単語は私(実験者)が決めますので、それにつけ加える残りの12個をあなたたちに決めてもらいます」というインストを与え、実際に実験者が12個を決定した。その後、残りの12個を3人集団で決定した。LP=1の群では、3人がまったく均等に、すなわち4個ずつ決定した。LP=0.5の群では、サクラが1/2(6個)、被験者がおのおの1/4(3個)ずつ決定した。LP=0の群では、サクラがすべての単語(12個)を決定し、被験者はまったく決定しなかった。

24個の単語の決定が終わると、それら24個の単語を用いて文章を作成することを確認し、「3人で話しあい始める前に、どういう文章をつくるか、各自で2,3分考えをまとめてください。」というインストを与え、2,3分時間をおいた。その2,3分の間に、「現在の気持ちをチェックしておきたいので、簡単な質問に答えてください。」というインストを与え、次のような質問に記入を求めた。

質問 先ほど、今からの集団作業で用いる単語を24個決めましたが、その決め方(決められた単語の内容ではなく)について、あなたの気持ちにもっとも近いものを1つ選んで○印をつけてください。

( ) あのような決め方でよいと思う。



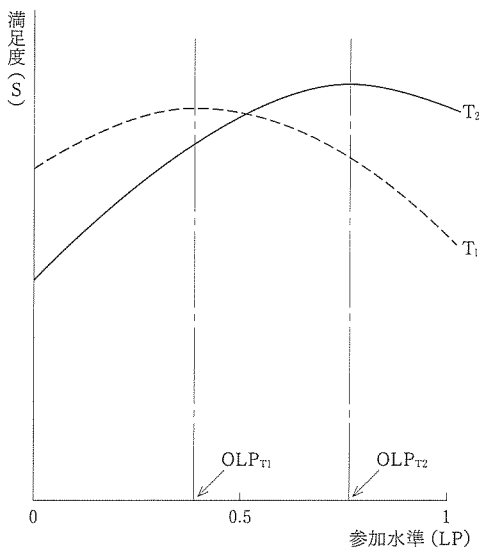


Fig. 1. 総影響量と参加水準が満足度に及ぼす効果

影響力の小さい成員とに分化することを指している)に関する多くの研究をレビューした結論として、「ある程度の構造化は、成員の満足にとって必要不可欠である」と述べるにとどまっている。Stogdillの結論を踏まえ、さらに、総影響量と参加水準という操作的概念を導入することによってモデル化を試みたのが仮説Aである。また、仮説Aのような関係を設定した場合、満足度を最大とする最適参加水準が興味あるところとなるが、その最適参加水準の変動を総影響量との関連でモデル化しようとしたのが仮説Bである。

## 方 法

被験者は、男子大学生48名(1処理8名×6処理)である。実験計画は、2要因完全無作為化法を用いた。総影響量の要因では、大・小の2水準を、参加水準の要因では、LP=0・LP=0.5・LP=1の3水準を設定した。

### 実験手続き

被験者2名、サクラ1名よりなる3人集団を構成し、最初に課題の説明を

を1とし、他の成員の影響量を比率化する、(ii) n人集団の比率化された影響量が、 $p_1, p_2, \dots, p_n$ であれば

$$LP = \frac{(\sum p_i - 1)}{(n-1)}$$

とする。

(注) あきらかに、 $0 \leq LP \leq 1$ である。LP=0の場合とは、意思決定がただ1人の成員によってなされた場合であり、LP=1の場合とは、意思決定に対して、各成員がまったく均等に影響を及ぼした場合である。このように、LP=0あるいはLP=1の場合には、この指数は明確であるが、 $0 < LP < 1$ の場合には、きめの粗い指数であるといえる。たとえばLP=0.5の場合、3人集団の影響量の比率が、(1, 0.25, 0.75)の場合と(1, 0.5, 0.5)の場合を区別することはできない。つまり、LPの意味するものは、もっとも多くの影響を及ぼした成員以外の成員の(比率化された)影響量の算術平均に相当するものであり、バラツキに相当するものは無視されている。

①の総影響量および②の参加水準という2つの要因を用いて、本研究で検討しようとする仮説は次のようなものである。

〔仮説A〕

総影響量が一定のとき、Sを成員の意思決定に対する満足度とすると、

$$\frac{\partial^2 S}{\partial LP^2} < 0$$

かつ、 $\frac{\partial S}{\partial LP} = 0$ となる $\widehat{LP}$ が存在する。この $\widehat{LP}$ を最適参加水準(optimum level of participation; OLP)と呼ぶことにする。

〔仮説B〕

総影響量が $T_1$ の場合と $T_2$ の場合を考えると、 $T_2 > T_1$ であれば、 $OLP_{T_2} > OLP_{T_1}$ となる。(ただし、 $OLP_{T_1}$ 、 $OLP_{T_2}$ はそれぞれ総影響量が $T_1$ 、 $T_2$ の場合の最適参加水準を示す)

従来の研究では、参加的意思決定と非参加的意決定という2水準間の比較を試みたものがほとんどであった。ところが、本仮説では、総影響量を一定とし、参加水準という連続量にそって満足度の変化を見た場合、満足度は参加水準に関して、上に凸な関数として表現できる、としている。また、

## 意思決定における参加の効果に関する研究

杉万俊夫

### 問 題

本研究の目的は、意思決定における参加に関する操作的概念として、総影響量と参加水準という2要因を設定し、それらが成員の意思決定に対する満足度に及ぼす効果について検討することである。

意思決定における参加については、欧米を中心に多くの研究がなされている(Stogdill 1974)。しかし、そのほとんどが参加的意決定と非参加的意決定とを現場研究で比較したものであり、厳密な要因分析は行なわれていない。また、参加という現象は、たしかに、実践的な見地からも、きわめて興味深い現象ではあるが、参加という現象を分析する際に、「参加」という概念を分析の道具として使用するのは必ずしも適当ではない。現在用いられているような意味での「参加」という概念のままでは操作性に欠けているからである。そこで、本研究では、参加という現象を分析する操作的概念として、総影響量と参加水準という2つの要因を取り上げ、それらが成員の意思決定に対する満足度に及ぼす効果を検討する。

### 仮 説

本研究では、参加という現象を分析するための操作的概念として、次の2つの要因を取り上げる。すなわち、

①意思決定場面において、集団の成員が意思決定に対して及ぼした影響の総量(以下、総影響量と呼ぶ)

②意思決定場面において、集団の成員が意思決定に対して及ぼした影響量の分布

②に関しては、影響量の分布の状態を示す次のような指数を用いる。この指数を参加水準(level of participation; LP)と呼ぶことにする。すなわち、まず、(i)成員中、意思決定に対して、もっとも多くの影響を及ぼした成員の影響量

矛盾(活動理論) 19, 20, 86, 88-93,  
97  
無知の姿勢(カウンセラーの) 144, 146  
メタ理論 36, 61, 236, 237, 245, 256,  
269  
モデル(活動理論)  
因果—— 95, 96  
自己組織システム・—— 96  
システム・—— 96  
典型—— 95  
分類—— 95  
物 154, 295  
——的環境 →「環境」  
——の道具 →「道具」  
→「事物」  
→「物象化」  
問題解決 54, 110, 111  
や行  
ユニバーサル(普遍的) 52, 57, 60, 66

夢を描くツール 99, 100, 146  
予言の自己成就 241  
ら行  
リーダーシップ 76, 78, 105, 111-115,  
186, 241, 243  
人間関係円滑化の—— 111-113  
目標達成の—— 111-113  
両義性 165, 166, 177  
ルール(活動理論) 80, 82-84, 93,  
102-104, 106, 107, 114  
歴史的分析 93  
歴史的文脈 78, 97, 289, 290  
ローカル(局所的) 48, 52, 54, 57-61,  
66, 253, 267, 268  
論理実証主義 36, 236-239, 245,  
247-249, 251, 269  
論理的先行性 163, 188, 189

対立 3, 6, 7, 40, 59, 89, 92  
ダブルバインド 86, 88, 90-94, 97  
多変量解析 273, 277  
探索的データ解析 265, 273, 276,  
281  
知識 53, 294  
秩序 117, 118  
抽象化 58, 59, 61, 62  
追体験 67  
 $t$ 検定 271, 273, 275, 281  
デシジョン・メイキング 72-75, 78,  
83, 98  
道具 80-84, 94-97, 101, 102, 114  
制度的—— 101  
物的—— 82, 101  
統計的検定 264, 271  
統語論 134  
同調傾向 215-217  
度数分布 272

## な行

内在と外在 53, 72  
内部者 兼 外部者 43, 44, 49  
ナラティブ 120, 139-146, 293  
——・セラピー 111, 119, 120,  
137, 140-142, 144, 146  
外在化(外面化)の—— 142  
支配的—— 141-145  
内面化の—— 142, 144  
もう一つの—— 141, 142  
→「「スニキー・プー」の事例」  
日常言語 61, 237  
人間科学 75, 236, 237, 248, 249,  
251-259, 262-265, 267, 269, 271,  
273, 285  
人間像の常識 16, 17

## は行

発達可能領域(活動の) 97  
林の数量化Ⅲ類 →「数量化Ⅲ類」  
「半身半心」モデル 13, 17, 29, 32-34,  
197, 198  
非直線的な関係 284-286  
人見知り 160, 161  
避難誘導法 221, 257  
吸着誘導法 221-227, 230-234  
指差誘導法 221, 222, 224, 225,  
227, 230-234  
微分方程式 198, 199, 210, 211, 215  
表情 20, 74, 154, 160, 193  
標本 52  
標本サンプリング 52  
廣松渉 120-122, 126, 127  
服従 →「「権威への服従」実験」  
物象化 128  
雰囲気 14, 16, 153, 154  
分業(活動理論) 80, 82, 83, 102, 106,  
109, 114  
ベターメント 9, 10, 48, 251  
変革活動 78, 79, 83, 84, 86, 88, 90-  
97  
母集団 271-275, 282-284  
ポスト近代 184, 296  
ホワイト(White, M.) 142-144

## ま行

マスター方程式 211  
マルコフ性 217, 220, 221  
マイクロ・コスモス(活動理論) 94, 96,  
97  
「マイクロ-マクロ」リンク 196-198, 204-  
206, 210, 212, 215  
ミルグラム(Milgram, S.) 265-268  
無限性 163, 188, 189

3シグマ法 271, 272  
サンプル →「標本」  
自己言及 163-165  
四肢構造 119-122, 124, 126-131,  
186, 191, 192  
境界面 124-126, 131  
「として」関係 121-124, 126, 131-  
133, 291  
膨張・収縮する身体 124-127,  
131, 191, 192  
自然科学 57, 58, 236, 237, 251, 256  
実践研究 →「アクション・リサーチ」  
実体主義 122, 127, 129  
事物 22, 25-28, 34, 44, 45, 53, 75,  
121, 157, 168, 185  
シミュレーション 52, 196, 198, 199,  
204-206, 210, 215, 217, 220, 221  
社会構成主義 36, 236, 237, 245-  
249, 251, 292  
集合性 11-15, 29, 36, 76, 119, 196,  
287  
意味的—— 12, 13, 74-76, 119,  
120, 147, 196, 197, 287  
物理的—— 11-13, 74-76, 119,  
196-198, 287  
集合体 2-8, 11, 16, 28, 36, 76, 77,  
150, 196  
集合体動学 8  
集合流 245, 246, 248, 249, 287-296  
意味的—— 248, 287, 293-295  
物理的—— 287, 294, 295  
集団主義 181-183  
集団力学 →「グループ・ダイナミクス」  
主体(活動理論) 81, 83, 84, 89, 92,  
97, 99, 101-109, 114, 118  
主体性 15, 16, 29-32, 34  
状況的認知論 290, 292, 293  
心象化 128

身体 25, 26, 46, 121, 124-126, 147,  
155-158, 178, 191, 192  
——的記憶 294, 295  
——の溶けあい 147, 155, 157,  
166, 178, 186  
→「第三の身体」  
親密さ 37, 38  
心理学 34, 78, 86, 97, 117, 154,  
242, 243, 259  
社会—— 182, 256, 259, 261, 265,  
268, 269, 271, 281  
認知—— 35  
発達—— 162  
数量化Ⅲ類 276, 279  
「スニーキー・プー」の事例 142  
スプリングボード(活動理論) 94, 95,  
97  
「スモールワールド」実験 267  
制度 4, 12, 75, 102, 107  
セオリー 139, 140  
説明変数 282, 284, 285  
セル・オートマトン 198, 199, 206-  
208, 210, 215, 220  
センス・メイキング 72-75, 78  
相関係数 270, 272, 273, 285, 286  
創発性 287, 290, 291, 296  
素朴実在論 55  
  
た行  
第三の身体 149, 155, 159-163,  
173-184, 186, 189, 192-195  
——の強制力 194  
——の作用圏 161, 162, 174, 175,  
177, 178, 192  
第1レベルの—— 173, 174, 177  
第2レベルの—— 173-177  
「胸ポケットの——」効果 179-182  
対象→結果(活動理論) 81

制度的—— 2, 4, 6, 11, 12, 14, 38,  
77, 287  
物的—— 2, 4, 6, 11, 12, 14, 16,  
38, 77, 101, 287  
関係主義 120-122, 127-129  
記憶 13, 266, 287, 293-295  
記号言語 61, 237  
基準変数 282, 284, 285  
擬制 189  
気づかざる前提 55, 56, 58, 61, 268  
規範 147-155, 178, 188, 189, 191-  
194  
——の伝達(贈与と略奪) 167-171,  
176, 178, 185, 193  
——の発達 166, 174, 182-185  
——の理念性 188  
である——・べし—— 149, 151,  
152, 178  
婦無仮説 274, 275, 282  
共同体(活動理論) 80, 82, 83, 93, 96,  
114, 118  
協同的実践(当事者と研究者の) 8, 48,  
51-63, 72, 73, 248-251, 253-255,  
262, 263  
偶発性 287, 290, 291, 296  
「グループ一本」主義 ii, 35  
グループ・ダイナミックス i, 2, 8, 11,  
24, 48, 72, 76, 120, 148, 196, 236,  
248, 251, 256, 296  
クロス集計 272, 277  
群集 3, 75, 196-200, 204, 206, 210  
群集流 200, 204, 221, 222, 226, 227,  
233  
「権威への服従」実験 265, 267, 268  
言語 119, 130, 133, 137, 153, 168,  
193, 237  
言語行為論 119, 120, 134, 135, 186,  
193

発話行為 135, 136, 193  
発話内行為 135, 136, 193  
発話媒介行為 136, 193  
言語の4機能(指示・述定・表出・喚起)  
指示 130-134, 136, 252  
述定 130-134, 136, 252  
表出 133-136  
喚起 133-136, 153  
言説 60, 61, 73, 75, 120, 137-140,  
199, 247, 251-255, 296  
知覚的・概念的—— 252, 253,  
269  
人称的・準没人称的・没人称的  
—— 138, 139, 252-254  
分析的・接合的—— 137-139,  
252-255, 294  
言説空間 48, 60-63, 137, 140, 236,  
251-253, 255  
現前 24-28, 120-126, 129, 155, 188,  
292  
交換 89-91, 168-173  
構築主義 36  
心 ii, 37, 77, 141, 178-181, 193  
——を内蔵した肉体 16, 24, 127,  
136  
成育史レベルの—— 180, 181  
歴史レベルの—— 180, 181  
個人 16, 17, 21, 184, 197  
個人主義 179, 181-184, 186  
個性(ユニークさ) 38, 39, 41, 47  
「個体」概念 183  
コミュニケーション 60, 168, 177, 178,  
249, 272  
語用論 134  
さ行  
再現性(実験結果の) 260, 261, 263,  
268

## 索引

頻出する語については、特に重要なページだけを選んだ。  
項目名そのままの形でなくても、関連性の高いページは掲載している。

### あ行

- 赤池情報量規準(AIC) 281-284  
アクション・リサーチ 62, 63  
アフオーダンス 154  
意見分布 196, 210, 212, 213, 215, 216  
異質性 11, 39-42, 44, 46, 47, 49  
一語文 130, 132, 133  
一次モードと二次モード 48, 51, 54, 56, 57, 61  
イマココ集合流 287, 289-296  
意味 12, 26-28, 88, 120-124, 152-154, 188, 189, 191  
——的集合性 →「集合性」  
——的集合流 →「集合流」  
インターローカリティ 51, 58, 60, 66, 67, 69  
ウソつきのパラドックス 164  
エスノグラフィ 60, 66, 67, 254, 263  
エスノメソドロジー 83, 117, 118, 194  
似非・自然科学的研究 iv, 256, 303  
エンゲストローム(Engeström, Y.) 79, 86, 89  
大きな物語 296  
大澤真幸 149, 195  
帯化指標 200, 204, 205  
帯状構造 198, 200, 201, 204-206, 215, 220  
音韻論 134

### か行

- 「外界 / 内界」図式 23, 24, 122, 237, 245  
回答パターン 277-281  
確率表示計 212-214  
仮説検定型データ解析 273-275  
過疎 58, 64, 65, 67-69, 95, 141, 171, 175, 189  
価値観 53, 55, 88-92, 113-115, 296  
価値中立 48, 53  
価値・目的 51, 53  
活動 76, 86, 98, 114, 118  
——ビジョン 76, 98  
→「発達可能領域」  
活動理論 76, 78, 86, 98, 111, 117, 118  
→「共同体」  
→「スプリングボード」  
→「対象→結果」  
→「分業」  
→「マイクロ・コスモス」  
→「矛盾」  
→「モデル」  
→「ルール」  
ガーフィンケル(Garfinkel, H.) 194  
かや 11, 16, 29, 30, 36-47, 48-51, 76, 119, 147, 196, 287  
「——」の多層性 36-38  
「——」の重複構造 38, 39, 41, 49-51, 177  
環境 2-4, 11, 79, 80



## 杉万俊夫（すぎまん としお）

1951年生まれ。九州大学大学院教育学研究科博士課程修了。学術博士（大阪大学）。1994～1997年日本グループ・ダイナミックス学会会長。現在、京都大学大学院人間・環境学研究科教授。国際応用心理学会フェロー（名誉会員）。専門はグループ・ダイナミックス。

おもな著作

『フィールドワーク人間科学——よみがえるコミュニティ』（編著、ミネルヴァ書房、2000）

『コミュニティのグループ・ダイナミックス』（編著、京都大学学術出版会、2006）

*Meaning in action: Constructions, narratives, and representations.*（共編、Springer、2008）

*Alternative production of knowledge and social representations.*（共編、University of Indonesia、2012）

## グループ・ダイナミックス入門——組織と地域を変える実践学

2013年4月20日 第1刷発行

定価はカバーに表示しています

著者 すぎ まん とし お  
杉 万 俊 夫

発行者 高 島 照 子

世界思想社

京都市左京区岩倉南桑原町56 〒606-0031

電話 075(721)6506

振替 01000-6-2908

<http://sekaishissha.co.jp/>

© 2013 T. SUGIMAN Printed in Japan (共同印刷工業・藤沢製本)

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

**JCOPY** <(社) 出版者著作権管理機構 委託出版物>

本書の無断複写は著作権法上での例外を除き禁じられています。複写される場合は、そのつど事前に、(社) 出版者著作権管理機構（電話 03-3513-6969、FAX 03-3513-6979、e-mail: info@jcopy.or.jp）の許諾を得てください。

ISBN978-4-7907-1588-7

